

英語におけるメタファー表現の明示性と修辭性：  
認知言語学・語用論のアプローチ

田丸歩実



## 謝辞

本論文は、京都大学大学院人間・環境学研究科にて、同大学大学院谷口一美教授の指導のもとに行った研究成果をまとめたものである。本論文の執筆をする過程で、数多くの方々にお世話になった。ここに感謝の意を表したい。

指導教官である谷口一美先生には、本研究を遂行するうえでの建設的な助言だけでなく、研究に関わる基礎的なことも多岐にわたって教えていただいた。先生から学んだことは、データと誠実に向き合う方法から先行文献の読み方に至るまで、数え上げればきりが無い。また、研究者として成長していくために大切な場や機会も十分に与えていただいた。特に毎週木曜日にひらいてくださった言語フォーラムは、筆者にとってかけがえのない時間であった。学生が自由に議論を交わすのをあたたかく見守ってくださり、時には確かな知識と経験に裏付けられた批判的なコメントを差し挟み議論を盛り上げてくださった。

本論文の副査は、関西外国語大学外国語学部の山梨正明教授、京都大学大学院人間・環境学研究科の守田貴弘准教授および横森大輔准教授につとめていただいた。山梨正明先生の著書を読み認知言語学の言語観・比喩観に感銘を受けた筆者にとって、研究会や関西外大での授業を通して先生から直接ご指導いただけたことは、なによりありがたいことであった。先生の深い問題意識から発せられる問いからたくさんの刺激を受け、先生とのディスカッションの後はいつもわくわくとした新鮮な気持ちで自分の研究に向き合うことができた。守田貴弘先生と横森大輔先生からは、審査の過程を通じ、多くの的確なご指摘とあたたかい励ましの言葉をいただいた。両先生が示してくださった問題点は、筆者が今後研究を続けていく上でも大切な指針になると確信している。

筆者が比喩研究の道を志すようになったのは、筆者がまだ学部生だった頃、当時お茶の水女子大学の准教授であった清水徹郎先生との出会いが大きい。シェイクスピア読書会に誘っていただき、仲間と共に原文と格闘しながらも、様々な角度からシェイクスピアの表現を味わう楽しさを知った。また卒業論文を執筆する際には、認知言語学の知見を取り入れて分析したいという筆者の希望を聞いて、一緒にいちから勉強してくださった。認知言語学や認知科学の面白さを教えてくださったのは、当時慶應義塾大学の教授であった辻幸夫先生である。外部生だった筆者をゼミの一員として快く受け入れてくださり、2年間文献の精読とディスカッションをする機会に恵まれた。

本論文の着想は、谷口研究室での言語フォーラムをはじめとした、研究室内外での自由で活発な議論から得たものが多い。同じレトリック研究者として共同研究に誘ってくださり数多くの勉強会・読書会をともにした小松原哲太氏をはじめとし、久保圭氏、齋藤隼人氏、

伊藤薫氏、黒田一平氏、岡久太郎氏、井上拓也氏など研究室 OBOG の皆様、現役院生の皆様、また主観性読書会にて多くの議論を交わした川上夏林氏、溝上瑛梨氏、春日悠生氏、ご自宅に招いてくださり常に鋭い視点からのコメントをくださった青木真喜子氏、同期として苦楽をともにした小川陽香氏、斎藤幹樹氏、佐々木英晃氏、佐藤亜弓氏には、筆者が博論を書き上げるまでの9年の間に大いにお世話になった。何気ない会話からも多くの知的興奮を受け、彼らが研究に取り組む姿が筆者の精神的な支えにもなった。ときには研究室に泊まり込み、常に何かに追われながらも、延々と議論を交わした日々の積み重ねによって本論文の完成を見ることができた。そのほか学会や研究会などでこの9年の間に出会ったたくさんの方々からいただいたコメントが本論文の着想になっていることは言うまでもない。当然ながら本論文における不備はすべて筆者に帰するものである。

最後になったが、家族への感謝を示したい。父と母からの長きにわたるサポートにはどれだけの感謝を捧げても十分ではないだろう。心配をかけてしまったことも多々あるだろうが、研究活動に理解を示し、いつも優しく見守ってくれていた。そして最後に、同じ研究室の先輩として、途中からは人生の伴侶としても、公私にわたってあらゆる面で支えになってくれた夫、木本幸憲に心からの感謝を捧げたい。



# 目次

<b>第 1 章</b>	<b>序論</b>	<b>1</b>
1.1	はじめに	1
1.2	メタファー表現の多様性	5
1.3	メタファーの明示と修辞性	9
1.4	本論の目的と構成	13
<b>第 2 章</b>	<b>直喩と隠喩の違いと明示性</b>	<b>17</b>
2.1	はじめに	17
2.2	like の有無と明示性	18
2.2.1	like の意味と機能	18
2.2.2	比較であることと標識を伴うこと	21
2.3	メタファーの明示性とは	24
2.3.1	意味的・語用論的要因	26
2.3.2	表現形式の要因	28
2.3.3	表現形式の 3 つの次元： 概念的自律性・プロファイル・解釈の方向づけ	32
2.4	直喩と隠喩の連続性	35
<b>第 3 章</b>	<b>メタファー表現の類型化</b>	<b>39</b>
3.1	はじめに	39
3.2	隠喩の類型	40
3.2.1	ST 型の隠喩	41
3.2.2	S 型の隠喩	46
3.2.3	隠喩の類型：まとめ	47
3.3	直喩の類型	49

3.3.1	直接比較型、根拠介在型 . . . . .	50
3.3.2	根拠=起点領域型、根拠=目標領域型、根拠=中立型 . . . . .	52
3.3.3	周辺的な直喩 . . . . .	54
3.3.4	直喩の種類：まとめ . . . . .	54
3.4	メタファー標識の種類 . . . . .	56
3.4.1	メタファー標識の多様性 . . . . .	56
3.4.2	発話事態モデルと標識 . . . . .	59
3.5	ケーススタディ：隠喩の構文別使用頻度 . . . . .	68
3.5.1	分析対象と方法 . . . . .	69
3.5.2	分析の結果 . . . . .	71
3.5.3	ケーススタディのまとめ . . . . .	80
3.6	まとめ . . . . .	80
<b>第4章</b>	<b>メタファー表現とテキストタイプ</b>	<b>83</b>
4.1	はじめに . . . . .	83
4.2	メタファー表現とジャンル・レジスター分析 . . . . .	84
4.3	分析の対象とするテキストタイプ . . . . .	86
4.3.1	分析の対象：科学的描写・広告的描写・詩的描写 . . . . .	86
4.3.2	各テキストの文脈的特徴 . . . . .	87
4.4	分析の方法と結果 . . . . .	90
4.4.1	分析の方法 . . . . .	90
4.4.2	分析の結果 . . . . .	91
4.5	考察 . . . . .	94
4.5.1	直喩の機能 . . . . .	94
4.5.2	中間タイプと広告的描写 . . . . .	96
4.5.3	S型の隠喩と科学的描写・詩的描写 . . . . .	98
4.5.4	メタファー標識の機能 . . . . .	105
4.6	まとめ . . . . .	107
<b>第5章</b>	<b>メタファー標識による隠喩の明示化</b>	<b>111</b>
5.1	はじめに . . . . .	111
5.2	分析対象と方法 . . . . .	113
5.3	分析結果 . . . . .	115

5.3.1	S 型の隠喩と標識の修辞機能 . . . . .	117
5.3.2	ST 型の隠喩と標識の修辞機能 . . . . .	124
5.3.3	まとめと考察 . . . . .	131
5.4	結論 . . . . .	134
<b>第 6 章</b>	<b>修辞的比較としての直喩</b>	<b>137</b>
6.1	はじめに . . . . .	137
6.2	先行研究 . . . . .	139
6.2.1	比較構文とは . . . . .	139
6.2.2	字義的比較と直喩 . . . . .	141
6.2.3	直喩を複数の要因から特徴づける：Fishelov (1993) の NPS モデル . . . . .	144
6.3	構文ごとの直喩率 . . . . .	146
6.3.1	分析対象と方法 . . . . .	146
6.3.2	分析結果 . . . . .	150
6.4	間ドメイン性と修辞性 . . . . .	152
6.5	構文的動機づけと修辞性 . . . . .	154
6.5.1	as...as 構文と than 構文 . . . . .	155
6.5.2	like 構文 . . . . .	158
6.6	主観的叙述としての直喩 . . . . .	167
6.6.1	like 構文と similar 構文の違い . . . . .	167
6.6.2	主観的叙述としての直喩 . . . . .	172
6.6.3	例外的な直喩 . . . . .	177
6.7	まとめ . . . . .	180
<b>第 7 章</b>	<b>結語</b>	<b>183</b>
7.1	各章のまとめ . . . . .	183
7.2	本研究の意義と残された課題 . . . . .	186



# 第 1 章

## 序論

### 1.1 はじめに

我々は日々の生活の様々な場面でことばを用いている。ことばは他者とやりとりするために最も重要な手段のひとつである。またことばは、世界のありとあらゆるものに「名」を与えるものでもある。我々は与えられた「名」を通して、様々なものごとを認識している。ことばによって自らをとりまく環境や事態を意味づけし、その事態に含まれる対象や出来事がどのような関係にあるかを理解し、そのうえで行動を選択したり、知識として記憶したりする。したがってことばは、我々が外部世界を認識するための「枠」としてはたらくと言えるだろう。ある言語を習得するということは、その言語における慣習を自らのものとして取り入れ、それと同時に、同じ言語を話す人々の間で共有可能な「ものの見方」を身につけることでもある。

ことばによって言い表されるものは、直接見たり触ったりすることができる事物に限られない。愛や時間、富、知識、権力関係など、抽象的な概念もまた、我々の基本的経験の一部をなしている。このような抽象概念が関わる経験はどのようにして理解され、他者と共有可能な知識として構造化されているのだろうか。この問題を解き明かすひとつの鍵として近年注目されているのが、メタファーである。メタファーは単なる言語的装飾ではなく、あるものを別のものにたとえることによって理解する認知的営みであると言われる (Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1993)。このメタファー観によると、抽象概念の多くはそれとは別の概念にたとえることによって、特に身体経験を通して得られた知識をもとにして理解されているという。このことは、20 世紀後半以降、言語学、心理学、神経科学など多くの分野で示されてきた (Lakoff and Johnson 1980, 1999, Gibbs 1994, Landau et al. 2010 等)。

抽象概念がメタファー的に理解されていることを確かめるには、我々がふだん意識するこ

となく用いている言語表現に目を向けるとよい。「彼らは袋小路に行き当たった」、「お互い別の道を歩むしかない」、「あのふたりもついにゴールインか」などの表現は、恋愛における様々な出来事を旅にまつわる語彙で言い表したものである。旅において経験するであろう出来事にたとえることによって、たとえば恋愛関係は時間をかけて進展すること、目標とする状態に到達するにはときに困難が生じることなど、恋愛がどのような経過をたどるかに対する理解が促される。また愛情について述べるときには、「あたたかな目を向ける」、「気持ちが冷めた」など、温度感覚を表す表現もよく用いられる。ものを熱したり冷やしたりするときの経験にたとえられる場合、愛情の移り変わりに関して、旅にたとえられる場合とは異なる方法での理解が促されると思われる。これらの言語事実に裏付けられるように、メタファーは我々が自らをとりまく事態を認識し理解するための重要な手段となっており、抽象概念の多くはもはやメタファーなしに語ることは難しい域にまで達している。

Lakoff ら初期の認知言語学者は、我々が話すことばが慣用的な比喻表現であふれていることに注目し、概念体系がメタファーによって無意識のうちに構造化されていることを強調した。後で詳しく述べるが、このようなメタファーは「概念メタファー (conceptual metaphor)」と呼ばれ、社会・文化的に慣用化されたものの見方を形成する。一方でメタファーは、創造的な認識と発見の手段にもなりうる。意外なものとの間に類似を見ることによって、意識的に類推をはたらかせ、これまで気付かれていなかった新たな側面の理解が促される。

次の例は英文学者・外山滋比古氏のエッセイからの抜粋だが、ここでは意識的に類推が行われている様子が見てとれる。外山氏は「人間」を「木」に、「知識」を「花」にたとえながら、これまで気付かれていなかった日本教育の問題を読み手に理解させようとしている。

- (1) 知識も人間という木の咲かせた花である。[...] 明治以来、日本の知識人は欧米で咲いた花をせっせと取り入れてきた。中には根まわしをして、根ごと移そうとした試みもないではなかったが、多くは花の咲いている枝を切ってもってきたにすぎない。これではこちらで同じ花を咲かせることは難しい。[...] 根のことを考えるべきだった。それを怠っては自前の花を咲かすことは不可能である。もっとも、これまでは切り花をもってきたほうが便利だったのかもしれない。

(外山滋比古『思考の整理学』p.14, 下線は筆者による)

外山氏は植物のメタファーを用いながら、欧米の知識を取り入れるだけの従来型の教育を批判している。人間を木にたとえること自体はさして珍しいメタファーではないかもしれないが、そのイメージをさらに展開させ、根や切り花にまで類推を拡げているところに外山氏の

創意工夫が読みとれる。読み手はそのイメージを思い浮かべることで、日本教育の問題点について具体的に理解し、自らさらなる類推を深めることもできるだろう。ここでは、読み手の理解を導くために、木や花といった身近なイメージが意識的に、かつ意図的に用いられていると考えられる。概念メタファーのように無意識のうちに用いられるにせよ、(1)の創造的なメタファーのように意識的に用いられるにせよ、メタファーは我々の認識や思考と深く関わっていると言えるだろう。

さらにメタファーはこれだけにとどまらない、より多様な可能性も秘めている。やりとりのなかで意識的・意図的に用いられるメタファーは、ことばの可能性を広げ、コミュニケーションを豊かにするために重要な役割を果たしうる。ことばに詩的な響きをもたせること、ユーモアや皮肉を効かせること、直接言うにははばかれることを遠回しに表すことなどは、メタファーが担いうる役割のほんの一部である。

メタファーがやりとりのなかでどのような役割を果たしうるのか、その一端を垣間見るために、もうひとつ具体例を取り上げたい。(2)はアメリカのテレビドラマ『FRIENDS』からの抜粋で、Monica という女性と Chandler と Ross という 2 人の男性が、メタファーを駆使しながら男女の恋愛観の違いについて議論を戦わせている場面での会話である。男性はもっとキスを大切にすべきだという Monica の主張を受け、Chandler はキスをコンサートの前座にたとえることで、なんとか男性側の意見を弁護しようとしている（下線部を参照）。その後そのメタファー的発想がさらに展開され、他の人物にも次々と引き継がれていく様子が観察される。ここでは 3 人の間でいわばメタファー合戦のようなものが繰り広げられており、どれだけうまくたとえるかを競い合っているような面白さが感じられる。

(2) **Monica** What you guys don't understand is, for us, kissing is as important as any part of it.

(あんたたち男が分かってないのは、女にとって、キスっていうのがとにかく大切だってことよ)

[...]

**Chandler** Yeah, I think for us, kissing is pretty much like an opening act, y'know?

I mean it's like the stand-up comedian you have to sit through before Pink Floyd comes out.

(うん、だけどさ、僕らにとってキスは前座みたいなものなんだよ。つまりピンク・フロイドが出てくるまで見とかなきゃいけないお笑い芸人みたいな)

**Ross** Yeah, and ... and it's not that we don't like the comedian, it's that ... that ... that's not why we bought the ticket.

(そう、それで、そのお笑い芸人が好きじゃないって訳じゃないんだ、そうじゃなくて、そのためにチケットを買った訳じゃないってことなんだ)

**Chandler** The problem is, though, after the concert's over, no matter how great the show was, you girls are always looking for the comedian again, y'know? I mean, we're in the car, we're fighting traffic ... basically just trying to stay awake.

(問題なのはさ、コンサートが終わった後どんなにそのコンサートが良かったとしても、女の子はいつだってそのお笑い芸人をもう一回見たがるってところなんだよ。車で帰ってるときに渋滞に巻き込まれて、ただ眠気と戦ってるってときにもさ)

**Monica** Yeah, well, word of advice: Bring back the comedian. Otherwise next time you're gonna find yourself sitting at home, listening to that album alone.

(そうね、でもひとつ忠告しておくわ。お笑い芸人を連れ戻すこと、じゃないと次のときは家で独りアルバムを聴くことになるから)

(*FRIENDS*, Season 1 - Episode 2)

この一連の会話では、新たな理解を得るための手段という役割に加えて、メタファーが担い  
 いるその他の役割、たとえばやりとりを面白おかしくしたり、言いにくいことを伏せてお  
 いたりといった、コミュニケーションの手段としての役割も期待されていると考えられる。  
 確かにキスをコンサートの前座にたとえることによって、男性にとってのキスの位置づけ  
 をわかりやすく説明しているという側面もあるだろう。しかしそれ以上に、3人が同じメタ  
 フェー的発想にもとづいて表現を駆使している巧みさと滑稽さ、肝心なことはほのめかすだ  
 けで直接は言わないでいる面白さなどが前面に出ていると考えられる（実際に同じ場に居合  
 わせたもう一人の男性は、「コンサート」が具体的に何を指すのかをずっと気にしており、そ  
 れがドラマ視聴者の笑いのポイントのひとつにもなっている）。

以上で簡単に見てきたように、メタファーは我々の認識やコミュニケーションにおいて重  
 要な様々な役割を果たしている。認知言語学に代表される近年のメタファー研究では、言語  
 的装飾というメタファー観への反動として、認識や発見の手段としてのメタファーが重視さ  
 れてきた。特に、無意識のうちに用いられる表現に反映されるような、社会・文化的に慣習  
 化された認識のメカニズムを解明することが目指されてきた。そのような研究プログラムのも  
 とでは、個々の具体的な言語表現よりも、それを動機づけるより抽象的なレベルでのメタ  
 フェー的構造や心的プロセスに光が当てられることになる。

しかし意識的にメタファーを用いることも、ことばが関わる活動の重要な一側面をなして  
 いると考えられる。意識的あるいは意図的にメタファーが用いられる場合、メタファーであ



ることが言語的に明示されるという特徴があると言われる (Steen et al. 2010)。話し手は言語的に様々な工夫をして、その状況に最も適切な形で、自らの認識を言い表そうと努めることになる。たとえば上の (1) では、「知識も... 花である (= A は B だ)」という形で言い切った後に、そのメタファー的認識にもとづく表現が続く。(2) でも同様に、「キスは前座みたいなものなんだ (= A は B のようだ)」という形でたとえのイメージが持ち込まれるところから、メタファーの応酬が始まる。メタファーを用いていることにあえて注意を向け、その効果を最大限に利用しようとするとき、メタファーは我々の認識や思考、あるいは情報の伝達やコミュニケーションに関して、どのような役割を果たすことができるのか。この問題に迫るには、具体的な言語表現のレベルに注目することが鍵になると考えられる。実際の会話やテキストのなかでメタファーがどのように言語化されるのか、その表現形式の違いは何を意味するのか、それらを解き明かすことで、メタファーを意識的に用いることの重要性も明らかになるに違いない。

## 1.2 メタファー表現の多様性

本研究では、Lakoff らに代表される認知言語学的アプローチのメタファー研究の慣習に従い、あるものを別のものとの類推によって理解する認知的営みを「メタファー」と捉える。そしてそのような認識を反映した個々の具体的な言語表現を「メタファー表現」と呼ぶことにする。

メタファー表現として最も広く知られているものは、「直喩」と「隠喩」の2つだろう<sup>\*1</sup>。どちらもあるものを別のものにたとえる表現であり、メタファー表現の下位タイプとして位置づけられる。直喩と隠喩は一見すると、その意味と形がよく似通っている。たとえばアキレスという男を獅子にたとえるとき、次の (3a) のように *like* を伴って述べるなら直喩、(3b) のように *like* を伴わずに述べるなら隠喩と呼ばれる。どちらも意味的にはほとんど同じであり、アキレスの勇敢さや猛々しさを表していると解釈される。

- (3) a. Achilles is like a lion.  
b. Achilles is a lion.

これまで直喩と隠喩の共通性や違いが論じられるとき、上の (3) に示すような A is like B

<sup>\*1</sup> 直喩と隠喩は、英語ではそれぞれ *simile* と *metaphor* と呼ばれる。*metaphor* という語は、あるものを別のものとして理解する認知的営みだけでなく、その認識を反映した言語表現一般、さらには直喩と対比される下位タイプも指すことができる。場合によっては、換喩や提喩を含めた比喩一般を指すこともある。直喩と対比される下位タイプとしての *metaphor* を、本研究では「隠喩」と呼んでいる。

と A is B という対比的な表現が中心に扱われてきた。しかし実際には、直喩と隠喩はほかの形で表されることもある。たとえば隠喩は、(4)のように、何にたとえているかを明かさないう形をとることもできる。このタイプは前後文脈があつてはじめて比喩的に解釈することができるという特徴があり、たとえば先行文脈である男性について語られているなら、「その男は加齢に伴い怒りっぽくなっている」といった意味を表していると解釈される。

(4) The rock is getting brittle with age. (Kittay 1984: 154)

本研究では、メタファーが多様な表現形式で実現されることに注目する。どのような構文をとるかによって、メタファーに関わる要素（たとえるものとたとえられるもの、両者の類似関係、あるいは比較の根拠など）がどの程度言語化されるかが異なってくる。実際にテキストの中で用いられるメタファー表現を注意深く観察すれば、直喩と隠喩が *like* の有無によって二分されるカテゴリーとは言えないことが分かる。むしろ (5) に示すように、直喩と隠喩はメタファーに関わる要素をどの程度言語化するかという点において連続的であると言える。以下に示すものは、すべて花を星にたとえて言い表したものである。

(5) 直喩と隠喩の連続性

- a. The flower was as yellow and bright as **a star**.
- b. **Star**-like flowers
- c. **Star**-shaped flowers
- d. **Starry** flowers
- e. **Star**flower
- f. Flowers are **shining** yellow, { as it were / metaphorically speaking / so to speak }.
- g. Flowers are **shining** yellow.
- h. She picked beautiful **stars** on the way home. (すべて作例)

花を星にたとえるだけでも、上に挙げるように様々な方法で表現することが可能である。(5a) は典型的な直喩の例で、花と星が両方とも言語化され、両者に共通の性質（明るい黄色をしていること）も明示的に述べられている。(5b)~(5e) はそれぞれ同様の意味を表しているが、下にいくほど、両者の類似関係や比較の根拠を明示的に述べない形をとっている。(5f) と (5g) は、たとえる対象である「星」も直接言語化されず、星のイメージはメタファー的に用いられている動詞 *shining* によって間接的に喚起されるにすぎない。ただし (5f) では、後続する表現によって、少なくともこの表現がメタファーであることは明示的に述べられている。最後に (5h) は最も典型的な隠喩の例で、上で見た (4) の例と同様に、何にたとえ

ているかを明かさない形をとっている。

さらに直喩は、字義的な比較とも意味的に連続するカテゴリーである。次の例では (6a) が典型的な直喩、(6d) が典型的な字義的比較として解釈されるだろう。残りの 2 例に関しては判断が揺れると思われる。字義的と判断されるのは花をそれとよく似たものと比べていると感じられる場合だが、似ている／似ていないの判断は人によって、また文脈によって異なる。また字義的比較か直喩かという判断には、どのような類似性に注目するかや、どのような構文をとるか (as...as や resemble) という点も影響していると思われる。

#### (6) 字義的比較と直喩の連続性

- a. The flower was as yellow and bright as **a star**.
- b. The flower was as big as **a watermelon**.
- c. The flower resembles **a star** in shape.
- d. The flower resembles **an English daisy**.

直喩と隠喩は、メタファー表現を二分する下位タイプとして捉えられ、修辞学をはじめとして、哲学、言語学、心理学など多くの分野において、その関係の規定が試みられてきた。両者の関係をどう捉えるかには、大きく分けて 2 つの立場がある。両者に共通するメカニズムに重きを置く立場 (equivalence view) と、それぞれの意味的・機能的違いを強調する立場 (non-equivalence view) である (Addison 1993)。

直喩と隠喩に共通するメカニズムに注目する立場では、メタファーとは一体何かを解き明かすことが目指される。この立場では、あるものを別のものになぞらえるとはどういうことか、メタファーによって新たな意味がどのように創出されるのか、意図されている意味はどのようにして理解されるのかといったことが問題となる。Lakoff and Johnson (1980) の概念メタファー理論もこの流れに属する。先に述べたように、Lakoff らはメタファーが文学や詩などの創造的な文脈に限られず、日常的なやりとりの中で無意識のうちに用いられていることを見抜き、メタファーが我々の思考や認識をいかに形作っているかを示した。概念メタファー理論では、メタファーは「起点領域から目標領域へのドメイン間写像 (cross-domain mapping)」(Lakoff 1990, 1993) と規定される。起点領域には物理的・身体的な経験を伴う身近な概念が選ばれやすく、起点領域において繰り返し経験される構造が目標領域に写像されることで、目標領域の概念の理解が促されるという。彼らのメタファー観は、後のメタファー研究に大きな影響を与えた\*2。

\*2 メタファーが思考や認識において重要であることを指摘したのは、概念メタファー理論がはじめてではない。たとえば Richards (1936) においてすでに装飾的なメタファー観が否定されており、2 つの概念を並べたときに生じる緊張によって新たな意味が産み出されることが論じられている。それを受け継ぎ発展させる形で、

この立場では、表現上のバリエーションの背後にある共通の原理に光が当てられるため、直喩と隠喩の間に本質的な違いはないとされることが多い<sup>\*3</sup>。このような見方は古代ギリシアや古代ローマにまで遡ることができる。たとえばアリストテレスは『弁論術』第3巻第4章において、「譬えもまた比喩である。というのは両者の違いはほんの僅かでしかないから」と述べている（ここでは譬えは直喩を、比喩は隠喩を表しているとされる）。またクインティリアヌスも、『弁論家の教育』の第8巻第6章「比喩」において「隠喩は短縮された直喩」であると述べており、両者は類似関係を言語的に説明するか否かという違いしかないと捉えている<sup>\*4</sup>。

したがって、両者に共通するメカニズムを重視する立場では、基本的にはどちらの形を選んでも同じような意味を表すことができると想定される。最も分かりやすい例はコピュラの形をとる場合である。上の(3)で示したように、対となる直喩と隠喩は、*like*の有無によらずほとんど同じ意味内容を表している。コピュラ以外の形をとる場合も同様である。たとえば *The ship ploughs the waves* 「船が波を切って進む」という隠喩表現は、*The ship goes through the waves like a plough ploughing the land* 「畑にあぜを刻む鋤のごとく船は波間を行く」のように直喩の形に変えても、ほとんど同じ意味を表すことができる (Leech 1969: 156)。表現上の差異は表面的なものにすぎないため、原則的にはすべての隠喩を直喩の形で言い換えることができることになる。

一方、表現形式の違いがもたらす意味的あるいは機能的な差異に注目する立場では、隠喩と直喩の選択に関わる要因を明らかにすることが中心的な課題となってきた。両表現を成立させる思考プロセスが共通していたとしても、特定のコンテキストにおいて一方を選択することは完全に自由なわけではなく、一方をもう一方で置き換えることが常に可能とは限らない。たとえば「もみじのような手」とは言えても、「もみじの手」とは言い難いことが指摘されている (谷口 2003: 6)。直喩と隠喩を比較するこれまでの研究によって、たとえる対象のどのような性質に光が当てられるか、どれほど多様な解釈が許されるか、聞き手や読み手に与えるインパクトの強さはどの程度かなど、様々な観点で両者が異なることが明らかにされ

---

Black (1962) は相互作用説を唱え、概念それぞれがもつ連想体系の相互作用によって意味の組織化が行われることを主張している。

<sup>\*3</sup> Whately (1867) の次の記述に、この考え方が最も端的に示されているだろう。Whately は、“The Simile or Comparison may be considered as differing in form only from a Metaphor; the resemblance being in that case stated, which in the Metaphor is implied” と述べており、直喩と隠喩は、比較や類似を明示的に述べるのか暗黙のうちに示唆するのかという点で異なるにすぎないとしている。

<sup>\*4</sup> 両者に本質的な違いはないとする立場でも、直喩と隠喩のうちどちらがより基本的な形を反映しているかという点では議論が分かれる。Miller (1979[1993]) らが主張するように、*like* の関係が基本だとすると、メタファーの産出や理解には比較プロセスが重要となる。Davidson (1978) らが主張するように、*as* の関係が基本だとすると、< A を B として見る > という同一視のプロセスが重要となる。詳細は Addison (1993) を参照。

てきた<sup>45</sup>。実際の使用に注目したこのアプローチは、直喩と隠喩それぞれの独自性・固有性を追求する立場だと言えよう。

しかし後者の立場においても、A is like B と A is B という対になる表現が中心的に論じられてきたため、直喩と隠喩の中間的な例が存在することや、直喩と字義的比較の連続性などはあまり注目されてこなかった。メタファー表現の構文的多様性を考慮することは、直喩と隠喩の性質の違いをより正確に捉えるためにも必要だと考えられる。

### 1.3 メタファーの明示と修辭性

伝統的に、直喩は隠喩に比べて劣った比喩であると見なされることが多い。それは直喩のほうが明示的な形をとるからだと言われる。一般的に、メタファーであることを明示することはメタファーとしての魅力を弱めると考えられてきた。

メタファーの力は隠喩の形で最も発揮されるという考え方は、アリストテレスにまで遡ることができ、クインティリアヌスに代表される伝統的修辭学においても、20世紀に入りメタファーの重要性が再び注目され哲学、心理学、言語学など様々な分野で扱われるようになってからも、基本的にその見方が受け継がれてきた (Miller 1979, Black 1979, Lakoff and Turner 1989, Glucksberg and Keysar 1990, Glucksberg and Haught 2006 等)。

しかしメタファーとして優れているとはどういう意味なのか、メタファーの魅力とは何なのか、これらの問題に関して、実は明快な答えがあるわけではない。ひとつには、比喩としてのインパクトの強さが挙げられる。聞き手を驚かせたり面白がらせたりすることができる表現のほうが、比喩として優れていると見なされる。あるいは解釈の多様性も修辭性に関わっているとされる。詩的な表現は様々な解釈が許されるものであり、意味が一義に決まるものよりも比喩として優れている。また、メタファー表現が既存の語彙体系では表現できないことを表現するものであったら、新たな意味を創り出し、聞き手に新たなものの見方を与えることがメタファーの重要な役割となる。この側面を重視するとしたら、聞き手に発見的推論を促すような表現のほうがより優れた表現と言えるだろう。

いずれにせよ隠喩のほうがメタファーとしての力が強い、あるいは詩的・修辭的效果が高いという見方は、両者に本質的な違いはないとする立場においても、違いを積極的に認める立場においても広く共有されている見方である。前者においては、直喩と隠喩はどちらも同じ意味内容を表すからこそ、その違いは聞き手に与えるインパクトや修辭的效果という形で現れるとされる。後者においても、隠喩の形でしか表せない意味や機能があり、それがメタ

<sup>45</sup> 直喩と隠喩がそれぞれ独自の認知的メカニズムにもとづき、異なるコミュニケーション上の機能をもつことを示すこれまでの研究については、Romano (2017) において簡潔に整理されている。

ファーの最も重要な役割だと考えられてきた。

直喩は明示的な比較の形をとるがゆえに隠喩に比べて弱いと見なされてきたが、なぜ直喩の形にするとメタファーとしての力が弱まるのかは、次の3つの側面に分けて考えることができる。

- (7) a. 新たな類似性を発見する楽しみがない  
 b. *like* や「ようだ」などの標識によって比喩であることが明かされてしまう  
 c. 同一性ではなく類似性が述べられるにすぎない

以下ではそれぞれの点について詳しく述べ、その見方の問題点を指摘する。

まず (7a) の直喩には新たな類似性を発見する楽しみがないという側面に関して、アリストテレスは、メタファーを理解するときに聞き手が快さをどれほど感じられるかが、メタファーとして優れているかどうかを判断するひとつの材料になると述べている。

- (8) その述べ方の違いゆえに、譬えのほうが快さにおいて劣っている。つまり、それは比喩よりも長々と述べられるためである。それに、譬えは、「これはあれである」という言い方で済ませない。だから、聴き手の心は、なぜそうなのか、その点を調べてみようという気にならないのである。

(アリストテレス『弁論術』第3巻第10章)

上の引用では「譬え」は直喩を、「比喩」は隠喩を指している。つまり直喩は、何がたとえられているかだけでなくどのように似ているのかということまで述べ尽くし、隠喩において秘されていたことをすべて言語化してしまう点が問題視されている。直喩は不用意な明晰さでもって隠喩の神秘性を弱めてしまうのである。アリストテレスは、何か新しいことを理解させてくれるかどうか、洗練された散文の要素であると述べている。この見方からすると、隠喩の形のほうが、聞き手が自ら気づきを得られるよう促すために洗練されていると言える。

たとえば直喩の場合、*Marino was breathing hard like a wounded bear* や *He was as hungry as a bear* のように、両者がどのような点で類似しているのかが、動詞句や形容詞によって限定されることが多い。一方隠喩の形で、*He couldn't find the word to the wounded bear* のように表されると、見た目やふるまいの類似だけでなく、力強さや気高さなどのより抽象的な側面での類似も喚起される。どのような点で似ているかが言語的に述べられないがために、隠喩の形のほうが自由で多様な解釈を許すのである (Croft and Cruse 2004: 213, Israel et al.

2004, Utsumi 2007)\*<sup>6</sup>。

しかし直喩であっても、解釈の自由が残されていないとは言えない。確かに直喩は、たとえられている対象および類似の根拠が言語化されることが多い。Wordsworth の詩の冒頭に現れる、“I wandered lonely as a cloud/ That floats on high o’er vales and hills” 「谷を越え山を越えて空高く流れてゆく白い一片の雲のように、私は独り悄然としてさまよっていた」という直喩もこの特徴を満たしており、「私」と「雲」が比較され、その類似性が「孤独にさまようこと」であるとはっきり言語化されている。しかしこのような分析によって、この詩の一節が表そうとしていることを理解したと言ってしまってよいのだろうか。直喩に通常の字義的比較とは異なるメタファー性があるとしたら、それはどこかで言語的に明かされているのだろうか。Davidson (1978) は、直喩は隠喩のパラフレーズではなく、両者とも文字通り以上のことは意味しないという点で何の違いもないと論じている。隠喩と同様に直喩もまた、あるものを別のものとして見るという可能性に気付かせてくれるだけであり、命題的内容に言い換えられない。したがって、たとえ直喩において謎解きの糸口が与えられているとしても、依然としてそのメタファー性は隠されたままだと考えられる。

直喩が隠喩よりも弱いと見なされる 2 つ目の理由として、(7b) の *like* や「ようだ」などの標識が用いられるという点が挙げられることがある。標識によってメタファーであることを指標すると、比喩としてのインパクトが弱まると言われている。標識はその表現が文字通りの意味で用いられていないことを聞き手に伝え、解釈の方向性をある程度定める効果があるからである。(7a) の側面にも関わるが、このような明晰さは聞き手の発見の楽しみや解釈の自由を損なうと同時に、作品世界への没入を妨げる恐れがある(鍋島 2016)。そのため標識を伴わないものに比べて、標識を伴う表現は「弱い」と見なされることになる。

しかしメタファーであることを指標することで、当該表現の修辭的効果がどのように変わるのかは自明ではない。一般的には、聞き手の理解を助けることとメタファーとしての力は代償の関係にあると考えられている<sup>7</sup>。しかしコミュニケーションの状況によっては、メタファーの明示が必要になる場合や効果的になる場合もあると考えられる。たとえば Steen が提唱する *Deliberate Metaphor Theory* の一連の研究では、メタファー標識はメタファー表現の意図的な使用を指標することで、聞き手の注意をドメイン間比較に向けさせることができると考えられており、メタファー標識の肯定的な価値が認められている (Steen 2011, 2017;

<sup>6</sup> ただし直喩も、より抽象的な関係に焦点が当てられ、読み手によって様々な解釈がなされうる場合がある(例: *When an issue comes, it is like an airdrop.*)。特に NP is like a(n) NP の形をとるときは、この傾向が強いと言われる (Croft and Cruse 2004, Moder 2010: 163)。

<sup>7</sup> Goatly (1997) は、関連性理論の立場から、メタファーを明示すること、特に事実に反していることを明かしてしまうことはメタファーの効果を弱めたり殺したりすると述べている (同上: 194)。

Steen, Dorst, Herrmann, Kaal, Krennmayr, Pasma 2010)\*<sup>8</sup>。メタファー標識が具体的にどのような修辭的役割を担うかは、個別の研究によって検証される必要がある。

最後に3つ目の理由として、(7c)の直喩は単に類似関係を述べているにすぎないということが指摘される場合もある。本来異なるはずのものを同一であると述べることに比べて、二者を比較して何らかの点で類似を見出すことは容易であり、心理的抵抗も少ない。隠喩の場合に生じるこの心理的抵抗、別の言葉で言えば意味的な緊張が、新たな意味を生むための原動力となりうる。それゆえに、緊張を生じない直喩は新たな意味を生み出す力が弱いと見なされる。たとえば Black (1979) は、隠喩の形で述べるということは、新しいフィルターやレンズを通してものごとを見るように迫ることだと論じる。(9)で述べられているように、あるものを通して別のものを見ることは、比較することとは全く別物であり、比較の形をとる直喩には隠喩の優れた力、すなわち別の見方を可能にするような「レンズ」を与える力がないとされる。

- (9) [I]mplication is not the same as covert identity: looking at a scene through blue spectacles is different from comparing that scene to something else [...]. [I]n discursively comparing one subject with another, we sacrifice the distinctive power and effectiveness of a good metaphor. The literal comparison lacks the ambience and suggestiveness, and the imposed “view” of the primary subject, upon which a metaphor’s power to illuminate depends.

(Black 1979: 30–31)

さらに Ricoeur (1975) も同じような立場から、隠喩にのみ、日常的に使い古された語彙に新しい意味や価値をもたらす力があると主張する。このような隠喩の「異例の属性賦与の力」は、直喩の形にすると緩められてしまう(同上: 248)。直喩の A is like B という形は、文字通り A と B が似ていることを述べたものであり、そこに論理的矛盾は存在しない。直喩は、隠喩において隠れている論理的矛盾を表面に出すという形をとることで、<である>と<でない>の間にある緊張を発展させるとともに枯渇させると論じられている(同上: 31)。

メタファーを思考や認識の手段として捉えるならば、ものごとに対する新たな見方を与えることはその最も重要な役割だと言えよう。哲学や概念メタファー理論以降のメタファー研究の文脈では、メタファーが我々の思考や認識を形作っているという側面が特に重視されてきた。しかし先の節でも述べたように、メタファーの役割はこれだけにとどまらない。立証や事物のイメージの再現に用いられるほか、コミュニケーションの場において、場を和ませ

\*<sup>8</sup> Deliberate Metaphor Theory に対する心理学の立場からの批判は、Gibbs (2015) を参照。



たり感情をのせたりするためにも用いられる<sup>\*9</sup>。メタファーが様々な役割を果たすなかで、あらゆる場合において隠喩のほうが効果的だとは限らない。また、ものごとに対する新たな見方を与えることが目的であったとしても、比較対象がかけ離れている場合は、直喩の形のほうが好まれることが知られている<sup>\*10</sup>。したがって、メタファーにどのような役割を期待するかによって、どのような形で表すことが適切かという判断も変わってくると考えられる。

以上で見たように、伝統的に直喩は隠喩よりも「弱い」と見なされてきたが、メタファー表現がそもそも *like* の有無によって二分できるようなカテゴリーではないこと、メタファー表現やメタファー標識が多様な語用論的機能を果たす可能性があることを考慮すると、この一般的な見解に対する疑問が生じてくる。メタファーであることが言語的に明示されているからといって、必ずしもメタファーとしての力が弱まるとは言えないのではないか。少なくとも実際のコミュニケーションの場では、多様なメタファー表現のうち適切なものが選択されているはずであり、それぞれに独自の認知的・修辭的価値があると想定してもよいのではないかと考えられる。

## 1.4 本論の目的と構成

メタファーは様々な表現形式で実現される。従来メタファーであることが言語的に明示されるほど、メタファーとしての力は弱まると考えられてきた。本研究ではそのような一般的な見方に対し、疑いの目を向ける。本論の目的は、直喩のように明示性の高いメタファー表現にもそれ独自の認知的価値や修辭的機能があることを明らかにすることである。本論ではメタファー表現の構文的特徴を重視するアプローチをとり、明示性の異なるメタファー表現が実際のテキストにおいてどのような役割を果たしているかを記述する。それによって、メタファーの明示が必ずしもメタファーの力を弱めるわけではないことを主張したい。

本論は、表現形式上の違いを重視する立場によってたつ。個々の具体的表現の修辭性に注

<sup>\*9</sup> たとえば Low (1988) は、第二言語教育の観点からメタファーの役割を考察している。メタファーの役割として、(i) X について語ることを可能にすること、(ii) 概念の体系性を示すこと、(iii) 思考を発展させること、(iv) 誇張して注意を惹きつけること、(v) 責任をごまかしたり隠したりすること、(vi) 感情をのせることなどが挙げられている。さらに Goatly (1997) は、ハリデーの機能文法の枠組みに則りメタファーの機能を分類している。観念形成的機能、すなわち情報伝達や内容に主に関わるものとしては、(i) Lexical Gap-filling、(ii) Explanation/Modelling、(iii) Reconceptualization、対人関係的機能、すなわち感情表出や交感、発話行為が主に関わるものとしては、(iv) Argument by Analogy、(v) Expressing Emotive Attitude、(vi) Disguise and Decoration、(vii) Cultivation of Intimacy、(viii) Humor and Games、テキスト形成的機能、すなわち伝達内容の構成や提示のしかたに主に関わるものとして、(ix) Fiction、(x) Enhancing Memorability, Foregrounding and Informativeness、(xi) Textual Structuring などが挙げられている。

<sup>\*10</sup> 佐藤 (1978) は、「直喩は類似性を創り出す」ことができるとし、直喩の積極的な価値を認めている。かけ離れているものにたとえられている場合、直喩の形で表されることで無理なく理解されうる。

目することは、思考や認識におけるメタファーの役割を重視する認知言語学的メタファー観を放棄し、メタファー表現を単なる言語的装飾と見なす古典修辞学のメタファー観に立ち返ることを意味しない。むしろ認知言語学、特に Langacker の認知文法の構文観によってたち、メタファー表現の構文的特徴は話し手の主観的認識を反映すると考える。したがって、直喩と隠喩の構文的違いも、単なる装飾的技巧の違いではなく、話し手のものごとに対する捉え方の違いにもとづいていると見なす。同時に、メタファー表現はコミュニケーションの中で用いられるものであるという視点も重視する。語用論的な視点を取り入れ、メタファー表現の選択には伝達上の目的も関わっていると考える。

本論では、明示性の高いメタファー表現にはどのような認知的価値や修辞的機能があるかを問う。それを明らかにするために、具体的には以下の点を検討する。

- (10) a. メタファー表現の明示性とは何か  
 b. 実際のテキストにおいてメタファーはどのような修辞的役割を果たしうるか  
 c. メタファー標識にはどのような役割があるか  
 d. 直喩の修辞性とは何か

本論の構成は以下の通りである。

第2章では、メタファー表現の明示性とは何かという問題を扱う。そもそもメタファー表現が明示的であるとはどういうことか。これまでの研究では、比較の形をとることとメタファー標識を伴うことという両側面から、直喩の明示性が議論されてきた。しかし、メタファー表現の明示性には複数の異なる側面が関わっている可能性がある。そこでこの章では、直喩と隠喩に関する先行研究の議論を土台に、本研究における明示性の定義を示す。その上で、明示性に関わる形式的・意味的・語用論的特徴を整理する。

第3章では、前章で示した明示性の定義をもとに、メタファーのどのような側面に焦点が当てられるかという観点から、隠喩、直喩、メタファー標識の類型化を行う。従来の直喩と隠喩の二分法よりも細かな分類を設けることによって、本研究のメタファー表現の分析の道具立てとする。

第4章では、実際のテキストでメタファーが果たす修辞的役割を検討するために、異なるテキストタイプにおいて、明示性の異なるメタファー表現がどのように使い分けられているかを考察する。ケーススタディとして、植物や風景の描写におけるメタファー表現の役割に注目し、第3章で示す隠喩・直喩・メタファー標識の分類をもとに、異なるテキストタイプにおけるメタファー表現の分布を記述する。構文的分布の記述と合わせ、意味とディスコースの観点から詳細な分析を行い、テキストの目的に応じて適切な表現形式が選択されている

ことを示す。

第5章では、メタファー標識にはどのような役割があるかを論じる。メタファー標識は一般的に解釈の曖昧性を軽減し、聞き手の理解を助ける機能があると言われている。そこで *metaphorical / metaphorically* というメタファー標識を例に、構文的に解釈の曖昧性が存在する隠喩と、メタファーであることが明らかな隠喩を比べ、どちらがより標識を伴いやすいのかを検証する。さらに解釈の曖昧性が低い形をとっているにも関わらず標識が付け加えられる場合、その標識がどのような修辭的機能を果たしているのかを考察する。

第6章では、直喩の修辭性とは何かという問題に取り組む。典型的な直喩は、形の上では字義的な比較構文と見分けがつかない。したがって本論では、直喩を比較構文の修辭的用法と見なし、比較の修辭性をもたらす要因について検討する。認知言語学の立場からの直喩研究では、比較構文であれば原則的には直喩として用いることができ、直喩の意味は元の比較構文の意味に動機づけられると予測されている (Israel, Harding and Tobin 2004, Dancygier and Sweetser 2014)。本論ではこの仮説を検証する。まずどのような比較構文が直喩として用いられやすいのかを明らかにし、その理由を探る。次に、A is like B と A is as ... as B という典型的な直喩表現を中心に、それぞれの修辭的意味がどのような構文の意味に動機づけられているのかを分析する。

第7章では、個々の研究成果をまとめ、メタファー表現の明示性と修辭性の関係を改めて論じる。最後に本研究の意義と残された課題について述べる。

最後に、本論で用いる用語と記法について述べる。本論は認知言語学的なメタファー観によってたち、思考や認識に関わる概念レベルでのメタファーと具体的な表現レベルでのメタファーを区別する。「メタファー」という用語は、前者のレベルでのメタファー現象を指すために用い、後者のレベルに対しては「メタファー表現」という用語を用いる。「直喩」と「隠喩」は具体的な表現を指し、どちらもメタファー表現の下位カテゴリーに位置づけられる。場合によっては、「直喩表現」「隠喩表現」と呼ぶこともあるが、指しているものは同じである。品詞が問題となるときは、具体的な表現を指して「名詞メタファー」「動詞メタファー」のように呼ぶこともある。さらに、「直喩」「隠喩」「換喩」「提喩」などの修辭表現をすべて包括する用語として、「比喩」あるいは「比喩表現」を用いる。最後に、「メタファー標識」は、当該表現がメタファーにもとづいた意味を表していることを聞き手に直接、あるいは間接的に伝える機能をもつ言語的要素一般に対して用いる。

メタファーは、Lakoff (1990, 1993) の定義に従い、異なる2つのドメイン間の写像 (cross-domain mapping) と捉える。理解の基盤となる具体的な概念ドメインを「起点領域 (source domain)」、もう一方のより抽象的な概念ドメインを「目標領域 (target domain)」と呼

ぶ。たとえば議論を戦いにたとえるとき、起点領域は「戦い」、目標領域は「議論」となる。たとえに関わるより具体的な要素を指す場合は、Richards (1936) の用語に従う。たとえられるものは「趣意 (tenor)」、引き合いにだされるものは「媒体 (vehicle)」、両者の間になりたつ類似関係は「根拠 (ground)」と呼ぶ。たとえば「槍のように鋭い批判」というとき、趣意は「批判」、媒体は「槍」、根拠は「鋭い」となる。起点領域の具体的要素が媒体、目標領域の具体的要素が趣意であり、逆に言うと、媒体が起点領域を、趣意が目標領域を喚起するという関係になっている。

例文を示すときは、必要に応じて、次のような記法を用いる。趣意あるいは目標領域を喚起する言語要素には下線を付す。媒体あるいは起点領域を喚起する要素は**太字**で表す。根拠を表す要素は斜体で示す。メタファー標識として機能している要素には $\dot{\cdot}$ を付す。

(11) 凡例

- a. Your voice is as *sweet* as **sugar**.
- b. It is the  $\dot{\cdot}$ metaphorical **smells** of corruption which are suggested from this painting.

## 第 2 章

# 直喩と喩の違いと明示性

### 2.1 はじめに

直喩と喩はどちらもメタファー表現の一種であり、両者は構文的に区別される。直喩は主に比較構文の形をとり、典型的には、*Achilles is like a lion* や *She is as sly as a fox* のように、*like* や *as* を伴って、趣意と媒体を明示的に比較する。これに対して喩は、*Achilles is a lion* のように *like* を伴わずに述べる形や、*The fox was very cunning* のように趣意が何かを明かさないう形などをとる。したがって両者を比べたとき、直喩のほうが喩よりも明示性が高いメタファー表現だと見なされる。

しかし、そもそもメタファー表現が明示的であるとはどういうことだろうか。そのとき、メタファーに関わるどのような要素が明示されていると言えるのだろうか。直喩が明示性の高いメタファー表現であることは一般的に受け入れられているものの、明示性とは何かに関して、一致した見解は見られない。たとえば、*A is like B* と *A is B* という最も単純な対比においても、*like* の有無による明示性の違いは、少なくとも 2 つの側面から論じられてきた。一方では、*like* を伴う形が比較構文の一種であることが重視され、類似関係が言語化されるという点に光が当てられる。他方では、*like* という語がメタファー標識としてはたらき、聞き手の解釈を助けるという点が重視される。

これまでの研究で論じられてきたメタファーの明示性には、複数の異なる側面が関わっている可能性がある。さらに序章でも述べたように、実際は直喩も喩もさまざまな形で表される。*like* の有無という点だけでは、直喩と喩の違い、ひいてはメタファー表現全体の明示性の違いを捉えることは難しいだろう。

本章では、メタファー表現の明示性とは何かを論じることを目的とする。本章の構成は以下の通りである。まず 2.2 節では、直喩と喩の意味的・機能的違いに関して、これまでの

研究で明らかにされてきたことを振り返り、それらの違いが *like* の有無によって説明されてきたことを確認する。その上で、直喩の明示性には、比較の形をとることと標識を伴うことという異なる 2 つの側面が関わっていることを指摘する。2.3 節では、本研究におけるメタファーの明示性を「メタファーとして気付きやすいこと」と定義し、メタファー的解釈を促すような形式的・意味的・語用論的特徴を、先行研究において述べられてきたことをもとに整理する。特に、明示性の違いをもたらす表現形式上の特徴を認知文法と語用論の観点から捉え直し、そこには 3 つの異なる次元が関わっていることを示す。最後に 2.4 節では、直喩と隠喩の関係を再度検討し、両者が二分されるカテゴリーではないことを論じる。

## 2.2 *like* の有無と明示性

直喩と隠喩は共通のメカニズムをもつという見方に対し、表現方法が異なれば、文が表す意味内容やコミュニケーション上の機能も異なるのではないかという観点から、言語学のみならず、哲学、心理学など様々な分野から批判的検討が行われてきた (Black 1979, Glucksberg and Keysar 1990, Bredin 1998, Aisenman 1999, Gentner and Bowdle 2001, Chiappe, Kennedy, & Chiappe 2003, Croft and Cruse 2004, Israel, Riddle Harding, & Tobin 2004, Utsumi 2007, Moder 2008, 2010, Dancygier and Sweetser 2014, Romano 2017 等)。両者の区別は単なるバリエーションの問題ではなく、直喩を隠喩で、あるいは隠喩を直喩で言い換えることが常に可能だとは限らない。むしろそれぞれに固有の修辭的機能がある可能性が高い。

この節では、直喩と隠喩それぞれの意味および機能の特徴について、これまでの研究において明らかにされてきたことを概観する。先行研究の多くで、*A is like B* と *A is B* という表現が中心に対比されてきたために、直喩と隠喩の違いを考える上で *like* の有無が重視されてきた。言い換えれば、この 2 つの構文を対比する限りにおいては、*like* の意味や機能が直喩を特徴づけていることになる。しかし *like* の意味や機能のうちどのような側面を重視するかは立場によって異なる。これまでの研究で直喩がどのように特徴づけられてきたかを振り返り、直喩の明示性として、少なくとも 2 つの側面が混同されてきたことを指摘したい。

### 2.2.1 *like* の意味と機能

*A is like B* と *A is B* の対比によって直喩と隠喩の違いを論じる場合、直喩独自の意味的・機能的特徴は、*like* によってもたらされていることが想定される。では、*like* はどのようなはたらきがあると考えられてきたのか。*like* の意味と機能に関し従来の研究で指摘されてきたことは、主に以下の 4 点にまとめられる。

(1) *like* の機能

- a. 類似性を明示的に述べる
- b. 文体や韻の調整を行う
- c. ヘッジとして断定の力を弱める
- d. 比喩であることを指標する

まず、*like* は文字通り類似を表しているとする見方がある (山梨 1988: 13-14 等)<sup>\*1</sup>。これは *like* の意味を最も素朴に捉えたものだが、同一ではなく単に類似を示しているという点が直喩と隠喩の違いにおいて重要になる。このことがもたらす特徴のひとつは、隠喩の場合のみ不合理性が生じるということである。隠喩は字義通りに解釈される要素とメタファー的に解釈される要素からなるため、命題的には偽であるのに対し、直喩は基本的にすべての要素が字義通りに解釈される (Ricoeur 1975, Davidson 1978, Miller 1979, Carston 2002, 2010 等)。隠喩の *Juliet is the sun* や *The ship ploughs the waves* は、隠喩的に用いられる語句 (*the sun* や *ploughs*) とそれ以外の中に意味の緊張が見られ、字義通りに解釈しようとする不合理な言述になる。ジュリエットは実際には太陽ではないし、船が波を文字通り耕しているわけではない<sup>\*2</sup>。一方直喩の場合は、「似ている」ということしか述べていないため、趣意を表す要素も媒体を表す要素も本来の字義的な意味で用いられる。*Juliet is like the sun* はジュリエットと太陽が似ていると述べているだけであり、両者の間に何かしらの類似を見出すことはさほど困難ではない。

慣習化していない創造的な隠喩の場合、字義的な語句とメタファー的な語句の間に生じる意味の緊張が、意味論的革新をもたらしうると言われている。不合理であるにも関わらずあるものを別のものとして見ることが求められるとき、新たな解釈が生み出される契機となるからである。通常の方法では解釈できないとき、既存の概念体系には存在しない、その文脈においてのみ生起する全体的意味が立ち現れる。これが直喩にはない、隠喩の重要な価値だと考えられてきた。

認知言語学の立場では、直喩と隠喩はその表現によって述べられる内容が異なること、すなわち構文によってプロファイルされるものが異なることに光が当てられる。Croft and Cruse (2004: 212-213) によると、*A is like B* という直喩の形は趣意と媒体の間に何らかの類似性があることを断定するのに対し、*A is B* という隠喩の形は趣意の性質を直接叙述する。

<sup>\*1</sup> Carston (2002) などに見られるように、関連性理論でも同様の考え方が一般的である (Wąlaszewska 2013)。*like* は類似という概念的な意味を担っている。したがってアドホックな意味が関わる隠喩とは異なり、直喩は字義的比較と同じように扱えると考えられている。

<sup>\*2</sup> ただしこの特徴はすべての隠喩に当てはまるわけではなく、文全体が隠喩的に用いられる場合 (アレゴリーや寓話を含む) や否定を伴う場合 (例: *Man is not a wolf*) はその例外である (Black 1979)。

認知文法の用語に倣うなら、直喩は類似性を、隠喩は叙述される性質をプロファイルしていると言える。したがって *Juliet is the sun* は、太陽との類似関係を述べているわけではなく、ジュリエットが太陽という属性をもっていること（直視できないほどまぶしい、世界のあらゆるものより明るい、太陽系の中心であるなど）が叙述されていると解釈される。このことは通常の措定文の *She is a student* において、述部の名詞句が主語の指示対象についての属性を表していると同様に捉えられる。

心理学の文脈では、隠喩の意味理解プロセスに関わるものが、比較なのかカテゴリー化なのかが大きな焦点となってきた。*like* は直喩の理解プロセスに比較に関わることを明示しているが、隠喩は形の上では比較を表さない。このとき、隠喩は直喩の省略形であり、どちらも比較プロセスにもとづいて理解されると主張する立場と、隠喩がコピュラの形であることに重きを置き、隠喩はカテゴリー化という独自のプロセスによって理解されると考える立場がある。後者には、カテゴリー説を提唱した Glucksberg らが含まれる。彼らによると、*A is B* という隠喩は、*A* が *B* というカテゴリーの成員であることを述べるものである (Glucksberg and Keysar 1990)<sup>\*3</sup>。

一方で、(1b) に示したように、*like* 自体に特に意味はなく、文体や韻律上の問題で挿入されているにすぎない場合もある (Black 1979: 30)。たとえば Burns の詩の冒頭、“*My love is like a red, red rose*” では韻律の弱強調を保つために、弱拍の *is* と *a* の間に *like* が挿入されていると考えられ、意味的には *like* はあまり重要なはたらきをしていない。

次に、*like* という語が表す概念的 content よりも、それを用いることによる聞き手への配慮という側面に焦点が当てられることもある。(1c) に示したように、*like* は隠喩に付け加えられるヘッジとして機能し、断定の力を弱めるはたらきがあると考えられている (Ricoeur 1975: 328, Lakoff and Turner 1989: 133, Chiappe and Kennedy 2000, Glucksberg 2001, Leezenberg 2001, Andersen 2001)。たとえば *Achilles is like a lion* というとき、話し手はアキレスはライオンであるという断定に対するコミットメントを避けていると見なすことができる (Leezenberg

<sup>\*3</sup> しかし比較とカテゴリー化は相互排他的なものではなく、直喩と隠喩のどちらが好まれるかには慣習性が深く関わっている可能性が指摘されている。たとえば Bowdle and Gentner (2005) は、隠喩履歴仮説 (career of metaphor hypothesis) と呼ばれる仮説を立て、創造的な比較が慣習化されるにつれ、直喩よりも隠喩の形が好まれるようになることを示した。逆に趣意と媒体がかけ離れており、読み手にとって意外な類似性が関わるときは直喩のほうが適している (佐藤 1978, Chiappe and Kennedy 2000, Chiappe et al. 2003)。しかし、(i) 隠喩とそれに対応する直喩が異なる意味を表す場合があること、(ii) 新奇なメタファーでも隠喩の形が好まれるものがあること、(iii) 直喩の形のまま慣用化するものもあることから、慣習性の違いだけではどちらの形が好まれるかを説明することは難しい (cf. Glucksberg and Haught 2006)。したがって、直喩と隠喩がパラフレーズできない場合に、どのような解釈の違いが生じるかを検討する必要がある。心理学における比喩理論の発展については、平・楠見 (2011) 「比喩研究の動向と展望」を参照。カテゴリー説に対する認知意味論の立場からの批判的検討は、谷口 (2003) を参照。



2001: 42)。

最後に、(1d)に示したように、*like*はある表現が拡張的な意味で用いられていること、すなわちメタファーであること自体を指標する機能があると言われている。Goatly (1997)は、指標されたメタファー (signalled metaphor) の一種として直喩を位置づけ、*like*はほかの標識 (*metaphorically, so to speak, as if* など)と同様に、ある表現がメタファーであることを聞き手に伝え、その意味を解釈するための助けとなると述べている。しかしメタファーであると指標することは、メタファーによって産み出されたイメージや虚構世界を打ち壊すことにもなりかねない。鍋島 (2016: 280–282)は、標識を伴うことによって生じる効果のうち、このような負の側面を強調する。メタファー明示表現は現実と言及することで仮想性を暴露するという性質があり、それによってメタファー的な推論や情景・情動描写の一貫性や一体性が失われ、仮想の世界への入り込みが妨げられると論じている。このような効果は、特に隠喩と直喩で表す内容が変わらないときに見出すことができ、隠喩のほうが優れたものであるとする根拠となってきた。

ただし、標識を伴うことに積極的な価値を認める研究者もいる。たとえば Moder (2010)は、ラジオニュースにおける隠喩と直喩 (NP is a(n) NP と It's like a(n) NP) の談話機能の違いを分析し、*like*は予想外の写像が行われることを聞き手に知らせ、後続するメタファー表現に注意を向けさせることができると論じた。Steen, Dorst, Herrmann, Kaal, Krennmayr & Pasma (2010)も同様の議論を展開しており、直喩は意図的な (deliberate) メタファー使用に読み手の注意を向ける機能があると主張している。

## 2.2.2 比較であることと標識を伴うこと

前節で見たように、A is like B という直喩における *like* は、一方では類似関係を叙述することによって、もう一方では断定の力を弱めたり比喩的意味であることを宣告することによって、同一であると断定したり比喩であることを隠して述べたりする隠喩に比べて、主に聞き手へのインパクトを和らげると考えられてきた。この形の直喩は、少なくとも次の2つの意味で、これに対応する隠喩よりも明示的だと見なされる。

- (2) a. 異なるドメイン間の比較が明示的に行われるという意味での明示性
- b. 標識によって、当該表現がメタファーであることが明示されるという意味での明示性

A is like B と A is B の対比を行う限りにおいては、これらの違いの重要性はあまり感じられないだろう。それは、A is like B が両方の性質を併せもつためである。しかし隠喩も直喩も

様々な形で表されることが知られている。他の形をとるメタファー表現も含めて検討するためには、このふたつの側面を区別する必要が生じてくる。それぞれの性質をもつ表現が、構文的に大きく異なるからである。

このふたつの側面のうち、どちらが直喩に特有の特徴と言えるだろうか。Goatly (1997) や Steen et al. (2010)、鍋島 (2016) に代表されるように、後者の側面、すなわち標識を伴っていることを直喩の重要な特徴と見る立場もある。この立場では、形の上からでは字義的な用法との区別ができない隠喩とは異なり、メタファーであることが指標されていることが、両者の修辭的機能の違いに影響を与えているとされる。しかし本研究では、前者の側面、すなわち比較の形をとることが直喩の重要な特徴だと考える。

その理由のひとつは、直喩もまた、形の上では字義的な用法との見分けがつかないからである。直喩は典型的には比較構文の形をとる。比較構文は字義的な比較も、修辭的・誇張的な比較も表すことができる。A is like B という形も同様である。この形は比較構文の一種であり、*She is like her mother* のように同じ形で字義的な比較を表すこともできる。したがって、厳密には *like* によってメタファーであることが指標されていると見なすことはできない。どのようなときに比較構文が修辭的に解釈されるかは、別の問題として考える必要がある。

もうひとつの理由として、標識を伴うメタファー表現の多くが、隠喩に標識を付け加えたものとして解釈され、比較構文とはまったく異なる形をとることが挙げられる。次の例は、メタファー標識の *metaphorical* を伴っているが、この標識を取り除いても、隠喩として解釈される表現になっている。

(3) Many of us would like to grab a metaphorical broom and sweep away all of our 2020 memories.

(私たちの多くが、比喩的な箒を手にとり 2020 年の思い出をすべて払いのけてしまいたいと思っている<sup>\*4</sup>)

(3) のような標識を伴う表現は、直喩とは異なる構文的特徴をもつ。このタイプは隠喩に標識が付け加えられたものと分析することができるが、直喩は *like* や *as...as* も含めて全体として比較構文として機能するため、そのように捉えることができない。

本研究では構文的な特徴を重視し、比較の形をとるものだけを直喩と呼びたい。そのように考えるとき、(2a) の直喩の明示性、つまり異なるドメイン間の比較が明示的に行われるという意味での明示性は、具体的には以下のように言い換えることができる。比較関係が明示

\*4 ここでの思い出とはもちろん新型コロナウイルスの蔓延と、それが社会に与えた影響を指している。

されるとは、メタファー写像に関わる要素（趣意／目標領域、媒体／起点領域、両者の対応関係、比較の根拠など）が言語化されるということである。典型的な直喩の構文では、これらの要素がすべて言語化される。(4)の直喩の構造は、(5)のように分析される。

- (4) a. Independence is like **an elephant** – *difficult to describe but instantly recognizable*.  
(Romano 2017: 2)
- b. Your voice is as *sweet* as **sugar**.

(5) 直喩 (4a・b) のメタファーの構造

趣意	a. Independence / b. Your voice
媒体	a. An elephant / b. Sugar
関係性	a. Be like / b. Be as ... as
比較の根拠	a. Difficult to describe but instantly recognizable / b. Sweet

よって、直喩は連辞的な文法関係のなかで、直接趣意と媒体の対応づけが行われると言える。

一方で隠喩の場合、趣意や根拠は言語化されず、起点領域から目標領域への写像は間接的に行われることが多い。A is B のように趣意と媒体がどちらも言語化され、その同一性の関係 (be) までも明示されることは、隠喩においては例外的である (Sullivan 2007, 2013)。たとえば *The criticism stung her* 「その批判は彼女を傷つけた」のような動詞メタファーの場合、動詞 *sting* によって指示される行為 (*provoke* など) は言語的には明示されない。

隠喩における写像は、それぞれの語句と共起しやすい一連の語句を連想することによって間接的に達成される。たとえばある動詞に関して、その動詞がどのような対象を主語や目的語にとるかにに関して、我々は連想体系の知識をもっている。動詞が比喩的に用いられる場合、実際に主語や目的語の位置に現れる語と、本来その動詞と共起する語との間で、間接的に対応づけが行われる。つまり、統語的に同じ位置に現れるという範列的な関係にもとづいて写像が行われる。たとえば *sting* の主語が *criticism* であるとき、*criticism* と、本来の主語にくると考えられる「人を物理的に刺す生き物」との間に、間接的な写像関係が成り立つ。(6)の a と b はこの隠喩に関わる範列的な関係を示しており、下線が引かれている部分は、対応する内容が言語化されていないことを表す (cf. Leech 1969: 153-157)。

- (6) a. 目標領域：The criticism \_\_\_\_\_ her.  
b. 起点領域：\_\_\_\_\_ stung her.

ここまでの議論をまとめる。本研究では、メタファー的写像に関わる要素や比較関係を言語化するという意味での明示性と、メタファーであることを明示的に伝えるという意味での

明示性とを区別する。構文的に異なる特徴をもつことから、「直喩」という用語は、比較構文の修辭的用法に対してのみ用いることにする\*<sup>5</sup>。隱喩に標識が付け加えられたものは直喩に含めず、「標識を伴う隱喩」として区別する。

(7) a. 直喩

例：Independence is like an elephant / Your voice is as sweet as sugar.

b. 標識を伴う隱喩

例：a metaphorical broom / His criticism sort of stung her.

一方で、直喩が like 構文や as...as 構文などいくつかの決まった形で実現されるために、それが直喩であると聞き手が容易に気付くことができるという側面もまた、見逃すことはできない。隱喩が決まった形をもたず、様々な品詞や構文で表されるのとは対照的である。したがって、直喩で用いられる like や as はメタファーであることを直接指標するわけではないが、その副次的な効果として、メタファー標識と同様の効果をもつと言ってもよいだろう。

本研究でのメタファー表現の大分類を、図 2.1 に示す。メタファー表現全体のうち、一部が標識を伴う形をとり、標識を伴うメタファー表現のうち比較構文の形で表されるものを本研究では「直喩」と呼ぶ。図の a は「隱喩」に当たる範囲を表しており、b (斜線部) は隱喩のうち標識を伴うものを表している\*<sup>6</sup>。

## 2.3 メタファーの明示性とは

標識を伴う隱喩と直喩を区別するとき、なぜ一部の隱喩では標識が必要になるのかということが問題となる。標識がメタファーであることを聞き手に伝えるものだとすれば、標識が必要となるのは、メタファーとして気付かれにくいものがあるからだと推測される。次の例を見てみよう。

(8) Latin American culture is separated from that of Europe and North America by the metaphorical borderlines.

(ラテンアメリカの文化は、ヨーロッパや北米の文化と比喩的境界によって隔てられている)

(8) では、*metaphorical* という語によって、*borderlines* を「抽象的・心理的な境界」として解

\*<sup>5</sup> 比較構文の定義については第 6 章を参照。

\*<sup>6</sup> 一部のメタファー標識は比較構文にも付け加えることができるので、厳密に言うと、「標識を伴う直喩」も存在することになる (例：It seems to me that / one might say / figuratively speaking, she is as light as a feather)。ただしこのタイプは図では示していない。

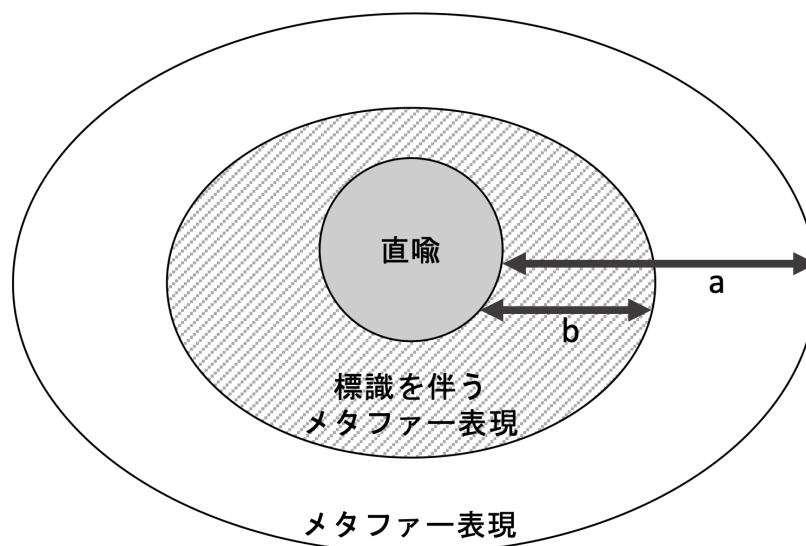


図 2.1 メタファー表現の大分類

積することが促される。この語が用いられていなければ「地理的な国境」という通常の意味でとることも可能だが、標識があることで字義的な解釈が回避されるのである。

本研究では、メタファー表現の中にはメタファーとして気付かれやすいものとそうでないものがあることに注目する。そこで、本論におけるメタファーの明示性を、(9)のように定義する。

- (9) メタファーの**明示性 (explicitness)**とは、メタファーとしての気付きやすさの程度を意味する。明示性の高いメタファー表現は、メタファー的な解釈を促すような形式的・意味的・語用論的特徴をもつ。

明示性は、直喩と隠喩の別を問わずメタファー表現一般に関わるものである。またこれは段階性のある概念だと想定する。そのため、隠喩のなかでも比較的明示性の高いものと低いものがあると考えられる。

本節では、メタファーとして気付かれやすいかどうかに影響を与える要因を、意味的・語用論的側面および形式的側面の両方から考察し、特に形式的側面に関わる要因を認知文法の観点から捉え直すことを目指す。続く 2.3.1 節では、メタファーとして気付かれやすいかどうかに関わる意味的・語用論的特徴について論じる。2.3.2 節では、メタファー表現の文法パターンに注目した先行研究を概観し、明示性に関わると思われる表現形式の特徴を整理する。2.3.3 節では、表現形式の特徴を認知文法の観点から捉え直し、そこには3つの異なる側

面が関わっていることを示す。

### 2.3.1 意味的・語用論的要因

本研究では主に表現形式に光を当てるが、メタファーとして気付きやすいかどうかを決める要因には、どのような対象にたとえるか、どのような文脈で用いるかなどの意味論的・語用論的な要因も大きく影響する。そこで本節では、メタファーとしての気付きやすさに影響を与えると考えられる意味論的・語用論的要因を簡単に整理しておきたい。

修辞表現は、意味や文法、用法などの慣習的規範からの逸脱として捉えられる（佐藤・佐々木・松尾 2006, 小松原 2016）。修辞的には転義現象のひとつであるメタファーは、語彙が本来表す意味内容と実際に叙述されている対象との「ずれ」が重要となる。この「ずれ」の気付きやすさに影響を与えると考えられる意味論的・語用論的要因として、以下のものが挙げられる。

#### (10) 意味論的・語用論的要因

- a. 概念的乖離の程度
- b. メタファー写像の新奇性
- c. 言語的文脈の修辞性
- d. 聞き手・読み手の言語知識

#### 概念的乖離の程度

語が本来表す意味内容と実際に叙述されている対象とのずれの認識には、第一に、比較される対象同士の関係が関わる。二者が概念的に乖離しているほど、すなわち二者の類似の程度が低いほど、メタファーだと気付かれやすくなる。対象に対する話し手の見方に創造性・独自性を感じとるからである。たとえばある人物に対して、「彼はびっくり箱みたいな人だ」と述べるのと「彼は芸人のような人だ」と述べるのでは、概念的によりかけ離れている「びっくり箱」にたとえるほうがメタファーとして受け取られやすいと言われる。

#### メタファー写像の新奇性

メタファーとして気付かれやすいかどうかは、概念的な距離だけでは決まらない。「目玉焼き」や「山のような課題」などの慣用的表現、あるいは概念メタファーのように、起点領域から目標領域へのメタファー写像がすでに当該の言語システムの中で慣習化されている場合は、比喩であることが意識されないことも多い (cf. Goatly 1997: 32)<sup>\*7</sup>。慣習化が進めば、

<sup>\*7</sup> たとえば「舌戦」、「この論の弱点をつかれた」、「論敵に集中砲火を浴びせる」などの表現が用いられるとき、

その表現の字義的な意味のひとつとして定着し、理解プロセスにかかる負担も字義の意味で用いられている場合と変わらなくなる\*8。

### 言語的文脈の修辞性

同じ表現を用いていたとしても、どのような言語的文脈で現れるかによってメタファーだと意識されるかどうか異なる可能性がある。よく知られているのは、詩という文脈のなかにおかれると、表現の語源に関わる隠喩が生き返るということである。ヤコブソンは *cocktail* という語を例に、このことを示している。*cocktail* はお酒の一種を表し、通常その語源的意味 (*cock* 「雄鶏」 + *tail* 「尾」) が分析的に意識されることはない。ところが詩という特殊な文脈の中におかれると、文字通りの意味の「雄鶏の尾」が浮かび上がってくるという。Mac Hammond 氏の詩に “O, Bloody Mary, // The cocktails have crowed not the cocks!” 「血まみれメアリよ、カクテルが朝を告ぐ、雄鶏でなく！」という一節がある。この特殊な文脈においては、語源的な意味が具象化され、*cocktail* という語はふだんは意識されることのない羽毛との関係を取り戻している。詩の構成要素すべては、詩的なものとして全体的再評価を受けるのである (ヤコブソン 1973: 219-220)。

### 聞き手・読み手の言語知識

さらに同じ表現であっても、人によってメタファーだと判断するかどうか揺れるケースも多い。語の意味や用法の逸脱に対して鋭い言語直感をはたらかせることができるかどうかは、その人がそれまでにどのような言語表現に出会ってきたか、どれだけ豊かな言語知識をもっているかに依存するからである。たとえば「クレーン」は日本では重いものをつり上げて運ぶための重機を指しているが、英語の知識があれば、首の長い「鶴」にたとえたものであると理解することができるであろう。また Patterson (2017) は、解釈者の言語知識の違いがメタファー判断に影響する例として、動詞 *grew* のメタファー判断が揺れるケースを分析している。その研究によると、悪い方向への変化を表す *grew weak*, *grew depressed* などの表現は人によって判断が分かれる例だが、身体の状態変化を表す表現一般 (*grew bigger* や *grew thin* など) との連想関係を意識できる人は、悪い変化を表す場合でも比喩的ではないと判断する傾向にあるという (同上: 113)。

このように、メタファーであると気付かれるか、あるいはその表現がメタファーとして理

---

議論を戦争にたとえていると意識されることはほとんどないだろう。

\*8 慣習性も段階的なものである。たとえば Deignan (2005) はコーパスデータにもとづき、新奇な比喩の定着過程をを 4 段階 (innovative, conventional, dead, historical) に分類している。

解されるかどうかには、比較される二者同士の類似性の程度や、両者の対応関係が慣習化しているかどうかといった要因に加えて、発話状況や聞き手あるいは読み手の言語知識などの要因が広く関わってくると言える。本論ではあまり立ち入らないが、これらの意味的・語用論的要因は表現形式の要因とも密接に関わってくると予想される。

### 2.3.2 表現形式の要因

近年、メタファー表現の形式的特徴に注目した研究によって、表現形式の違いによってもたらされるメタファーとしての意味や語用論的効果の違い、ある語がメタファー的に用いられるときの慣習的パターンや共起表現との関係など、様々な事実が明らかにされてきている (Brooke-Rose 1958, Low 1988, Goatly 1997, Deignan 2005, Steen et al. 2010, Sullivan 2007, 2013 等)。それらの研究で記述されてきたことをメタファーとしての気付きやすさという観点から見直すと、明示性に関わると考えられる表現形式の要因は、次の3点にまとめられる。第一に、メタファー的に用いられている語句自体の文法的特徴が挙げられる。第二に、メタファー的に用いられている語とそれ以外の語の間に意味の緊張が見られるかどうかという点が挙げられる。最後に、メタファーであることを指標する形をとるかどうかの問題となる。

#### メタファー的に用いられている語自体の文法的特徴

まずひとつめの観点に関して、メタファー的に用いられている語が際立ちの高い形式をとる場合、メタファーとして気付かれやすいと言われる。Goatly は、メタファーと品詞の関係を考察し、名詞のメタファーは他の品詞のものよりも際立つと論じている (Goatly 1997: 82-84)。名詞の主要な機能は指し示すことにあるため、実際の指示対象とのずれが認識されやすい。ここには、名詞は典型的には具体物を表すために、他の品詞よりも具体的で鮮明なイメージを喚起しやすいという点も貢献している。

さらに名詞メタファーであっても、共起する冠詞や形容句によってその効果が異なる。Brooke-Rose (1958) によると、冠詞がない場合にはメタファーとしての効果がぼやけ、結果的にメタファーとして気付かれにくくなる。冠詞を伴えば指示対象の具体性が上がるが、冠詞がない場合には抽象的あるいは総称的な性質をもつからである (Brooke-Rose 1958: 42)。たとえば *medicine* 「薬」や *bondage* 「隷属」という語は冠詞を伴わずに用いられ、それぞれ「慰め」と「(恋愛における) 束縛状態」という一般的な性質・状態を表す。これらのメタファーの意味はすでに慣用化されており、読み手は本来の意味と文脈上の意味のずれをほとんど感じないと考えられる。したがって、メタファーであることに意識が向けられる可能性



も低い\*9。

### 意味の緊張

メタファー表現のなかには、1文だけで明らかにメタファーだと判断されるものがある一方で、前後の言語文脈や発話状況などを参照してはじめてそれと解釈されるものがある。メタファー的に用いられている語と、まわりの語との間に意味の緊張がある場合、メタファーとして気付かれやすい形をとっていると言える。一般的に動詞のメタファーは、項に字義的な意味を表す語をとり、動詞と項の間に意味の緊張が生じることが多い。

- (11) a. The chairman **plowed** through the discussion. (Black 1962: 26)  
 (司会はなんとか議論を進めた)
- b. Denmark **shot down** the Maastricht treaty. (Croft 1993: 335)  
 (デンマークはマーストリヒト条約を否決した)

上の例では、太字で示されている *plowed* 「耕す」や *shot down* 「撃ち落とす」がメタファー的な意味で用いられていることにすぐ気が付くだろう。Black (1962:28, 47) は、*plowed* のようにメタファー的に用いられている語を「焦点 (focus)」、文の残りの部分を「枠 (frame)」とよび、両者が全体として「メタファー的陳述 (metaphorical statement)」をなすと主張した\*10。1文だけでメタファーだと分かるものは、同じ文の中で、「焦点」を解釈するための「枠」が明確に与えられている表現だと言い換えられる。メタファーだと気づきやすいのは、焦点と枠のあいだに、意味的な緊張関係が生じているからである\*11。

\*9 Brooke-rose の “A Grammar of Metaphor” では、チャーサーからディラン・トマスまで 15 人の詩人の作品が取り上げられ、詩的なメタファー表現の緻密な分析が行われている。Brooke-Rose は、メタファーを本来の語の代わり (replacement) として用いられているものとして捉えている (同上: 23)。したがってメタファー表現の文法的側面に光が当てられるのは、それが本来用いられるべき語あるいは本来表したい意味内容を同定するためにどれだけ寄与しているかという点を明らかにするためである。

\*10 Black の主張で重要なのは、焦点と枠は互いに意味に影響を与え合っているという点である。焦点となる語がどのようなメタファーの意味を表すかは、枠によって方向づけられる。(11 a) の *The chairman plowed through the discussion* では、会議における司会の行為として、*plowed* が解釈される。もし枠となる部分が別の状況 (たとえば読書など) を表すなら、同じ語が別のメタファーの意味を表すことになる。さらに Black は、枠から焦点へという方向にとどまらず、焦点から枠に対する解釈の影響も存在すると主張している。字義的な意味を表すと考えられる「枠」もまた、焦点となる語の影響をうけて意味が変容するのである。この例でいえば、会議は単なる会議ではなく、*plow* 「耕す」という行為を行う対象として捉え直されることになる。このような見方を、著者はメタファーの「相互作用説 (interaction view)」とよび、メタファー的語は字義的語の言い換えにすぎないとする「代替説 (substitution view)」や、二者の類似性の叙述にすぎないとする「比較説 (comparison view)」を批判した。

\*11 焦点と枠のあいだの緊張関係は、これまでのメタファー研究において、「選択制限の違反」(Katz and Fodor 1963) や「意味の衝突」(Cruse 2011) という現象として捉えられてきた。あるいは、*Juliet is the sun* のように A is B の形をとるときなどは、単に「矛盾」とよばれることもある。「選択制限の違反」や「意味の衝突」を

本研究では認知言語学的な見方によってたち、メタファー表現における意味の緊張を「ドメインの一体性 (the conceptual unity of domain)」に対する違反として捉える。これは Croft によって提唱された概念で、依存的な文法要素と、その要素と関係をもつ自律的な文法要素がひとつの同じドメインで解釈されなければならないという原則である (Croft 1991, 1993)。焦点と枠がそれぞれ異なるドメインを喚起する場合、両者のあいだに緊張関係が生じる。たとえば (11b) の *Denmark shot down the Maastricht treaty* では、焦点である *shot down* 「撃ち落とす」が兵器や軍事のドメインを喚起するのに対し、枠となっているその他の部分、特に *the Maastricht treaty* 「マーストリヒト条約」は政治活動というドメインを喚起する (Croft 1993: 363)。聞き手あるいは読み手は、両ドメインのあいだの緊張関係を察知し、「撃ち落とす」という行為を外交上の駆け引きとして解釈する必要がある。

しかしこのような意味の緊張は、メタファー表現の十分条件でも必要条件でもない (Stern 1983)。メタファー表現によっては、文字通りの意味として解釈することも可能なタイプが存在する。以下の例は、文脈がなければ字義的にもメタファー的にも解釈しうる文である。

(12) a. **The rock is getting brittle with age.** (Kittay 1984: 154)

(岩は経年によって砕けやすくなっている / (比喩的解釈の一例) 男性は加齢に伴い怒りっぽくなっている)

b. **John is getting peanuts for his labour.** (Stern 1983: 587)

(ジョンは働いても {ピーナッツ / わずかなお金} しかもらっていない)

c. 私は今暗闇の中にいる。 (山梨 1988)

これらの例がメタファーだと判断されるためには、前後の言語文脈や発話状況を必要とする。もちろんここで述べたいのは、この判断が難しいということではない。読み手・聞き手には「テキストの一貫性に対する期待」(伊藤 2020)があるため、談話トピックや語義の一貫性などのずれを察知し、適切に解釈できるだろう。しかし (11) の 2 例のように、文脈の指定なくメタファーだと判断しうるタイプに比べると、解釈の曖昧性が存在する。その意味で、焦点と枠がドメインの一体性に違反しているタイプのほうが、メタファーとして気付かれやすいと考えられる。

## 有標性

2.2.2 節で見たように、基本的に、*metaphorically speaking* や *in a figurative sense*, *as it were* などメタファーであることを示す標識を伴うものはメタファーだと気付かれやすい。特にあ

---

はじめ、メタファー表現における意味の緊張の問題については、伊藤 (2020) にまとめられている。

る表現が字義的な解釈も可能なとき、標識が付け加えられることで解釈の曖昧性が軽減される。これに関して詳しい議論は本論第 5 章で行う。

さらに、具体的な標識を伴わなくても、字義的用法とは表現形式の上で区別される場合がある (Low 1988, Deignan 2005, 田丸 2015a,b, Patterson 2017)。特にメタファーの意味が慣習化されると、字義的用法との混同を避けるために、それとは異なる方法で用いられるようになることが知られている (Deignan 2005: 212)。Deignan はコーパスデータから得たメタファー表現の文法的特徴を詳細に分析し、品詞というマクロレベルでも、より細かい統語パターンの上でも、同じ語のメタファー的用法と字義的用法には形式的な違いがあることを示した。

品詞レベルの違いとしては、動物名詞が形容詞や動詞として用いられるとき、メタファー的な意味拡張がおこることが知られている。たとえば *dog* が動詞として用いられるとき、(13 a) のように「長期にわたり悩ませる・混乱させる」というメタファー的な意味を表す。名詞派生形容詞の場合も同様の傾向が見られ、(13 b) の例のように派生接辞を伴って形容詞化されると、人間の性質や行動をメタファー的に表すために用いられる\*<sup>12</sup>。

- (13) a. Freddie's life had been **dogged** by love troubles. (Deignan 2005: 47)  
 (フレディの人生は恋愛のもめごとにつきまわられてきた)
- b. **catty** remarks / a **sheepish** grin / the **mousy** little couple (同上: 153)  
 (意地の悪い所見／おどおどした笑み／臆病で幼い 2 人の男女)

その他の統語パターンの違いとしては、動詞がメタファー的に使われるときに句動詞の形で現れるという傾向が知られる (Low 1988)。(14 a) の *die* は、不変化詞 *down* を伴うと「弱まる、静まる」というメタファーの意味を表す。また (14 b) では、*face* という語が自尊心を表しているが、字義の意味を表す場合は可算名詞で用いられるのに対し、「面子」というメタファーの意味を表すときは常に不可算になる。

- (14) a. Her anger **died down** after we had apologized. (Low 1988:136)  
 (我々が謝ると、彼女の怒りは静まった。)

\*<sup>12</sup> 動詞の *dog* や形容詞の *catty* などそもそもメタファーの意味しかもたない語に対して、その意味は字義の意味とみなしたほうがいいのかという意見もある。Deignan はこの指摘に対する反論として、字義通りの意味とメタファーの意味の間での形態の相違が品詞の相違に限らないことを挙げている (同上: 48)。具体的には (14 a) の *die* と *die down* の対立などがこれに当たる。様々な統語レベルで字義的な用法とメタファー的用法が区別されるとき、品詞が違うものだけを特別視する必要はないと言える。特に派生関係が明確なとき、語幹と接辞の構成的意味からは予測できない意味が生じるなら、メタファー的な意味拡張として扱ってよいのではないかと考える。

b. ... lying to save **face**

(Deignan 2005: 161)

(面子を保つために嘘をつき...)

これらの例に示されるように、メタファー的用法は、字義的用法とは異なる表現形式で表されることがある。このような場合、メタファー標識としてはたらく語句を伴わなくても解釈の曖昧性が下がり、メタファーとして気付かれやすくなると考えられる。字義的な意味を表す場合を通常の用法と捉えるなら、メタファー的用法はそれとは異なる文法的特徴をもつという意味で「有標」だと言える。

具体的な標識を伴う場合と、品詞や統語パターンの違いによって字義的用法と区別される場合を合わせて、表現形式の有標性が関わっていると見なす。

## 2.3.3 表現形式の3つの次元：

## 概念的自律性・プロフィール・解釈の方向づけ

あるものを別のものになぞらえて理解するとき、そのメタファー的認識は様々な表現で言い表すことができる。表現形式のバリエーションを整理するためのひとつの着眼点として、本研究では、ある表現がメタファー的認識を反映したものであることがどれほど明示的に言語化されているかという点に注目した。前節では先行研究で記述されてきたことをもとに、メタファーの明示性には、品詞や冠詞の種類などメタファー的に用いられている語句自体の文法的特徴に加え、表現形式の有標性、意味の緊張など複数の要因が関わっていることを指摘した。

一般的に、表現形式の選択には話し手の事態把握のありかたが深く関わっている。認知文法では、具体的な語彙だけでなく、品詞カテゴリーやより抽象的な構文（移動使役構文、二重目的語構文など）も意味をもつと考えられている (Langacker 1987, 1991, 2008)。たとえば同じ出来事を名詞で表すか動詞で表すか（例：*explosion, explode*）という違いは、その出来事をモノ的に捉えるかプロセス的に捉えるかという意味の違いを反映している。このような、広い意味での“構文”の選択には、事態をどのように概念化するかという話し手のものの見方が関わる。メタファー表現においても、表現形式のバリエーションは、話し手のものの見方を反映していると考えられる。

これに加えて、メタファー表現の場合、聞き手への伝達効果を考慮して適切な形が選択されているという側面も見逃すことはできない。特にコミュニケーション上の目的に応じて意識的にメタファー表現が駆使される場合、その目的を達成するために最も効果的な形が選ばれている可能性が高い。

そこで本研究では、メタファーの明示性に関わる表現形式上の特徴を、話し手の認識と聞き手への配慮という両側面から捉え直し、隠喩だけでなく直喩も含めたメタファー表現一般の特徴を整理・記述するための土台にしたい。前節で指摘した特徴のうち、主に品詞の違いに関わる側面と意味の緊張に関わる側面は、話し手のものの見方と深く関わっていると考え、Langacker (1987, 1991, 2008) の認知文法の考え方にもとづいて、それぞれ「プロファイル」の問題、「概念的自律性」の問題として捉え直す。有標性に関わる側面は、聞き手への配慮で解釈の曖昧性が調整されていると考え、「解釈の方向づけ」の問題として捉え直す。まとめると、メタファーの明示性には次の3つの次元が関わっていると考える。

#### (15) 明示性に関わる3つの次元

##### a. 概念的自律性

起点領域や目標領域を喚起する言語要素が、具体的なイメージを喚起する形をとるか

##### b. プロファイル

メタファー写像に関わる要素（趣意／目標領域、媒体／起点領域、両者の対応関係、比較の根拠など）のうち、どの要素が言語化されるか

##### c. 解釈の方向づけ

当該表現がメタファーとして解釈されるべきことを指標する要素を伴うか

まず、名詞メタファーなど、具体的な指示対象をもつ形のほうがメタファーとして際立つという Brooke-Rose (1958) や Goatly (1997) の指摘は、認知文法的に捉え直すと、概念的自律性の次元に関わると言える。この概念については第3章 3.2.1 節で詳しく述べるが、簡単に言うと、ほかの概念に依存せずにどれだけ具体的なイメージを喚起することができるかを問題とする。名詞は典型的には具体的な物を表すため、関係を表す動詞や形容詞、前置詞などよりも概念的に自律している。たとえば動詞 *open* は、その動作の対象 (*book* や *eyes* など) を想起することなしに、具体的な動作のイメージを鮮明に思い描くことが難しい。メタファー表現においては、起点領域や目標領域を喚起する言語要素がどの品詞で表されるか、どちらがより具体的なイメージを喚起する形で表されるかといったことが関わってくる。起点領域や媒体が、概念的に自律している名詞の形で表されるほうが、それらが動詞で表されるよりも、メタファーとして気付かれやすいといえる。

次に、意味の緊張を生じるかどうかという側面は、隠喩だけを考えるなら、目標領域を喚起する要素をとるか否かという問題に読みかえることができる。(11) のような意味の緊張があるタイプの隠喩は、起点領域と目標領域を喚起する要素を両方とる。一方で (12) のよう

な意味の緊張を生じないタイプは、起点領域を喚起する要素しかとらない。要するにこれら2つのタイプの違いは、目標領域を喚起する要素を伴うか否かの違いとなる。これをメタファー写像に関わるほかの要素にまで拡張し、起点領域・趣意、目標領域・媒体、根拠、両者の対応関係まで含め、これらのうちどの要素が言語化されるかを問題にしたい。そうすることで、隠喩だけでなく直喩も含め、メタファー表現一般の特徴を考えることができる。

メタファー写像の要素がどの程度言語化されるかという側面は、認知文法的にはプロフィール (profile) の次元として捉え直すことができる。認知文法では、言語化されるということは、話し手によってその対象や行為に認知的な際立ちが与えられる (=プロフィールされる) ということの意味する<sup>\*13</sup>。一般的になにごとかを言い表そうとするとき、事態に参与するものすべてを言語化することはあまりない。事態の一部の要素、一部の側面のみが焦点が当てられ、そのほかの要素は背景化される。メタファー表現においても、メタファー写像に関わる要素のごく一部のみにはしか焦点を当てないものと、より広範に言語化するものがある。直喩のように趣意や媒体、根拠まで言語化するタイプは、プロフィールという次元において明示性が高いといえる。

最後に、メタファーであることを指標する標識をとるかかどうかには、聞き手への配慮という別の要因が大きく関わってくる。これを解釈の方向づけという次元として捉え直す。メタファーであることをメタ的に表す標識 (*metaphorically speaking, this is figurative* など) や間接的に示す標識 (*sort of, in a way, imaginative, I believe*) は、解釈のフレームを与えることによって、聞き手の理解や解釈を促したり、話し手の修辭的意図に注意を向けさせたりすることができる。品詞派生など字義的用法と区別される文法的特徴をもつ、あるいは音韻的・書記的に卓立させて逸脱を示唆するなどの有標な形をとる場合も、この次元に含めることができよう<sup>\*14</sup>。このような場合も、標識を伴う場合と同様、解釈の曖昧性が低いことで理解が容易になったり、特別な強調が置かれることでメタファーであることに注意が向けられ、文脈における適切な意味の理解が促されたりする。

メタファーの明示性に関わる形式的特徴を認知文法の観点を取り入れて整理する目的は、表現形式の選択に反映される、話し手の事態把握やコミュニケーション上の意図を分析・考察するためである。たとえば概念的自律性に注目することで、話し手が起点領域と目標領域のどちらをより具体的に喚起しているのかを推し量ることができると思われる。プロフィールの次元では、どの要素に認知的際立ちを与えるかだけでなく、起点領域を喚起する語のみ

<sup>\*13</sup> 「花子が花瓶を壊した」と「花瓶が壊れた」を比べると、後者では行為者である「花子」が背景化しており、認知的際立ちが与えられていない。言い換えれば、行為と行為の対象のみがプロフィールされている。

<sup>\*14</sup> Goatly (1997) の第6章で述べられるように、二重引用符を付けたり太字にしたりして強調することも語用論的な指標としてはたらき、当該表現が通常の意味とは異なる用法で使われていることを示唆する。

用いて虚構世界に没入して語るのか、趣意や根拠も明示的に述べながらより客観的な視点から語るのかといった語りのモードも考察することができるようになると期待される。

## 2.4 直喩と隠喩の連続性

直喩と隠喩を比較したとき、基本的には、この3つの次元すべてにおいて直喩のほうが明示性が高くなる。概念的自律性に関しては、直喩は趣意と媒体がともに名詞句の形で表されることが多いために、基本的に隠喩よりも明示性が高くなる<sup>\*15</sup>。隠喩は、動詞や形容詞など様々な品詞で現れうるからである。プロフィールの次元では、趣意や比較の根拠が言語化されることが多いという点で、直喩のほうが明示性が高いと言える。解釈の方向づけの次元では、標識を伴う隠喩を例外的なものとする、*like* や *as...as* という定型表現で表される直喩のほうが基本的に明示的な表現となる。先に述べたように、本研究では、*like* や *as* を純粋なメタファー標識としては見なさないが、直喩は構文的なバリエーションが比較的少ないために、直喩として気付かれやすいという側面も認める。したがって、それらの語句はメタ

<sup>\*15</sup> 名詞の隠喩と直喩を比較した場合でも、直喩のほうが概念的自律性が高くなる。直喩の場合、媒体名詞句によって表される概念は、趣意や目標領域の意味の影響を受けなくてそのまま想起されるような形で表される。一方隠喩の場合、起点領域と目標領域の概念的な相互作用が起き、両者のイメージが融合されることがその特徴である (Croft and Cruse 2004: 213, 利沢 1984: 22)。

イメージの融合が起きているかどうかは、媒体名詞句がとる形容句が起点領域と目標領域、どちらのドメインで解釈されるかによって裏付けられる。次の例における、形容詞 *old* の意味を比較してみよう。

(i) My lawyer is like an old shark.

(ii) My lawyer is an old shark.

(Gluckesberg and Haught 2006: 374)

上の例では、直喩の形をとるか隠喩の形をとるかによって、*old* の解釈が異なると言われている。(a)は「その弁護士は、弁護士として長い間経験を積み重ねたことによって、ずるくて卑怯で狡猾になった」といった意味を表すのに対し、(b)は「弁護士はいまだずるくて卑怯で狡猾だが、若かった頃に比べて活力を失い弱々しくなった」といった意味を表す (Gluckesberg and Haught 2006)。つまり、直喩の場合は *old* は字義的なサメを形容して「経験を積んだことによりなお狡猾になったサメ」を表しているが、隠喩の場合は *old* はむしろ弁護士の年齢を形容していると解釈される。後者では、弁護士がサメとして見られると同時にサメも擬人化されており、人間とサメのドメインが重ね合わされたところに弁護士の姿が描き出されていると言えよう。形容詞を *well-paid* に変えると、意味の違いがより明確になる。

(iii) ?My lawyer is like a well-paid shark.

(iv) My lawyer is a well-paid shark.

(Gluckesberg and Haught 2006: 375)

この2つの例を比べると、隠喩のほうがはるかに自然に解釈される。これは、*well-paid* が人間の性質を描写する形容詞だからだと考えられる。直喩は基本的に、媒体の特性を表す形容詞しかとることができない。以上の事実から、たとえ名詞の形をとる隠喩であっても、直喩と比較すると概念的自律性が低いと言えるのではないかと考えられる。

ファーであることを聞き手に伝える効果も一定程度担っていると考える。

しかし、直喩と隠喩は明示性という点ではっきりと二分されるカテゴリーではない。従来の研究で中心的に扱われてきた、A is like B と A is B という対比的表現は、プロフィールおよび概念的自律性という観点で限りなく近い関係にあることが分かる。両者とも、趣意と媒体がプロフィールされており、それらが名詞で表されるためにそれぞれの概念的自律性も高い。別の言い方をすれば、A is B という隠喩表現は隠喩の中でもかなり明示性の高い表現であり、直喩と似た特徴をもっている。A is like B と A is B の選択が、場合によっては単なるスタイルの問題となりほとんど意味の違いを生じないのも、両者がプロフィールと概念的自律性という次元で近い関係にあることがひとつの理由ではないかと考えられる。

さらに、直喩と動詞メタファーの隠喩表現も、概念的自律性という点で連続性をなしている。まずは具体例を見てみよう。次の例は、どちらも花が光を浴びて輝いて見える様子を行い表したものである。(16a)は直喩の典型的な形である。ここでは、趣意の「花」と媒体の「星」はどちらも概念的自律性が高い名詞の形で表されており、両者のイメージを具体的に思い描くことができる。一方、(16b)の隠喩の場合、動詞 *shining* によってメタファー的な意味が担われているが、この語は星や太陽など様々なものが輝く様子を想起させるので、たとえば「星」自体の具体的なイメージをもつことは難しい。

- (16) a. The flower was as yellow and bright as **a star**.  
 b. Flowers are **shining** yellow.

両者は対極的に思えるかもしれないが、媒体の「星」がどれだけ具体的なイメージを喚起するかという点で、中間的な表現が考えられる。次の例を見てほしい。(17)では、(a)を典型的な直喩、(f)を典型的な隠喩として、その間には媒体のイメージの具体性という点で異なる様々な形が考えられる。

- (17) a. The flower was as yellow and bright as **a star**. (= (16a))  
 b. **Star-like** flowers  
 c. **Star-shaped** flowers  
 d. **Starry** flowers  
 e. **Star**flower  
 f. Flowers are **shining** yellow. (= (16b))

(17b・c)は、*star* が接尾辞を伴って形容詞化されているため、冠詞を伴って表される(17a)のタイプよりも具体性が下がる。(17a)のように具体的な指示対象をもつのではなく、星一



般のイメージが想起されるからである。しかし語幹と接尾辞の分析性が高いため、(17d)以下のものと比べると、まだ星のイメージが保たれている。(17d)では、接尾辞によって星の属性のみに焦点が当てられることで、イメージの具体性がより下がる\*<sup>16</sup>。このタイプの表現では、星がもつ性質の一部だけ、たとえば「形状」や「色」などが想起できれば十分だからである。そして(17e)のように複合名詞として用いられるまでに至ると、「星」のイメージは限りなく後退する。この表現では星に喩えることの修辭的意図はほとんど感じられず、花の品種を表す固有名として解釈される。

以上、概念的自律性の次元を例に、直喩と隱喩は連続的であることを示した。特に(17)に示した段階的な表現のうちどこまでを直喩とし、どこからを隱喩と見なすのか、はっきりとした境界を定めることは難しいのではないかと思われる。明示性を複数の次元に分解して捉えることで、直喩と隱喩の違いを明確にするだけでなく、両者の連続性も捉えることができる。

---

\*<sup>16</sup> *-y, -ish, -oid, -ous, -ic, -al, -en* などの接辞を伴う名詞派生形容詞は、対象が持つ典型的な性質のみに焦点が当てられその他の特徴は捨象されることで、色や形、感触などの知覚的な性質を表すようになる(田丸 2015b)。



## 第3章

# メタファー表現の類型化

### 3.1 はじめに

本章は、メタファー表現の類型化を行うことを目的とする。メタファー表現の下位タイプとして最も代表的で、最も古くから論じられてきたのは、直喩と隠喩である。隠喩の場合は品詞に注目して分類・記述されることもあるが (cf. Brooke-Rose 1958)、体系的な類型化がなされてきたとは言いがたい。また起点領域や目標領域に何が選ばれるかという意味的な側面からの類型化が試みられることもあるが (例: 「擬人化」や「感情のメタファー」など)、表現形式の違いに注目した類型は、直喩と隠喩の対比にとどまっているものが多い。しかし前章で論じたように、直喩と隠喩は必ずしも明示的か否かによって二分できるカテゴリーではない。メタファー表現の構文的バリエーションを捉え、実際のテキストやコミュニケーションにおけるメタファー表現の使用を緻密に記述するためには、構文的観点を取り入れ、より細かな下位タイプに類型化する必要があると考える。

本章では、第2章で示したメタファーの明示性に関わる3つの次元 (概念的自律性、プロフィール、解釈の方向づけ) のうち、プロフィールの次元に注目し、隠喩、直喩、メタファー標識の類型化を行う。直喩と隠喩の二分よりも細かな分類を設けることによって、本研究のメタファー表現の分析の道具立てとする。まず直喩と隠喩に関しては、目標領域を喚起する要素がプロフィールされているか否かによって、2タイプに大別する。第一のタイプは、目標領域と起点領域を喚起する要素の両方がプロフィールされるものである。これを起点領域 (Source domain) と目標領域 (Target domain) の頭文字をそれぞれとって、「ST型」とよぶ。第二のタイプは、起点領域を喚起する要素しかプロフィールされていないという意味から「S型」とよび、前者と区別する。直喩は基本的にすべてST型になる。直喩は比較構文の形をとるため、趣意と媒体が必ず言語化されるからである。隠喩の場合は、意味の緊張を

伴うタイプは ST 型に、それ以外は S 型に属する。

メタファー標識は、聞き手に字義的用法からの逸脱であることを伝達することで、解釈の方向づけを行うものである。メタファー標識として機能する表現には多様なものが含まれ、*metaphorically speaking* や *in a figurative sense* のように、当該表現がメタファーであることに直接言及するものはそのごく一部に限られる。後で詳しく述べるように、*like, similar* など類似性を表す語彙だけでなく、*could, might* などの法助動詞や *actually, indeed* などの強意語もメタファー標識として機能することがあり、また *compare* や *imagine* などの動詞を命令形で用いることで、聞き手に比喩的な解釈を促すこともできる。このような様々な標識を分類するために、本研究では、崎田・岡本 (2010) の発話事態モデルの考え方を取り入れる。このモデルでは、発話理解は発話事態を構成する要素（話し手、聞き手、対象、発話）間の規範的關係とそこからの逸脱に基づくと考えられている。本研究では、これらの関係性のうちどこに焦点が当てられるかという点に注目して、メタファー標識の類型化を行う。

本章の構成は以下の通りである。まず 3.2 節では、隠喩を ST 型と S 型に類型化し、それぞれのタイプの構文パターンと具体例を見ていく。3.3 節では、比較の根拠に注目し、直喩の類型化を行う。直喩の場合はすべてが ST 型になるため、(i) 比較の根拠が文法的に義務的要素として現れるか、(ii) 比較の根拠が起点領域と目標領域のどちらを喚起するかという 2 つの観点で分類する。3.4 節では、発話事態モデルの考え方を取り入れ、メタファー標識の類型化を行う。3.5 節では、ケーススタディとして隠喩の構文パターンの分布を調査する。3.2 節で示した隠喩の類型を用いて、隠喩の中でもどの構文が使用頻度が高いのか、コーパスを用いて明らかにする。最後に 3.6 節で本章の内容をまとめる。

## 3.2 隠喩の類型

隠喩は、意味の緊張を伴うタイプは ST 型に、それ以外は S 型に属する。ST 型の隠喩は、目標領域と起点領域を喚起する語がどのような統語的關係で現れるかによってさらに細分化できる。本節では、ST 型と S 型の隠喩が、具体的にはどのような構文で実現されるか、先行研究を参照しながら整理する。

隠喩を構文的な観点から下位タイプに分類しようという試みは、これまでもいくつかの研究によってなされてきた。その代表的なものは、Goatly (1997) と Sullivan (2007, 2013) である。特に Sullivan は、Croft (1993) を発展させ、認知文法とフレーム意味論を融合させながら隠喩表現の分類を行ったという点で、本研究の試みともかなり親和性が高い。ただし Sullivan はメタファー表現一般の体系的な類型化を目指したわけではなく、起点領域を喚起する語と目標領域を喚起する語が両方とも現れるタイプ、つまり本研究で ST 型と呼ぶ隠喩

に限定して、その構文的特徴の一般化に努めている。本研究では Sullivan の分類を組み入れる形で、その研究で取り上げられていなかったタイプも含めた分類を示す。

### 3.2.1 ST 型の隠喩

起点領域を喚起する概念と目標領域を喚起する概念が両方プロファイルされる場合、その現れ方には慣用的なパターンがあることが知られている。

#### 5 つの隠喩構文

Sullivan (2007, 2013) は、認知文法とフレーム意味論を融合させながら、メタファー表現の構文的特徴の一般化を行った。Sullivan によると、起点領域を喚起する語と目標領域を喚起する語がそれぞれの要素によって実現されるかは、概念的な自律・依存関係によって予測できる。

概念的自律・依存関係 (A/D Alignment) は認知文法の重要概念のひとつで、言語表現が合成されるときに構成要素間 (音韻、意味、記号それぞれのレベルを含む) の非対称的關係を指すものである (Langacker 1987, 1991, 2002)。Langacker (1987: 300) によると、この関係は “One structure, *D*, is dependent on the other, *A*, to the extent that *A* constitutes an elaboration of a salient substructure within *D*” のように定義される。依存的な要素は意味や音を精緻化するための下位構造をもち、そこに自律的な要素が入ることによって意味や音の全体的構造が満たされる。たとえば動詞の *open* は「開く」という動作を表しているが、何を開くかによって実際の動作は微妙に異なってくる。*open the book* と *open your eyes* を比べると、目的語にとる名詞句によって動作の詳細が規定されることが分かるだろう。動詞 *open* は、その概念内容に行為の対象というスロットをもつ依存的要素であると言える。同様に、*a good book* において形容詞 *good* は名詞 *book* に概念的に依存している。どのような名詞と共起するかによって、形容詞が表す「良さ」の意味が大きく左右されるからである。構成要素は互いに依存的であり、ある要素の自律性／依存性は相対的なものである。動詞や形容詞など関係を表すものに比べ名詞は基本的に概念的自律性が高いが、*the mouth of a river* における *mouth* のように名詞が補部をとる場合は、補部によって概念内容が精緻化されることもある。Langacker の理論ではこのような要素間の非対称性は文法構造と強く関係しており、補部と修飾部の区別などに寄与する。一方 Sullivan はこの自律・依存関係を意味・概念的な領域に限定し、統語的關係とは独立したものとして捉えているという点で注意が必要である<sup>\*1</sup>。

<sup>\*1</sup> 詳しくは Sullivan (2007) の 2.4 節を参照のこと。依存要素がもつ下位構造 (=精緻化サイト) を、語が喚起するフレーム役割 (Fillmore 1982) として捉え直している。

Sullivan は、以上の概念的自律・依存関係によって、起点領域・目標領域がどのようにプロファイルされるかが予測できるとし、(1)のように一般化している。この原則にしたがう表現は、「隠喩構文 (metaphorical construction)」と呼ばれる。

### (1) 隠喩構文の原則

概念的に自律している語 (Autonomous) : 目標領域を喚起

概念的に依存している語 (Dependent) : 起点領域を喚起

たとえば *Denmark shot down the Maastricht treaty* 「デンマークはマーストリヒト条約を撃ち落とした (否決した)」では動詞 *shot down* が起点領域を喚起し、項 *the Maastricht treaty* が目標領域を喚起している。「マーストリヒト条約」はそれ単独でも想起されやすいが、「撃ち落とす」という動作は撃ち落とされる対象と独立して具体的に想起することが難しいので、概念的に依存しているといえる。

Sullivan によると、隠喩構文は次の 5 つに類型化できる。次の (2) では、起点領域を喚起する要素 (メタファー的意味を担うもの) を太字で、目標領域を喚起する要素 (字義の意味を担うもの) を下線で示している。括弧内にはそれぞれの型に当てはまる文法構造を示している。

### (2) 5 つの主要な隠喩構文<sup>\*2</sup>

【I】 Mental **exercise** 型 (Adj-N / V-Adv / Adv-Adj)

【II】 **Bright** students 型 (**Adj-N** / V-Adv / Adv-Adj)

【III】 Mind **exercise** 型 (N-N)

【IV】 **Chasing** the title 型 (**V-N**)

【V】 **Foundation** of argument 型 (**N-PP** / N's-N / V-PP)

Sullivan は FrameNet のプロジェクトの副産物としてつくられたミニコーパスを利用し、そこに含まれるメタファー表現 2415 例の分析を通し、全用例中およそ 98% がこのパターンのどれかに当てはまることを示した<sup>\*3 \*4</sup>。

<sup>\*2</sup> (2) に示すタイプ名は筆者によるものである。Sullivan の研究では *domain constructions* や *predicating modifier constructions* のように呼ばれているが、どのような表現が当てはまるか容易に分かるように、Sullivan が挙げていた具体例のひとつをそれぞれのタイプ名として用いることにする。

<sup>\*3</sup> 残りの 2% に、A is B の形をとるコピュラ型が含まれる。このタイプはメタファー表現として最もよく取り上げられてきた形のひとつであるにも関わらず、使用頻度という点ではかなりマイナーな構文であることが示された。

<sup>\*4</sup> Sullivan の予測は、Lederer (2019) によって実証されている。Lederer (2019) は、BNC コーパスを用いたより再現性の高い手法をとり、メタファー表現がこの 5 つの構文の形で実現されるとき、起点領域と目標領域がそれぞれどのスロットに入るのかを検証した。トークン数でもタイプ数でも、例外的パターンで現れるもの

まず、概念的自律・依存関係が統語的に明らかなものから説明する。【II】 **Bright students** 型は、概念的自律性が高い主要部が字義的に用いられ、形容詞、副詞などその修飾部がメタファー的に用いられるタイプである（例：*bright students*, *black humour*, *bubbling furiously*, *obliquely modernist*）。このタイプでは、メタファーに関わる2つのドメインは間接的に喚起される。たとえば *bright students* では、*bright* が起点領域である視覚のドメインを、*students* が目標領域である知性のドメインをそれぞれ間接的に喚起している。次に、【IV】 **Chasing the title** 型はいわゆる動詞のメタファーで、主語や目的語など項となる名詞句のうち少なくともひとつが目標領域を喚起するタイプである（例：*Your morals reek*, *Two people are chasing the same world title*）。【V】 **Foundation of argument** 型は、主要部となる名詞か動詞が起点領域を喚起し、前置詞句の名詞あるいは所有格の名詞が目標領域を喚起する（例：*the foundation of an argument*, *taste of his temper*, *her mind's eyes*, *escape from poverty*）。

【I】 **Mental exercise** 型に当てはまるのは、*mental exercise*, *political game* などの表現である。このタイプは【II】の **Bright students** 型とは逆に、形容詞が目標領域を、名詞が起点領域を喚起しており、一見すると概念的自律・依存関係の例外に思えるかもしれない。しかしこのタイプは、用いられる形容詞が抽象的なドメインを表すために、形容詞のほうが概念的自律性が高いと見なされる。このタイプで用いられる形容詞は、*academic*, *economic*, *political*, *religious* などが挙げられる。これらの形容詞は名詞による意味の影響をあまり受けず、むしろ名詞がもつ精緻化サイト（Sullivan の用語ではフレーム役割）を満たすことで、その名詞の意味を限定することができる。たとえば、*a religious leader* では、名詞 *leader* は指導される人や指導の内容などのフレーム役割を喚起する。ドメイン形容詞である *religious* は指導の内容を表すことで、名詞の意味を限定している（cf. Lederer 2019: 178）<sup>5</sup>。このタイプには、*verbally attack*, *financially sound* などのドメイン副詞をとるものも含まれる。

【III】 **Mind exercise** 型は、複合名詞の形をとるものである。複合名詞は基本的に、第一名詞が概念的に自律した要素を表すと言われている（例：*a jar lid*, Langacker 1991）。このタイプは一方で【I】型と似ており、第一名詞が目標領域を直接指示し、第二名詞が起点領域を喚起する（例：*mind exercise*）。もう一方で【II】型と似ており、第一名詞が間接的に目標領域を喚起する（例：*rumor mill*, *bargain hunting*）<sup>6</sup>。

なぜメタファー表現はこのパターンにしたがうのか。概念的に自律している語が目標領域を喚起し、概念的に依存している語が起点領域を喚起するのはなぜか。Sullivan 自身はこの

がきわめて少ないという結果になり、Sullivan の予測の正しさが確かめられた。

<sup>5</sup> メタファー表現におけるドメイン形容詞の役割は Reijnierse et al. (2018) を参照。ドメイン形容詞・ドメイン副詞全般に関しては、Ernst (1981, 2001) を参照。

<sup>6</sup> ただし複合名詞は例外的なパターンも多く知られる。詳しくは、第5章の脚注\*30を参照。

理由に関して詳しく述べていないが、ひとつには、自律的要素のほうが談話のトピックを表しやすいという可能性が考えられる。Croft (1993: 360) は、自律的要素と依存的要素は最終的にひとつのドメインで解釈される必要があると述べている。解釈されるべきドメインは談話のトピックによって決まるため、相対的に具体的なイメージを想起しやすい要素によって、目標領域が喚起されるのではないか。Croft も指摘するように、複合的構造がどのドメインで解釈されるかという問題は文脈や背景知識なども関わってくるためアルゴリズム的には決められないが、自律的要素の想起のしやすさが解釈されるべきドメインの決定に優位にはたらくのではないかと思われる。

### その他の ST 型構文

ST 型の隠喩には他の構文も存在する。特に Sullivan の隠喩構文にはほとんど含まれていないのが、趣意と媒体が直接プロファイルされるタイプである。このタイプは、Goatly によって「趣意明示型」として詳しく論じられている (Goatly 1997: 第 7 章)。Goatly の研究は関連性理論に立脚しているため、起点領域と目標領域という概念ではなく、趣意と媒体、根拠がいかに関与されるかという観点でメタファーの分析が行われている。趣意と媒体は直接比較されるもの同士なので、必然的に同じ品詞・文法単位で実現される<sup>\*7</sup>。趣意と媒体がどちらも言語化される場合、以下の 6 つが典型的なタイプとしてあげられる (Goatly 1997: 202)<sup>\*8</sup>。

#### (3) その他の ST 型構文

1. 名詞補部 例：The eye was a **raindrop**.
2. 並置 例：The eye, a **raindrop**
3. of 句 例：The **raindrop** of an eye
4. 名詞修飾 例：The **raindrop** eye

<sup>\*7</sup> Goatly が主に分析対象とした隠喩は、Croft や Sullivan が主に対象としていた隠喩とおおむね相補的な関係にあるといえる。Croft や Sullivan は、名詞句における形容詞と名詞や、動詞句における動詞と名詞のように、統語的關係を利用した隠喩を中心に論じる。Goatly はこのタイプの隠喩を、趣意が示唆されているもの、つまり本来用いられるべき語がメタファー的に用いられている語から間接的に喚起されるものと論じており、わずかに触れるにとどめている。

<sup>\*8</sup> Goatly が趣意明示型としてあげたものは、部分的に Sullivan の隠喩構文と重複している。3 の所有形は、Sullivan の隠喩構文の【V】**Foundation of argument** 型に、5 の複合名詞は【III】**mind exercise** 型に対応している。しかし、Goatly がもっとも重視するのは、2 つの名詞が同じものを指しているタイプであるという点で違いがある。複合名詞を例にとると、目を雨粒にたとえる *the eye-raindrop* やペンを剣にたとえる *my pen-sword* など、両者が直接イコールの関係にあるものが中心に論じられる。一方 Sullivan が論じるのは、*mind exercise* や *rumor mill* など、1 つ目の名詞が、2 つ目の名詞が解釈されるべきフレームを提供するものである。



5. 複合名詞 例：The eye-raindrop

6. 融合 例：The reyendrop

名詞補部型には様々な構文が含まれる。コンピュータ文の形をとるものに加え、状態変化を表す動詞と共起するもの（例：*Then the rock will become **a hot-cross bun*** 「岩はホットクロスパンになるだろう」）や、認識動詞と共起するもの（例：*I find Cambridge **an asylum** in every sense of the word* 「ケンブリッジはあらゆる意味で避難所だと分かった」 / *I could see the gulls as **flying-lizards*** 「カモメは空飛ぶトカゲに見えた」）もこのタイプに属する。

さらに、ST型の隠喩として、構文のメタファー的拡張に関わるタイプも含めることができる。認知文法や構文文法の考え方によって立てば、意味をもつ言語単位は個々の語や句に限られない (Langacker 1987, 1991, Goldberg 1995)。たとえば<主語+動詞+目的語+斜格語>という抽象的な構造も、「XがYをZに動かす」という使役移動の意味を表すと考えられている (Goldberg 1995)。移動を表さない *laugh* などの動詞が用いられても、*We laughed Joe off the stage* 「私たちが笑ったのでジョーはステージを下りた」のように移動を表すことができるのは、この構文自体に「使役移動」の意味があるからだと考えられる。

構文自体がもつスキーマ的意味と、その構文で用いられる具体的な語の間に意味的な緊張が生じる場合、その文は比喩的に解釈されうる (Dancygier and Sweetser 2014: 131)。たとえば次の例では、使役移動を表す構文がメタファー的に拡張され、状態変化を表している。

(4) *We laughed Joe out of his depression.* (Dancygier and Sweetser 2014: 128)

(私たちが笑ったので、ジョーは憂鬱な気分から抜け出た)

この構文は本来物理的な移動を表すが、この構文で用いられる語 *depression* は物理的な場所を表さないため、ここに意味の緊張が生じることになる。その結果、*depression* という心理的状态は場所としてメタファー的に理解され、物理的な移動ではなく心理的な状態変化を表していると解釈される<sup>9)</sup>。このとき起点領域である物理的な移動は構文全体によって、目標領域である心理的な状態変化は個々の語によって喚起される。このように考えれば、構文のメタファー的拡張に関わるものも、周辺例としてST型の隠喩の一部に含めることができる。

<sup>9)</sup> この理解には<STATES ARE LOCATIONS>、<MOTION IS CHANGE>という概念メタファーも関わっている (Lakoff and Johnson 1999)。

### 3.2.2 S型の隠喩

S型の隠喩は、目標領域を喚起する概念をプロファイルしないタイプである。起点領域を喚起する語とドメイン中立的な語から成り立つため、字義的にもメタファー的にも解釈できる。次のようなものが、S型の隠喩に含まれる。

#### (5) (第2章(12)の再掲)

- a. **The rock is getting brittle with age.** (Kittay 1984: 154)  
 (岩は経年によって砕けやすくなっている／(比喩的解釈の一例) 男性は加齢に伴い怒りっぽくなっている)
- b. **John is getting peanuts for his labour.** (Stern 1983: 587)  
 (ジョンは働いても{ピーナッツ／わずかなお金}しかもらっていない)
- c. 私は今暗闇の中にいる。 (山梨 1988)

ただし、S型の隠喩の解釈曖昧性は、文脈から切り離してその文だけを取り上げたときに生じるもので、基本的には前後の言語文脈で目標領域を喚起する概念がプロファイルされていることが多い。また、テキスト全体としてメタファー的な語りがなされるときに、その一部として現れることもある。特に寓話や説話などの教訓的なテキスト、あるいは象徴や暗示を用いた詩などは、起点領域に関わる語彙のみでテキストが構築されうる。このようにテキストの一部で一連のメタファーが展開されたり、テキスト全体で何か別のものに喩えたりするレトリックは、**アレゴリー (allegory)** あるいは**諷喩**とよばれる(佐藤・佐々木・松尾 2006)。したがってS型の隠喩は、アレゴリーの一部分をなすものとして捉え直すことができる<sup>\*10</sup>。ただし常に曖昧性が解消されるわけではなく、文学的なテキストやウィットをきかせた語りにおいては、多義的な解釈があえて意図されることも大いにありえる。

S型の隠喩にもST型の隠喩で見られたような慣用的パターンがあるかどうかは明らかになっていない。より具体性の高いレベルでは、ことわざなどのイディオム的な表現がS型の隠喩として慣用化していると言える。しかしイディオムでない場合、形の上で字義的な文と区別することはできないため、メタファーの意味を担う語が現れる位置を予測することは難しいと考えられる。構文をより広い意味で捉え、前後文脈も含めて構文とするならば、アレ

<sup>\*10</sup> Sullivan (2013) の9.6節では、アレゴリーの例として Robert Frost の詩の一節がひかれている。“Two roads diverged in a yellow wood,/ And sorry I could not travel both/ And be one traveler, long I stood ...” (Robert Frost 1916, The Road Not Taken)。ここでは目標領域が示されていなくても、人生の選択について書かれていることが理解される。

ゴリーを導入するための語りの慣用的パターンを見出すことも可能かもしれないが、今回は文法的構文を単位にしているため、このようなパターンは考えない。

### 3.2.3 隠喩の種類：まとめ

ここで、隠喩表現をプロファイルという観点から分類したものを図 3.1 にまとめる。図 3.1 に示されるように、隠喩は、(i) 目標領域を喚起する概念をプロファイルするか否かによって ST 型と S 型に二分することができ、ST 型の隠喩表現は、(ii) 趣意を直接プロファイルするか間接的に喚起するかによってさらに細分化できる。Goatly の挙げたタイプは趣意を直接プロファイルするもの、Sullivan の隠喩構文は基本的に間接的に喚起するものである。

次の図 3.2 は、隠喩の種類それぞれを図示したものである。外側の 2 つの円は起点領域 (S) と目標領域 (T) を示しており、内側の丸 (○) と四角 (□) は趣意あるいは媒体となっている要素を表している。丸は人物、モノなど名詞で表される参与者、四角は動詞や形容詞で表される行為・性質を示している。太線はその要素が言語的にプロファイルされていることを、破線はプロファイルされていないことを意味する。両者を結ぶ点線は写像関係を意味している。たとえば (a) の *the eye, a raindrop* 「目、雨粒」という隠喩表現では、起点領域内の丸が *a raindrop* を、目標領域内の丸が *the eye* を表しており、趣意と媒体が両方ともプロファイルされているためそれぞれ太線で表される。またプロファイルされている対象が直接対応付けられるため、両者は直接点線で結ばれる。(b) の *your moral reeks* 「君のモラルは悪臭がする」の場合、直接対応付けられるものがプロファイルされているわけではない。起点領域は *reek* という動詞によって喚起される（破線矢印によってそれを示している）が、物理的に悪臭を放つもの自体は言語化されていない。したがって起点領域内の破線の丸は、悪臭を放つもの一般を表している。逆に目標領域は *your moral* という名詞によって喚起され、*reek* に対応するような行為はプロファイルされていない。起点領域と目標領域それぞれに「ある参与者が何らかの行為をする」という関係が成り立ち、その関係全体が対応付けられるのである。このことを、両者を結ぶ点線で表している。

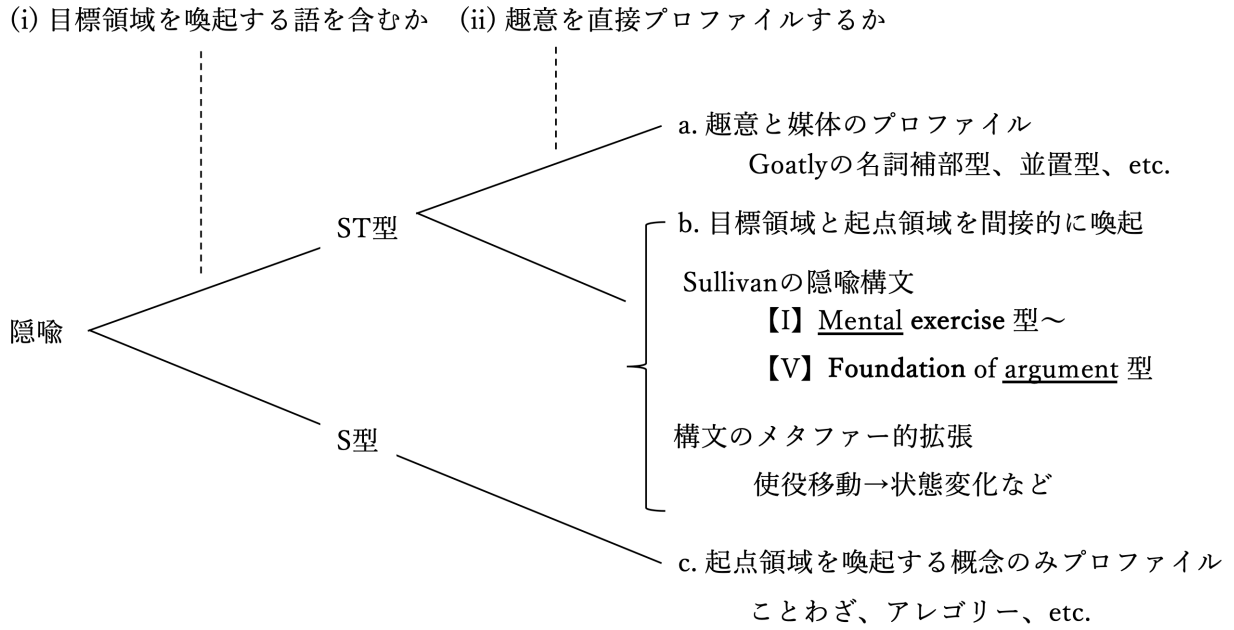


図 3.1 プロファイルによる隠喩の種類

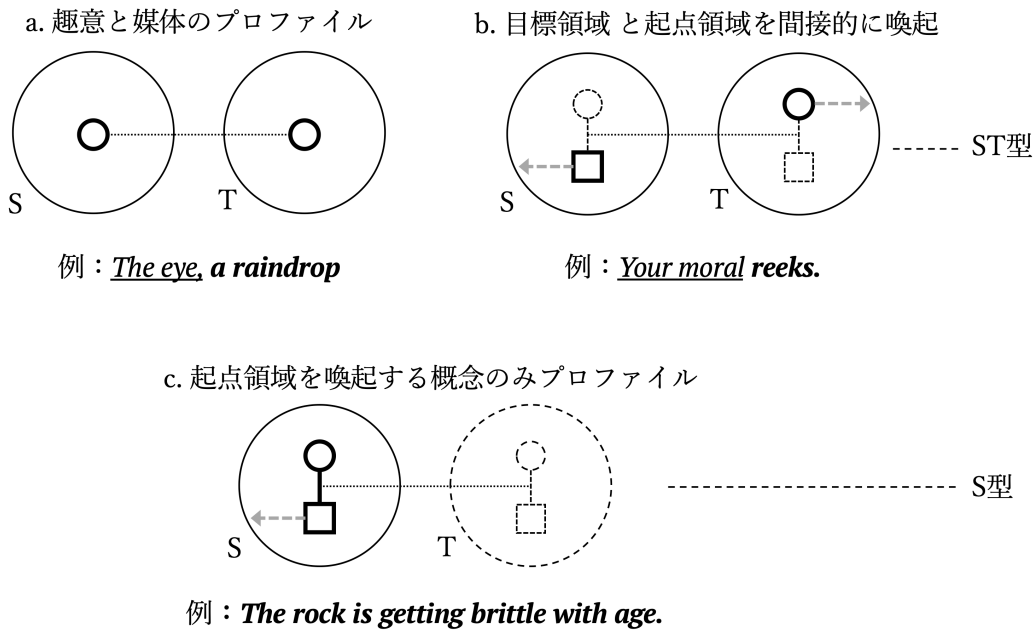


図 3.2 隠喩の種類の図示

隠喩のなかでも、メタファーの構造をどれだけプロファイルするかによって明示性の高低が生じる。起点領域と目標領域の両方が喚起される ST 型の隠喩のほうが S 型の隠喩よりも明示性が高いといえる。さらに、両ドメインを間接的に喚起するタイプよりも、趣意と媒体を直接プロファイルするもののほうが明示性が高くなる。

また、ここでは起点領域と目標領域のみに注目したが、両者の写像関係や比較の根拠がプロファイルされるか否かという観点を取り入れ、さらに細分化することも可能だろう<sup>\*11</sup>。たとえば写像関係のプロファイルという点に注目すると、ST 型のなかでも趣意と媒体の関係が be 動詞によってプロファイルされるコピュラ文の形が最も明示的と見なせる。並置型（例：*the eye, a raindrop*）も趣意と媒体が言語化されるという点では同じだが、両者の関係の解釈は読み手に任されるため、コピュラ型に比べると明示性が低いと考えられる。

### 3.3 直喩の類型

本節では、プロファイルの観点から直喩の類型化を行う。直喩は比較構文の形をとるため、趣意、媒体、写像関係が基本的に必ずプロファイルされる。よってすべてが ST 型タイプとなる<sup>\*12</sup>。したがって直喩の場合は、(i) 比較の根拠が文法的に義務的要素として現れるか、(ii) 比較の根拠が起点領域と目標領域のどちらを喚起するかという 2 つの観点で分類する<sup>\*13</sup>。

<sup>\*11</sup> 根拠がどのようにプロファイルされるか、その構文的パターンについては Goatly (1997) の第 8 章に詳しい。

<sup>\*12</sup> 例外的に趣意がはっきりとプロファイルされない場合がある。たとえば漠然と状況全体を指す *it* を主語にとる場合（例：*It's like a jail*）や、架空の状況を思い描いて「感じ」を表す場合がこれに当たる（例：*I felt as if I found a treasure in a cave and then were buried alive* 「洞窟のなかで宝物を見つけたのに生き埋めになった気分」）。前者のタイプでは、趣意が必ずしも明らかではなく、読み手の解釈に委ねられるという意味で、主語の指示対象が明らかなもの（例：*Marriage is like a jail*）に比べてプロファイルが低いと言える。後者は、実際の感情と架空の状況下での感情が比べられていると言えるが、実際の感情がどのようなものであったか明らかではないという点で、同様に考えることができる。

<sup>\*13</sup> 以降で示す分類は、日本語の直喩を同じようにプロファイルの観点から類型化した、小松原・田丸 (2019) の手法をベースとする。小松原・田丸 (2019) では、直喩の指標 (marker) を伴うものを対象に、指標がプロファイルする言語要素の関係に注目している（ここでの指標とは、「X が Y のようだ」「X ような Y」「あたかも X のように Y する」「一種の X である Y」「X 的な Y」など、幅広い対象をカバーする。X と Y は単純に先行・後続の関係にあり、趣意と媒体のどちらに関わるかということはあまり重要視されない）。たとえば、指標が写像関係をプロファイルするか否かという分類の軸では、「墨汁のようないらだたしさ」と「狸のような目」や「狐は風のように走り出した」が区別される。前者では指標「～のような」がプロファイルするのは「墨汁」と「いらだたしさ」の写像関係だが、後者ではそうっていない。したがって前者は「**直接写像方略**」、後者は「**間接写像方略**」とよばれる。

しかし、これらの分類の軸をそのまま応用することはできない。日本語の直喩は必ずしも比較構文の形をとらないため、英語の直喩にそのまま対応するとは限らないからである。たとえば「主観性明示方略」のひとつとして挙げられている「『何じゃ、この鼻赤めが。』五位はこの語が自分の顔を打ったように感じた」という例は、「ように」が入っているために直喩の一例として見なすことができるが、比較構文の形をとる英語の直喩とは異なり、趣意がプロファイルされていない。

一つ目の観点、(i) 比較の根拠が文法的に義務的要素として現れるか否かは、直喩の典型例である A is as ... as B と A is like B の区別に関与する。両者は、比較の根拠（次の例で斜体で示されている部分）が文法的に必須かどうかという点で大きく異なる。A is as ... as B は、比較の根拠が文法的に必ずプロファイルされる。A is like B は、(6b) のように前後の文脈で根拠が示されることが多いことも事実だが (Romano 2017)、この要素は任意であるという点で区別される。

(6) a. She is as *light* as a **feather**.

b. Independence is like **an elephant** – *difficult to describe but instantly recognizable*.

(Romano 2017: 2)

本研究では、A is like B のように比較の根拠を伴わなくてもよいタイプを「直接比較型」と呼び、A is as ... as B のように比較の根拠が義務的に現れるものを、趣意と媒体の比較が根拠によって介在されるという意味で、「根拠介在型」と呼ぶことにする。根拠介在型は、(ii) 比較の根拠が起点領域と目標領域のどちらを喚起するかによって、「根拠＝起点領域型」、「根拠＝目標領域型」、「根拠＝中立型」の3つに、さらに細分化できる。以下では、各タイプについて、具体例を示しながら述べていく。

### 3.3.1 直接比較型、根拠介在型

#### 直接比較型

「直接比較型」は、比較の根拠が文法的に必須ではなく、趣意と媒体が直接比較されるタイプである。このタイプの典型例は、(7a) のように趣意と媒体の類似性を述べるものである。しかしそれだけにとどまらず、(7b) のように節同士が対比されるもの、(7c) のように趣意が知覚動詞や認識動詞の目的語によって、媒体が as 句の補部によって表されるものなども、このタイプに含めることができる。

(7) a. My love {is like/ is similar to/ resembles} a **red rose**.

b. It [= her portrait] no more approached her than a **weed comes up to a rose**.

(Edith Wharton, qtd. in Israel et al. 2004: 125)

c. A madam would see the gulls as **flying lizards**. (Goatly 1997: 191)

ただし、統語的には直接比較の形をとるが、意味的には趣意と媒体がずれて見える場合もある<sup>\*14</sup>。具体的には、次のような例が含まれる。

<sup>\*14</sup> 省略が関わる場合もずれが生じるが、ここでは元の形を復元したときに直接比較型あるいは根拠介在型とし

- (8) a. Poor Colin has a face like a wet weekend.  
 b. The room was shuddering slightly, as if a tunnel on the underground lay below.

(Goatly 1997: 186)

(8a) は、直訳すると「衰れなコリンは雨の週末のような顔をしている」で、「コリンは非常にがっかりした顔をしている」という意味を表す。形の上では、*a face* と *a wet weekend*、あるいは *have a face* を介して *poor Colin* と *a wet weekend* が比較されているが、どちらの解釈も適切ではないと思われる。この表現では、プロフィールされている二者は実際には類似関係になく、形と意味の間にずれが生じていると考えられる。次の (8b) も同様である。主節と *as if* 節によって表されている事態が、直接比較されていると解釈することは難しい。

このような「ずれ」が関わる時、起点領域として、現実の事態をもたらし原因となりそのようなシナリオが想起されるという特徴がある。我々が具体的に思い描くことができるシナリオを引き合いに出すことで、その結果生じたものとして、現実の事態の性質や様態が鮮明に描写されている。ここには、原因で結果を表すというメトニミー的な関係が関わっていると考えられる。たとえば (8a) では、「雨の週末」と「コリンの表情」の間に見立ての原因・結果関係がなりたっている。*like a wet weekend* 「雨の週末であるかのような」は、週末が雨だと人々がどのような表情をするかというシナリオを想起させ、そのシナリオが原因となって引き起こされた結果として、コリンの表情が描写されている。(8b) も同じく、部屋の揺れは、「真下に地下トンネルが走っている」という仮想的な原因によって引き起こされたものであるかのように描かれている。ここで重要なのは、実際の原因と引き合いに出される原因が類似関係にあるわけではないということである。その意味で、趣意と媒体がずれていると言える<sup>\*15</sup>。

### 根拠介在型

「根拠介在型」は、趣意と媒体に共通する要素が文法的に必須であり、省略できないタイプである。典型的には、*as* 句や *like* 句が、先行する形容詞句や動詞句を修飾する副詞句としてはたらく形をとる。(9a) では、彼女と羽が直接比較されるのではなく、「彼女の軽さ」が「羽の軽さ」に喩えられることによって、間接的に彼女と羽のイメージが重ね合わされる。直接比較型の場合と異なり、性質や様態の局所的な類似が問題となるため、写像のスコープが狭くなることが多い<sup>\*16</sup>。このタイプの周辺的な例は、(9c・d) のようなタイプで、比較の観点

て解釈できるものは除外する (例: *The movement is like waves = The movement of yoga is like that of waves*)。

<sup>\*15</sup> 趣意が具体的に言語化されない場合 (例: *It's like a jail, I felt as if I found a treasure in a cave and then were buried alive*) も、このタイプに含めることができるかもしれない。

<sup>\*16</sup> Moder (2008, 2010), Dancygier and Sweetser (2014) は、直喩には写像のスコープが広いものと狭いものがある

(色、大きさ、形、手触り、音など) がプロファイルされることで、間接的に写像が達成されている。

- (9) a. She is as *light* as a **feather**.  
 b. The boy *swam* like a **fish**.  
 c. This wine has the *color* of **fire**.  
 d. My kitchen is approximately the *size* of a **postage stamp**.

(Laurie Colwin, qtd. in Israel et al. 2004: 130)

### 3.3.2 根拠＝起点領域型、根拠＝目標領域型、根拠＝中立型

根拠介在型は、比較の根拠が起点領域と目標領域のどちらを喚起するかによって、根拠＝起点領域型、根拠＝目標領域型、根拠＝中立型の3つのタイプに類型化できる。

#### 根拠＝起点領域型

一つ目のタイプは、比較の根拠が起点領域に属するものである。このタイプは、「隠喩支援」の機能をもつ。すなわち、趣意と根拠との間の意味的な緊張から隠喩として解釈できる表現に、媒体を付け加えることによって、隠喩の意味を補強する。具体的には以下のものが当てはまる。

- (10) a. The classroom was *buzzing* like a **beehive**. (Dancygier and Sweetser 2014: 142)  
 b. Her argument was as *clear* as **glass**.

たとえば(10a)は、*the classroom was buzzing*「教室はブンブンと音を立てていた(ざわめいていた)」だけで隠喩として成立しているが、これに *like a beehive*「蜜蜂の巣のごとく」が付け加えられることによって、そのイメージがより具体化される。(10b)も、形容詞の慣用化した比喩的な意味が、比較の対象をとることによって再活性化されていると捉えられる。

---

ると指摘している。Dancygier and Sweetser (2014)によると、写像のスコープが狭いタイプでは起点領域はあまり重要でなく、媒体がもつ属性のうち、際立ったものだけに焦点が当てられる。したがって構造的写像が行われるときは異なり、プロファイルされる類似性をこえた類推はあまり許されない(Dancygier and Sweetser 2014: 142-145)。この考え方にしたがえば、少なくとも一部の誇張的な表現に関しては、間接写像という呼称よりも「部分的写像」のほうが適切かもしれない。たとえば“His face went as white as a sheet”「彼の顔はシーツのように真っ白になった(=恐怖で青ざめた)」は、「白さ」を介して彼の顔とシーツを比較しているわけではなく、彼の顔色を描写するためにシーツの「白さ」のみが注目されていると見なせるからである。



### 根拠＝目標領域型

比較の根拠が目標領域を表すタイプは、趣意となる名詞句と根拠を表す形容詞あるいは動詞自体は、字義的な関係を表す。したがって *like* 句や *as* 句によって、文字通りの文脈にメタファー的に「イメージの挿入」を行うという効果がある。

- (11) But when she returns he hangs on to her like **a leech** and refuses to let the other person come near. (Goatly 1997: 185)

(11) では、*he hangs on to her* 「男の子は彼女（母親）にしがみつく」という字義的な表現に *like a leech* 「ヒルのように」という付加詞句が付け加えられることで、少年がしがみつく様子がメタファー的に描写される<sup>\*17</sup>。

### 根拠＝中立型

第三のタイプとして、比較の根拠が起点領域と目標領域のどちらにも属することができる、中立的な場合がある。具体例を挙げることで性質や様態を叙述する「例示」の機能をもつことがその特徴である。

- (12) a. She is as *light* as **a feather**. ((9a) の再掲)  
 b. When the phone rang, he jumped like **a jittery private in a fox-hole**.  
 (Israel et al. 2004: 132)  
 c. Human brains *function* as **a machine**.  
 d. Italy is *shaped* like **a boot**.  
 e. The biscuit *tastes* like **a cardboard**.

まず、(12a・b) のように *as...as* の形や動詞句 +*like*～の形をとり、極端な例を引き合いに出すことで当該の性質や様態の程度を強めるものが挙げられる。(12c～e) は、述部が比較の着眼点（形や色など）を表すタイプである。具体的にどのような性質をしているかは述べられないが、具体例が示されることによって聞き手はその性質の内容を理解することができる。

このタイプの直喩は、起点領域と目標領域の相互作用というメタファーの重要な側面はあまり関わっておらず、当該の性質を有しており、かつ十分に具体的で身近なものであれば、媒体として適切に用いられる。したがって、(12a) で *feather* の代わりに *air* を比較対象にして、*she is as light as air* と述べても、基本的には大きく意味は変わらない<sup>\*18</sup>。

<sup>\*17</sup> このタイプは副詞のメタファーと似ている。たとえば *The large oak trees proudly spread their branches* では、副詞によって擬人的な効果が生まれているが、これを *like* 句によって言い換えることも可能だろう。

<sup>\*18</sup> ただし、その概念から連想される評価的な意味が関わる場合もある。これについては第6章で詳しく論じる。

### 3.3.3 周辺の直喩

本研究では直喩を比較構文の形をとるものと定義し、隠喩と区別した。しかし厳密には比較構文の形をとらないが、きわめて直喩に近い性質をもつ表現が存在する。次に示す表現は、趣意と媒体、比較の根拠がプロファイルされるという点で直喩と共通している。

- (13) a. This wine has the *color of fire*. ((9c) の再掲)  
 b. My kitchen is approximately the *size of a postage stamp*. ((9d) の再掲)  
 c. I proceed with the *speed of a turtle*.  
 d. 名詞派生形容詞：an **olive-colored dress**, **egg-shaped candies** 等  
 e. 複合名詞：**snow-white hands**, **rose-pink cheeks** 等

(13a)~(13c) のように比較の着眼点（色や大きさ、早さなど）が of 句の主要部として現れるものは、典型的な比較構文ではないが、直喩と似たような意味を表すことができる。主語として現れる対象と前置詞 of の補部として現れる対象との間に、間接的な写像関係が成り立っているからである。これらの表現は、研究者によっては比較構文の範囲に含められることもある (cf. Israel et al. 2004)。また (13d) の名詞派生形容詞は、派生接辞 (-colored, -shaped) の部分で比較の着眼点を表している。(13e) の複合名詞は、第二の名詞が比較の根拠（「雪」と「手」が白さという点で共通していること等）を表している。これらは直喩のなかでも、「根拠=中立型」に近い表現と言える。

さらに、「直接比較型」の直喩に近い表現も存在する。-like や -y, -ish などの派生接辞を伴う名詞派生形容詞がこれに当たり、たとえば *a thunder-like voice*, *silky hair* などの表現が挙げられる。これらの表現では、形容詞化される名詞（「雷」や「絹」）と被修飾部の名詞（「声」や「髪」）の間で写像関係が成り立っており、A is like B のような直接比較型の直喩構文を名詞句の形に言い換えたものとして捉えることができる。

### 3.3.4 直喩の類型：まとめ

直喩をプロファイルという観点から分類したものを、図 3.3 に示す。直喩は、(i) 比較の根拠が文法的に義務的要素として現れるかによって、「直接比較型」と「根拠介在型」の 2 つに区分できる。根拠介在型は、(ii) 比較の根拠が起点領域と目標領域のどちらを喚起するかによってさらに三分することができ、「根拠=起点領域型」「根拠=目標領域型」「根拠=中立型」はそれぞれ異なる修辞効果をもつと考えられる。

隠喩と同様に、直喩の類型それぞれを図示したものを図 3.4 に示す。外側の 2 つの円は起

点領域 (S) と目標領域 (T) を、内側の丸は趣意と媒体を、太線はプロフィールを表す。直接比較型では、趣意と媒体が直接比較されることを矢印によって表している。根拠介在型では、根拠となる性質あるいは様態を四角で、趣意と媒体の対応関係を点線で示している。根拠が喚起するドメインの違いは、趣意と媒体のうちどちらの性質・様態がプロフィールされるかによって表している。たとえば *Her argument was as clear as glass* のような根拠=起点領域型では、「透明さ」という性質は媒体である「ガラス」の性質を述べたものであると捉え、起点領域における性質を太線で図示することで、これを表している。

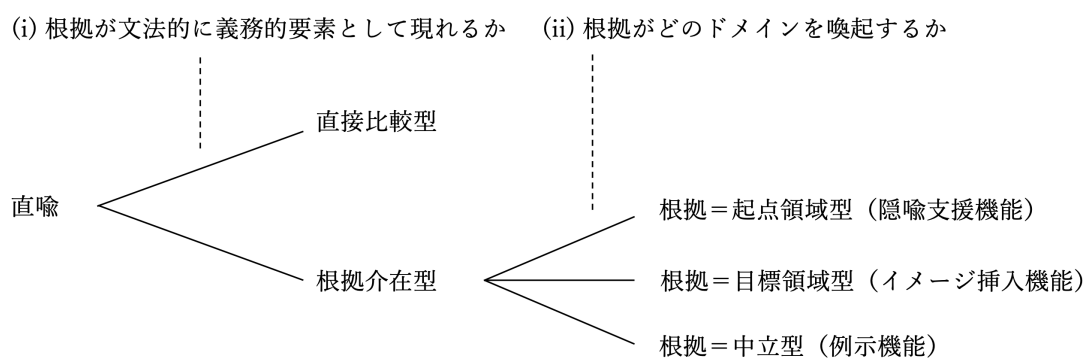


図 3.3 プロファイルによる直喩の類型

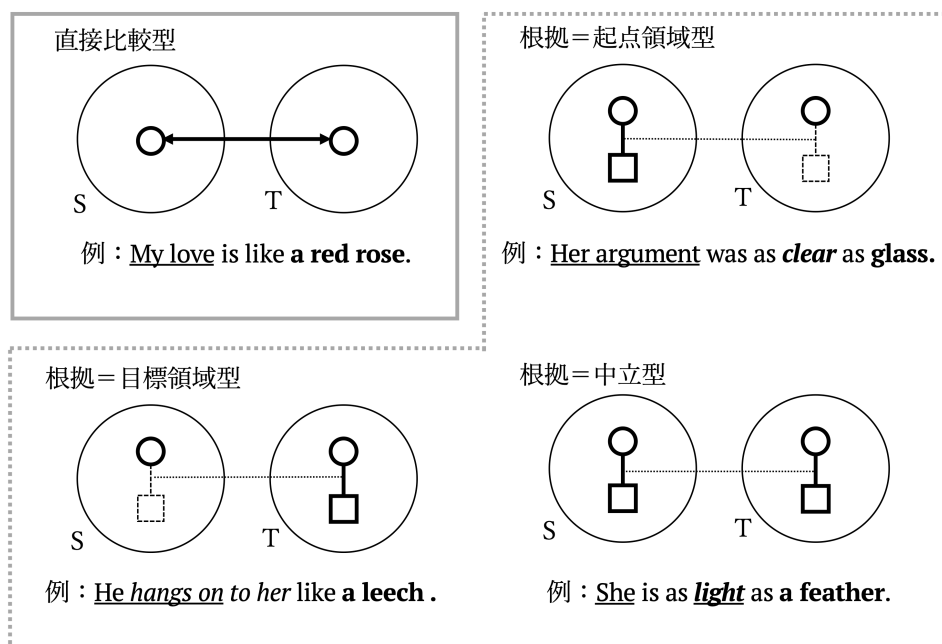


図 3.4 直喩の類型の図示

直喩のなかでも、趣意、媒体、比較の根拠がすべてプロファイルされているものは、明示性の高い直喩表現ということができる。しかし、明示性が高いことと修辞性は直接は関係しない。Ortony (1979) は、A is as ... as B のように根拠がプロファイルされるタイプは字義的な意味を表し、A is like B のように根拠が聞き手の解釈に任されるタイプに比べて修辞性が低いと述べているが、本研究ではそのような見方をとらない。根拠が必ず言語化される形をとるものも、何らかの側面で通常の字義的比較から逸脱しており、その構文特有の修辞効果が生まれていると考える。その修辞効果の一端は、上ですべに述べたとおりである。字義的比較と直喩がどのように異なるか、どのような側面で逸脱しているのかという点については、第6章で詳しく論じる。

### 3.4 メタファー標識の類型

この節では、メタファー標識の類型化を試みる。メタファー標識はある表現がメタファーであること、つまり規範的な用法からの逸脱が関わっていることを指標することで、聞き手の解釈の方向づけを行うものである。この逸脱は、認知言語学の立場からは概念化者の主観的な認識にもとづく、規範的な事態把握からの逸脱として捉えられる。話し手の主観的な認識の反映であることはメタファーの重要な側面のひとつだが、それがコミュニケーションのなかで聞き手に向けて用いられるものであるという側面も忘れてはならない。そこで本研究では、崎田・岡本 (2010) の発話事態モデルにもとづき、メタファー標識が発話事態のどのような側面を明示することで逸脱を指標するのかという観点を取り入れながら、メタファー標識を整理したい。

まず 3.4.1 節で、メタファー標識にはどのようなものが含まれるか、またこれまでどのような分類がなされてきたかを述べ、その問題点を指摘する。次に 3.4.2 節で、本研究におけるメタファー標識の類型の試案を示す。

#### 3.4.1 メタファー標識の多様性

メタファー標識とは、ある表現がメタファー表現であることを指標する要素のことで、起点領域から目標領域への写像が働いていることを、聞き手に 'alert' するものであると言われる (Steen et al. 2010: 40)。メタファー標識は *like* や「ようだ」などがその典型と見なされてきたが、実際のテキストでは様々な表現がメタファー標識として機能する。また接辞や構文レベルでの有標性、音声的・書記的強調、ジェスチャーや表情など、語句レベル以外の方法で指標されることもある。日本語のメタファー標識については中村 (1977)、山梨 (1988)、鍋

島 (2016) などで、英語のメタファー標識については Goatly (1997)、Steen et al. (2010) などとその多様性が示されている。表 3.5 では、様々なジャンルのテキストから多くの標識を収集し、メタファー標識の多様性を明らかにした Goatly (1997) による標識の分類を示す。

Goatly (1997) の類型は、表記法まで含めた幅広い言語現象が指標として機能するという点を示したという点で意義深い。しかし、表 3.5 から分かるように意味分類、統語分類、機能分類がないままになっており、個別のイディオム表現がひとつのタクソンとなっている場合もあるなどの問題があり、アドホックな印象を免れない。このひとつの要因は、個々の標識からボトムアップ的に分類が行われていることにあると考えられる。

ボトムアップ的な分類のもうひとつの問題点は、ひとつの標識がいずれかのグループに割り振られることになり、複数のグループにまたがる可能性を見落としてしまいかねないという点である。たとえば *sort of* は、Goatly の分類では上位語というグループに位置付けられているが、カテゴリーの包含関係を表すだけでなく、*in a way* や *a bit of* などと同様にヘッジ表現として断定の力を弱めることによって、規範的な事態認識からの逸脱を示すこともできる。よって、実際には同じ言語表現が文脈によって異なる機能を果たすことがある。

このような従来のボトムアップ的な分類に対して、鍋島・中野 (2017) はメタファー表現を動機付ける認知構造を想定し、認知構造のどの側面を明示するかという観点での体系的・統一的な分類を提案した (図 3.6)。この認知構造は「比喩化フレーム」と呼ばれる。比喩化フレームには、比較という過程 (図で破線で示されている部分) に加えて、認識・仮想・言語化・比喩化という認知主体の認識過程も含まれる。このようなフレームを想定する利点のひとつは、「たとえて言うならば」のように複合的な標識を、比喩化、言語化、仮想など複数の側面が同時に明示化されたものとして捉えることができるようになることである。

しかし、比喩化フレームで捉えきれないのが、コミュニケーション上の役割という側面である。このフレームでは、概念化者のメタファー的認識過程に光が当てられる一方で、標識がコミュニケーションのなかでどのような役割を果たすかという点が見過ごされている。標識によるメタファーの明示化はコミュニケーションの中で行われるものであり、聞き手に対する配慮という側面を無視することはできない<sup>\*19</sup>。したがって本研究では、概念化者の事態把握の過程も包摂した崎田・岡本 (2010) の発話事態モデルの枠組みを用いて、発話事態のどの側面に焦点が当てられるかという観点から標識を整理してみたい。

<sup>\*19</sup> たとえば Cameron and Deignan (2003) は、同じような言語現象を “tuning device” と呼び、ディスコースにおいて予測できない何かが起きていることを知らせる、聞き手の解釈を誘導する、メタファーの力を調整するなどの、標識が果たす語用論的な役割に重きを置いている (同上: 159)。

表 3.5 Goatly (1997) の標識の分類

明示的標識	metaphor/-ically, figurative/-ly, trope
強意	literally, really, actually, in fact, simply, fairly, just, absolutely, fully, completely, quite, thoroughly, utterly, veritable, regular
ヘッジ、緩和詞	in a/ one way, a bit of, half-, practically, almost, not exactly, not so much ... as ~, ... if not ~
メタ言語的表現	in both/ more than one sense(s), mean(-ing), import
模倣語	image, likeness, picture, parody, caricature, model, plan, effigy, imitation, artificial, mock
象徴語	symbol(-ic/ -ically), sign, type, token, instance, example
上位語	(some) (curious, strange, odd, peculiar, special) sort of, kind of
コピュラ形の直喩	like, as
精緻化の直喩	Material verb + like x, the y of a x, y's x, Noun-adj., the x equivalent of
節比較の直喩	as if, as though
知覚動詞	seemed, sounded, looked, felt, tasted, + like/ as though/ as if
誤認	delusion, illusion, hallucination, mirage, phantom, fantasy, unreal
認識動詞	believe, think, regard, unbelievable, incredible
発話動詞	say, call, refer to, swear
<i>so to speak</i>	so to speak
表記	“ ... ” . ! white space
法助動詞 + 発話動詞	could say, might say
モーダル	must, certainly, surely, would, probable/-y, may, might, could, possible/-y, perhaps, impossible/-bility
条件節	if ... could, would, might, imagine, suppose
<i>as it were</i>	as it were

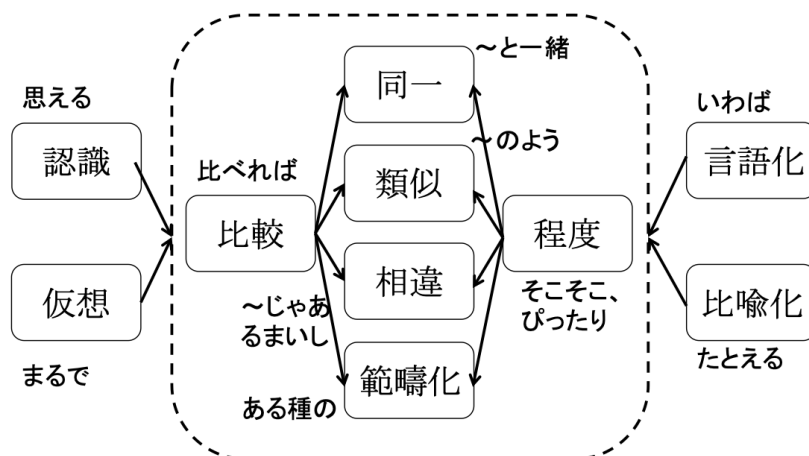


図 3.6 比喩化フレーム (鍋島・中野 2017)

### 3.4.2 発話事態モデルと標識

話し手がコミュニケーションの場に参与するとき、事態を認知し言語化するだけでなく、それを聞き手に表出し、発話することによって何らかの行為（陳述、質問、要求など）を行っていると言うことができる。崎田・岡本(2010)は、このような発話の産出と理解を成り立たせるコミュニケーションの場を、発話事態モデルとして表した(図 3.7)。このモデルでは、発話事態は<話し手>、<聞き手>、<対象・事態>を中心に構成され、発話はこの三者間の相互関係全体から理解されると想定される<sup>\*20</sup>。発話事態をこのように捉えるとき、話し手は単に対象を認知する主体としてコミュニケーションに参加するのではなく、対象についての情報を聞き手に与える主体、発話によって聞き手に何らかの行為を行う主体という、3つの次元でコミュニケーションに関わる。

#### (14) コミュニケーションにおける話し手の多元性

- a. <事態認知>の主体
- b. <情報共有>の主体
- c. <発話行為>の主体

<sup>\*20</sup> 発話事態には、周辺の要素として、ほかに<状況コンテキスト>や<先行文脈>、<世界知識>、<言語知識>などが関わっているとされる。

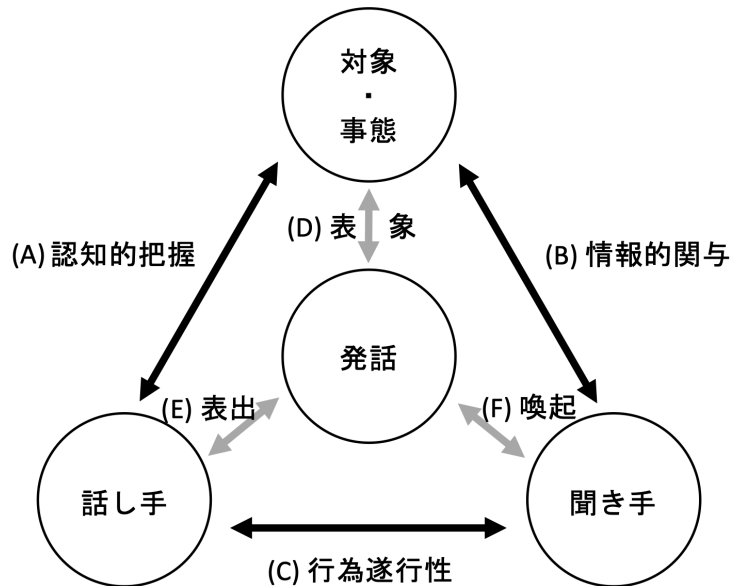


図 3.7 発話事態モデル (崎田・岡本 2010: 147)

図 3.7 の矢印は、「言語媒介的關係」と「言語機能的關係」を表している。外側の黒色の矢印は言語によって媒介される行為を表しており、上で述べた話し手の 3 つの次元での関与を意味している\*<sup>21</sup>。内側の灰色の矢印は発話をもつ 3 つの記号的機能、すなわち対象を表象する機能、話し手の感情や社会的属性などを表出する機能、聞き手へ意味を喚起する機能を表している。これらの媒介的關係や機能的關係は同一の発話によって成り立つため、ある発話はいずれかの關係を優先的に伝達すると同時に、他の關係を伝達するポテンシャルを持つ。

発話事態モデルは、話し手の主体的関与だけでなく、聞き手が発話を理解するために想定・参照する關係性を表している。発話を理解するとき、聞き手は発話から何らかの点で意味のあることを受けとることを期待する。意味があるというのは新しい情報を得るということに限られず、話し手の要求に気付いたり、皮肉や嘘として解釈したりすることも含まれる。崎田・岡本 (2010) では、このような理解や解釈を動機づけるのは、発話事態の「規範」的關係性とそこから「逸脱」であると論じられている。事態認知、情報共有、発話行為のそれぞれに規範的な關係があり、いずれかの規範からの「逸脱」が聞き手の主体的な理解のトリガーとなり、その認知的解消を通じて、聞き手は自らの世界知識を改変し再構成することができるのである\*<sup>22</sup>。

\*<sup>21</sup> ただし「情報の関与」という用語は、どちらかというと発話理解・解釈に重点が置かれた用語で、聞き手が発話が表象する事態を情報として自らに関与づけるというプロセスを指している。

\*<sup>22</sup> 崎田・岡本 (2010) では、「雨が降ってきたよ」という発話を例に、発話理解の際に生じる逸脱とその認知的解



メタファー表現は主に、事態認知の次元での逸脱が関わる。人生を芝居にたとえたり、恋人を夏の日に見立てたりすることは、聞き手とは異なるものの見方を反映すると考えられるからである<sup>\*23</sup>。したがってメタファー表現に付け加えられる標識は、この事態認知の次元での逸脱を聞き手に気付かせるはたらきがあると考えられる。では、メタファー標識は発話事態のどのような側面に焦点を当てることで、事態認知のレベルでの逸脱を示唆するのか。言い換えれば、発話事態を構成する関係性のうち、どの関係性が主にプロファイルされるのか。以降では、Goatly (1997) によって挙げられたもの(表 3.5)を中心に、メタファー標識を発話事態モデルに則って整理し直したい。具体的には、3つの言語媒介的關係と3つの言語機能的關係に加え、起点領域と目標領域の写像關係に注目し、次の7つの關係から標識の分類を行う<sup>\*24</sup>。

(15) メタファー標識が明示する關係

- (A) 認知的把握 (対象・事態と話し手)
- (B) 情動的関与 (対象・事態と聞き手)
- (C) 行為遂行性 (話し手と聞き手)
- (D) 表象 (発話と対象・事態)
- (E) 表出 (発話と話し手)
- (F) 喚起 (発話と聞き手)
- (G) ドメイン間写像 (対象・事態の内部關係)

---

消のプロセスが説明されている。(i) 事態認知の次元での逸脱が生じるのは、聞き手にとって知らないことが述べられる場合や事態認知が食い違う場合などである。前者では世界知識が更新され(例:「砂漠でも雨が降るんだ!」)、後者では「この程度では雨が降ってきたとは言わないよ」と訂正をするなどの反応が考えられる。(ii) 情報共有の次元での逸脱は、情報的な価値がない場合がその典型である。聞き手がこのような逸脱に気付いたときの反応としては、「これだから梅雨は嫌だね」などの発話が後続することを期待するか、あるいはひとりごととして受けとるなどが考えられる。(iii) 発話行為の次元での逸脱は、その表現を用いることが文脈的に不適切な場合などが挙げられる。たとえば聞き手が遊びに誘ったという場面でこの発話がなされたとしたら、期待される応答が返ってこないことから、断りの言葉と解釈することができる。

<sup>\*23</sup> もちろん概念メタファーのようにその逸脱が慣用化されている場合は、逸脱として意識されないこともある。

<sup>\*24</sup> この類型化は、メタファー標識を、それ以外の談話標識 (discourse markers) あるいは (メタ) 語用論的標識 ((meta-) pragmatic markers) と区別するためのものではない。談話標識は幅広い言語現象を含む概念であり、研究者によってその定義や捉え方は一様ではないが、基本的には発話同士を関係づけ、談話の流れを決めるために用いられるメタ的言語である (Schiffrin 1987, 2001, Fraser 1990, 1999, 2006)。英語では、*but, so, well, oh, y'know* など比較的短い語句がその代表的な例として挙げられる。談話標識が果たす機能は多岐にわたるが、その主要なものとしては、談話全体の一貫性を構築していくための「テキスト構成的機能」と、会話参加者間でフェイスを損ねることを緩和するために用いられる「対人的機能」があり、さらに法助動詞的な「メタ言語的機能」が挙げられる場合もある (林 2008)。メタファー標識も、ある発話あるいは文がメタファーであることを指標するメタ言語的機能を果たしており、談話標識/語用論的標識の一種と位置づけられる。このモデルを他の標識の機能の説明にも用いることができるかどうかの検討は、今後の課題としたい。

(G)の関係は発話事態モデルには含まれていない側面だが、メタファーを考えるときには、発話によって表される事態の内部関係が重要となる。メタファーの場合、言語的に指示されている対象とその文脈における実際の指示対象との間にずれが生じることが多いからである。このずれをとらえるために、叙述される事態の内部関係に目を向ける必要がある。メタファーの場合、この内部関係とは、たとえのために引き合いに出される起点領域と、実際に談話のトピックとなっている目標領域の間のドメイン間写像の関係を指す。このドメイン間写像の関係を、発話事態モデルで想定される関係に加え、7つ目の関係として設定したい。

次の図 3.8 では、発話事態モデルにおける対象・事態の部分に、ドメイン間写像の関係を埋め込んだものを示している（このドメイン間写像の関係は、隠喩や直喩の類型において示した図 3.2 および図 3.4 を簡略化したものに対応している）。

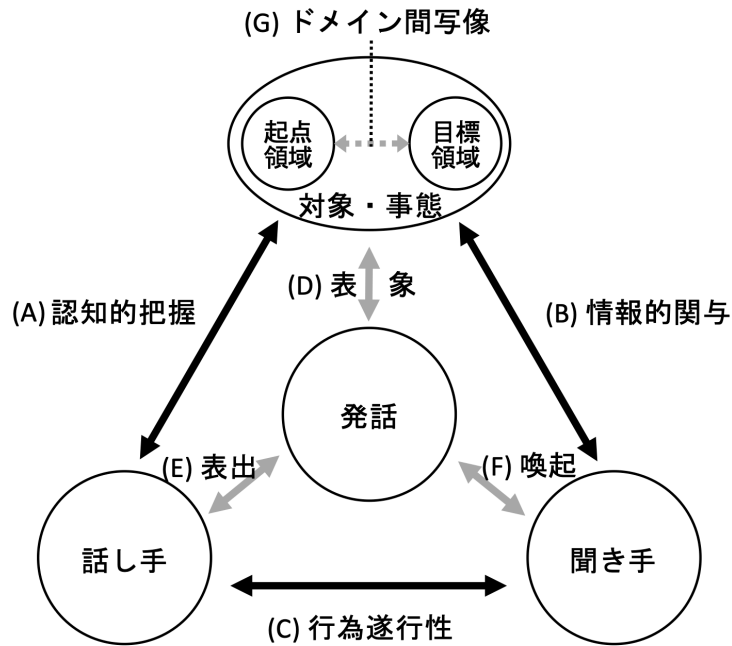


図 3.8 発話事態モデルの7つ目の関係

なお、以降では標識をいずれかのタイプに分類しているが、どの関係を優先的に指標するかによって分類しているのであって、その関係のみを指標するという意味ではない。発話事態モデルではひとつの発話が同時に異なる言語機能を果たしうると考えるが、同じことがメタファー標識にも当てはまる。また、同じ標識が文脈によっては別の関係を優先的に指標する場合もありえる。さらに、複数の標識が組み合わせられることも十分考えられる。したがって以降で示すものは、典型的な使用場面を想定したものにすぎない。

## (A) 認知的把握の明示

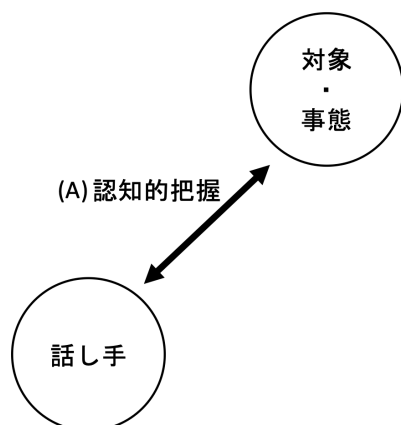


図 3.9 話し手と対象・事態

例： *to me, think, believe, see, find, sound, look, taste, is said to be ..., as is referred to ... by, it seems that ..., would, could, might, probably, fantasy, delusion, illusion, unreal, etc..*

第一のタイプは、認知主体による主観的な事態把握であることを明示することで、メタファーを指標するものである。認識動詞や知覚動詞によって事態把握のプロセスを表すもの、*to/for someone* など認知主体を明示するもの、モダリティを表す表現によって認知主体の存在を示唆するものなどがこのタイプに属する。

- (16) a. A madam would see the gulls as flying-lizards. (Goatly 1997: 191)  
 b. She sounded like a whole party of people. (Goatly 1997: 187)  
 c. The forest was believed to be a prison.

典型的には (16a) のように認知主体とその認識過程の両方 (*a madam would see ... as*) が言語化される<sup>\*25</sup>。一方で (16b・c) のように認知主体が言語化されないことも多い。(16b) では推論の根拠 (*sounded*) を示すことによって間接的に認知主体の存在が喚起されるが、(16c) のように不特定多数に帰することもできる。

<sup>\*25</sup> このとき、認知主体は必ずしも語り手と一致する必要はない。この例で認知主体となっているのは、*a madam* という物語世界内の人物である。ナラトロジーの分野では語りの視点が重要になり、主体がさらに細分化される。たとえば福沢 (2015) は、表現主体を「言及対象」「視点」「語り手」「作者」の4階層に分解し、言語表現には、表現される対象 (人物の内面を含む)、その対象を知覚・認識し判断する主体、特定の視点から見られたものごとを言語で表現する主体、そして言語表現から全体的テキストをつくりあげ発言の責任と権利をもつ主体が関わっていると主張している。

## (B) 情報の関与の明示

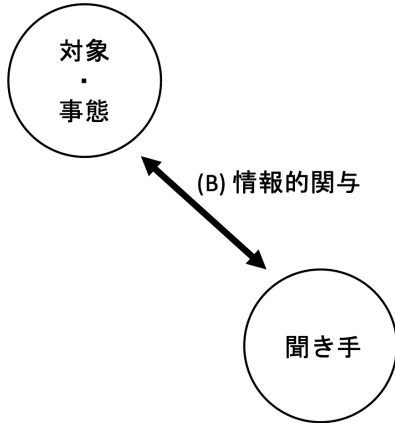


図 3.10 聞き手と対象・事態

例: *You can think ..., You almost swear ..., You might say ..., Say if you like ..., Suppose ..., Imagine ..., etc.*

聞き手の情報の関与に焦点を当てるタイプは、Goatly (1997) の分類ではあまり観察されない。しかし次の (17) のように、典型的には *you* を伴い、聞き手の認識過程に言及するものはこのタイプとして見なせられると思われる。

(17) a. Food for thought, you might say.

(Goatly 1997: 191)

b. Imagine that the forest is a prison!

(17a) は *food for thought* 「思考の糧」という使い古された表現に対して、*you might say* と付け加えることで、慣用化されたメタファー的認識に対して聞き手がどのように関与しているかを表している。(17b) の *Imagine* は、補部節で述べられているメタファー的事態把握を行うよう聞き手を導いている。ただし命令の形をとるため、この標識は同時に (C) の行為遂行性を明示するタイプの標識としても機能していると言える。発話することで、聞き手に「何かを想像させる」という行為を行なっているからである。この例は、ひとつの標識が異なる関係性に焦点を当てる好例となっている。

## (C) 行為遂行性の明示

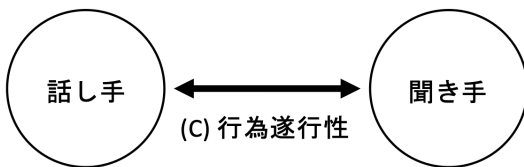


図 3.11 話し手と聞き手

例: *let me say, compare ... to, to change the metaphor, describe, express, tell, show, Suppose, Imagine, etc.*

発話行為、つまり「たとえること」や「発話すること」を明示することによってメタファーであると指標するタイプもまた、メタファー標識としては周辺的なタイプである。典型例は、発話動詞や認識動詞が疑問や命令の形で用いられ、聞き手への発話行為を表すものである。たとえばシェイクスピアのソネット 18 番の冒頭は、このタイプの好例と言えるだろう。

(18) a. Shall I compare thee to a summer's day?

(Shakespeare, *Sonnet 18*)

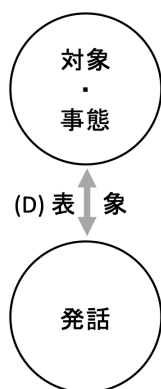
b. Imagine that the forest is a prison!

((17b) の再掲)

(18) のように、たとえるという発話行為を明示することは、この発話に続きメタファー的な語りを展開するためのシグナルとなりうると考えられる。

以上、話し手、対象、聞き手の言語媒介的關係をプロファイルする標識について述べた。次に、発話の記号的・機能的關係に関するタイプについて、表象機能から順に見ていく。

#### (D) 表象機能の明示



例： *metaphor, sign, token, metaphorical, metaphorically, literally, symbolically, metaphorically speaking, this is figurative, if such a trope may stand, in a sense, so to speak, mean, import, represent, epitomize, etc.*

発話の記号的な側面に目を向けると、メタファー表現は語の慣用的使用からの逸脱として捉えることができる。したがって、表象機能の逸脱を明示するタイプの標識は数多く挙げるができる。

(19) a. I don't like the Singapore climate in all senses of the word.

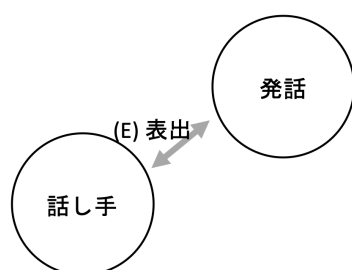
(Goatly 1997: 178)

b. The forest was a prison literally as well as metaphorically.

図 3.12 発話と対象・事態

たとえば (19a) では、*climate* という語の多義性が *in all senses of the word* によって表されることによって、字義的な「天候」だけでなく政治的・経済的な「状況」も指していることが理解される。(19b) も同様である。

#### (E) 表出機能の明示



例： *really, actually, indeed, simply, fairly, just, absolutely, completely, quite, utterly, bizarre, odd, curious, etc.*

表出機能に関わる表現も、メタファー標識として用いられうる。話し手の感情や態度を表出するような表現は、きわめて間接的ではあるものの、話し手独自の事態把握が行われていることや話し手がその把握のありかたに疑問を抱いていることを示唆することができる。

図 3.13 発話と話し手

(20) a. a kind of bizarre saint

(Goatly 1997: 180)

b. The forest was really a prison.

(20a)のように、*bizarre* や *odd* などの話し手の驚きや疑いを表す表現は、*a kind of* などとともに用いられ、当該のカテゴリー化に対する疑いを聞き手に伝えることができる。(20b)は逆に、事態把握に対する話し手の信念を強調することによって、逆説的にその逸脱を指標している例である。いずれにせよ、このタイプはメタファー標識のなかでもきわめて間接的であると言わざるをえない。

### (F) 喚起機能の明示

例：“...”、. . . !, ? blank space, etc.

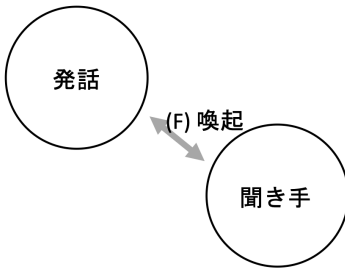


図 3.14 発話と聞き手

喚起機能を強調することでメタファーを指標することもできる。すべての記号はそもそも何らかの意味を聞き手に喚起するものなので、この機能を優先的に表す標識を見つけるのは難しい。しかし、Goatly (1997: 189) が指摘する「表記上の方策」(“orthographic devices”)は、記号の喚起機能を強調していると見なせるだろう。具体的には、次の例のように二重引用符が用いられる場合がこれに当たる。

(21) They have been confined in “the prison.”

二重引用符が付け加えられることによって、当該表現が通常とは異なる意味で用いられていることが指標される。ここでは、*the prison* という表現が通常の解釈とは異なることが示される。このように、句読点や声色の変化、ジェスチャーなどを伴うことで、自然な理解プロセスが妨げられると、聞き手はその記号自体に注意を向けるようになる。結果として、メタファーの存在に気づきやすくなると考えられる。

### (G) ドメイン間写像の明示

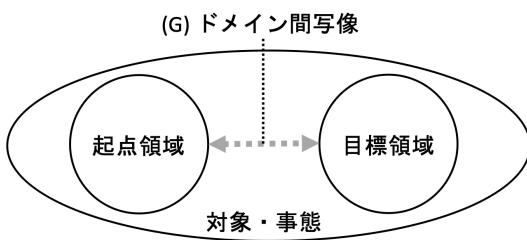


図 3.15 起点領域と目標領域（趣意と媒体）

例：like, as, similar, equal, resemble, same, -shaped, -colored, -er than ..., not, another, imitation, pretending to be ..., model, a kind of, a sort of, a bit of, as if, as though, if ..., as it were, nearly, almost, rather, half-, quasi-, in a way, veritable, exactly, true, etc.

最後に7つ目のタイプとして、趣意と媒体の結びつきの意外性、あるいはドメイン間写像の関係を聞き手に伝達する標識を取り上げる<sup>\*26</sup>。このタイプの典型例は、直喩のように類似関係を表すものや（例：*like, similar, resemble*）、カテゴリーの包含関係を表すものである（例：*Coffee is a kind of magic you can drink*）。

直接ドメイン間写像の関係を表すわけではないが、(22)に見られる標識も、このタイプの周辺例として含めることができる。(22a)の *as if* は、起点領域の仮想性を明示することによって、趣意と媒体が異なるドメインに属することを示している。(22b)の *imitation* は媒体が模倣物にすぎないことを明かすことによって、(22c・d)の *half* や *almost* は媒体との概念的な近さを表すことによって、それぞれ本来はその名で呼ばれるべきものではないことを示している。これらも結果として、趣意と媒体のずれを表していると言えよう。

- (22) a. The room was shuddering slightly, as if a tunnel on the underground lay below.  
 b. imitation marble (Goatly 1997: 178)  
 c. He put his face in the water and half-gulped, half-ate it. (Goatly 1997: 177)  
 d. The forest was almost a prison.

以上、崎田・岡本(2010)の発話事態モデルに則って、メタファー標識の新たな分類を試みた。標識の使用は聞き手への配慮と密接な関わりがある以上、従来のように語彙の意味からボトムアップ的に分類するのではなく、コミュニケーションのなかでどのような役割を果たすかという側面を重視すべきだと考える。ゆえに、発話動詞が用いられているからといって、常に行為遂行性を明示すると判断することはできない。たとえば *A is called B* のように発話動詞が受動態で用いられる場合は、実際のやりとりのなかでの発話行為ではなく、むしろ認知的把握の逸脱を表すものとして分類できる。誰かにとっては、それは *B* として解釈されるということを述べているからである。まとめると、メタファー標識の機能を考える場合、語彙の意味だけでなく、その語がどのような場面で、どのような構文で用いられるかといった側面にも広く注目する必要があると言える。

メタファーは主に事態認知の逸脱に関わる現象であるが、話し手と対象の認知的関係にとどまらず、発話事態に含まれるさまざまな関係を明示することによって、その逸脱を聞き手に伝えることができる可能性を示した。一方で、タイプによって偏りがある可能性も示唆された。たとえば主体の認知的把握や発話の表象機能はさまざまな標識によってプロファイルされ、実際に使用頻度も高いことが予想されるが、これに比べて聞き手の情動的関与や発話

<sup>\*26</sup> この意外な結びつきは、趣意あるいは目標領域をプロファイルする ST 型のメタファー表現の形をとることによっても明示される（本章 3.1 節を参照。）

の喚起機能はあまり一般的でない。もちろん上で示したものは網羅的なリストではなく、他にもさまざまな表現によってメタファーが指標されるだろう。そもそもメタファー標識としてのみ用いられる表現は、あったとしてもかなり稀である。残された疑問は、メタファー標識にはどのような修辭的効果があるのか、メタファーであることを明示することは、本当にその表現の修辭的な力を弱めるのかといった、標識の修辭的価値に関わるものである。これらの問題は、第5章で論じる。

### 3.5 ケーススタディ：隠喩の構文別使用頻度

本節では、ケーススタディとして隠喩の構文パターンの分布を調査する。それによって、隠喩の種類ごとの具体例を示すと共に、メタファー表現の構文分布の分析に3.2節で示した隠喩の種類が有用なことを示す。

これまでもメタファー表現の分布は研究されてきたが、目標領域を喚起する要素が含まれるか否かという観点が入り入れられることはほとんどなかった。その理由のひとつとして、メタファー表現を構文として捉えるのではなく、メタファー的に用いられている個々の語に注意が向けられたことがあげられる。たとえば、テキストにおけるメタファー表現を同定するための基準として、多くのコーパス研究やテキスト分析で用いられている方法論であるMIPVU (Metaphor Identification Procedure VU University Amsterdam) でも、語レベルでの分析が行われる (Steen et al. 2010)。MIPVUは、一語一語テキストを調べ、語の文脈的意味と基本的意味のずれを検討するという手法をとり、メタファー的に用いられている語そのものをメタファーを数える単位として用いる。そのため、構文的な観点はあえて取り入れられていない (Steen et al. 2010: 12-13)。

構文的な観点を取り入れて分析した研究としては、Sullivan (2007, 2013) やそれに続くLederer (2019) の研究が挙げられる。これらの研究では、目標領域を喚起する要素を含む句レベルの表現を対象に、各タイプの分布を明らかにすることがその目的とされた。しかしその分析の対象は、彼らが「隠喩構文 (metaphorical construction)」と呼ぶもの (詳しくは本章3.2.1節を参照) に限定されており、隠喩表現全体の中で隠喩構文がどれほどの割合を占めるのかは明らかにされていない。

そこで本研究では、*storm*, *flame*, *leak*, *sow* という4つの語を取り上げ、その語を含むメタファー表現の構文タイプを分析する。特に目標領域を喚起する要素を伴うST型のとそうでないS型の比率を比べ、どちらがより一般的なのかを明らかにする。また、Sullivan (2007, 2013) で示された隠喩構文の形に従うものはどの程度を占めるのか、例外的パターンを許す要因は何かを検討する。最後に、S型の隠喩の理解を促す文脈的・語用論的要因を考察する。



### 3.5.1 分析対象と方法

#### 分析対象

分析対象は、名詞 2 語 (*storm, flame*) および動詞 2 語 (*leak, sow*) である。この 4 語の選定基準は、(i) 字義的な意味が具体的な物理現象で、拡張した意味との区別が容易であること、(ii) 比喩的な意味もある程度慣習化していること (辞書の定義として一般的に掲載される程度) の 2 点を満たすことである。4 語の字義的な意味と比喩的な意味のうち典型的なものは以下の通りである。

#### (23) 分析対象とする語とそれぞれの字義的意味／比喩的意味

- storm* 「天候としての嵐」 / 「怒りや非難などの激発」  
*flame* 「燃え上がる炎」 / 「感情の高まり」  
*leak* 「気体・液体などが漏れること」 / 「情報などが漏れること」  
*sow* 「植物の種をまくこと」 / 「負の感情や不利な状況をもたらすこと」

用例は、British National Corpus (以下、BNC コーパス) から収集し、Sketch Engine という検索システムを用いて各 200 例ずつ無作為抽出を行った。以下が、Sketch Engine での検索クエリ (CQL) と全用例数である。

表 3.1 分析対象と検索クエリ

	検索クエリ (CQL)	ヒット数 (例)
<i>storm</i>	[lemma="storm" & tag="N.*"]	2444
<i>flame</i>	[lemma="flame" & tag="N.*"]	2073
<i>leak</i>	[lemma="leak" & tag="V.*"]	984
<i>sow</i>	[lemma="sow" & tag="V.*"]	742

#### BNC コーパスの特徴と利点

BNC コーパスは、扱いやすさと信頼性という点で本研究の分析に適している。BNC コーパスは現代イギリス英語 1 億語からなる大型均衡コーパスで、書き言葉 (90%) と話し言葉 (10%) の両方が収められている。均衡コーパスなので特定のジャンルに偏らず、様々なジャンルにおける使用を観察できること、すでに多くのメタファー研究で用いられており信頼性が高いという利点がある。量的な分析を行う場合には、enTenTen のようなウェブコーパスのほうが大量のデータを入手できるというメリットがあるが、1 例ずつ前後の文脈も含めて

分析をしていくには、1億語程度のコーパスの方が扱いやすい<sup>\*27</sup>。検索システムとして用いた Sketch Engine は、同じ検索クエリを用いると、必ず同じ結果が返ってくるという特徴がある。したがって、他の研究者が同じデータにアクセスし、分析の妥当性を検証することも可能である。本研究で用いたデータも、表 3.1 に示した検索クエリを用い、200 例の無作為抽出を行えば、同じものが得られるようになっている。

## 分析方法

上記の方法で収集した用例に対し、以下の手順で分析を行った。(i) まず隠喩用法を取り出す。対象とする語が当該の文でどのような意味で用いられているかを分析し、比喩的な意味で用いられている場合は隠喩と直喩と換喩に分類する。ここでいう字義的な意味とは、上の(23)で示したように具体的な物理現象を表す場合を指す。比喩的な意味とは、感情や状況などより抽象的なものごとについて語っている場合を指す。

(ii) 次に、隠喩と判断された例に対して構文タイプの分類を行い、隠喩表現全体における ST 型の比率を求める。基本的には、本章で示した隠喩の類型に従い、(ii-a) 目標領域を喚起する要素を含むか否かで、「ST 型」と「S 型」に大別する。次に、(ii-b) ST 型の下位カテゴリとして、本章 3.2.1 節で示した「Sullivan の隠喩構文【I】～【V】」に加えて、Goatly の分類にしたがい「名詞補部型」、「並置型」、「その他」を区別する。

### (24) Sullivan の隠喩構文（再掲）

【I】 Mental exercise 型 (Adj-N / V-Adv / Adv-Adj)

【II】 Bright students 型 (Adj-N / V-Adv / Adv-Adj)

【III】 Mind exercise 型 (N-N)

【IV】 Chasing the title 型 (V-N)

【V】 Foundation of argument 型 (N-PP / N's-N / V-PP)

「Sullivan の隠喩構文」には、対象語が目標領域を表す要素と統語的に直接結びつくもの（自律・依存関係にあるもの）と（例：【I】 *political storm*、【II】 *leaked secrets*、【IV】 *sow doubt* など）、対象語をふくむ句全体がメタファーの意味を表し、他の共起要素によって目標領域が表されるものがある。前者を語レベル、後者を句レベルと呼び区別する。句レベルの隠喩構文は、その句が目標領域を表す自律的要素をとる場合と（例：【IV】 *NP blow a storm*）、対象語がとる項が隠喩構文の形になる場合がある（例：【V】 *sow the seed of NP* 等）。

(iii) 最後に、「S 型」と判断される例に関して、前後文脈においてどのように目標領域が喚

<sup>\*27</sup> enTenTen は、インターネット上の用例を収集した超大型コーパスであり、数年に一度用例の数が更新されている。2018 年のバージョンは 200 億語以上からなる。

起され、その理解が促されるのかを検討する。

### 3.5.2 分析の結果

それぞれの語が隠喩表現として用いられる比率は表 3.2 の通りである。合計数が 200 に満たないのは、元のコーパスのアノテーション上のミスで品詞が対象外のものであったり、固有名の一部だったりするものを、例外として分析対象から外したためである。表 3.3 は、それぞれの語が隠喩として用いられる場合の構文タイプの分布と、隠喩表現全体における隠喩構文の比率および ST 型の比率を示している。隠喩構文率は語レベルと句レベルを合計したものである。表 3.4 は、表 3.3 の詳細で、隠喩構文で実現されるとき具体的にはどのタイプで実現され、それぞれ何例ずつあったかを示している。

表 3.2 用法の分布と隠喩率

	字義的	隠喩	直喩	換喩	合計	隠喩率
storm (n.)	143	47	6	0	196	24.0%
flame (n.)	152	40	4	1	197	20.3%
leak (v.)	93	105	0	0	198	53.0%
sow (v.)	118	71	2	0	191	37.2%

表 3.3 隠喩の構文タイプの分布と ST 型率

	ST型					S型	合計	隠喩 構文率	ST型率
	隠喩構文 (語)	隠喩構文 (句)	コピュラ	並置	その他				
storm (n.)	17	14	1	1	2	12	47	66.0%	74.5%
flame (n.)	14	9	8	1	2	6	40	57.5%	85.0%
leak (v.)	103	0	0	1	0	1	105	98.1%	99.0%
sow (v.)	30	22	0	3	0	16	71	73.2%	77.5%

表 3.4 隠喩構文の分布

	隠喩構文 (語)	隠喩構文 (句)
storm (n.)	17 (【I】 6, 【III】 1, 【V】 10)	14 (【II】 1, 【IV】 13)
flame (n.)	14 (【V】 14)	9 (【IV】 7, 【V】 2)
leak (v.)	103 (【II】 19, 【IV】 83, 【V】 1)	0
sow (v.)	30 (【IV】 25, 【V】 5)	22 (【V】 22)

この結果からまず分かるのは、隠喩は基本的に目標領域を喚起する概念がプロファイルされることが多いことである(表 3.3 の ST 型率)。それぞれの語の ST 型の比率は、74.5%~99.0% と大きな範囲を占めている。さらに、ST 型のなかでも特に Sullivan の隠喩構文が高頻度で用いられることが明らかになった。隠喩表現全体における隠喩構文の比率は、57.5%~98.1% の範囲を占めている。

語によって、どのような方法で目標領域を喚起しやすいかは異なる(表 3.4)。たとえば *leak* は他の 3 語とは異なり、語レベルの隠喩構文の形をとりやすい。これに対し同じく動詞の *sow* は、語レベルと句レベルの数が 30 例対 22 例とあまり違いがない。名詞 *storm* と *flame* を比べると、*storm* は多様な構文で用いられ、【I】型、つまり *political* などのドメイン形容詞をとる形も観察されたが、*flame* は比較的限られた構文で用いられ、【V】型の前置詞句を伴う形が大半を占めた。

### 隠喩構文の具体例

各構文タイプ of 具体例を見ていく。まず語レベルで Sullivan の隠喩構文の形をとるものを示す。名詞 *storm*, *flame* がメタファー的に用いられる場合、【V】型の前置詞句によって目標領域を喚起するタイプが最も数が多く、*flame* はこのタイプのみで観察された。

#### (25) 【I】 Mental exercise 型 6 例

- a. They have weathered every kind of financial storm [...].
- b. [T]he government faced a political storm.

(26) 【III】 Mind exercise 型 1 例

COUNCILLORS are likely to consider whether the 11-year old girl at the centre of a Home Alone storm should be returned to her mother [=Yasmin Gibson] when she returns from her Spanish holiday, it emerged yesterday <sup>\*28</sup>.

(ホームアローン騒動の中心にいる 11 歳の少女に関し、母親がスペインでの休暇から戻った際に少女を母親の元に戻すべきかどうか、議員らが検討する見込みだ。昨日判明。)

(27) 【V】 Foundation of argument 型 23 例

- a. [...] raised a **storm** of protest
- b. [I]t's all just been a **storm** in a teacup.
- c. [...] to rekindle the **flames** of passion
- d. Phoebe hated her with a brief clear **flame** of anger

動詞 *leak*, *sow* で最も用例数が多かったのは、(29) のように、項に目標領域を喚起する要素をとる【IV】のタイプである。【V】のタイプは、項には (30a) の *anything* のような中立的な語や、(30b) の *the seeds* のような起点領域を喚起する語を伴うが、前置詞の補部である名詞によって目標領域が喚起される。

(28) 【II】 Bright students 型 19 例

- a. A **leaked** UK government report
- b. A **leaked** International Monetary Fund document

(29) 【IV】 Chasing the title 型 108 例

- a. He therefore **leaked** his deepest, darkest secret.
- b. [I]n order to **sow** confusion amongst the West's intelligence agencies.

(30) 【V】 Foundation of argument 型 6 例

- a. I was worried about anything being **leaked** to the papers [...].
- b. However, the seeds had been **sown** in my mind – they just took a long time to grow!

句レベルの隠喩構文では、対象語を含む句全体がメタファー的に解釈され、その句と概念

<sup>\*28</sup> この用例では、女優の Yasmin Gibson が、自宅に娘を置き去りにしたままスペインでの長期休暇に行ってしまった事件について述べられている。この事件は、1993 年当時イギリスで世間を大きく騒がせた。Home Alone storm という表現は、子どもがひとりで家にいるという状況が、この事件の 2 年前に公開された『ホームアローン』という映画の状況に似ていることに依ると考えられる。

的に自律・依存関係にある要素によって目標領域が喚起される。このタイプは全体で 44 例観察された。

- (31) a. It had been his lips - her lips for him - that **had sparked the sudden flame**.  
(突然火花を散らしたのは、彼の唇、そして彼に送る彼女の唇だった)
- b. Nirvana Inc **battened down the hatches and made to ride out the storm**.  
(ニルヴァーナ社は暴風に備えて船のハッチを締め、嵐を乗り切ろうとした)
- c. You may consider the susceptibility as **the soil in which the seeds of disease are sown**.  
(感染しやすい体質は、病気の種が植え付けられる土壌だと見なせる)
- d. [H]e must have taken pleasure in **sowing any seed which was likely to grow into a further barrier between father and son**.  
(父親と息子をいっそう隔てる障壁へと育ちそうな種ならなんでも、それをまくことに彼は喜びを覚えていたに違いない)

名詞の場合は、対象語がメタファー的に解釈される動詞句の一部となり、その動詞句がとる項によって目標領域が喚起されるパターンが最も多い。結果として、Sullivan の隠喩構文の【IV】に対応する形になる。たとえば (31a) では、*spark the sudden flame* 「火花を散らす」という句が主語に唇をとっているため、この句によって表される行為がメタファー的に解釈され、恋愛の一場面について語っていることが理解される。(31b) では、動詞句は航海のドメインを喚起するが、主語のニルヴァーナ社が音楽プロダクションだという背景知識があれば、両者に意味の緊張を感じとることができる。動詞の場合は、動詞が意味的に調和する語を目的語にとり、その目的語が目標領域を喚起する要素によって修飾されるタイプが多く観察された。これは Sullivan の隠喩構文の【V】に対応する。(31c・d) はどちらも、*sow* の目的語として同じく園芸のドメインを喚起する *seed* が入り、それを修飾する前置詞句や関係節によって、*seed* が実際の植物の種ではなく抽象的な原因として理解するべきであることが示される。

### その他 ST 型の具体例

Sullivan の隠喩構文に当てはまらないタイプも一定数観察された。このタイプにおいても、語レベルで目標領域を喚起する要素と共起するものと、句レベルで目標領域を喚起する要素と共起するものの両者があるが、ここでは区別せずに論じることにする。まず名詞補部型は、全体で 9 例観察された。(32a) のように A is B の形をとるものもあれば、(32b) のよう

に状態変化を表す構文で表されるものもある。これらの例で共通して見られる特徴として、*flame* が単体で用いられるのではなく、物理的な炎を形容する語彙によって修飾され、より豊かで具体的なイメージを獲得していることが挙げられる。

- (32) a. Desire was a **leaping sheet of flame** now [...].  
 (欲望はいまや燃え広がる炎であった)
- b. [S]ea breezes dancing through the French windows turned every light to a **fairy flame**.  
 (海からのそよ風がフランス窓から踊りながら入ってきて、ありとあらゆる光を妖精の炎へと変えた)

次に、並置型は6例観察された。(33a)は *exposing his own feelings* という字義的な表現の後に、その現象が比喩的には *leaking* とよばれることが挿入句的に示されている。(33b)はニュースの見出しで、ある判事が男性を狂わすのは女性の役割だといって加害者をかばったために論争になった事件が背景にある。ここではコロンによってふたつの要素が並列されており、広い意味で、並置によって趣意の明示が行われていると捉えられる。*storm* 「(議論の)嵐」が実際に指す内容が、コロンの後で説明されているからである。(33c)は句レベルの並置で、*fan the flames and add fuel to them* 「炎を燃え立たせ、燃料を投下する」という句が、下線部で示した句と並置されることによって、人々を扇動する行為として理解される。

- (33) a. [H]e also suffers from the disadvantage of exposing his own feelings ('leaking'; Ekman & Friesen, 1969).  
 (彼は自分の感情をさらけ出すこと(「漏らすこと」, Ekman & Friesen, 1969)のデメリットにも苦しんでいた)
- b. **STORM: Judge hits back over sex jibe**<sup>\*29</sup>  
 (嵐:判事が性的あざけりについて反論)
- c. [...] jumping around to establish ties, make outcries, agitate the people, fan the flames, and add fuel to them.  
 (結びつけ、怒りの声を上げ、人々を扇情し、炎を燃え立たせ、燃料を投下するために飛び回った)

最後に、上記2タイプに当てはまらなかったのは、Sullivanの隠喩構文の原則に反するタ

<sup>\*29</sup> この用例に関して、コーパスデータあるいは元のニュース記事に誤植があると考えられる。コーパス上では、*STORM: The Duchess Judge hits back over sex jibe* のように、*The Duchess* という語が含まれているが、これは一つ前のニュース記事の話題であり、何らかの原因でこの語が残ってしまったようである。

イプである。つまり概念的に自律した要素が起点領域を、依存した要素が目標領域を喚起する表現である。Sullivan は複合名詞の場合、原則的には第一の要素が目標領域を直接表したり (cf. *mind exercise*)、間接的に第二の要素を解釈するためのフレームを提供したりする (cf. *rumor mill*) と論じる。しかし、(34) のような逆のパターンも存在する。これらの例では、第一の名詞がメタファー的に用いられており、起点領域を喚起する。

(34) a. The Midland sent in a team of its **storm troopers** to try to sort Crocker out.

(ミッドランド銀行はクロッカー銀行を懲らしめるために突撃部隊を送った)

b. GIBSON Les Paul Custom Plus, stunning **flame top**, vintage cherry, reduced from £ 995 to £ 795.

(ギブソン社製レスポール・カスタム・プラス、美しいフレイム模様のトップ、ヴィンテージ・チェリー色、995 £ から 795 £ に値下げ)

第一の名詞が分類詞 (classifier) としてはたらくときや、色や形を表すときは、この例外的な語順が許される可能性が指摘されており (cf. Goatly 1997: 220-222, Lederer 2019: 183-185)、今回の調査で観察された例もその予測に従っている。たとえば (34a) の *storm trooper* は第一の名詞が分類詞として分析される。この句は元々帝国ドイツの特殊部隊を指すために用いられ、後にナチスの突撃部隊を意味するようになったが、*trooper* 「騎兵」のなかでもある特殊な任務を負ったものを区別して呼称する表現である。(34b) の *flame top* は、ギブソン社のエレキギターのうち、ある特定の色や模様のトップ材を用いたギターを指す用語であり、*flame* は色を表すメタファーとして解釈される。これらの例外的な複合名詞メタファーは、慣用化した表現になっているという特徴がある<sup>\*30</sup>。

<sup>\*30</sup> 複合語は伝統的に内心的 (endocentric) / 外心的 (exocentric) という対立で区別され、内心的構造をもつタイプのほうが典型的で用例数も多いと考えられてきた。内心的な複合名詞は、意味的には、複合名詞が表す対象が主要部の名詞が表すものの下位カテゴリーになっているものを指す。一方外心的な複合名詞の場合、*redhead* や *pickpocket* のように、複合名詞が表す対象を主要部の名詞が表す対象の一種として解釈することはできない。

しかし複合名詞型の隠喩の場合、典型と周辺の関係が逆転し、いわゆる外心的といわれるタイプのほうが典型的になる。複合名詞型の典型である Sullivan の原則にしたがうタイプは、外心的とみなせるからである。このタイプは、主要部である第二の名詞がメタファー的に解釈されるため、複合名詞全体が指している対象は主要部の下位カテゴリーにはならない。たとえば *rumor mill* は、製粉機の種類ではなく噂をばらまく人物を指している。一方例外として扱われるタイプは、主要部の下位カテゴリーとして解釈されるため内心的である。*flame top* を例にとると、この語はフレイムタイプ (日本語では虎目模様などとよばれることのほうが多い) のトップ材、すなわちトップ材の一種を指している。

なぜ典型と周辺が逆転するのか、その理由はそもそもメタファーがどういう現象であるかを考えれば分かるだろう。メタファーはある語が本来とは異なる指示対象を指すために用いられる現象なので、その性質上、おのずと外心的な意味構造をとると考えられる。むしろ考察する必要があるのは、分類詞としてメタファーが機能するのはどういう場合かという問題だろう。



## S型の具体例

S型の隠喩は同一節内に目標領域を喚起する要素をもたないが、それでも聞き手はそのメタファーの意味を適切に理解することが期待される。このとき、どのようにしてその理解が達成されるのだろうか。ST型の場合とは異なり構文的な特徴づけが難しいが、S型の隠喩にも、その理解を動機付ける一定のパターンがあると考えられる。今回得られたデータを観察すると、S型の隠喩を可能にする語用論的・文脈的要因に関して、少なくとも3つのパターンが見出された。その3つとは、「慣用句であること」、「アレゴリーの一部であること」、「照応的な隠喩であること」である。

慣用句となっている場合、対象語がことわざやイディオムの一部として用いられており、句全体で比喩的な意味が定着しているため、読み手はそれを比喩として理解することが容易である。たとえば(35 a)の *weather a storm* という表現はイディオムとして定着しており、字義的な「嵐を乗り切る」という意味よりも比喩的な「難局を乗り切る」という意味のほうが想起されやすい。(35 b)の *the lull before the storm* という表現も同様に、文字通り嵐の前の状態を意味することもできるが、むしろ「変事が起きる前の不気味な静けさ」という比喩的な意味で用いられることのほうが多い。このようにメタファーの意味が慣用化したイディオムは、目標領域を喚起する要素がなくても適切に理解されると考えられる。

(35) a. With him by her side, she could **weather any storm**.<sup>\*31</sup>

(彼がそばにいれば、彼女はどんな嵐も乗り切れた)

b. Then came **the lull before the storm**. From the mid-50s, things were never the same at Bosigran.

(嵐の前の静けさがやってきた。50年代半ばからは、ボジグランではあらゆることがまるで違ってしまった)

c. In good songs, the thinking is: '**you reap as you sow!**'

(優れた歌に見られる教えは、「自分で蒔いたなら自分で刈り取れ」というものだ)

S型の隠喩の理解を促すふたつめのパターンは、テキストの一部あるいは全体が同一のメタファーに基づいて展開され、対象語がそのアレゴリー的な語りの中で現れる場合である。このタイプは、より大きな単位で意味の緊張が生じる。典型的な例として、教会開拓 (Church Planting) について書かれた(36)を取り上げる。教会開拓はキリスト教の伝導と教

<sup>\*31</sup> 主語があるため、【IV】の **Chasing the title** 型の隠喩構文のように見えるかもしれない、しかし、この例における主語は字義的解釈の可能性を排除しない中立的な語であるため、S型と判断される。

会設立のための活動であり、伝統的に土地開拓のメタファーを用いて語られる。下の例では、教会開拓の意義を説明するために、対象語である *sow* が同じ園芸ドメインを喚起する語 *seed, bear, fruit* などとともに用いられている。

(36) In these ways we can **sow** seed every day. Surely some of it will bear fruit. The problem is that we **sow** so little. [...] The church planting team needs to **sow** seed as a way of life.

(このように我々は毎日種を蒔くことができます。きっといくつかは実を結ぶでしょう。問題は、蒔く種が少なすぎるということです。教会開拓者らは種を蒔くことを生活の一部とする必要があるのです)

(36) は既存のなじみのあるメタファーを利用したアレゴリーの語りだが、局所的に一時的なアレゴリーが発生することもある。以下の2例はそれぞれ、社会変化と、メダウと呼ばれるエクササイズの一種の普及過程について書かれたものである。

(37) a. Industrial base cut so close to the bone the marrow's **leaking** out, the old vaguely socialist inefficiencies replaced with more rabid capitalist ones, power centralised, corruption institutionalised, [...]

(産業基盤は骨すれすれに傷を負ったために骨髓が漏れ出し、昔からのゆるやかな社会主義的非効率性がより急進的な資本主義的非効率性にとって代われ、中央集権化され、腐敗は制度化され...)

b. THE MEDAU TREE

From the seed **sown** by Peggy Secord, our President, when she brought Medau to England in the early 1930s, the roots were established to feed a wide geographical spread and incorporate various branches of Medau work.

(「メダウの樹」 我々の会長であるペギー・セコードが1930年代初頭イギリスにメダウをもたらしたとき、彼女が蒔いた種から根がはり、地理的に広範囲を養い、メダウワークの様々な分野を取り込んだ)

(37 a) では、対象語の *leak* が *the marrow is leaking out* 「骨髓が漏れ出している」という表現の一部として用いられている。この表現自体は目標領域を喚起する要素を伴わないS型の隠喩である。この表現の意味は、直前で産業基盤 (Industrial base) が肉体を持った存在として喩えられていることから、産業基盤が受けたダメージの深刻さを言い表したものとして理解される。興味深いのは、このアレゴリーが、Sullivan の隠喩構文を利用して作り出されている

るということである。直前の *Industrial base cut so close to the bone* 「骨に非常に近いところで切られた産業基盤」という表現は、被動作主である主語に目標領域を喚起する語をとり、述部が起点領域を表す【IV】型の隠喩構文となっている。対象語が含まれている部分だけを見ればS型の隠喩でも、その表現を理解するための素地として隠喩構文によって目標領域が示されているのである。隠喩構文は新たにメタファー的認識をつくりだし、アレゴリーを展開するための装置としても機能することがわかる。

同じことが、(37b)にも当てはまる。この例では、「メダウ」というエクササイズをイギリスに広める過程が、樹木が土地に根付く様子に喩えられている。このメタファー的關係は、記事の見出しとなっている *THE MEDAU TREE* によって明示的に示される。この見出しは【III】の複合名詞型の隠喩構文の形をとっており、この隠喩構文を起点として、樹木に喩えるアレゴリーが展開されている。

第3のパターンである照応的な隠喩は、特に名詞の隠喩に関わるものである。このタイプは、前後の文脈で語られるできごとに対して、できごと全体あるいはその一部がメタファー的に指示される場合に観察される。特徴としては、修飾語句をほとんど伴わないかわりに、定冠詞や指示詞、あるいは指示対象を特定化する形容詞 (*particular, familiar*) などを伴うことが挙げられる。また、上で述べた2つのパターンと異なり、定着していない意味で用いられることが多い。具体例を見てみよう。

- (38) a. On the afternoon of 11 April, when the news of the impending annulment was announced, word went out to all growers in the Marne and their supporters. Men could be seen grouping together, bugles and horns were sounded. The **storm** broke over the little townships north of Épernay.  
 (4月11日午後、差し迫った(とある法律の)破棄のニュースが発表されたとき、マルヌのすべての生産者およびその支持者のもとに知らせが伝わった。人々は集まり、らっぱやホルンがかき鳴らされた。その嵐はエペルネー北部の小さな町々を襲った)
- b. Clearly she heard the crackling of the **flames**, saw her mother's flesh scorch and blacken. She shrivelled up, fell forwards, like a paper doll. Cancer was a fire. It ate her mother away.  
 (はっきりと炎がパチパチと音を立てるのを聞き、母の肉が焦げて黒くなるのを見た。彼女は震え上がり、ペーパードールのように前に倒れた。癌は火だった。癌は母を食い尽くした。)
- c. Corruption has been the way of life for years with certain powerful people. If necessary, to win our campaign we will rekindle that familiar **flame**.

(腐敗は何年もの間、権力者の生き方だったのだ。必要とあらば、我々の運動に勝利をもたらすために、その慣れ親しんだ炎を再燃させてみせようぞ)

(38 a) では、最後の文で *the storm* が S 型の隠喩として用いられている。この文だけでは、字義的解釈の可能性を排除することができない。しかし直前までの文脈で、ある法律の破棄が発表されたことをうけ、人々が抗議活動を開始したことが述べられている。この抗議活動は激しいものであり、人々が集団となって楽器をかき鳴らしたことが描かれている。その騒動が起きている状況全体が、最後の文の *storm* という語によって指示されている。この語が直前の状況を指すことは、定冠詞 *the* を伴うことによっても示される。

次の (38 b) も同様に、*the flames* によって、メタファー的な認識にもとづいた指示が行われる。しかしこの例では後方照応的な指示が行われており、*Cancer was a fire* の部分で初めて、母親の身体をむしばむ病気が火として捉えられていることが明かされる。*flame* を含む部分のメタファーの理解が遅らされるため、読み手をぎょっとさせる効果があると考えられる。

### 3.5.3 ケーススタディのまとめ

本節では、名詞 *storm*, *flame* および動詞 *leak*, *sow* を対象に、それらの語がメタファーの意味で用いられる場合、どのような構文で実現されるかを調査した。隠喩の類型を用いることによって、構文タイプの分布を記述することができた。このケーススタディで確かめられたのは、実際のテキストでは ST 型の隠喩が大きな割合を占めるということ、およびその中でも Sullivan の隠喩構文が特権的な地位を占めるということである。一方で例外的な形も一定数存在することが確認できた。さらに S 型の隠喩に関しても、具体例を分析することによって、その理解を動機付ける重要なパターンがあることが示された。

## 3.6 まとめ

本章では、プロフィールの次元に注目し、隠喩、直喩、メタファー標識の類型化を行った。隠喩と直喩は目標領域を喚起する要素をプロフィールするか否かによって、メタファー標識は発話事態に関わる関係性のうち、どの側面に焦点を当てるかに注目して分類した。

隠喩と直喩の関係をまとめたものを、図 3.16 に示す。この図では、下にいくほどプロフィールの次元で明示性が高い表現になっている。同じ ST 型の隠喩であっても、目標領域を喚起する要素をプロフィールするだけの隠喩構文より、趣意を言語化するタイプのほうが明示性が高くなる。直喩の場合は、比較の根拠を義務的にプロフィールする根拠介在型のほうが、直接比較型よりも明示性が高くなる。さらに直喩に関しては、ST 型のなかでも比較構文



図 3.16 まとめ：隠喩と直喩の関係

の形をとることが定義的な特徴となるため、比較構文の一部であることも図で示している。

本研究で提案するメタファー表現の類型は、メタファー表現の分布を記述・分析するために有用な手段となりうる。本章ではその実践例として、BNC コーパスを用い、隠喩表現における ST 型や隠喩構文の比率などを求めた。このケーススタディでは無作為抽出で得られたデータをもとに一般的な分布の記述を行ったが、データ同士を比較・対照することで、メタファー表現の認知的価値や修辭的機能に対し、さらに緻密な議論ができるようになることが期待される。たとえば、ジャンル間の違いや談話におけるメタファー表現の使用に関して、隠喩・直喩・換喩という従来のレトリック分類よりも細かな分類を設けることで、より詳細な記述が可能となる。また、メタファー標識の修辭的機能を考察するためにも、この類型が有用である。メタファー標識は一般的に解釈の曖昧性を解消するために用いられると言われているが、メタファー標識が本当に解釈が曖昧な表現に付け加えられるかどうかは明らかでない。これを実証するためには、まず字義的な解釈が可能な表現とは何かを規定した上で、メタファー標識を伴う場合とそうでない場合の構文タイプの分布を調べる必要がある。本研究で示した類型を用いれば、メタファー標識を伴う場合のほうが S 型の比率が高くなることを示すことで、この予想を裏付けることができる。



## 第4章

# メタファー表現とテキストタイプ

### 4.1 はじめに

本章では、実際のテキストにおいてメタファー表現がどのような役割を果たしているかを考察する。2章および3章で述べたように、メタファー表現は表現形式の特徴によってもたらされる明示性の違いから、様々なタイプに分類することができる。本研究では3章で示したメタファー表現の類型をもとに、より細かな文法的・構文的特徴に注目し、実際のテキストにおいてメタファー表現がどのように使い分けられているかをみる。それによって、直喩と隠喩の対比にとどまらず、明示性の異なるメタファー表現がそれぞれどのような修辭的機能をもつかを検討したい。

明示性と修辭性は一般的にはトレードオフの関係にあると考えられており、明示的な形をとるほどメタファーとしての力が弱まると見なされている。たとえば趣意や根拠を明示的に述べる形をとると、それが聞き手の解釈に委ねられている場合と比べ、聞き手に与えるインパクトが弱まり、謎解きの面白さも損なわれてしまうと言われる。しかし様々な表現形式が存在しているということは、それぞれが異なる場面において適切に選択されていることを示唆する。したがって明示性の高いメタファー表現にも、それ独自の修辭的機能があることが予想される。

本章の目的は、メタファー表現はテキストの伝達上の目的に応じて、適切かつ効果的な形が選択されていることを示すことである。具体的には、植物や風景の描写におけるメタファー表現の使用に注目する。「科学的描写」、「広告的描写」、「詩的描写」という異なる目的をもって書かれたと考えられるテキストにおいて、メタファー表現がどのように使い分けられているかを分析する。各テキストにおいて好まれるメタファー表現の文法的・構文的特徴を明らかにし、なぜその形が選択されるのか、どのような修辭的機能を果たしているのか

を考察する。

本章の構成は以下の通りである。まず 4.2 節で、メタファー研究においてジャンルやレジスターの観点が入り入れられるとき、どのようなことが争点となってきたかを概観し、これまでの研究と比べた本研究の特徴を述べる。4.3 節では、分析の対象とするテキストをハリデーの枠組みを用いて記述する。4.4 節では、分析の方法と結果を述べ、各テキストにおけるメタファー表現の分布を示す。4.5 節では、各テキストにおいて特徴的に観察されたメタファー表現の機能を、テキストタイプの目的と関連づけて考察する。最後に 4.6 節で結論を述べる。

## 4.2 メタファー表現とジャンル・レジスター分析

ジャンルやレジスターの分析をベースとするメタファー研究では、伝達上の目的を達成するためにメタファー表現がどのような役割を果たすかを明らかにすることが主たる目的とされてきた。

ジャンル研究は、どのようなテキスト・談話を対象にするかによって、大きく 2 つの流れがある (Deignan, Littlemore and Semino 2013: 36)。ひとつは、特殊性や専門性の高いコミュニティ内での談話を対象とする場合で、もう一方は不特定多数に向けたパブリックな談話を対象とする場合である。前者では、メタファー表現の語彙的、社会的、イデオロギー的意味を明らかにすることで、理解の妨げになっている要素を解明し、述べられている内容に対する深い理解をもたらすことなどが目指される。後者では、イデオロギー的な立場を反映・強化するために、メタファーがどのように用いられているかといった批判的談話分析や、大規模コーパスを利用したジャンルごとの頻度比較などが行われている。

これまでの研究によって、メタファー表現の頻度や慣習性、起点領域の選択や表現形式の違いなど、様々な側面でジャンルがメタファーの使用に大きく影響を与えることが明らかにされてきた (Goatly 1997, Skorzynska and Deignan 2006, Charteris-Black 2000, Steen et al. 2010, Deignan et al. 2013 等)。ジャンルとメタファーの関係に注目した初期の研究として、Goatly (1997) が挙げられる。Goatly は、「ニュース報道」、「会話」、「科学雑誌の記事」、「雑誌の広告」、「現代文学」、「現代詩」という 6 つの異なるジャンルに対し、メタファー表現の頻度や品詞、構文、標識の有無など様々な観点から比較を行った。それによってたとえば、「ニュース報道」や「会話」など慣習的なメタファーが多く出現するジャンルでは標識が多く用いられ、逆に「現代文学」や「現代詩」など新奇なメタファーが多く出現するジャンルでは標識が付け加えられないことが多いことが明らかにされた (同上: 311-316)。

Steen et al. (2010) は、MIPVU と呼ばれるメタファー表現を同定するための厳格な方法論



を提案し、その後のジャンル研究に大きく貢献した。Steen et al. (2010) では、「学術的談話」が最もメタファー表現の頻度が高く、「ニュース報道」、「フィクション」、「会話」の順で頻度が下がることなどが示されている。その要因として、ジャンルごとの言語の機能 (involved/informational) や、指示対象の性質 (situation-dependent/ independent)、情報の抽象性／具体性などが関わっていることが指摘された。

さらに近年では、ジャンルやレジスターを統一的に記述するための方法論の重要性も指摘されている。Deignan et al. (2013) は、機能主義的言語観によってたつ Halliday and Hasan (1989) の枠組みが、比喻表現の分析においても有用だと述べ、その方法論と実践例を提示している。ジャンルやレジスターの記述手段としてすでに体系化されている枠組みを用いることで、メタファー研究においても、異なる研究者によって行われたテキスト分析の結果を比較することが可能になると考えられる\*1。

本研究もこれらのジャンル分析の流れに属する。特に Goatly (1997) や Steen et al. (2010) と同じく、メタファーの表現形式に注目し、ジャンルによって好まれる構文を明らかにすることが目的である。本研究の特徴のひとつは、認知文法概念を用いて表現形式をより細かく類型化していることである。もうひとつの特徴は、トピックをある程度限定して、テキスト間の比較を行うことである。Steen et al. (2010) でも指摘されているように、メタファー表現の頻度や表現形式の選択は、トピックや指示対象の影響を大きく受けると考えられる。したがって、トピックを限定せずに比較を行うと、ジャンル間の違いをもたらしている要因を特定することが難しくなる恐れがある。そこで「植物や風景」について書かれたテキストに限定し、トピックの影響をなるべく排除したうえで、テキストが書かれた目的とメタファー表現の使用の関係を考察したい。

テキストの目的や特徴の記述には、Halliday and Hasan (1989) の枠組みを用いる。ただし、本研究では「ジャンル」や「レジスター」の代わりに、「テキストタイプ」という用語を用いる。Deignan et al. (2013: 49) の主張にしたがい、「ジャンル」や「レジスター」という語は、特定のコミュニティにおいて特定の目的で行われる、慣習化されたコミュニケーション様態を指すためにとっておくことにし、より定義がゆるやかな「テキストタイプ」を用いたい。植物の描写がひとつのジャンルとして確立されているか否かはここでは大きな問題とならないと考える。

---

\*1 ジャンルとレジスターの違いについては Deignan et al. (2013: 46-47) を参照。研究者によって両者の定義は異なるが、基本的にはジャンルという語を用いるときはテキスト全体に力点が置かれ、レジスターはより具体的な言語的特徴を考慮する際に用いられる。同書では、ジャンルは、“a specific text-type used by a specific community of speakers, for specific purposes”(同上: 40) と定義され、「目的」と「談話コミュニティ」の存在が重要視される。レジスターは“composites of linguistic features”と定義される。

## 4.3 分析の対象とするテキストタイプ

### 4.3.1 分析の対象：科学的描写・広告的描写・詩的描写

本研究では、植物や風景の描写が中心に行われているテキストのうち、科学的な描写、広告のための描写、詩的描写という異なる目的のもとで書かれたと考えられるものを取り上げる<sup>\*2</sup>。具体的には、以下のテキストを分析の対象とする(田丸 2016, 2018a)。

<分析対象とするテキスト><sup>\*3</sup>

#### A. 科学的描写



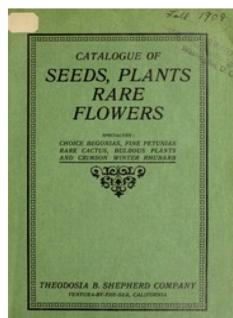
Botanical Society of America が運営するサイトにおける食虫植物に関する特集ページ

(“Carnivorous Plants/ Insectivorous Plants”)。研究の成果の一部として、食虫植物の形態や生態に関する情報が公開されている。食虫植物11種(Nepenthes、Drosophyllum、Drosera、Dionaea muscipula、Cephalotus follicularis、Darlingtonia californica、Sarracenia、Heliamphora minor、Utricularia、Pinguicula、Byblis) の記述を取り上げる。

<sup>\*2</sup> 分析対象とする3つのテキストは、Bühler (1934) の言語機能の3分類に概ね対応すると考えられるものを選出した。ビューラーは、テキストの主要な言語機能を「内容の伝達」「相手に働きかけるような伝達」「芸術的に構築されたメッセージの伝達」の3つに分類している。科学的描写は、情報や内容の正確な伝達が主要な目的となっていると言え、広告的描写は、相手の購買意欲をかきたてることが目指されると言える。今回詩的描写として取り上げるものは、厳密には韻文詩ではなく散文のエッセイだが、内容の伝達以上に表現自体が美しいと名高いエッセイなので、ビューラーでいう「芸術的に構築されたメッセージの伝達」に対応すると見なした。

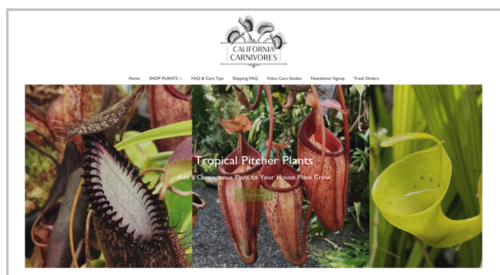
<sup>\*3</sup> A. *Carnivorous Plants/ Insectivorous Plants*. (n.d.) Botanical Society of America. <https://botany.org/home/resources/carnivorous-plants-insectivorous-plants.html> (最終確認日 2022/2/28)  
B-1. *Catalogue of Seeds, Plants, Rare Flowers*. (1908) Theodosia. B Shepherd Company.  
B-2. *Shop plants*. (n.d.) California Carnivores. <https://www.californiacarnivores.com/> (最終確認日 2022/2/28)  
C. Carson, R. (1956[1998]) *The sense of wonder*. Harper Collins Publishers.

## B. 広告的描写



(B-1)

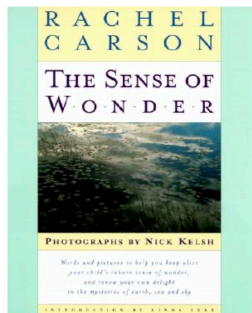
Theodosia Shepherd社による1908年発行の種苗カタログより、“New and Rare Seeds and Plants”というカテゴリに含まれる全22種。



(B-2)

食虫植物専門のネット通販店California Carnivoresのサイトより、5品種Tropical Pitcher Plants (Nepenthes)、Drosophyllum、Cape Sundews (Drosera capensis)、American Pitcher Plants (Sarracenia)、Cobra Plants (Darlingtonia)の記述、および各品種の商品 (Nepenthes spathulata (burbidgeae × edwardsiana)、Drosophyllum lusitanicum、Drosera capensis ICPS Giant、Sarracenia alata ‘Night’、Darlingtonia californica) の記述。

## C. 詩的描写



生物学者レイチェル・カーソンによるエッセイ『センス・オブ・ワンダー』。メイン州の海岸と森の風景が描写されている。著者が姪の息子である幼いロジャーと共に探索する中で見出した自然の美しさに対する感動が綴られている。詩情豊かな筆致で名高い。

## 4.3.2 各テキストの文脈的特徴

ハリデーの機能主義的言語観では、語彙や文法の選択、ディスコースの展開などは、ジャンルの目的や談話コミュニティの性質などの文化的・社会的コンテクストに加え、談話のトピックや話し手と聞き手の関係などの具体的な状況のコンテクストによって規定されると考えられている。テキストをとりまく状況のコンテクストは、「フィールド」「テナー」「モード」と呼ばれる3つの側面から構成される (Halliday and Hasan 1989: 12)。(1a)のフィールドは、言葉のやりとりによって実際に行われていることや話題になっているもの、(1b)のテナーは、どのような人が会話に参加しているかあるいは参加者同士の関係（話し手と聞き

手、先生と学生など)、そして (1c) のモードは、言語が当該コミュニケーションにおいて果たす役割や用いられている媒体 (文字なのか音声なのか) が関わる。

(1) 状況のコンテキスト

- a. フィールド：何が行われているか、何について語られているか
- b. テナー：誰が関わっているか、どのような関係か
- c. モード：どのように言語が用いられるか

テキストが書かれた目的とフィールド、テナー、モードという3つの側面から、分析対象とする各テキストのコンテキストの特徴を記述したものを、次の表 4.1 に示す。表に示されているように、植物や風景の描写が行われているため、3つのテキストタイプはフィールドの点で類似している。また、モードの点でも、言語による記述が中心的で、写真が補足的に機能しているという点で似通っている。しかし目的という点で、これらのテキストは大きく異なっている。科学的描写である、Botanical Society of America の食虫植物に関する記事では、正しい知識を伝えることで植物全般の興味をかきたてるという教育的な意図が大きくはたらいている。種苗カタログやネット通販における広告的描写では、商品を買ってもらうことが第一の目的であり、そのために商品に興味を持たせ、魅力を理解させることが目指される。レイチェル・カーソンによる叙情的なエッセイでは、植物や風景の美しさを描き出しながら、その美しさを味わうための「センス・オブ・ワンダー」を持ち続ける大切さを読み手に伝えることが目的である。

このように、これら3つのテキストタイプは伝達上の目的という点で大きく異なるということをもふまえた上で、それぞれにおいて用いられるメタファー表現の分析を行っていく。

表 4.1 各テキストのコンテキストの特徴

	テキストが書かれた目的	フィールド (何が行われているか)	テナー (誰が関わっているか)	モード (どのように言語が用いられるか)
A. 科学的描写	当団体の主たる目的は、植物学の研究の発展および教育の推進である。「食虫植物」の特集ページは Resource というカテゴリの一部で、風変わりな植物の実態を示すことによって植物に対する興味全般をかき立てることが目指されている。	それぞれの食虫植物の生態、捕食法、構造、外見的特徴などが科学的に記述、説明されている。	書き手は植物に関する専門的・科学的知識を有する。読み手は植物に一定の関心がある読者一般が想定されている。したがって知識量という点で非対称性が見られる。	オンライン上で公開されている。言語が中心的に用いられるが、カラー写真（拡大写真含む）や図も多く掲載されている。
B. 広告的描写	自社の商品に興味を持たせ、購買欲を高めることが目的である。	(B-1) 商品である植物の外見的特徴（特に色や形など）が記述されると同時に、育て方、値段などの情報も提示されている。	売り手（種苗会社）と買い手（ガーデニング愛好家）の関係。売り手のほうが専門的知識を有しているが、選択権は買い手にあるため、必ずしも上下の関係は発生していないと考えられる。	(B-1) 言語が中心的。多くの品種に対して写真が掲載されているが、1908年に出版されたものなので、すべて白黒写真であり、低画質である。
		(B-2) 商品である植物の外見的特徴、生態、育て方、値段などの情報が提示されている。		(B-2) 言語が中心的。すべての品種に対して高解像度のカラー写真が掲載されており、場合によっては動画による解説もある。
C. 詩的描写	すべての子どもが生まれながらにして持っている「センス・オブ・ワンダー」を失わないでほしいということ、子どもとよろこびを共有できる大人の存在が重要だということを、読み手に訴えることを目的とする。	メイン州の海岸と森が舞台。著者の姪の息子である幼いロジャーとともに、夜の海や雨の森などを探索したときの情景が描写されており、それらの自然に触れた幼い男の子の反応と、それに対する著者の思索が述べられる。	書き手は『沈黙の春』で有名な生物学者、読み手は不特定多数の読者（特に幼い子どもをもつ保護者が想定される）。したがって読者に対する影響力が比較的強いと考えられる。初版刊行後、版を重ねて国内外の幅広い読者に読まれている。	言語が中心的。詩情豊かな筆致。1998年版では、Nick Kelshによるメイン州の四季を切り取った写真が付け加えられている（ただしこれらの写真は、書かれている内容とは直接関係しない）。

## 4.4 分析の方法と結果

本節では、分析の方法と結果を示す。

分析の目的は、各テキストにおけるメタファー表現の文法的・構文的特徴を分類し、それぞれのテキストにおいてどのような構文が好まれるのかを明らかにすることである。特に、メタファー表現の明示性の違いに注目し、(i) 概念的自律性、(ii) プロファイル、(iii) 解釈の方向付けという3つの次元から、明示性の異なるメタファー表現が実際のテキストにおいてどのように使い分けられているのかを記述・考察する。

### 4.4.1 分析の方法

まず、分析対象とするテキストからメタファー表現を取り出す。メタファー表現の同定は、Deignan et al. (2013: 15) の定義にしたがい、基本的には以下のものをメタファー表現と見なす。

#### (2) メタファー表現の定義

[L]inguistic expressions that involve the form of incongruity that can be resolved by means of a comparison based on a perceived similarity between two unlike entities, properties, or processes.

この定義で述べられているように、“incongruity”（不一致）の存在が重要なので、同じカテゴリーに属するもの同士の比較は除外する。よって植物が描写対象である場合、植物カテゴリーに属するものと比較されている場合は、メタファーと見なさない。たとえば *fern-like bright green foliage* は、葉をシダと比較しているため、字義的な比較と見なせる。慣用化されたメタファー表現も分析対象に含める。ただし品詞は、名詞、動詞、形容詞、副詞のみに限定する。

得られたメタファー表現は、3章で示した類型にしたがって、次のように分類する（第3章 3.2 節～3.4 節を参照）。

#### 1. 隠喩、直喩、中間例に分類する。

直喩は比較構文の形をとるものに限定する。中間例には、*-like, -y, -colored, -shaped* などの名詞派生形容詞、*snow white* のように主要部が根拠を表す複合語、*have the size/color/shape of* のように比較の観点（大きさ、色、形など）を言語化したものを含める。これらは隠喩と直喩の中間的な性質をもつ。厳密には比較の形をとらないが、

趣意と媒体が必ず言語化され、比較の根拠が明示／示唆されるという点で直喩と共通しているからである。今回の分析では、このタイプがテキストタイプの違いを反映しているため、これを別カテゴリーとして区別することにする\*4。

2. 隠喩は、次の下位タイプに分類する。

概念的自律性： メタファー的に用いられる語の品詞

**名詞 (N)、形容詞・副詞 (A)、動詞 (V)**

プロフィール： 目標領域を喚起する要素を伴うか

**ST 型、例外的 ST 型\*5、S 型**

解釈の方向づけ： メタファー標識を伴うか

**標識を伴う (mkd) \*6、標識を伴わない (un)**

3. 直喩は、次の下位タイプに分類する。

プロフィール： 比較の根拠を義務的に伴うか、根拠が喚起するドメインは何か

**直接比較型、根拠介在型**（根拠＝起点領域型、根拠＝目標領域型、根拠＝中立型）

以上の分類をもとに、各テキストタイプで用いられるメタファー表現を下位タイプに分類した上で、特に「直喩」、「名詞メタファー」、「S 型の隠喩」、「メタファー標識を伴う隠喩」の 4 つに注目し、それぞれがどのテキストタイプで多く観察されるかを検討する。

#### 4.4.2 分析の結果

この節では分析の結果を述べる。各テキストの隠喩、直喩、中間例の分布は表 4.2 に、隠喩の下位タイプ（概念的自律性、プロフィール、解釈の方向づけ）の分布は表 4.3 に、直喩の下位タイプの分布は表 4.4 に示す。表中の数字は基本的にメタファー表現の用例数を表しているが、表 4.2 の総語数は語数を表している。

\*4 名詞派生形容詞や複合語は、メトニミーと解釈できるように思えるかもしれない。たとえば *snow white* の場合、「雪」と「白さ」は部分－全体のメトニミー的關係にあると見ることもできる。しかし本研究では、雪の白さによって何か別のもの（ここでは花など）の白さを言い表しており、雪と花の間にはメタファー的な類似関係が成り立っていることを重視する。ゆえに、*The flowers are snow white* のような表現は、構文全体としてメタファー表現だと考える。

\*5 目標領域を喚起する要素をとるが、Sullivan (2007, 2013) が示した隠喩構文の原則に従わないものを例外的 ST 型として区別する。Sullivan によると、隠喩構文では自律的な要素が目標領域を喚起するが、それとは異なり、依存的な要素が目標領域を喚起する形をとるものを例外と見なす（詳しくは第 3 章 3.2.1 節を参照）。

\*6 直喩の形をとるものはここに含めない。

分析の結果、以下のことが明らかになった。「直喩」、「名詞メタファー」、「S型の隠喩」、「メタファー標識を伴う隠喩」の順に取り上げ、それぞれについて述べていく。まず直喩に関しては、表 4.2 から分かるように、特出して直喩が好まれるテキストタイプは観察されなかった。メタファー表現全体に占める直喩の割合は、4.9%~6.1%の範囲に収まっており、テキストタイプによる差があまり見られない。むしろ直喩と隠喩の中間的な形（派生形や複合語など）でやや偏りが見られ、このタイプは広告的描写で用いられやすいことが示された。特に (B-1) の Theodosia Sheperd 社の種苗カタログでは、62 例中 32 例が中間タイプに分類

表 4.2 隠喩・直喩・中間例の分布

	隠喩	直喩	中間例	合計	総語数
A. 科学的描写	232 (83.2%)	17 (6.1%)	30 (10.8%)	279	9,124
B-1. 広告的描写	27 (43.5%)	3 (4.9%)	32 <b>(51.6%)</b>	62	2,623
B-2. 広告的描写	40 (75.4%)	3 (5.7%)	10 <b>(18.9%)</b>	53	1,919
C. 詩的描写	148 (86.0%)	9 (5.2%)	15 (8.7%)	172	4,339

表 4.3 隠喩の下位タイプの分布

	概念的自律性	プロフィール			解釈の 方向づけ (mkdの数)
		ST型	例外的ST型	S型	
A. 科学的描写	N 217	計 232例	87 / 232 (37.5%)	57 / 232 (24.6%)	88 / 232 <b>(37.9%)</b>
	A 5				
	V 10				
B-1. 広告的描写	N 13	計 27例	21 / 27 (77.8%)	1 / 27 (3.7%)	5 / 27 <b>(18.5%)</b>
	A 9				
	V 5				
B-2. 広告的描写	N 30	計 40例	27 / 40 (67.5%)	6 / 40 (15.0%)	7 / 40 (17.5%) <b>(12.5%)</b>
	A 7				
	V 3				
C. 詩的描写	N 79	計 148例	105 / 148 (70.9%)	7 / 148 (4.7%)	36 / 148 (24.3%) (7.4%)
	A 22				
	V 47				



表 4.4 直喩の下位タイプの分布

	直接比較	根拠介在	根拠のタイプ	
A. 科学的描写	7	10	起点	0
			目標	0
			中立	10
B-1. 広告的描写	1	2	起点	0
			目標	2
			中立	0
B-2. 広告的描写	0	3	起点	1
			目標	1
			中立	1
C. 詩的描写	2	7	起点	3
			目標	0
			中立	4

されるものだった。

次に名詞メタファーは、どのテキストタイプでも高頻度で用いられることが示された（表 4.3 の概念的自律性の列を参照。A. 217 例（93.5%）、B-1. 13 例（48.1%）、B-2. 30 例（75.0%）、79 例（53.4%））。その要因としては、植物がメタファー的に命名されており、その名前で指示されることが多いことが挙げられる。つまり、名詞メタファーの頻度の高さは、トピックの影響を大きく受けていると考えられる。特に食虫植物は、“pitcher plant”「ウツボカズラ」（水差しに似ていることから），“sundew”「モウセンゴケ」（朝露に似た粘液を出すことに由来），“flypaper”「ハエトリグサ」（ハエ取り紙のように虫をくっつけることから）など、見た目や機能が類似しているものがその名前として用いられるので、食虫植物について書かれた (A) と (B-2) のテキストは名詞メタファーの頻度が特に高くなっている。

S 型の隠喩は、目標領域を喚起する要素を伴わず、起点領域に関わる要素のみで語られることになるため、メタファー的な語りが展開されるテキストで多く見られると予想される。つまり詩的な印象を与える (C) のエッセイで最も好まれることが予想される。しかし分析の結果、S 型のメタファーが最も高頻度で見られたのは科学的描写（37.9%）であり、続いて詩的描写（24.3%）、広告的描写（18.5%、17.5%）の順で頻度が高かった（表 4.3 のプロフィールの列を参照）。予想と異なる結果が得られた理由については、次の節で考察する。

最後に、メタファー標識を伴う隠喩は、テキストタイプ間で大きな差はなく、広告的描写

でやや頻度が高かった（表 4.3 の解釈の方向づけの列を参照）。

以上、テキストタイプによって、用いられやすいメタファー表現に偏りが見られることを示した。しかし、なぜそのような偏りが見られるのか、またそれぞれの形が当該のテキストにおいてどのような機能を果たしているのかは、頻度情報だけでは明らかにすることができない。それらの点を検討するために、次の節では個々の具体例に目を向け、より細かな分析を行っていく。

## 4.5 考察

この節では具体例の分析を通し、なぜそれぞれのテキストで好まれる形があるのか、またそれぞれのテキストタイプにおいてメタファー表現がどのような機能を果たしているかを考察する。特に次の点に焦点をおく。

- (3) a. 直喩はどのような機能を果たしているか
- b. 直喩と隠喩の中間タイプが広告的描写で多く用いられるのはなぜか
- c. S 型の隠喩が科学的描写で多いのはなぜか。S 型の隠喩が詩的描写で用いられる場合とどのような違いがあるか
- d. 標識によって解釈の方向づけが行われるとき、発話事態に関わる関係性のうちどこに焦点が当てられるかという点で、テキストタイプ間の違いが見られるか

### 4.5.1 直喩の機能

前の節で示したように、直喩の割合はテキストタイプ間であまり違いが見られない。しかし根拠介在型において、根拠がプロファイルするものが起点領域か目標領域かそれとも中立的かという点に注目すると、科学的描写と詩的描写の間で違いが見られる（表 4.4 を参照）。

科学的描写がなされる (A) のテキストでは、根拠介在型の直喩 10 例のうちすべてが根拠＝中立型だった。根拠＝中立型は、同じ性質や様態をもつものを例示することで、トピックとなっている植物の形状や機能などを描写するという機能がある。次の例を見てみよう。

- (4) a. The steel trap of Dionaea is hardly as *powerful* as **the ones set by trappers for wolves, beavers or bears.**
- b. Its petals are ordinary enough, with a deep burgundy color that attracts flies by *looking like raw meat.*

(4) の例はどちらも、根拠に当たる部分（斜体で示されている）が趣意と媒体の両者に共通する内容となっている。(4a) では、ディオネアという食虫植物がもつ罠のような構造と、大型動物を捕まえるための罠が比較されているが、威力という性質 (“powerful”) は両者に共通するものである。(4b) では花卉と生肉の見目の類似が述べられている。この例のように、根拠を表す部分が *look, sound, taste* などの知覚動詞で表される場合も、趣意と媒体に共通する様態がプロファイルされていると見なせる。これらの例では、身近なものを例示することによって、見慣れない植物を正確かつ具体的に叙述しようとしていると考えられる。

一方、詩的描写がなされる (C) のテキストでは、根拠＝起点領域型が効果的に用いられる。このタイプは、動詞や形容詞がメタファー的な意味を表し、それに like 句などが付け加えられることによって、たとえのイメージが具体化される効果が見られる。たとえば (5) の例では、地衣類が地面に広がっている様子が、細長い布がひかれている様子にたとえて描写されている。like 句は、「昔ながらの細長い絨毯」という具体的なイメージを想起させることで、このイメージをさらに鮮明にしていると考えられる。

(5) Like **an old-fashioned hall runner**, *it* [= a lichen] *made a narrow strip* of silvery gray through the green of the woods, here and there spreading out to cover a larger area.

さらに、(C) のテキストでは、根拠＝中立型のタイプでもメタファーのイメージを強化するような例が観察された。次に示すのはその一例である。

(6) A lens-aided view into a patch of moss reveals a dense tropical jungle, in which insects large as tigers prowl amid strangely formed, luxury trees.

(6) は虫を虎にたとえる直喩で、根拠の *large* 自体はドメイン中立的な性質を表すタイプである。しかし媒体である *tiger* は、後続する動詞 *prowl* 「(動物などが) うろつき回る」と間接的に結びつくことで、小さな昆虫が虎のようにのっしのっしと歩き回るというイメージをより強化していると考えられる。つまり、根拠＝起点領域型と同じような効果がここで観察される。

まとめると、科学的描写においては、根拠＝中立型の直喩が多く用いられ、具体的で身近な対象を例示することで、叙述対象の性質や様態を分かりやすく説明するという機能が観察された。詩的描写では、根拠＝起点領域型の直喩が効果的に用いられ、メタファー的なイメージをより鮮明にする機能が見られた。ただし直喩の用例数が少なかったため、ここで述べたことは今回対象としたテキストにおいて見られる特徴であり、一般化するためにはより多くの用例を見る必要があるだろう。

#### 4.5.2 中間タイプと広告的描写

中間タイプのメタファー表現（名詞派生形容詞や複合語、比較の観点を明示的に述べる構文など）は、広告的描写でよく見られた。このタイプは、次の(7)のように、植物の形状や色を描写する際に多く用いられる。(7a・b)は茎や葉の形状が、(7c・d)では花の色が、名詞派生形容詞および複合語で描写されている。

- (7) a. The stems are well **clothed**, giving it a character quite different from the **wirey appearance** of other varieties. (B-1)
- b. Their leaves may be **strapped-shaped**, oval or **forked** and branching like a fern or lethal spider web. (B-2)
- c. “President Garfield” **fiery scarlet**. (B-1)
- d. The flower is large, **thick cream colored**, on the order of a calla lily. (B-1)

色の描写は特に、(B-1)のテキストで特によく観察された。これは(B-1)の種苗カタログで掲載されている写真が白黒写真であり、色を言語的に記述する必要が高かったためだと考えられる。

この形が広告で多く用いられるのは、派生形や複合語のメタファー表現が、色や形状などの細かな違いを言い分けるのに適しているからだと考えられる。広告という文脈では、読み手が購入する植物を決めるために、花や葉の色や形、かおり、感触などの情報が重要となる。しかし異なる品種間の微妙な差異を表す必要性が高いのに比べて、色や形などを純粹に表す形容詞は数が限られている。派生形や複合語のメタファー表現は、元の名詞が表す指示対象の色や形状、かおり、手ざわりなどの知覚可能な性質に焦点を当てることができ、生産性もきわめて高い構文である(田丸 2015a)。したがって、細かな差異を言い分けることができ、読み手にとっても具体的な性質をイメージしやすいという特徴をもつ。

「赤」を表したい場合を例にとろう。赤であることを述べる時、*red* 以外に、*scarlet*, *crimson*, *carmine* などの色名を用いることもできるが、専門的になるほど一般の読み手にとってはその特定の色をイメージしづらくなる。より具体性の高い「赤」を表したい場合は、*terra cotta*, *orange*, *wine*, *salmon*, *coral* のように、その色を典型的に有する具体物のイメージを利用することが一般的である。このように色名として定着しているものはそれ単体で用いることもできる。一方名詞派生形容詞や複合語は、その生産性の高さゆえに、慣用化されていないものもふくめて様々な色を表すことができることがその利点である。たとえば *fiery scarlet*, *blood red* のように色名を詳述したり、*rosy petals*, *sunset-colored flowers* のように直接

叙述対象の色を描写することもできる。したがってこれらの形は、花の色の微妙な差異を表すのに適していると考えられる。

次に、広告的描写における中間タイプのメタファー表現の使用を、科学的描写における使用と比較したい。科学的描写は、広告的描写に次いでこのタイプが多く用いられていた。しかし、同じ名詞派生形容詞でも好まれる形が異なり、科学的描写では *-like* という接尾辞をとる形が多く観察された（例：*the necklike part, mouthlike openings, the window-like nature*）。

その理由は、科学的描写ではより厳密な類似性にもとづく比較が求められるからではないかと考えられる。*-like* は趣意と媒体を直接結びつける形をとるため、直接比較型の直喩に近い意味を表すことができる。よって性質の部分的な類似だけでなく、機能なども含めたより全体的な対応関係を表すことができる。たとえば “The fruit of *Darlingtonia* is like a shaker –only a few seeds escape at a time, because the **mouthlike openings** are small” では、*mouthlike* によって、実の裂け目を「口」にたとえている。これは単なる外見的な類似だけでなく、閉じたり開いたりすること、ものが吐き出されることといった機能的な類似も関わっていると考えられる。また、*-like* は、*-y* や *-ed* よりもさらに生産性の高い接尾辞であり、辞書に登録されていない新奇なものも比較対象にとることができるという点も重要である。これらの特徴を有しているために、*-like* 形は、場面に最も適切で、より厳密な類似関係を表すのに適していると思われる。

実際に Sketch Engine を用いて、British National Corpus における *-like* と *-y* の比較を行ったところ、科学的テキストと広告での用いられやすさに違いがあることが確かめられた<sup>\*7</sup>。Sketch Engine は、ジャンルごとの相対頻度を出すことができる。相対頻度とは、BNC コーパスのデータ全体におけるターゲット語の出現数を基準とし、特定のジャンルにおいて、そのジャンルに含まれるデータの総語数から、全体の分布から予測される出現数との程度ずれが見られるかを算出したものである。相対頻度が 100% を超えていると、全体の分布から予想されるよりも高頻度で語彙が用いられていることを表す。本研究で対象としたテキストに最も近いと考えられるのは、BNC コーパスのジャンル区分における「非学術的テキスト（自然科学）」（W\_non\_ac\_nat\_science）と「広告」（W\_advert）だと考えられる。この 2 つのジャンルにおいて、両表現形式の相対頻度を調べた。

比較したのは、(8) に示す 2 つの形容詞群である。*-y* 接尾辞を伴う形容詞は、色、形、感触を主に表すものに限定し、34 語を選出した<sup>\*8</sup>。

<sup>\*7</sup> BNC コーパスの詳細については、第 3 章 3.5.1 節を参照のこと。

<sup>\*8</sup> 語の選出にあたっては『ウィズダム英和辞典第 3 版』（2012, 三省堂）を参照し、色、形、感触に関する拡張的意味が辞書に掲載されているものを選んだ。*-y* で終わる形容詞すべてを対象にすると、一般的な形容詞 *easy, busy, happy* などや、動詞派生形容詞 *sleepy, floaty* なども含んでしまうため、あらかじめ検索語彙を限定す

- (8) a. *-like* で終わる名詞派生形容詞：4966 例  
例：star-like, childlike, dream-like など
- b. *-y* で終わる名詞派生形容詞 34 語：3317 例  
(i) 色を表すもの (chalky, chocolaty, creamy, inky, milky, pearly, peachy, rosy, silvery, sooty)、(ii) 形を表すもの (baggy, beady, boxy, chubby, filmy, flaky, papery, plummy, stringy, wavy, willowy, wiry)、(iii) 感触を表すもの (creamy, crusty, doughy, fleecy, fluffy, leathery, rubbery, satiny, silky, spongy, velvety, waxy)

「非学術的テキスト（自然科学）」と「広告」における、それぞれの相対頻度は次の通りであった。

- (9) a. *-like* で終わる名詞派生形容詞  
「非学術的テキスト（自然科学）」 332.29%  
「広告」 39.60%
- b. *-y* で終わる名詞派生形容詞  
「非学術的テキスト（自然科学）」 75.13%  
「広告」 155.05%

*-like* 形容詞は「非学術的テキスト（自然科学）」での相対頻度が 100% をはるかに超えており、逆に「広告」では 100% を大きく下回る。一方 *-y* 形容詞は、これと正反対の分布となっている。よって、*-like* 形容詞と *-y* 形容詞は好まれるジャンルが異なることが、均衡コーパスでも確かめられた。同じ中間タイプでも、テキストタイプによって好まれる具体的な形は異なると言える。

#### 4.5.3 S 型の隠喩と科学的描写・詩的描写

S 型の隠喩表現は、科学的描写で最も多く用いられ、次いで詩的描写で多く用いられていた。科学的描写と詩的描写における S 型の隠喩の特徴を比較しつつ、それぞれのテキストタイプにおける S 型の隠喩の修辭的機能を考察する。

##### 科学的描写

科学的描写では、S 型の隠喩の多くが慣用化された意味を表し、植物の名前や部位を指し示すためのラベルとして用いられている。たとえば次の (10) に示す S 型の隠喩の例は、植物

---

る必要があった。

学者のコミュニティやある程度植物に関する知識がある層の間ではすでに共有されている用語だと考えられる。

- (10) a. 食虫植物の通名：bladderwort, buttercup, flytrap, pitcher, sundew など<sup>9</sup>  
 b. 植物学の分野一般で用いられる用語：spur (距)<sup>10</sup>, vein (葉脈) など  
 c. 食虫植物の部位の名前：lid, hood, mouth, neck, wing など

これらの表現は十分慣用化されているため、目標領域を喚起する要素を伴わなくても植物に関連する対象を指示していることが自明である。したがって目標領域を喚起する要素を必ずしも伴わなくてよいと考えられる<sup>11</sup>。

これに対して、慣用化されていない言い方がディスコース内で初めて用いられるときは、標識を伴う、あるいは趣意が言語化されるなどして、読み手にメタファー的名付けであることが明示されるというケースが多く観察された。一度明示的なラベリングが行われれば、その後のディスコースではその名で指示することができるようになる。この傾向は、特に形状や機能に基づき、その場限りでの名付けが行われるときに観察された。具体例を見てみよう。次の(11)~(13)では、それぞれ *spoon*, *windows*, *funnel* という語がメタファーの意味で用いられている。(a)はその語が当該ディスコースにおいて初めて用いられたときを、(b)は後続文脈においてS型の隠喩で用いられたときを表している。矢印の横には、(a)と(b)の間に文がいくつ挿入されていたかを示している。

(11) spoon

- a. The small hoodlike “**spoon**” at the tip of a leaf has nectar glands on its lower surface.  
 (葉の先端についた小さなフードのような“スプーン”は、表面下部に蜜腺をもつ)  
 ↓ (0文)  
 b. The reddish color of the **spoon** may attract insects.  
 (スプーンの赤みがかかった色は昆虫を惹きつけうる)

<sup>9</sup> 品種の隠喩的命名は、他のジャンルでも多く観察された。

<sup>10</sup> *spur* は本来乗馬靴に付けられる金具の「拍車」を意味する。形状の類似から、花冠または萼の一部が細長く突き出たものを指す。

<sup>11</sup> ST型のうちSullivanの隠喩構文に従わない形も、科学的描写で多く用いられていた(表4.3の「例外的ST型」を参照)。Sullivan(2007, 2013)は概念的に依存的な要素(典型的には動詞や形容詞)がメタファーの意味を担うと予測しているが、例外的な形では、概念的に自律した要素がメタファーの意味を表す。つまり例外的ST型において目標領域を喚起する要素を伴うことは義務的ではなく、自律的要素のみで指示が完結している。したがって例外的ST型は、S型の隠喩とかなり近い特徴をもつと言える。

## (12) windows

- a. The translucent **windows** in the leaf tissue look skyward, so that the insect tends to fly upward thinking it is going outside of the hood ...

(葉組織にある半透明の窓は空に向かっていているように見えるため、昆虫はフードの外に行けると思い上に向かって飛んでしまう)

↓ (3文)

- b. So why doesn't an insect just buzz around in the hood until it finds its way out through the circular opening? It is, of course, fooled by the **windows**.

(ではなぜ昆虫は、円形の開口部から出る道を見つけるまで、フードの中でただ飛び回っておかないのか。それはもちろん窓に騙されるからだ)

## (13) funnel

- a. The **funnel**-like zone of the leaf below the spoon tends to be reddish.

(スプーンの下にある、葉の漏斗のようなところは赤みがかったことが多い)

↓ (0文)

- b. The lower necklike part of the **funnel** has downwardly-pointing hairs.

(漏斗の首のようにになっている部分の下のあたりには、下向きの毛が生えている)

(11) では、ある部分が初めてメタファー的に指示されるとき、特殊な意味で用いられていることが二重引用符によって指標されている。さらにこの記述には拡大写真が添えられており、読み手はその写真を見てどの部分を指しているかを理解することができる。(12a) と (13a) では、それぞれ前置詞句の *in the leaf tissue* と *of the leaf* によって目標領域の概念がプロファイルされている。(13a) はこれに加えて、派生接辞の *-like* によってもメタファーであることが指標されている。このようにその場限りの名付けでは、先行文脈のなかであらかじめメタファーであることが明示された上で、(b) のようにそのメタファー的ラベリングを用いた対象指示が行われている。

科学的描写においてメタファー的ラベリングが高頻度で行われていることは、他の関連する事実からも裏付けられる。第一に、他のテキストタイプよりも名詞メタファーが多いことが挙げられる。これは具体的な指示対象のラベリングが行われているからだと考えられる。第二に、媒体を表す語彙のバリエーションが少ないことも関連する。科学的描写がなされた (A) のテキストでは、隠喩のトークン数 232 に対し、タイプ数は 57 しかなかった。他のテキストと比べると、トークン数に対するタイプ数がかなり少ない。(B-1) はトークン数 27 に対しタイプ数 23、(B-2) はトークン数 40 に対しタイプ数 24、(C) はトークン数 148 に対しタイプ数 118 であった。このことが示しているのは、科学的描写では同じ名前で特定の対象を何度も指示しているという事実で、少なくともその談話内において、対象に対するラベリング



が確立されていることが示唆される。

科学的描写においてこのようなラベリングが多用される理由は、植物の構造の細部にわたって指し示す必要があるからだと考えられる。一部はラテン語からの借用などによってラベリングが行われるが（例：*stamen* 「おしべ」、*style* 「花柱」）、形状や機能の類似を利用してメタファー的に名付けることで、専門的な知識のない読者に対しても、容易に同定可能なラベリングを与えることができる。特に食虫植物のように馴染みのない植物に関しては、専門用語を用いるよりも、メタファーを利用した通称が効果的だと思われる。

以上より、科学的描写における S 型の隠喩表現の主な機能は、一般的な読み手にも分かりやすいラベリングを提供することだと結論づけられる。

### 詩的描写

詩的描写でも科学的描写に次いで、S 型の隠喩が多く用いられていた。しかし、隠喩的指示が達成される過程という点で、科学的描写とは対照的である。

(C) のテキスト『センス・オブ・ワンダー』では、隠喩的指示が行われるとき、2 つのタイプが見られた。(i) たとえのイメージが突然持ち込まれるものと、(ii) 文脈の中で徐々に確立されていくものである。(i) のタイプには、固有名（例：*lady's slippers* 「アツモリソウ」、*the Milky Way* 「天の川」など）や慣用化したメタファー表現（*guide* 「指導する」、*pave the way for* 「～のために下地をつくる」など）と、新奇なメタファー表現の両方が含まれる。前者は科学的描写にも見られたタイプである。

一方で後者の新奇なメタファー表現によってたとえのイメージが突然持ち込まれる場合、特定の視点からの「見え」が関わるという特徴が見られた。このタイプでは、特定の視点の存在を明示あるいは示唆するような要素を伴うことが多い。次の (14) では、満月の光に照らされた海岸がダイヤモンドがちりばめられたように光り輝いている様子が描かれており、*a thousand diamonds* が S 型の隠喩になっている。

(14) We have let him join us in the dark living room before the big picture window to watch the full moon riding lower and lower toward the far shore of the bay, setting all the water ablaze with silver flames and finding **a thousand diamonds** in the rocks on the shore as the light strikes the flakes of mica embedded in them.

（私たちは彼（ロジャー）を仲間に入れ、暗いリビングの、一枚ガラスの大きな窓の前で、はるか先の入り江の岸に向かって満月が沈んでいくのをともに眺めた。海は一面銀の炎に燃え、雲母の破片に光が当たると、海岸沿いの岩には幾千ものダイヤモンドがきらめいていた。）

読み手が *a thousand diamonds* という箇所を読むとき、それがメタファーであるかどうかは

自明ではない。少なくとも言語的には趣意が表されておらず、もしかすると本物のダイヤモンドかもしれない。しかし文の冒頭部で「暗いリビングで」「窓の前において」外を眺めているという視点が明示されていることで、「岩の中のダイヤモンド」が著者たちにとってそう見えたにすぎないということが読み手に示唆される。それによって、正体は分からないが何か美しいものがダイヤモンドとして描かれていることが理解される。さらにこの例では、直後の下線部によって趣意が明かされる。種明かしされるような形で、「ダイヤモンド」が実は「雲母」であったことが伝えられるのである。

この例に典型的に示されるような形は、科学的描写における隠喩的指示のパターンとは大きく異なる。科学的描写で慣用的でないメタファー表現が用いられるときは、標識を伴ったり趣意を表したりするなどの過程を経てラベリングが行われる。つまり、通常の意味ではないことがあらかじめ読み手に伝えられる。詩的描写では、視点の明示によって認識の逸脱が示唆されるも、趣意は明かされないままにS型の隠喩が用いられている。後者の形のほうが読み手に与えるインパクトが強く、ゆえに詩的な印象をもたらしていると考えられる。

次に、(ii) 文脈の中で隠喩的指示が段階的に確立される場合を見ていく。このタイプでは、まず Sullivan の隠喩構文の形で起点領域が喚起され、その後のディスコースにおいて同じ起点領域を喚起する語彙で語られていくなかで、徐々に隠喩的指示が達成されるという過程が観察された。このタイプのほうが (i) よりも多く見られ、詩的描写の重要な特徴をなしていると考えられる。

ここでは、*lichen* 「地衣類」がロジャーにとってやわらかな絨毯として立ち現れる場面を例に、隠喩的指示が達成される過程を見ていきたい。問題となるS型の隠喩は、(15) に示すものである。ここでは目標領域を喚起する要素が伴われておらず、文脈がなければ趣意である「地衣類」を同定することは難しい表現になっている。したがって、文字通り絨毯のうえでロジャーが跳びはねていると解釈することもできる。

(15) Roger delighted in its texture, getting down on chubby knees to feel it, and running from one patch to another to jump up and down in **the deep, resilient carpet** with squeals of pleasure.

(ロジャーはその感触に喜び、ぽっちゃりとしたひざを下ろしてその感覚を味わい、あっちこっち駆け回っては歓喜の声を上げ、ふかふかで弾む絨毯の上で跳んだり跳ねたりした。)

このように完全な隠喩的指示が達成されるまでに、先行するディスコースにおいて、段階的にメタファーのイメージが具体化される過程が見られる。まず、地衣類が絨毯として指示される過程を見ていこう。(16) では、対象とするS型の隠喩を下線で示している。太字で示しているのは、同じ起点領域を喚起する語彙群である。

(16) The woods path was **carpeted** with the so-called reindeer moss, in reality a lichen.

Like **an old-fashioned hall runner**, it made **a narrow strip** of silvery gray through the green of the woods, here and there **spreading out to cover a larger area**. In dry weather the lichen **carpet** seems thin; it is brittle and crumbles underfoot. Now, saturated with rain which it absorbs like a sponge, it was deep and springy. Roger delighted in its texture, getting down on chubby knees to feel it, and running from one patch to another to jump up and down in the deep, resilient carpet with squeals of pleasure.

(森の小道はいわゆるハナゴケ、実際には地衣類で覆われていた。古風な細長い絨毯のように、森の緑を縫って銀色がかった灰色の線が細長く続き、あちらこちらで大きく広がっていた。乾いた日には、地衣類の絨毯は薄くなっているように思える。もろく、足の裏の下でぼろぼろに崩れてしまう。今は雨をスポンジのように吸い込み、ふかふかで弾力があつた。ロジャーはその感触に喜び、ぽっちゃりとしたひざを下ろしてその感覚を味わい、あっちこっち駆け回っては歓喜の声を上げ、ふかふかで弾む絨毯の上で跳んだり跳ねたりした。)

ここでは、まず一文目の *carpet* という動詞によって絨毯のイメージが喚起される。この表現は、Sullivan の隠喩構文のうち【IV】 **Chasing the title** 型にあたる表現で、動詞がメタファー的に用いられ、主語の *the wood path* や *with* 句の *the so-called reindeer moss, in reality a lichen* が目標領域を喚起する。この段階ではまだ、趣意である *a lichen* は自律的要素で表されている。次に、*Like an old-fashioned hall runner, ...* という直喩によってこの隠喩のイメージが強化される<sup>\*12</sup>。続く *In dry weather ...* の文では、地衣類は *a lichen carpet* という複合名詞の形で指示されている。この段階にいたると、もはや *carpet* のほうが主要部になっており、*a lichen* の概念的自律性が相対的に低くなっている。このように徐々に「地衣類」のイメージが「絨毯」のイメージに取って代われ、最終的に下線部の部分で、隠喩的な指示が行われている。

同様の過程が観察される例として、夜の虫がオーケストラの一員に変化する場面を取り上げたい。次の(17)に取り上げる一節では、最後の文(下線が引かれている部分)でS型の隠喩が用いられている。

まず一文目の *the insects (that) play little fiddles* では、述部が起点領域であるオーケストラのイメージを喚起し、主部が趣意である *insect* を表している。つまり最初の段階では、(16)の場合と同様に、趣意が概念的に自律した要素によって表されている。次に、*the insect orchestra* という複合名詞のメタファー表現が用いられ、続いて *the tiny players* によって虫が指示されることで、虫のイメージが徐々に背景化される。特に *the tiny players* では、*tiny*

<sup>\*12</sup> この直喩は根拠=起点領域型である。詳しくは4.5.1節の(5)を参照。

によって小さな存在であることがわずかに示唆されているにすぎない。そして最後の部分では、虫の集団はオーケストラ、個々の虫は演奏者として完全に隠喩的に指示されているのである。

- (17) I have already promised Roger that we'll take our flashlights this fall and go out into the garden to hunt for the insects that **play little fiddles** in the grass and among the shrubbery and flower borders. The sound of the insect **orchestra** swells and throbs night after night, from midsummer until autumn ends and the frosty nights make **the tiny players** stiff and numb, and finally the last note is stilled in the long cold. [...] The game is to listen, not so much to the full orchestra as to the separate instruments, and to try to locate the players.

(この秋は懐中電灯をもって庭に出かけ、草むらや植え込み、花壇のなかで小さなバイオリンを弾く虫たちを見つけに行こうと、私はもうロジャーに約束していた。虫のオーケストラの音は、真夏から秋の終わりまで、毎晩ふくれあがるように鳴り響く。そして霜が降りる夜になると小さな演奏者達は凍えて動きが鈍くなり、やがて長い冬を前に最後の音がやむ。[...] そのゲームでするのは、フルオーケストラというより個々の楽器を聞くこと、そして演奏者を突き止めることだ。)

詩的描写において隠喩的指示が確立される過程においては、このように焦点となっている語句とそれを取り囲む言語的コンテクストとの間に意味の緊張が生じる段階を経ているということが重要ではないかと考えられる。Richards (1936) や Black (1962) など、メタファーにおける概念間の相互作用を重視する立場では、メタファーによって新たな意味が生じるとき、このような緊張あるいは概念間の取り引きがその契機となると述べている。意味的な緊張をはらむ形で示されたイメージが、一貫性のあるメタファー的語りを展開されていくなかで、その概念間の結びつきを強めていく。最終的に、描写対象はそのディスコースにおける新たな意味や価値を獲得し、語られる世界の中で「絨毯」や「オーケストラ」として存在するにいたる。たとえば (16) の「地衣類」は、単なる森に生えている目立たない植物ではなく、その上で跳んだり跳ねたりして感触を楽しむことができる存在として、新たな価値を獲得していると言える。

以上より、詩的描写における S 型の隠喩は、ST 型の隠喩や直喩と協働してはたらき、書き手の主観的な認識や、対象に対する新たな価値付けを反映する機能があると考えられる。これは、科学的描写における S 型の隠喩とはまったく異なる機能である。前後のディスコースを見ることによって、同じタイプの隠喩でもその用いられ方が大きく異なることが示された。

#### 4.5.4 メタファー標識の機能

最後に、テキストタイプによるメタファー標識の機能の相違について考察する。標識を伴った隠喩は広告的描写でやや多いものの、科学的描写と詩的描写ではあまり差が見られなかった。つまり頻度という点では、テキストタイプ間の差があまり見られない。そこで、第3章3.4節で示した発話事態モデルに基づく分類にしたがって、どのようなタイプの標識をとるのかを分析することで、それぞれのテキストタイプにおける標識の機能を検討する。

まず広告的描写では、主に表象機能と喚起機能に焦点を当てるタイプのものが用いられ、特に植物の名前がメタファーに基づく場合に標識が付け加えられていた。以下にその典型例を示す。(18)では、*golden fleece* (金色の羊毛)がある特定の品種を表しており、この表現に標識が付け加えられている。*suggests the name* は表象機能を直接言語化しており、二重引用符“...”は喚起機能を表している。

(18) Its soft fluffy appearance suggests the name, “Golden Fleece.” (B-1, 表象・喚起)

このタイプの標識は、第一に、固有名であることを読み手に分かりやすく伝える機能があると考えられる。同時に、その呼び方がメタファー表現であることを強調していると考えられる。命名の由来を明示的に述べることで、語が本来表す対象を想起させることができる。特に(B-1)の種苗カタログにおいてメタファー的な通称の使用が顕著に見られたが、このテキストでは(18)のように標識を用いることで、メタファー的語源に意識を向けさせ、媒体のもつ美しいイメージを読み手に強調する狙いがあると考えられる。

さらに(B-2)のオンラインショップの描写で特徴的だったのは、読み手の興味を惹きつけたり面白がらせたりするような文脈で、標識を伴う隠喩が用いられることである。このタイプは各植物の記述の冒頭部分、1文目で多く見られた。次の(19)も1文目で現れたもので、*sundew*「モウセンゴケ」がモンスターのようだというコピュラ型の隠喩に、複数の標識が付け加えられている。

(19) If an insect ever evolved the brains to write a horror novel, the monster in that novel would probably be a sundew.

(もし虫の知能がホラー小説を書けるほど発達したなら、その小説に出てくるモンスターはきっとモウセンゴケになるだろう)

ここで用いられているのは、if節および *would*、*probably* という標識である。if節は現実世界と虚構世界のずれが関わるため「ドメイン間写像」の関係をプロファイルするタイプにあ

たり、後者の2つは「認知的把握」の逸脱を示すものである。ここでは、虫がホラー小説を書く知能を持つという虚構世界を想起させ、その意外な認識の枠組みのなかで「モウセンゴケ」がどういう存在かを描写している。あえて読み手に想像の世界だと明かすという方略をとることで、突飛なメタファーを可能にすると同時に、読み手も嘘と知りながら想像の世界を楽しむことができる。標識は、このようなメタファーの遊びを助けるはたらきがあると考えられる。

科学的描写は、表象機能や喚起機能の明示による名前の由来の説明が見られるという点では、広告的描写と共通している。それ以外でこのテキストタイプに特有だったのは、喚起機能の明示（特に“...”）によって、ある語が通常とは異なる意味で用いられていることを示唆するタイプである。(20)はその典型例である。ここでは、*midrib*「(葉の)中肋」が触られたことを感知することができる」と述べられており、そのときの *know* という行為が、いわゆる人間の脳が感知するときの *know* とは異なる行為であることが、標識によって示唆されている。

(20) Your brain knows you have been touched. In this case, the midrib **“knows”** that the leaf has been touched.

(あなたの脳は、あなたに何かが触れたことを知る。この場合、中肋は葉に何かが触れたことを“知る”のだ)

このタイプの標識は、科学的描写に求められる客観性や厳密さを補助する機能があると考えられる。上の例では、標識は *know* という動詞が便宜的に用いられているだけであり、植物がもつ知能を人間のそれとは単純比較できないことを示唆している。厳密には同じ行為ではないことを補足しているのである。また、4.5.3 節の (11)~(13) の例で見られた標識“...”の使用も、記述の客観性を保つための方法だと言える。“*spoon*,” “*windows*,” “*funnel*” など、科学的描写において S 型の隠喩が初出で用いられるときは標識“...”を伴いやすいと述べたが、聞き手に対して意外性や驚きを感じさせるよりも、字義通りの意味でないことをあらかじめ伝達することが優先されていると考えられる。

最後に、詩的描写は、標識のタイプに偏りがなくバリエーションが豊かであるという特徴が見られた。以下にその一部を示す。

(21) a. With a friend I went out on a flat headland that is almost a tiny island, being all but surrounded by the waters of the bay. (ドメイン間写像)

b. This one must be a Christmas tree for the squirrels,” I would say. (認知的把握)

- c. A lens-aided view into a patch of moss reveals a dense tropical jungle. (認知的把握)
- d. It is exactly the sound that should come from a bell held in the hand of the tiniest elf. (表出)
- e. There is symbolic as well as actual beauty in the migration of birds. (表象)

(21a) では、*almost* という概念的な距離を表す表現によって、趣意と媒体のずれが示されており、「ドメイン間写像」の関係が間接的にプロファイルされている。(21b) のように、*must* や *for the squirrels* によって書き手の主観的な視点や誰にとっての価値なのかを示したり、(21c) のように虫眼鏡を通すという特殊な視点を示したりすることで、「認知的把握」の逸脱をプロファイルするパターンも見られた。また、(21d) のように *exactly* によって自身の感動を強調する「表出」機能や、(21e) のように *symbolic as well as actual* によって言葉の多義性に気付かせる「表象」機能も観察された。

詩的描写では様々な標識を用いながら、書き手の主観的な認識を投影した風景描写がなされる。標識はそのような主観的認識の存在を示唆することによって、異なる認識の可能性を提示し、既存の認識のしかたの相対化をはかる機能をもっているのではないかと思われる。

## 4.6 まとめ

メタファー表現は、一般的には詩的な効果をもたらすために用いられると考えられてきた。また、概念メタファー理論に代表されるようなメタファーが思考や認識の手段となりうるということを強調する立場からは、意外な類似性に気付かせ、新たな認識をもたらすことがメタファーの重要な役割だと見なされてきた。しかしどのような文脈で用いられるかによって、メタファー表現に期待される修辭的役割も異なると考えられる。この章では、メタファーとして気付かれにくい表現のほうが比喩としてのインパクトが強い、あるいは修辭性が高くなるという従来の見方に対して、メタファーの修辭性は一面的には決められないという立場から、様々な表現形式をとるメタファー表現の修辭的役割を分析・考察した。

本研究では、メタファー表現は、当該テキストにおいて適切な形あるいは効果的な形が選ばれているのではないかという予測のもと、異なる3つのテキストタイプにおける植物や風景の描写の分析を行った。取り上げたのは、科学的描写、広告的描写、詩的描写という異なる目的をもって書かれたテキストタイプである。これらのテキストにおいてどのようにメタファー表現が使分けられているのかを、メタファー表現の文法的・構文的特徴に注目して分類した。さらに、科学的描写、広告的描写、詩的描写のそれぞれにおいて、メタファー表

現やメタファー標識がどのような役割を果たしているのかを検討した。

分析の結果、テキストタイプの目的によって好まれる構文やその構文が果たす修辭的機能が異なることが明らかになった。

まず科学的描写では、S型の名詞メタファーが高頻度で用いられていた。媒体に選ばれる対象のバリエーションが少なく、英語話者や植物学者の間で慣用化されたメタファー表現 (*mouth, lid, pitcher, spur* など) が多く用いられていることも、このテキストタイプの特徴である。これらの名詞メタファーは、メタファー的ラベリングを行うのに適切な形であり、植物の記述においてその細部構造まで指示する必要性を満たす。すでに確立されたラベリングを用いることによって、書き手の主観をなるべく排することもできる。また、ラテン語由来の学名や専門性の高い名称を用いるのを避けることができ、一般的な読み手の理解を容易にする効果もある。科学的描写で直喩が用いられる場合、根拠＝中立型の形を用いることによって、具体例を例示する方略がとられる。形状や機能を具体化し、正確に理解させるのに効果的で、字義的比較にかなり近い。メタファー標識は、喚起機能をプロファイルするタイプが多く用いられ、初出のS型メタファーや通常とは異なる意味で用いられている表現に付け加えられていた。これは、解釈の曖昧性を排除し、記述の客観性や厳密さを保つ機能があると考えられる。

次に広告的描写は、名詞派生形容詞メタファー (*fiery, cupped*) や比較の根拠を言語化する形 (*thick cream colored*) の多用が特徴的だった。この形は、色や形、感触などに関わる性質を、具体化・細分化して言い表すことができる。植物の購入にあたっては色や形などの情報が重要だと考えられるが、通常の形容詞では言い分けられないような微妙な差異まで言い表せるため、より詳細な情報を与えることに寄与する。特に白黒写真しか掲載されていないテキストでは、色の描写をする際に中間タイプのメタファー表現が重要な役割を果たしていた。広告的描写におけるメタファー標識は、植物名の由来を述べるときによく用いられていた。広告では基本的に学名ではなく通称が用いられるが、元の意味が表すイメージを想起させることで、植物の美しさを読み手に訴える効果があると考えられる。

最後に詩的描写の特徴を述べる。このテキストタイプでは、科学的描写と同じくS型の名詞メタファーが多く用いられていたが、ディスコースの展開の中で隠喩的指示が徐々に確立されていくという点で、科学的描写とは異なる。起点領域のイメージが最初に持ち込まれる段階では、ST型の隠喩構文の形が用いられ、概念的に依存した要素がメタファーの意味を担う (例: *insects play little fiddles*)。その後ディスコースが展開されるなかで趣意のイメージが徐々に背景化され、概念的に依存した要素が趣意や目標領域を喚起するようになる (例: *insect orchestra, tiny players*)。逆に、媒体や起点領域は概念的に自律した要素によっ



て担われるようになり、最終的に隠喩的な指示が確立される（例：*the full orchestra, the players*）。このようなメタファー表現のクラスターの・段階的使用は、書き手の個人的経験を通して、描写対象が新たな世界との結びつきを獲得する過程を反映していると考えられる。メタファーの重要な役割として、新たな意味の創出や価値付けをもたらすことが指摘されているが、メタファー表現のクラスターの・段階的使用はこのような新たな価値付けを行う過程を示していると言えよう。また、詩的描写においては、直喩もこのようなメタファー表現のクラスターに組み込まれ、根拠＝起点領域型の形をとることによって、隠喩のイメージを具体化し、メタファー的語りをより強化するはたらきが見られた。

これらのメタファー表現の使い分けが示しているのは、メタファー表現はその明示性が高くなるほど修辭性が低くなるとは一概には言えないということである。むしろそれぞれのテキストにおいて、テキストが書かれた目的を果たすために最も効果的な形でたとえが用いられていると見なすべきである。テキストタイプごとの分布の偏りは、明示性の異なるメタファー表現にはそれぞれ異なる役割があることを物語っている。



## 第 5 章

# メタファー標識による隠喩の明示化

### 5.1 はじめに

この章では、メタファー標識を伴う隠喩に注目する。メタファー標識を伴う隠喩は、当該表現がメタファーであることを指標するために、メタファーとして気付かれやすい表現である。聞き手に対して「解釈の方向づけ」を与えているという意味で、明示性が高い。

具体例を見てみよう。たとえば次の例では、*metaphorical* という表現がメタファー標識として機能している。この例は、メイヴ・ビンシー (Maev Binchy) というジャーナリストが、まわりから作家として見られているのではないかと恐れていることを述べたものである。彼女にはジャーナリストとしての自負があるのだが、新聞のコラムを担当させられており、その現状に満足していないことが描かれている。

- (1) She would not like to abandon journalism altogether. “I’m nervous about hanging a **metaphorical sign on my door** saying, ‘Maev Binchy: Author.’ In my passport I have ‘Journalist.’ It’s my proudest achievement to have got into the Irish Times. [...]”

(BNC, FSW)

(彼女はジャーナリズムをあきらめる気などなかった。「わたしはドアに『メイヴ・ビンシー (作家)』という札を下げておくような真似に不安を感じるのです。パスポートにはジャーナリストと書いてあります。アイリッシュ・タイムズに入社できたことは、わたしが成し遂げたことなのかで最も誇りに思うことですから」)

*metaphorical* という標識は *a sign on my door* がメタファー的に解釈されるべきものであることを指標する。したがってこの表現は、自分のアイデンティティの問題が、ドアに下げる札にどんな肩書きを書くかという問題として、比喩的に言い表されたものであると解釈でき

る。もしこの標識がなければ、*a sign on my door* を文字通り解釈し、ドアに本当に札が下げられているような状況を想起することもできるだろう。しかし標識があることによって、実際に札が下げられているわけではなく、彼女の心理的な状況を表していると容易に理解される。

メタファー標識は一般的に、解釈が文脈からは予測しづらいとき、比喩的な解釈を促し、聞き手の理解を助ける機能があると言われる (Cameron and Deignan 2003: 150)。実際に (1) の *metaphorical* は *hang a sign on my door* が字義通りの解釈も可能な文脈で用いられており、聞き手の理解を助けていると考えられる。一方でメタファーであることを明示することは、解釈の自由を狭め、意味を限定することになる。そのため、標識の使用は比喩としてのインパクトを弱め、作品世界への没入を妨げることになると見なされることも多い (Goatly 1997, 鍋島 2016)。これに対して、Steen (2011, 2017) は、標識の積極的な価値を認める。Steenによると、標識はメタファー表現の意図的な使用を指標し、ドメイン間比較に聞き手の注意を向けさせることで、意識的なパースペクティブの転換を促すことができる。

本章の目的は、従来指摘されてきたように、メタファー標識の主な機能は解釈の曖昧性を軽減することなのか、それともそれ以外の機能があるのかを考察することである。そこでまず、メタファー標識は適切な解釈が予測しづらい場合に用いられると仮定し、次の仮説を立てる。

#### <仮説 1 >

メタファー標識は、解釈の曖昧性があるメタファー表現に付け加えられる。

上の仮説が正しいとすると、メタファー標識は解釈の曖昧性を軽減し、メタファー的に解釈すべきであることを聞き手に伝達するというメタ的・手続き的機能を担っていると言える。逆に比喩であることが明らかな表現にも標識が用いられるとしたら、その機能は解釈の曖昧性の軽減にあるとは言えない。その場合、メタファー標識は解釈を限定するだけでなく、より豊かな修辭的機能を担っている可能性がある。

解釈の曖昧性があるということは、メタファーとして気付かれやすいかどうかということと深く関連している。メタファー表現の形式的な特徴に注目すると、特に、目標領域を喚起する要素がプロファイルされているかどうかが大きく関わる。*The chairman **plowed** through the discussion* 「司会はなんとか議論を進めた」のように目標領域を喚起する要素 (*the discussion*) が明示されていれば、メタファー的に用いられている語 (*plowed*) との間に意味の緊張を生じるため、字義通りの解釈が難しくなるからである。逆に起点領域を喚起する要素のみしかプロファイルされない場合、たとえば *The rock is getting brittle with age* 「岩は経

年によって砕けやすくなっている／男性は加齢に伴い怒りっぽくなっている」のような場合では、文脈がなければ解釈の曖昧性が残る。

したがって本研究では、目標領域を喚起する要素をプロファイルする ST 型の隠喩に比べて、そうでない S 型の隠喩のほうが解釈の曖昧性が高いと想定する。その上で、解釈の曖昧性と標識の有無の関係を調査するために、上の仮説 1 を以下のように変更する。

#### <仮説 2 >

S 型の隠喩のほうが、ST 型の隠喩よりもメタファー標識を伴いやすい。

この<仮説 2 >を検証するためには、メタファー標識を伴う隠喩の構文タイプの分布を、メタファー標識を伴わない隠喩における構文タイプの分布と比較する必要がある。前者の方が S 型の比率が高くなることを示すことができれば、仮説の正しさが実証される。

この章の構成は以下の通りである。5.2 節では、本研究の分析対象と方法を述べる。5.3 節では標識を伴う隠喩の構文タイプの分布を示し、第 3 章のケーススタディで示した分布との違いを述べる。その上で、メタファー標識の機能をより詳しく検討するために個々の具体例を観察し、S 型の隠喩および ST 型の隠喩それぞれにおいて、標識によって比喩のどのような側面に焦点が当てられるのかを考察する。最後に 5.4 節で結論を述べる。

## 5.2 分析対象と方法

### 分析対象

分析対象は、*metaphorical* あるいは *metaphorically* を伴う隠喩である。この標識は、第 3 章 3.4 節の発話事態モデルにもとづくメタファー標識の類型では、発話の記号的・機能的関係をプロファイルするタイプのうち、特に記号の<表象機能>をプロファイルするタイプに含まれる。ある表現が比喩であることを最も直接的に明示する標識であり、最も効率的に比喩表現を抽出できると予想される。その明示性が最大の特徴で、Goatly (1997: 172) はこれを“explicit marker”と呼び、メタファーの効果を弱める効果が最も高い標識のひとつだと主張する (同上: 194)。

用例は、Sketch Engine を用いて BNC コーパスから抽出した<sup>\*1</sup>。*metaphorical* あるいは *metaphorically* を含む文を特に条件を設けずに抽出し、*metaphorical* の 192 例、*metaphorically* の 120 例を得た。得られた用例すべてを分析対象とする。

この 2 語の用法の概観をつかむために、これらが典型的にどのようなジャンルで用いられ

<sup>\*1</sup> Sketch Engine および BNC コーパスの特徴および利点は、第 3 章 3.5.1 節を参照。

表 5.1 *metaphorical* および *metaphorically* とジャンル別相対頻度

	高頻度	低頻度
metaphorical	学術的散文（社会科学・行動科学）：597.3%（58例）	小説：44.3%（17例）
	学術的散文（人文学）：383.1%（29例）	大衆紙：35.5%（6例）
	非学術的／ノンフィクション（人文学）：212.3%（18例）	
metaphorically	学術的散文（人文学）：317%（15例）	小説：95.8%（23例）
	学術的散文（社会科学・行動科学）：280.1%（17例）	大衆紙：66.2%（7例）

るかを表 5.1 に示す。パーセンテージは相対頻度を表しており、100% より高い値はデータ全体の分布から予想されるよりも高頻度で語彙が用いられていることを表す<sup>\*2</sup>。数値が高いほど、そのジャンルで特徴的に用いられる語である。この数値は Sketch Engine によって自動で産出されるもので、ジャンルの区分は BNC コーパスの David Lee による区分に従っている。ここでは、高頻度あるいは低頻度で見られたジャンルのうち、用例数が極端に少ないものを除いて示している。分析対象とする 2 語、*metaphorical* および *metaphorically* は似たような分布の傾向を示し、人文社会系の学術テキストにおいて高頻度で用いられ、小説や大衆紙などの形式ばらないテキストにおいては頻度が下がることがわかる。つまりこの 2 語はどちらも、比較的フォーマルな文章で好まれる標識であることが推察される。

## 分析方法

分析方法は次の通りである。(i) まず比喩標識として機能しているか否かで分類する。*metaphorical/ metaphorically* が修飾する語句がメタファー的あるいはメトニミー的に用いられている場合、比喩標識として機能していると見なす<sup>\*3</sup>。たとえば (2a) は標識を伴う隠喩の例で、(2b) は字義的な表現の例である。

- (2) a. Interwoven with these images are subtler references to the metaphorical **borderlines** which separate Latin American culture from that of Europe and North America.

（これらのイメージに織り込まれているのは、ラテンアメリカの文化とヨーロッパや北米の

<sup>\*2</sup> 分布の相対頻度については 4.5.2 節において説明しているので参照されたい。

<sup>\*3</sup> ここでメトニミーも含めるのは、後述する理由で、これらの標識を伴う場合メタファーとメトニミーを区別することが難しい用例が多く観察されるからである。

文化を分ける比喩的境界への巧妙な言及である)

- b. A definitive interpretation of the metaphorical structure of King Lear would “solve” or “explain” the play, which would then lose all further interest.

(『リア王』の比喩の構造に決定的な解釈があれば、その作品が「解決」されたり「説明」されたりするかもしれないが、その先の面白みがすべて失われることになるだろう)

(2a) は、*metaphorical* が修飾する名詞 *borderlines* が物理的ではなく抽象的・心理的なものを指しているため、隠喩だと判断できる。これに対し (2b) は、『リア王』という作品に見られる比喩の構造が問題になっており、*structure* 自体は字義的な意味で用いられている<sup>\*4</sup>。

(ii) 次に、比喩標識として機能していると判断される例に対し、標識が修飾する表現の構文タイプを、「ST 型」、「S 型」、「その他」に分類する。「ST 型」はさらに、「Sullivan の隠喩構文」、「名詞補部型」、「その他 ST 型」に下位区分する<sup>\*5</sup>。

(iii) 最後に、標識を伴う必要があるのはなぜか、S 型の場合と ST 型の場合それぞれについて、その要因を分析する。個々の用例を前後文脈も含めて分析することで、標識がどのような修辭的機能を担っているのか、より詳細に考察する。

### 5.3 分析結果

まず、*metaphorical* および *metaphorically* が比喩標識として用いられる比率を、表 5.2 に示す。全用例のなかで比喩表現と見なせるものは、形容詞の *metaphorical* で約 30%、副詞の *metaphorically* で約 70% を占めた。この中には、*in a metaphorical sense* のように、他の語彙と共にメタファー表現を指標しているものも含まれる。最も明示的に比喩を指標すると言われている標識であっても、常に比喩を指標するとは限らず、形容詞形では字義的な用法のほうが大部分を占めることは注意が必要である。

<sup>\*4</sup> 一見すると、両者の区別は形容詞の制限的／非制限的の用法に対応するように思われるかもしれない (例: my younger daughter/ my beautiful wife) (cf. Quirk et al. 1985: 1239)。 (2a) のようにメタファーの標識として機能する場合、標識がなくても指示対象を同定することができるため、*metaphorical* は非制限的な修飾 (non-restrictive modification) を表していると考えられる。一方字義的な例では、*metaphorical* の後に *expression, meaning, use (of a word)* などの名詞が典型的に後続する。これらの例では名詞が表すカテゴリーに当てはまる成員のうち、「比喩的」という特徴をもつものだけに指示対象が限定されており、*metaphorical* は制限的な修飾 (restrictive modification) を表している。しかし、字義的な用法のすべてが、制限的修飾を表しているとは限らない。たとえば (2b) は、『リア王』という作品の潜在的な構造自体が比喩の構造と呼ばれている可能性がある。よってここでは *metaphorical* は指示の範囲を狭めるのではなく、補足的な情報を与えるにすぎない。したがって、メタファー標識として機能しているかどうかは、制限的／非制限的の区別とは必ずしも対応しない。

<sup>\*5</sup> 隠喩の類型法については、第 3 章 3.2 節を参照。

表 5.2 比喩標識としての *metaphorical/ metaphorically*

	字義的	比喩的
<i>metaphorical</i>	135例 (70.3%)	57例 (29.7%)
<i>metaphorically</i>	35例 (29.2%)	85例 (70.8%)

表 5.3 *metaphorical/ metaphorically* と隠喩の構文タイプ

	ST型	S型	その他	合計	S型率
<i>metaphorical</i>	15例 (隠喩構文9、名詞補部型6、その他1)	41例	1例	57例	71.9%
<i>metaphorically</i>	16例 (隠喩構文9、名詞補部型7、その他3)	66例	2例	85例	77.6%

表 5.4 *storm, flame, leak, sow* が隠喩で用いられるときの構文タイプ (第 3 章の表 3.3 を改変)

	ST型	S型	合計	S型率
<i>storm</i> (n.)	35	12	47	25.5%
<i>flame</i> (n.)	34	6	40	15.0%
<i>leak</i> (v.)	104	1	105	1.0%
<i>sow</i> (v.)	55	16	71	22.5%

次に、標識を伴う隠喩が、どのような構文タイプをとるのかを分析した結果を表 5.3 に示す<sup>\*6</sup>。さらに次の表 5.4 には、第 3 章のケーススタディで行った、*storm, flame, leak, sow* がそれぞれ隠喩で用いられるときの構文タイプの分布を示す (ここでは下位タイプの分類は省略する)。まず分析の結果から示されるのは、*metaphorical/ metaphorically* ともに、ST 型よりも S 型と共起する用例のほうが多いということである (表 5.3)。これは、「S 型の隠喩のほ

<sup>\*6</sup> ST 型の下位分類の構文タイプを合計すると、ST 型全体の用例数よりも多くなっている。これは、ひとつの隠喩表現に複数の隠喩構文が含まれていることがあり、重複してカウントしたためである。



うが ST 型の隠喩よりもメタファー標識を伴いやすい」という仮説を支持する結果となった。さらにケーススタディの分析結果と照らし合わせると、標識を伴う場合は分布が S 型に偏っていることがよく示される。表 5.4 に示すように、名詞の *storm* と *flame*、および動詞の *leak* と *sow* を含む隠喩表現における S 型の比率は 1.0% から 25.5% の範囲を占めた。これに対し、*metaphorical/ metaphorically* を伴う隠喩表現の S 型の比率はそれぞれ 71.9% と 77.6% であり、標識を伴わない場合と比べるとかなり高い比率となっている。比喩標識は、多くの研究の予想通り、解釈の曖昧性がある隠喩に付け加えられる傾向が強いことが明らかになった。

一方で、ST 型の隠喩に標識が付け加えられる場合が一定数あることが明らかになった。これはメタファー標識の例外的な使用と言える。そこで次節以降では、S 型の隠喩および ST 型の隠喩それぞれの具体例を、前後文脈も含めて詳細に分析することで、それぞれの場合においてメタファー標識がどのような機能を果たしているのかを考察していく。

### 5.3.1 S 型の隠喩と標識の修辞機能

S 型の隠喩に標識が用いられるのは、解釈の曖昧性を和らげ、メタファー的解釈を促すためだと予想される。この予想はすべての例に対して当てはまるのかを確かめるために、具体例を詳細に分析した。その結果、一部は確かに曖昧性の軽減に役立っていることが観察されたが、異なる方法でメタファー的解釈を促しているものも見られた。*metaphorical* および *metaphorically* が S 型の隠喩と共起する場合、その修辞機能は少なくとも以下の 3 つのパターンに分けられる。なおこれらは相互排他的な分類ではなく、修辞性の高い比喩表現では複数の機能が同時に果たされていると考えるべきものである。

#### (3) S 型の隠喩における標識の機能

- i. 曖昧性の軽減
- ii. 比喩的意味の創出
- iii. 字義的意味の活性化

##### i. 曖昧性の軽減

ひとつめのタイプとして、解釈の曖昧性を減らし、読み手あるいは聞き手にメタファー的解釈を促すという最も典型的な機能を挙げたい。これはある表現が字義的にも比喩的にも解釈可能な文脈において解釈の方向性を定めるものであり、字義的な解釈を否定する場合と、両義性を強調する場合の両方が見られる。字義的解釈の否定は、次の例に示される。

## (4) a. ((2a)の再掲)

Interwoven with these images are subtler references to the metaphorical borderlines which separate Latin American culture from that of Europe and North America.

(これらのイメージに織り込まれているのは、ラテンアメリカの文化とヨーロッパや北米の文化を分ける比喩的境界への巧妙な言及である)

b. They're [= Family] a safe investment, but in love you can **make a killing overnight**. Metaphorically speaking, I hasten to add.

(家族は安全な投資だが、恋は一夜にしてぼろ儲けすることもできる。比喩的な意味だということを、急いで付け加えるが)

(4a)は、前節でも示した例である。ここでの *metaphorical* は、*borderline* 「境界」が比喩的な意味で用いられていることを標示している。この文には、目標領域を喚起するような語(たとえば *psychological borderlines* や *the borderline of love* における、*psychological* や *love* など)がない。そのため、ラテンアメリカ文化と欧米文化を隔てる境界を、地理的な境界として字義的に解釈することもできる。標識が付け加えられているのは、メタファー的な意味での境界、すなわちそれぞれの文化を構成する内容面での差異というふうに解釈を限定するためだと考えられる。

次の(4b)では、*make a killing* というイディオム表現が解釈の曖昧性をもっている。この表現には文字通り「殺人を行う」という意味と「ひとやま儲ける」というイディオム的な意味がある。ここでは、主人公の男性はとある既婚女性と恋愛関係にあり、相手の女性とは異なり自分は自分の家庭のことを一切顧みなかったとし、その理由を投資のメタファーで言い表している。すなわち、家族愛は安全な投資かもしれないがリターンも少ないのに対し、恋愛はハイリターンを求めることができる。しかし *in love you can make a killing overnight* という表現だけでは、「恋愛においては一夜で人殺しもできてしまう」という解釈も捨てきれない。恋情が高まれば、人は何をしでかすか分からない。その誤解をとくために、念押し的に *metaphorically speaking, I hasten to add* という表現が付け加えられていると考えられる。(4)のふたつの例はどちらも、慣用的な比喩的意味を前景化するために標識が用いられていると言える。

ある表現が複数の解釈が可能であることを強調する場合、*literally* や *physically* などと共に、字義的な解釈も保持されることが示される。たとえば以下の(5)では、*stink* 「悪臭を放つ」という動詞が、実際に臭うという解釈と、悪い気配に満ちているという比喩的な解釈の両方が可能であることを示している。このタイプは、兼用法と呼ばれるレトリックを標

示するものであると言える。

- (5) The whole world **stank**, both literally and metaphorically, and I withdrew fastidiously from it.

(世界中が字義通りにも比喩的にも悪臭を放っており、私は細心の注意を払って身を引いた)

## ii. 比喩的意味の創出

第二に、メタファー標識には、字義的意味のほうが優先されるような文脈において比喩的解釈の可能性を提示する機能がある。語が表しうる意味範囲を拡大させ、当該文脈においてのみ許されるような、非慣習的な意味を産み出すという点で、第一のタイプとは異なる。たとえば次の例では、*a cliff* という表現の解釈が問題になっている。この例は、刑事 (Donne) が殺人未遂事件を調べるために、事件現場に居合わせた主人公の元に聞き取りに訪れたときの会話である。ここでは事件直後、被害者の車がどこかに消えてしまったことが問題となっている。刑事に車の場所の心当たりがないか聞かれた主人公は、“*At the top of a cliff*” 「断崖の上」と答える。刑事は本当の崖かと思い “*Beachy Head? Dover*” と具体的な地名を挙げて聞き返しているが、その勘違いを正すために、彼は標識を用いてそれが実際の崖ではない可能性を強調している。

- (6) ‘Where would you search for it [= his car]?’ he [=Donne] asked.

After a pause I said, ‘At the top of a cliff.’ He blinked.

‘Don’t you think so?’ I said.

‘Beachy Head? Dover?’ he suggested. ‘A long drive to the sea.’

‘Maybe a metaphorical cliff,’ I said.

(「あの車、あなたならどこを探しますか？」と彼は尋ねた。少し間を置き、「断崖の上」と私は答えた。彼はまばたきをした。「そう思わないかい」と私は言った。彼は「ビーチ・ヘッド？ ドーバー？」と聞き返した。「車で行くには海は遠すぎますね」「断崖と言っても、比喩的なほうかもしれない」と私は言った。)

主人公は、犯人が犯行に及ぶ際、被害者の自死に見せかけようとしたことを目撃している。自死を装うのであれば、被害者の車を断崖の近くに運ぶという工作をするのは理にかなっている。しかし最後の台詞で、ここでの *a cliff* は必ずしも実際の断崖を指すわけではなく、自殺をしそうな場所一般として言ってみたにすぎない可能性が言及されている。刑事が本気で断崖を捜査しそうな気配を感じ、その解釈を訂正し、留保しているのである。ちなみにこの例は、種で類を指すシネクドキになっている。英語の *metaphor* という語は比喩一般を指す

ために用いられるため、この例のように、*metaphorical/metaphorically* はメトニミーやシネクドキを明示する標識としても機能する。

比喩的意味の創出の派生的なパターンとして、通常の意味を否定し、何らかの含みを持たせた拡張的な意味合いで用いられていることを標示する機能がある。上の例と異なり、標示されるのは比喩的な意味ではない。次の例では、*define* 「定義する」という語が、いわゆる通常の意味とは異なり「言語を用いてメタ的に規定する」という意味で用いられている。

- (7) Instead of defining ‘hardness’ in poetry, Pound rapidly cites three poets where he finds the quality in question: Gautier, Hérédia, Albert Samain. [...] Pound says, in effect: “If your French isn’t good enough to go where the quality is both **defined** (metaphorically) and exemplified, [...] then remind yourself, or re-experience, what it is like to read George Herbert and Christina Rossetti and Lionel Johnson.”

(詩における「固さ」を定義する代わりに、パウンドはまずその性質が見いだせる3人の詩人を挙げる。その3人とは、ゴーティエ、エレディア、そしてアルベール・サマンである。[...] パウンドは実際にこう述べている。「もしあなたがフランス語が得意ではなくその性質を(比喩的に)定義したり例証したりできないなら、ジョージ・ハーバートやクリスティーナ・ロゼッティ、ライオネル・ジョンソンを読むとはどういうことかを思い出してください、あるいはそれを再体験してください」)

より詳しく文脈をみないと、ここで何を言っているのかが明白にならないだろう。この断片が現れるテキストにおいて著者はパウンドの詩論について論じており、パウンドが用いた“hardness”という概念について解説している。パウンド自身この概念を文字通りの意味で定義することをあきらめており、その性質を有する詩を読み、体験することによってしか理解できないとしている。その性質は、本来ならここで挙げられているフランス詩人の詩を読むことによってしか理解できないものだが、次善の策として英詩で疑似体験することが勧められ、複数の詩人が挙げられている。つまりここでの *define* とは、辞書の定義のようにはっきりと規定することではなく、詩を読むことで感じる、通常とは異なる理解の仕方を表していると思われる。括弧で付け足されている *metaphorically* は、その語が慣習的な意味とは異なり、その場限りの意味で用いられていることを表していると言えよう。

さらにメタファー標識は、ディスコースの中に架空のシナリオをもちこむとき、その虚構性を強調するために用いられることがある。事実の語りのなかに架空のできごとを挿入することで、具体的にありありとイメージできるような描写が目指される場合である。以下にそ

の具体例を示す。

- (8) Metaphorically, we can imagine theoretical astronomers breathing a sigh of relief and saying ‘Oh, so the Sun is only shrinking by a tenth of a second of arc per century, not a full arc second after all. Nothing to worry about.’

(たとえるなら、理論天文学者が安堵のため息をつき、「じゃあ、太陽は1世紀にたったの10分の1秒角で収縮しており、1秒角ではないのか。心配することは何もない」と言ったのを想像できる)

この例では、*metaphorically* に加えて *we can imagine* という表現が標識として機能しており、それらに後続する内容の虚構性を強調している。ここでは特定の語句が比喩的に用いられているのではなく、かなり具体的なできごとが描かれ、架空のシナリオが創り出されているのが見てとれるだろう。この例を詳しく見るために、少し長くなるが前後の文脈を引用したい。

- (9) (= (8)')

The two papers did not cause an immediate stir. The headlines had already been written when Eddy and Boornazian suggested that the Sun was shrinking at a rate of 0.1 per century. Contraction at just one tenth of this rate seemed small beer to astronomers, and was presented by the popular media (where they took any notice at all) as another example of a way-out scientific idea that had been undermined by more careful studies. Metaphorically, we can imagine theoretical astronomers breathing a sigh of relief and saying ‘Oh, so the Sun is only shrinking by a tenth of a second of arc per century, not a full arc second after all. Nothing to worry about.’ It seems to have taken several months for the message to sink in that here was plenty to worry about, with deep implications for the inhabitants of planet Earth.

(この2本の論文はすぐには反響を呼ばなかった。それらはエディとブルナジアン(の論文)が太陽は1世紀に0.1%ずつ収縮しているのではないかと指摘したときには、すでに書かれていたのだが。(エディとブルナジアンが示した)比率の10分の1の比率での収縮は天文学者にとって些細なことで、大衆メディアではとっぴな科学的知見の一例として取り上げられ、入念な研究によってすでに突き崩されたものとされた。たとえるなら、理論天文学者が安堵のため息をつき、「じゃあ、太陽は1世紀にたったの10分の1秒角で収縮しており、1秒角ではないのか。心配することは何もない」と言ったのを想像できる。地上の生物への影響は甚大で心配すべきことが多々あるというメッセージが十分認識されるには、数ヶ月かかったと思われる。)

上から分かるように、このテキストは太陽の収縮に関する画期的な論文が発表されたときに、後続論文に比べてほとんど反響がなかったというできごとを述べたものである。このテキストでは、標識によって導入される部分で、当時の科学者たちの反応としてありえそうな想像上のシナリオが描かれている。ここで描かれているのは、発表された収縮の値の小ささに、理論天文学者たちが「心配することは何もない」と安心する様子である。この部分は、メタファー的に類似するできごとを表すわけでも、メトニミー的に何か別のできごとを指し示しているわけでもない。また、実際にこのような台詞を言った科学者達がいたかどうかあまり重要でないだろう。むしろこのような架空の台詞を描出してみせることで、当時その2本の論文がいかにか反響がなかったかを現代の読者にありありと再現するねらいがあると考えられる。*metaphorically* という標識は、描かれるできごとの虚構性を強調することで比喩的な世界を創り出し、読み手にも同じ虚構世界を想像するように促す効果があると考えられる。

### iii. 字義的意味の活性化

第三のタイプは、比喩的意味がすでに慣習化している表現に標識が付け加えられ、あえて字義的解釈を否定することで、逆説的に字義的意味を蘇らせるものである。このタイプで顕著に見られるのは、イディオム的な転喩に付け加えられ、参照点関係の虚構性を強調するものである。

転喩とは、先行するできごとによって後続するできごとを表す（あるいはその逆の）レトリックで、典型的には原因で結果を表すものである。認知的際立ちの高いできごとが参照点としてはたらき、もう一方のできごとを指し示すという点で、行為やできごとレベルのメトニミーと言えらる。転喩的な表現において、参照点となるべきできごと・原因が実際に起こっているかどうかは曖昧なことが多い。特にイディオムとして定着した表現は、その表現が指示する意味のほうが前景化するため、文字通りの意味が表すできごとの生起は必須ではない。たとえば *beat one's breast* は、「胸をたたく」という行為によって「胸をたたいて悲しむ」という感情を表す転喩表現だが、実際に胸をたたいているかどうかは文脈による。実際の行為を伴う場合はメトニミーとして解釈されるが、「胸をたたく“かのように”悲しむ」という意味を表す場合、メトニミーがメタファー化されていると捉えられる。Goossens (1990) はこのタイプの比喩を、メタファーとメトニミーが相互作用する比喩、メタフトニミー (*metaphonymy*) のうちのひとつとして位置づけている<sup>\*7</sup>。

転喩に *metaphorical* あるいは *metaphorically* という標識が付け加えられると、参照点とな

<sup>\*7</sup> 主に関係するのは、彼の分類で「メトニミーからのメタファー (*metaphor from metonymy*)」と呼ばれるものに相当する。

るべきできごと・原因が実在しないことを表し、メタフトニミーとして解釈されるようになる。次の例を見てみよう。

- (10) a. Mr Kinnock wandering back among the press party, glass of whisky in hand, letting his (metaphorical) **hair** down a little, [...].

(キノック氏はウイスキーのグラスを手に、くつろいだ様子で出版祝賀会にふらっと戻ってきた)

- b. Much of Arnold Brown's strength as a stand-up comedian lies in his eyebrows, a pair of fat black, hyperactive caterpillars. On radio, metaphorically **shorn of them** [= his eyebrows ], he is also shorn of that strength.

(アーノルド・ブラウンのお笑い芸人としての強みはその多くが彼の眉毛、太っちょで真っ黒けで、とても活発な毛虫たちにある。ラジオでは眉毛が剃られてしまうので、彼の強みもまた奪われてしまう)

(10 a) では、*let one's hair down* 「くつろぐ」というイディオムの表現に *metaphorical* が付け加えられている。この表現はもともと、髪の毛を下ろすという行為によって、(まとめ髪にしなくてもいいため) くつろいだ状態を表す転喩である。一般的には女性のくつろいだ状態を表す表現だが、イディオムの意味が十分に慣習化しているため、文字通りの意味を喚起することなく男性に対しても用いることができる。しかし標識の付加によって比喩であることがあえて強調されると、元の意味、つまり髪の毛を下ろす動作のイメージが再活性化される。このイメージが主語のキノック氏に重ね合わされると、言葉遊び的な側面が強調され、一種のユーモアが生じると考えられる。当時イギリスの労働党党首を務めていたキノック氏は女性のような長い髪をもたないどころか、どちらかという涼しげな頭頂部の持ち主だったため、文字通りのイメージとの矛盾を感じられるからである。

(10 b) も同様である。*shorn of them* 「眉毛を剃られた」という表現に *metaphorically* が付け加えられると、その事態が実際には起きていないことが強調される。これは Arnold Brown というコメディアンがラジオ番組に出演するときに、彼のトレードマークである眉毛を生かすことができずに、力を発揮できないという状況を面白おかしく言ったものである。ラジオという媒体では、表情を使ってリスナーの心をつかむことができない。眉毛は彼の強みをメトニミー的に表しており、眉毛という視覚的手段に訴えることができないという状況を参照点にして、自身の強みを奪われるということを表している。このことは、直後の *he is also shorn of that strength* という比喩的な表現だけでも十分言い表せるが、あえて *shorn of them* という表現の字義性を否定することで、その表現が表す事態を読み手に想像させ、それに

よってユーモアを感じさせることができる。

以上、S型の隠喩における標識の修辭的效果を考察した。メタファー標識は、基本的には解釈の曖昧性を軽減し比喩的解釈を促すために用いられるが、表現の意味を拓げることで新たな解釈の可能性を示したり、逆に字義的意味の活性化を促すことでユーモアを感じさせたりするなど、これまであまり指摘されてこなかった効果ももっていることが明らかになった。

### 5.3.2 ST型の隠喩と標識の修辭機能

*metaphorical* あるいは *metaphorically* を伴うことが多いのはS型の隠喩であるが、ST型のものも2割前後を占めていた。ST型の隠喩は目標領域を喚起する要素を伴うため、メタファーであることに容易に気付くことができる。そのため、本来なら標識を伴う必要がないと考えられる。それにも関わらず、なぜ比喩であることが明示されるのか。

*metaphorical* あるいは *metaphorically* を伴うST型の隠喩に共通して見られる特徴は、その表現が比喩であることを読み手にいっそう強調して伝えることができるという点である。比喩であることをあえて強調することで、様々な修辭的效果がもたらされる。本研究での分析の結果、ST型の隠喩に付け加えられる標識には少なくとも次の3つの異なる機能があることが観察された。ただしS型の隠喩の場合と同じく、これらは相互排他的なものではなく複数の機能を同時に果たすこともある。

#### (11) ST型の隠喩における標識の機能

- iv. 比喩の強調 (Emphasising the metaphor)
- v. トピックの活性化 (Highlighting the topic)
- vi. 認識の相対化 (Distantiation)

#### iv. 比喩の強調

第一のタイプは、比喩的意味の強調によって、字義的意味との対比を鮮明にするという機能である。以下の例では、【V】 **Foundation of argument** 型の隠喩表現に標識が付け加えられているが、前後でそれに対応する字義的な表現が現れている。(12a) は *the smells of corruption* 「墮落の臭い」と *the strong smell of food* 「食べ物**の**強い臭い」が、(12b) は *walls in this council* 「この議会における壁」と *real ones in the city* 「街にある本物の壁」が対比されており、それぞれ前者の比喩的な表現にメタファー標識が付け加えられている。



(12) 【V】 Foundation of argument 型

- a. [I]t is not just the strong smells of food, but the metaphorical smells of corruption and moral and social decay which are suggested by the inclusion of such items [= sardine tins] in his work.

(作品にそのようなものを使うことによって仄めかされているのは、単なる食べ物の強い臭いではなく、比喩的な堕落の臭いに加え倫理的、社会的な腐敗である)

- b. 'We don't need metaphorical walls in this council, there already too many real ones in the city,' he said.

(「この議会に比喩的な壁は必要ありません。すでに本物が街にあふれているんだから」と、彼は言った)

(12a) は、作品にイワシ缶を用いてコラージュを行う画家についての解説であり、彼の作品からは、実際のイワシ缶の臭いとモラルや社会の悪化としての腐敗の臭いという、2つの臭いが漂ってくることが述べられている。この臭いのメタファーは、一般的な腐敗臭ではなく、まさに作品に用いられているそのイワシ缶の腐った臭いと対比されることでより鮮烈なイメージをもたらしている。*metaphorical* という標識は、そのような臭いの二面性を強調するのに役立っていると考えられる。これらの例に見られるように、実際の指示物と対比されるような文脈では、標識を伴うことでその意味の二面性を際立たせるはたらきが観察される。

## ii. トピックの活性化

*metaphorical* および *metaphorically* は、トピック依拠型メタファーと共起し、読み手の注意を喩える対象に向ける効果がある。

メタファーにおいて喩える対象は一般的に、*cold as ice* 「氷のように冷たい」や *roar like a lion* 「ライオンのようにうなる」における「氷」や「ライオン」のように、ある特徴を顕著にもつものや身近で親しみがあるものが選ばれやすい。概念メタファー論では、身体的・物理的経験に根ざした概念が起点領域として選ばれやすいと考えられている (Lakoff and Johnson 1980: 61ff.)。一方でメタファーが実際のテキストのなかで現れるとき、テキストのトピックが起点領域の選択に影響を与える場合がある。Semino (2008) はこのタイプのメタファー表現を *topic-triggered/ situationally triggered metaphor* 「トピック依拠型/状況依拠型メタファー」と呼び、メタファーの言語的現れのなかでも重要なパターンとして位置づけている。

たとえば、ガーディアン誌の見出しとして用いられた *Diplomatic desert* 「外交上の砂漠」という表現がこのタイプに当たる。「砂漠」というメタファーは2国間の同意が形成されな

かったことを表しているが、ここでは単にメタファー的な意味を担うだけでなく、字義的な意味も表している。なぜならこの表現が現れるテキストにおいて、2 国間の係争の焦点となっているもののひとつにサハラ砂漠があるからである。つまり、トピックがメタファーの起点領域を動機付けているのである。このようなトピック依拠型メタファーはニュースの見出しなどで典型的に用いられ、主にユーモアを演出したり興味を惹きつける効果があると言われているが、まだあまり研究が進んでいない領域である (Semino 2008: 27)。

本研究のデータでは、ST 型にもかかわらず標識を伴う場合に、トピック依拠型メタファーであることを強調するタイプが観察された。明示的な標識を伴うことで、喩える対象が当該のテキストにおいて特別な意味をもつことを示唆するのである。以下の例を見てみよう。(13) では、*breathe down someone's neck* 「首元にまとわりつく、しつこくつきまとう」、転じて「(誰かを) 監視する、脅す」という意味を表すイディオムの表現に、*metaphorically* が付け加えられている。この行為の主体となっているのは *his action yesterday* 「彼の昨日の行動」なので、彼の行いが擬人的に描かれていると判断できる。形としては、項と動詞の間に意味の衝突が生じる【IV】型の隠喩構文のバリエーションのひとつである。

#### (13) 【IV】 Chasing the title 型

Leith, with two very large problems staring her in the face — the mortgage and Naylor Massingham, despite his action yesterday still there metaphorically breathing down her neck — thought a denial preferable to dampening her mother's present happy frame of mind.

(リースの目の前に、2つの難題、住宅ローンの件とネイラー・マシングムの件が迫っていた。

しかも昨日彼にされたことが、自分を脅し続けるのを肌で感じていた。だがそれでも、リースは母親の今の幸せな気分をくじくよりは、(何の問題もないと) 否定する方がましだと考えた)

この文に先行して、ネイラー・マシングムという男が昨夜リースのもとを訪れ、実際に彼女を脅してきたことが描かれている。よって *breathe down her neck* という表現は、彼にずっと監視されているように感じる彼女の気持ちを表していると解釈される。しかしそれと同時にこの表現の字義的な意味、すなわち「彼女の首元に息を吹きかける」という意味もここで活性化されていると考えられる。なぜならネイラーは脅すときに、彼女を抱きしめキスをして、それに抵抗できない彼女をあざ笑ったからである。この表現は、そのときに感じたであろう彼の吐息も含めて、前夜のことが重荷となっていることを表したものだと考えられる。したがって「監視する」という意味を表す表現なら何でもいいわけではなく、他にもない *breathe down her neck* と言い表すことがここでは重要なのである。この表現は

先行するできごとを受けて選ばれており、トピック依拠型メタファーの好例だと言えよう。*metaphorically* という標識は、当該のメタファー表現の語源的な意味を活性化することで、読み手に前夜のことを再び思い出させる効果があると考えられる。

次の(14)も同様である。この例は、「彼女の心を捉えた男」を「船」にたとえた、コンピュータの形のメタファー表現に標識が付け加えられたものである。*a ship passing in the night* は字義的には「暗闇の中を行き交う船」を意味するが、転じて「行きずりの他人、一度会ったきり二度と会わない人」を表す。ここでは後者の比喩的意味で解釈される。先行文脈で、ゴシップ誌で彼の写真と名前をみただけで彼女が恋に落ちてしまったことが述べられているからである。

#### (14) 名詞補部型

How cruelly ironic it was that the first man to capture her heart and awaken her senses, the man she had waited and longed for, should be *metaphorically a ship passing in the night*.

(なんとむごい皮肉だろう、彼女の心を捉え感情を揺り起こした初めての男、彼女が待ち望んできた男が行きずりの他人だとは)

この例でも、媒体に「船」が選ばれる動機がある。なぜなら彼女が恋に落ちた相手は、後に競技用ヨットのデザイナーであることが判明するからである。つまり、彼を船にたとえることは決して偶然ではなく、「船」がこのテキストの中で重要なテーマとなっていることに依ると考えられる。

これらの例に示されているように、ST型の隠喩に対して標識が用いられると、喩える対象として選ばれたものがテキストの中で特別な意味をもつことが示唆される。このとき、書き手と読み手との間にメタ的なコミュニケーションが発生しうる。読み手は書き手の作為に気付き、単に慣用的な意味を理解するだけでなく、当該文脈においては文字通りの意味である、具体的なイメージが重要であることに気付くことが期待されるのである。

### iii. 認識の相対化

日常会話の中で用いられるメタファー表現の多くは、社会・文化的に慣用化した捉え方を反映しており、メタファーだと意識されないことも多い。一方で、誰かの特定の見方を強く反映した、主観性の高いメタファー表現もある。*metaphorical* および *metaphorically* は、このような特殊な見方に基づくメタファーであることを示し、そのような見方から距離をおくはたらきがある。自己の認識と他者の認識の間のずれを明らかにし、当該のメタファー的事態把握が、数ある捉え方のうちのひとつにすぎないことを強調するのである。このタイプ

は、話し手のメタ的認識を表すだけでなく、場合によっては新しい認識の枠組みを相手に教示する効果もある。

このタイプは、解説や引用を行っている部分でよく観察される。具体例を見てみよう。次のテキストではコンピューターが人間と同じような心を持っているかどうかについて論じられている。*only in the most metaphorical sense* 「最も比喩的な意味でのみ」および *we would want to say that ...* 「我々は～と述べたい」という標識が付け加えられている部分では、コンピューターにも心があるとする立場にたって意見が述べられており、形としては【IV】**Chasing the title** 型の隠喩構文になっている。主語が無生物のコンピューターなのに対し、述部の *have a theory of the external world* では意図を有する主体を主語にとることが期待されるので、ここに意味の緊張が生じている。結果として、擬人的な表現になっている。

(15) 【IV】 **Chasing the title** 型

This is a very sophisticated procedure, but only in the most metaphorical sense would we want to say that the computer has a theory of the external world. [...] Well, I think that there is an argument of sorts for saying that a computer of the kind described does not have a theory of the external world [...].

(これはきわめて洗練された手順だけど、コンピューターが外界の理論をもっていると言うとしても、最も比喩的な意味でしか言いたくない。いや、述べてきたようなコンピューターは外界の理論をもっていないのだと言える論拠の類いがあると思うんだ)

しかし、*Well, I think ...* から続く文から見て取れるように、著者はコンピューターが人間と同様に外界を理解しているという考え方に対し、全面的に賛成しているわけではない。それどころか、そうとは言えない根拠があるとすら述べている。留保付きで示した支持派の意見は、実は自分の考えとは異なることが明かされるのである。おそらく支持派にとっては、*the computer has a theory of the external world* という表現はメタファーとして意識されることすらないだろう。しかし明示的な標識を伴って、あえてその比喩性を強調することで、その見方に対して一定の留保を与えることができる。言い換えるなら、標識はそこで示されるメタファー的認識が、自分（ここでは著者）の認識とは異なることを示すのに一役買っている。

類例をもうひとつ見ておく。(16) では、*the research front* 「先端研究領域」を *a frozen moment in time* 「時間の中の凍りついた瞬間」としてたとえる名詞補部型のメタファー表現に標識が用いられている。ここでは、比喩であることを読み手に明示的に伝えることで、比喩による理解を促すと同時にその有用性や限界に意識をむけさせる目的があると考えられる。

## (16) 名詞補部型

Metaphorically speaking, the research front is a **frozen moment in time**; a snapshot of the state of a growing, changing, organic entity at a precise instant, seen from a single viewpoint. With hindsight, such viewpoints may be seen as irrelevant, off-centre, or temporary. Metaphor is not a substitute for logical argument based on the consistent application of valid concepts.

(たとえるなら、先端研究領域は時間の中の凍りついた瞬間である。成長し、変化する有機物の一瞬の状態を、ひとつの視点から切り取ったスナップショットだ。後から見れば、そのような視点は無関係だったり、的を外していたり、あるいは一時的なものだったりするかもしれない。メタファーは有効な概念の一貫した適用にもとづく、論理的議論の代替物にはなりえない。)

(16) の例は、「先端研究領域」という概念（論文の被引用数を利用して分野の最先端を分析する手法）を解説するテキストの最終部で現れ、定義や歴史を述べた後の補足的な説明となっている部分である。筆者はこの概念を「凍りついた瞬間」という具体的なイメージを想起しやすいものに喩え、その根拠を後続部分で述べている。曰く、変化する存在の一瞬を切り取ったものであり、しかもひとつの視点から見たものである。また後から見れば、その視点が間違っているかもしれないと。ここでは、このように読み手の類推を導くことで、新奇な専門概念に対する理解を補おうとしていると考えられる。興味深いのは、さらなる後続部分で、「メタファーは論理的議論の代替物にはなりえない」という但し書きが付け加えられていることである。メタファーであることをいま一度強調し、この説明があくまでも補助的な理解手段にすぎず、厳密な定義ではないことを念押ししている。したがってここでのメタファー標識は、たとえに対するメタ的な認識を促すはたらきがあり、たとえの限界に意識を向けさせることも可能にすると思われる (cf. Cameron and Deignan 2003: 155–157)。

このタイプには、単純に、あるメタファー的認識が他者のものであることを示す場合も含めることができる。たとえば次の例では、隠喩的な言い回しが引用され、そこに標識が付け加えられている。

(17) 【V】 Foundation of argument 型

The central focus of all this railway activity was, however, the railway station. Here it was that Foxwell and Farrer's '**flag of Hope**' metaphorically waved.

(しかしながら、すべての鉄道事業の興味の中心は駅にあった。フォックスウェルとファーラーの「希望の旗」が比喩的に振られたのはここであった)

ここでの「希望の旗を振る」という隠喩は著者オリジナルのものではない。フォックス

ウェルとファーラーの“Express trains, English and Foreign”という本に書かれている、‘Over every railway station the flag of Hope waves bright’「あらゆる鉄道駅で、希望の旗が輝かしく振られた」という箇所を引用していると思われる。出典の著者名を挙げていること、また引用符を用いていることから、距離を置いた立場から述べられていることが示されているが、*metaphorically* が付け加えられることによって、このメタファー的認識から距離をおいていることがさらに強調される。

最後に、少し長くなるが小説から次の例をとりあげたい。(18)に挙げるテキストは、目の前で起きている事態に困惑した人物が、相手に解説を求めている場面である。聞かれた相手は、その事態をメタファー的に捉えてはどうかと提案しており、そのメタファー的な解説の部分に標識が用いられている。この例は、メタ的に認識の仕方を変えられることを仄めかしているという点で、大変興味深い例となっている。

(18) 名詞補部型

‘Mr Gooseneck,’ he whispered, ‘what about the Muslims?’

‘Your kind instincts do you credit, my dear Robert, but have no fear, I have no desire to torture our Islamic friends.’

Through the swing doors came the same chef, this time carrying dishes of mushrooms, tomatoes and fried eggs.

‘What’s happened, Mr Gooseneck?’ asked Amiss [...].

‘I think you could call it the metaphorical **baked meats** for our secretary. [...].’

(「グースネックさん」と、彼は声をひそめた。「ムスリムにはどうされるのですか」

「あなたの生来の優しさはすばらしいものですがね、ロバート君、しかし心配ありませんよ、私はイスラームの友をいじめたいという欲を持ち合わせてませんからね」

ドアが揺れて同じシェフが入ってきたが、今回はキノコとトマトと目玉焼きの皿を運んでいた。

「何ごとですか、グースネックさん」と、アミスは聞いた。

「あれを、比喩的な肉のオープン焼き・秘書さま用、と呼んでもらってもかまいませんよ」)

(18)の最後の文では、call NP NP という形の名詞補部型の隠喩が用いられており、キノコとトマトと目玉焼きのプレートが、焼いた肉に喩えられている。両者の類似性は自明ではなく、もちろん味や見た目の類似性を述べているわけではない。そうではなく、肉を食べられないイスラム教徒の客に対して代替品として野菜中心の一品が供されたこと、つまり宗教にかかわらず、等しく親切なもてなしがなされたことを表している。そのようなもてなしを受けることが珍しかったからか、アミスと呼ばれる人物は事態に困惑する様子を見せ、それに対してもうひとりの人物がウィットを効かせて、もし理解の助けになるならば野菜のプレー

トを肉と呼んではどうかと提案しているのである。つまり彼は、非ムスリムに対する肉と、ムスリムに対する野菜料理が同じであるという見方を示していると言える。これは認識を相対化しているというよりは、標識を伴うことによって、このようなメタファー的認識がひとつの選択肢としてありえることを聞き手に教示していると言ったほうが正確かもしれない。いずれにせよ、標識を付け加えることで、メタファー的認識に対するメタ的認識を示すことができる一例である。

### 5.3.3 まとめと考察

本節では、*metaphorical* あるいは *metaphorically* を伴う隠喩を分析し、ST 型の隠喩よりも S 型の隠喩のほうがこれらの標識と共に起る傾向が強いことを示した。これは、解釈の曖昧性があるメタファー表現のほうがメタファー標識を伴いやすいという仮説を裏付ける結果となった。一方で、メタファー標識の機能は、単に曖昧性を軽減し、解釈を限定するだけではない。個々の用例を分析したところ、S 型の隠喩に付け加えられる場合と ST 型の隠喩に付け加えられる場合のそれぞれに、その他の修辭的機能が観察された。本研究のデータから観察される範囲だけでも、メタファー標識の修辭的機能として以下のものが挙げられる。

#### S 型の隠喩

- i. 曖昧性の軽減
- ii. 比喩的意味の創出
- iii. 字義的意味の活性化

#### ST 型の隠喩

- iv. 比喩の強調
- v. トピックの活性化
- vi. 認識の相対化

認知言語学的なアプローチでは、メタファーは意図的に用いられるのではなく、無意識のうち概念体系を構造化していることが強調される。一方メタファー標識を用いることは、聞き手に何らかのシグナルを送り、メタファーであることに意識を向けさせるものである。標識を付け加えることによって、ふだんは暗黙のうちに行われていることが浮き彫りになり、話し手あるいは書き手が当該文脈においてメタファー表現を用いる目的、あるいはコミュニケーション上の意図が際立つようになる。では標識によって、メタファー表現が果たす役割のうちどのような側面に注意が向けられるようになるのだろうか。まとめにかえて、今回観察した用例において、発話事態のどのような側面に焦点が当てられていたかを、第 3

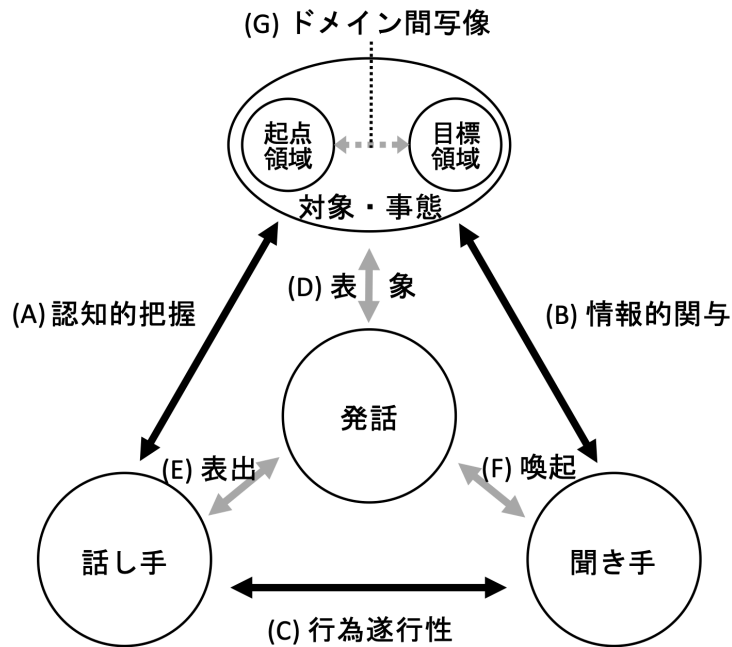


図 5.1 発話事態モデルの7つの関係（第3章の図3.8の再掲）

章で示した発話事態モデルに基づいて検討したい（図 5.1）。なおここでは、S 型と ST 型の区別をとりはらって考えることとする。

第一に、*metaphorical* および *metaphorically* は、記号の表象機能（図 5.1 の (D) の関係）をプロファイルすることによって、言語知識に対するメタ的意識を活性化するはたらきがある。これらの標識はそもそも文字通りには、ある表現が比喩的に解釈されることを明示的に述べるものである。標識は、ある表現が複数の意味を担い、これを聞き手に知らせ、結果的に、文字通りの意味と比喩の意味の両方を同時に活性化することができる。上で挙げたメタファー標識の6つの修辭的機能は、基本的にはすべて、この記号の表象機能をプロファイルすることから派生する修辭的效果と言えよう。

ヤコブソンが言語の6機能説のなかで論じているように、一般的に情報をやりとりする際は言語の指示的機能が優先的になり、指示される対象やものごとに意識が向けられる (Jakobson 1973: 188)。これはメタファー表現が用いられている場合も同様である。特に慣用化した表現が用いられている場合、拡張的意味が指示する対象あるいは事態にのみ意識が向けられ、その語が本来もっている字義的な意味は背景化される。しかし標識によって比喩であることが明示されると、その表現の形（コード）のほうに注意が向けられる。その結果、本来の字義的な意味が活性化され、拡張的な意味との間のずれが浮かび上がるのである。



この最も基本的な機能が実現されているのは、たとえば(4)~(7)のように字義的解釈を否定するパターン、(5)のように字義的解釈と比喩的解釈の二重性を示すパターン、(12)のように字義的意味との対比がなされるパターンなどである。これらの例でもし標識が用いられていなかったとしたら、指示対象を同定し文脈にあった解釈ができるかどうかを最も重要となり、その文脈における指示対象のみに注意が向けられるだろう。しかし標識を伴うことで、記号の表象機能にも焦点が当てられ、解釈の曖昧性や語の多義性の存在に読み手が気付きやすくなる。それによって逆説的に、字義的意味にも意識が向けられることになる。

しかしこれらの標識が果たす修辭的機能は、これだけにとどまらない。第二に、表象機能を明示する標識であっても、それによって間接的に認知的把握の逸脱を指標することができる(図5.1の(A)の関係)。認知言語学ではメタファーに限らず、なにごとかが言語化される場合、語彙や構文の選択には、かならず話し手あるいは書き手の主観的事態把握が反映されていると考える。しかし話し手と聞き手が抱く世界に対する信念のあいだに齟齬が生じなければ、その主観性が意識されることはあまりない。メタファーの場合も同様である。基本的には認知主体の存在は背景化され、比喩的に描かれた事態のみに焦点が当てられる。受動的な読み手であれば、そのメタファー的事態把握をあるがままに受け入れ、書き手によってつくられた世界観に没入することになる。あるいは虚構だと分かったうえであえて約束事にしたがい、そういうものとして理解することもあるだろう。

本研究では、*metaphorical/ metaphorically* には、メタファー的事態把握に潜む主観性を前景化するはたらきがあることを示した。標識によって比喩であることを明示すると、メタファー的事態把握が誰かの主観にもとづく見方であること、何かの目的のためにつくられた見方であることが読み手に伝えられ、結果として、背景化されていた認知主体にも意識が向けられるようになる。このことは、(8)のように虚構的シナリオを展開させるパターン、(15)~(18)のように認識の相対化をはかるパターンなどで主に見られる。標識があることによって、メタファー的に描出された世界が、絶対的なものではなく一時的なものにすぎない可能性が示唆されるのである。書き手自身がそのメタファー的事態把握にコミットしていない場合もあり、その場合はその事態把握の仕方が、可能な捉え方のひとつとして提示される。

第三に、標識が不必要であるにも関わらず標識が用いられるとき、情動的関与の逸脱(図5.1の(B)の関係)に焦点が当てられ、聞き手はそこに話し手のユーモアを感じることができる。このタイプはイディオム的な転喩に標識が付け加えられている、(10)のようなパターンで典型的に観察される。このタイプの標識は、メタファー表現が言葉遊び的に用いられていることを読み手が理解するのを助けるはたらきがあると考えられる。標識がなくても問題なく解釈されるにもかかわらず、あえて標識が付け加えられるとき、読み手はそこに何

らかの作為を感じることになるからである。たとえば (10 a) の “Mr Kinnock [...] letting his (metaphorical) hair down a little” 「キノック氏はくつろいだ様子で…」の例では、男性の様子を描写するために *let one's hair* というイディオムの表現が用いられていた。この表現は「くつろぐ」というイディオム的な意味で用いられており、本来標識は必要ない。しかし故意に標識が付け加えられることで、逆説的に文字通りの意味が前景化され、その滑稽さが仄めかされるのである。このとき読み手は情報的関与の逸脱を認識し、書き手があえてその表現を選んでいることの作為に気付くことで、ユーモアの共犯者になることができると考えられる。

最後に、標識によって喚起機能（図 5.1 の (F) の関係）に焦点が当てられる場合もある。(13) における *breathing down her neck* や (14) における *a ship passing in the night* のようにトピック依拠型メタファーに標識が用いられるパターンが、このタイプの典型である。標識があることで、当該文脈とは直接関係ない、文字通りのできごとや対象のイメージが喚起される。それによって、そこで選ばれている媒体がテキストにおいて特別な意味をもつことが示唆されると考えられる。このタイプは、記号の喚起的関係だけでなく、書き手の作為への気付きも重要となる。媒体の選択によって作者が仄めかしている内容に気付くことが求められるからである。ここには、書き手と読み手の間にメッセージの伝達以上の、メタ的なコミュニケーションが発生している。このコミュニケーションが成功したとき、読み手は解釈の喜びを感じることができると考えられる。

## 5.4 結論

この章では、隠喩がメタファー標識を伴って指標される現象に注目し、どのようなときに標識を伴うのか、標識にはどのような修辞機能があるのかを明らかにすることを目指した。本研究では、構文的に解釈の曖昧性がある表現のほうが、そうでないものよりも標識を伴いやすいのではないかという仮説を立て、それを検証した。

具体的には、*metaphorical/ metaphorically* という標識を伴う隠喩を取り上げ、BNC コーパスを用いて用例を収集し、構文タイプの分布を調査した。その結果、目標領域を喚起する要素を伴う ST 型よりもそれを伴わない S 型のほうが、標識と共起しやすいことが明らかになった。これは、上の仮説を裏付ける結果となった。

しかし、メタファー標識が担う修辞的機能は、単に解釈の曖昧性を軽減するだけではない。本研究では、前後文脈を参照した詳細な分析・考察を行い、S 型と ST 型の両方で、メタファー標識が様々な修辞的機能を担っていることを示した。もちろん解釈の曖昧性を軽減することがひとつの重要な機能であることは確かであるが、字義的意味を活性化すること、

メタファー的認識の相対化を行うこと、話し手のコミュニケーション上の意図に注意を向けさせることなど、様々な機能を担っていることを論じた。このような意図的なメタファーの使用は、一部は Steen らが “deliberate metaphor” の機能として挙げた、パースペクティブの転換という機能を果たす (cf. Steen 2011, 2017 他)。たとえば本研究で「認識の相対化」と呼ぶものは、パースペクティブの転換という機能にかなり近いと考えられる。今後は、メタファー標識として機能する他の表現 (*literally* や *sort of*, *as it were* など) も類似の機能を持つのか、あるいは談話標識／メタ語用論的標識一般と比較してメタファー標識に特有の特徴はあるのかなども検討していく必要があるだろう。

解釈の方向づけが示されるという意味でのメタファー表現の明示性は、直喩とは異なるタイプの明示性である。直喩と隠喩の違いは、ドメイン間写像に関わる要素がどれだけプロフィールされるかどうかが大きく関わり、直喩は趣意と媒体のずれが明示的に言語化されることがその大きな特徴となる。標識によるメタファーの明示には、言語表現自体への焦点化や主観的な事態把握の前景化が関わっており、話し手と聞き手のあいだに、意図的にメタファーを使用をしているというメタ的意識の共有をもたらす。これは直喩とは異なる、標識を伴う隠喩に独自の修辭的效果だと考えられる。



## 第 6 章

# 修辭的比較としての直喩

### 6.1 はじめに

直喩は、隱喩と同じく、あるものをそれと類似した別のものでたとえる比喩であり、典型的には A is like B や A is as ... as B のように明示的な比較構文の形をとる。Israel et al. (2004) は、直喩が隱喩とは異なり比較の形をとることを重視し、直喩には独自の修辭的機能があると論じた。Israel らは典型的な構文だけでなく、比較を表すことができるものであれば原則的にはすべて直喩として用いられうると主張する。

- (1) We claim that similes really are just explicit, figurative comparisons, and therefore any construction which can express a literal comparison should in principle be available to form a simile.

(Israel et al. 2004: 125)

本研究では Israel らの見方に従い、直喩を比較構文の修辭的用法として捉え、隱喩にメタファー標識が付け加えられたものと区別する。

従来、直喩は隱喩との対比で特徴づけられることが多かった。しかし、隱喩に *metaphorically* などの標識が付け加えられたものとは異なり、直喩の形はメタファー的解釈を聞き手に促したりしない。むしろ形の上では字義的な比較構文との見分けがつかないことがほとんどである。したがって、直喩の修辭性や機能がいかんして生じるかを考えるには、字義的比較から意味的にどのように逸脱しているのかという点を考える必要がある。

Dancygier and Sweetser (2014) は、Israel らによる直喩の規定にもとづき、修辭的比較としての直喩の意味は字義的比較の構文の意味によって動機づけられていると予測し、(2) のように述べる。

- (2) [W]e might predict that literal constructional senses would be crucial in motivating figurative ones. (Dancygier and Sweetser 2014: 139)

つまり直喩の修辞性を考えるには、字義的比較の構文的意味を考慮し、どのように動機づけられているのか、そしてどのような側面において逸脱しているのかを明らかにする必要がある。ところが、従来の直喩の研究においては、対比すべき字義的比較の意味は自明のこととされ、似ているもの同士を比較しているときは字義的、似ていないもの同士を比較しているときは修辞的というふうに単純化して捉えられることが多かった。

本研究は、直喩独自の修辞性に光を当てるために、比較構文の字義的用法と修辞的用法の違いを明らかにすることを目的とする。そのために、次の2つの観点から分析を行う。(i) 第一に、どのような比較構文が直喩として用いられやすいのかを明らかにし、(1)のIsraelらの主張がどこまで適切なのかを考察する。典型的な *as...as* 構文および *like* 構文だけでなく、他の比較構文も分析の対象に含め、どのような構文的意味をもつものが直喩として用いられやすいかを分析する。(ii) 第二に、(2)のDancygier and Sweetser (2014)の予測を確かめる。字義的比較にはどのような構文的意味があるのかを分析し、その上で修辞的比較がどのような意味で「修辞的」とみなせるのかを考察する。これらの点を明らかにすることで、直喩の修辞性は似ていないもの同士の比較によって意外な類似性をもたらすことにある、という従来の見方がどこまで有効かを検討する。

この章の構成は以下の通りである。まず6.2節で先行研究を概観する。比較構文の形式的、意味的特徴を整理した後、字義的比較と直喩の区別について先行研究で指摘されてきたことを概観する。6.3節では、先行研究に基づき直喩の判断基準を設定した上で、(1)に示したIsraelらの予測を検討するため、どのような比較構文が直喩として用いられやすいかを分析する。6.4節では、直喩の判断基準として、ドメイン間比較であることがどれだけ重要な要因かを検討する。間ドメイン性は直喩の定義的特徴とされてきたが、例外的な用例をもとに、間ドメイン性と修辞性の関係を探る。6.5節では、字義的用法の意味を詳細に分析することで、直喩の修辞的機能が字義的比較の構文的意味にどのように動機付けられているかを論じる。6.6節では、直喩として用いられうる比較構文の重要な特徴として、トピックの主観的叙述として機能するか否かが関わっていることを指摘する。最後に6.7節で、この章のまとめを述べる。

## 6.2 先行研究

### 6.2.1 比較構文とは

そもそも比較はどのような構文で表されるのか、また、比較構文はどのような意味関係を表すことができるのか。この節では英語の比較に関する先行研究を簡単に振り返る。

比較構文とは、ふたつ以上の対象や出来事、性質などを明示的に比較する表現である。比較関係を表す表現は多岐にわたり、統語的特徴によって定義づけることは難しい。典型的には *as...as* 構文や *-er than* 構文のように比較節補部をとるものが相当するが、*superior*, *prefer* など優劣や好悪を述べる語や *similar*, *different*, *resemble* など類似関係を表す語によって表されることもある。*She is tall, but he is not* のように前後の節を対比させることによって、間接的に比較を表すこともできる。さらに、音的に特別な強調をおくことで対比を示唆することもできる。このように比較構文と呼ばれるものはかなり広い範囲にわたって存在している。

意味の観点から比較構文の類型化がなされる場合、焦点が置かれるのが同一性なのか差異性なのか (*equality*, *sameness*, *identity* vs. *inequality*, *difference*)、差異性を表すとしたら *more/less* の関係なのか否かという概念によって整理されてきた (Jespersen 1933, Quirk et al. 1985, Cruse 1986, Mitchell 1990 など)。たとえば Huddleston and Pullum (2002: 1099) は、同一性と差異性という軸と尺度 (*scale*) の有無という軸をかけあわせ、4タイプからなる分類を提唱している。その分類に従うと、*as...as* や *as...as if* などと、*identical* や *similar*, *like* などはどちらも同一性を表すという点では共通するが、前者は段階的な性質に基づく比較であるのに対し、後者には尺度が関わらないという点で区別される。また *as...as* と *-er than* はどちらも段階的な性質に基づくという点で共通するが、後者は差異性を表すという点で異なる。

しかし、同一性と差異性は本来は連続的なカテゴリーである。*as...as* 構文は、ある性質を比較対象と同じかそれ以上もっていることを表すため、厳密には同一性を表さない (Huddleston and Pullum 2002, Mitchell 1990 など)。Fortescue (2010) は類型論的な立場から *Similitude* 「類似性」という概念カテゴリーがあると仮定し、類似性は同一性を一方の極に、差異性をもう一方の極にもつスペクトラムをなすと考える。以下の図 6.1 は類似性スペクトラムの軸と、その軸上に位置づけられる語彙を概略的に示している ([1]~[16] の番号は、次の図 6.2 の意味のリストに対応している)。図 6.2 は、Fortescue (2010) が仮定する、通言語的に区別されうる比較関係の意味のリストである。ここで示されている意味関係は、彼が

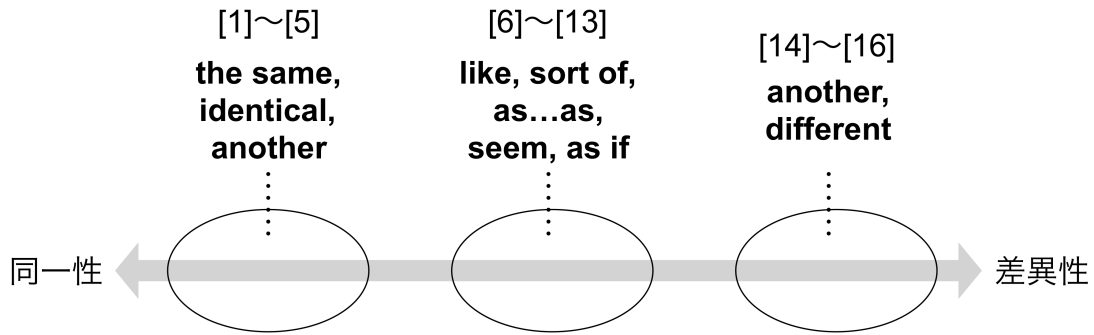


図 6.1 類似性スペクトラム (cf. Fortescue (2010))

- |      |  |
|------|--|
| [1]  | the identical token entity A as before/as assumed                        |
| [2]  | things of the same type/manner/status Y (generic)                        |
| [3]  | one more additional token of the same type Y                             |
| [4]  | one more token of the same type Y but differing in some relevant respect |
| [5]  | once more  |
| [6]  | like X (individual) or Y (generic)                                       |
| [7]  | simile, like Y (generic)   |
| [8]  | to the same degree as A  |
| [9]  | to look like A   |
| [10] | to act like A  |
| [11] | to sound like A  |
| [12] | to seem  |
| [13] | as if  |
| [14] | the other individual of a set of two                                     |
| [15] | a different token of a different type                                    |
| [16] | a different individual token from an open-ended set                      |

図 6.2 言語的に区別されうる関係のリスト (Fortescue (2010: 123-124) を一部修正)

分析対象とした 29 言語のうち少なくともひとつ以上の言語で異なる形式で表されるものである。同じ言語内では、ひとつの形式が複数の意味を担うことがあるのと同時に、ひとつの意味が複数の形式で実現されることもある。これらの比較関係を表しうる語あるいは構文の多くは、比較関係にとどまらず、共時的あるいは通時的に他の意味関係を表すために兼用される。なかでも類似性スペクトラムの中間に位置する表現、英語で言うと *look/act/sound like* や *seem* などは、認識的エビデンシャルティ (何らかの証拠にもとづく話し手の推論など) を表すことができるのが大きな特徴として挙げられている (cf. Croft and Cruse 2004: 211)。



## 6.2.2 字義的比較と直喩

直喩は比較構文の修辭的用法としてみなすことができる。直喩と字義的比較は形の上では区別が難しい場合が多いが、典型的直喩である *A is as...as B* および *A is like B* の場合、以下の特徴によって字義的比較から区別されうる。

- (3) a. (*as...as* に関して) 最初の *as* を省略することができる

\**She is young as you. / She is light as a feather.*

(彼女はあなたと同じくらい若い／彼女は羽のように軽い)

- b. *as, than, like* 等に後続する助動詞や *be* 動詞は義務的に省略される (Morgan 1975: 300-301, 山梨 1986: 193-194)

*Mary is bigger than a house. / Mary is bigger than a house is.*

(メアリーは家を越すくらい巨大だ／家の大きさよりもメアリーの大きさのほうが上だ)

*Wilt is as tall as the Empire State Building. / Wilt is as tall as the Empire State Building is.*

(ウィルトはエンパイア・ステート・ビルのようにでかい／ウィルトの背の高さはエンパイア・ステート・ビルの高さと同じくらいだ)

直喩の場合、(3a) に示すように最初の *as* を省略することができる。ただしこれが可能になるのは、主動詞にコピュラ動詞が用いられ第二の *as* に名詞句が後続するときに限られ、主に形式ばらない文体や使い古された直喩において頻繁に観察される (Quirk et al. 1985: 1138, Huddleston and Pullum 2002: 1139)。

次に (3b) に示すように、比較構文が比喩的な誇張の意味合いで用いられる場合、*than* や *as* には名詞句のみが後続する。助動詞や *be* 動詞を付け加えると誇張の含意が打ち消され、字義的な比較として解釈されると言われる。よって *Mary is bigger than a house is* が自然に解釈されたとしたら、メアリーという名を持つ巨人族の女について語っている、あるいは人間のメアリーを小人や小動物たちの住む家と比較しているなどの少しトリッキーな文脈を思い浮かべねばならないだろう。Morgan (1975) や山梨 (1986) はこの現象を動詞の義務的省略と捉えているが、(3a) の第二の *as* には必ず名詞句が後続するという特徴と合わせて考えると、誇張の効果を伴う直喩として解釈される場合、*as* や *than* は動詞が省略された節を導入するものであるとは言えないのではないか。むしろ、*as* や *than* はそもそも名詞句補部をとる前置詞としてはたらくと見なすべきだと考える<sup>\*1</sup>。

<sup>\*1</sup> ただし直喩のなかには、*as* の後に節をとるものもある (例: *The sky was as clear as if it had been etched into a*

次に、先行研究で直喩と字義的比較が意味的にどのように区別されてきたかを概観する。両者を区別する特徴として古くから指摘されてきたのは、直喩の場合、本質的に異なると捉えられるものを比較するという点だろう。比較対象間の非類似性に言及した研究は数多く、Richards (1936)、佐藤 (1978)、山梨 (1988)、Miller (1979)、Fishelov (1993)、Israel et al. (2004)、Steen et al. (2010)、Romano (2017) など枚挙に暇がない。認知言語学的に言い換えれば、字義的比較とは異なり、直喩には異なるドメイン間の写像が関わると特徴づけられる。Israel et al. (2004) はこの立場から、次のように述べている。

- (4) Literal comparison involves entities which evoke similar domain matrices, but which may differ in their specifications within one or more domains. Figurative comparison, on the other hand, [...] involves the alignment of concepts with very different domain matrices. What makes a simile figurative is that it prompts one to search for similarities where one would not expect to find them, and to make connections across concepts which seem otherwise unconnected.

(Israel et al. 2004: 126, 下線は筆者による)

たとえば *He is as cold as stone* という表現は、有生物であるヒトと無生物の石という異なるドメイン間での比較が行われているため直喩だと判断される。エリオットの詩<sup>\*2</sup>で現れる “the evening is spread out against the sky like a patient etherized upon a table” 「手術台の上の麻酔をかけられた患者のように夕暮れが空いっぱい広がっている」という直喩のように、およそ類似性が感じられないもの同士が結びつけられることもあり、その場合は意外性や驚きに加え、「夕暮れ」によって呼び起こされる心象に気付くなどの発見的な側面が関わることもある。

Familiarity 「親しみ」や Saliency 「顕著さ」という点で非対称性が見られるという点も、直喩の特徴としてしばしば指摘される。直喩の媒体に選ばれるものは、当該の言語コミュニティにおいて趣意よりも身近で具体的な概念であり、ある行為や性質を有するものとして典型的に想起されるという傾向がある (山梨 1988、Lakoff and Turner 1989、Ortony 1979、Israel et al. 2004、Dancygier and Sweetser 2014、Cuenca 2015 等)。*Her future is as bright as the sun* を例にとると、「彼女の未来」という非物理的なものに対して、その輝かしさを言い

---

*great glass bowl*. 「空はガラスでできた巨大なボウルに描かれているかのように透き通っていた」、*The artist paints as a bird sings* 「その画家は鳥が歌うように絵を描く」。これらの例は、主節で表される事態と *as* によって導入される従属節の内容が比較されており、対象同士が直接比較されているわけではないという点で、名詞句同士の比較とは異なる。*as* や *than* が前置詞としてはたらくのは、比較対象が名詞句で表される場合に限られる。

\*2 T.S. Eliot, “The Love Song of J. Alfred Prufrock.”

表すために光り輝くものの典型例でありかつ身近な例であると考えられる「太陽」が引き合いに出されている<sup>\*3</sup>。ただし媒体に選ばれる対象が必ずしも物理的な具体物であるとは限らない。文化的にステレオタイプ的なイメージが共有されているかどうか重要で、想像上の存在でも身近に感じられるものは媒体として選ばれうる（例：*like a zombie/ dragon*、Hanks 2005）。

Israel et al. (2004: 127) は、直喩の重要な意味の特徴は誇張を表すことにあると考える。彼らによると、上で述べた媒体に典型例が選ばれるという特徴が、直喩の構文的意味として定着している。このことは、直喩がときにアイロニーの効果をもたらすという事実によって裏付けられる。たとえば *as clear as mud* では透明さとは真逆の性質をもつものが比較されているが、このような場合でも比較対象はある意味典型例として解釈される。すなわち、透明さとはもっともかけ離れた存在の典型として解釈されるため、アイロニーと感じられるのである。また *as...as hell* のように内容的意味をほとんど失い、強意表現として慣習化されたものもある。Israel らはこの現象を SSC (Superlative Source Constraint) と呼び、この形式に当てはまれば基本的に何を比較対象に選んでも誇張として解釈されると述べている。

さらに、評価的コノテーションを伴うことも、直喩の特徴として挙げられる。たとえば、*That river is like a sewer* 「その川は下水のようだ」では、下水がもつ負のイメージによって、川の描写が行われている。このように知覚的・構造的類似性だけでなく、善悪や好悪などの評価の同一性もメタファー写像を動機付けると言われる (Richards 1936: 111, 鍋島 2011: 第 15 章)。このタイプでは、肯定的あるいは否定的評価と強く結びついたものが媒体に選ばれる。

しかし、字義的比較と直喩の境界を定めることは容易ではない。たとえばある二者が本質的に異なるとはどういうことかを明確に定義することはできない。どのようなものも何らかの点で異なっており、ひとほどのようなものの中にも類似性を見出すことができるからである。実際上で挙げた意味的区別は傾向にすぎず、例外も多く観察される。*You are like a son to me!* 「あなたは私にとって息子同然よ！」という表現は明らかに同じドメインに属する対象を比較しているが、人によってはこれも直喩の一例と見なされるだろう。逆に、*Machines can become as intelligent as a human being* 「機械は人間と同じくらい知性をもちうる」は、人工知能開発の将来を思い浮かべればほとんど字義的に感じられるのではないだろうか。

さらに、媒体が必ずしも身近で典型的な例とも限らない。特に、Dancygier and Sweetser

<sup>\*3</sup> *bright* がふたつの意味で用いられていることも、直喩の特徴である。ここでは、*bright* が未来が希望に溢れているさまと、太陽が物理的に光り輝くさまの両方を意味している。*as...as* 構文の直喩は、特に慣用的な表現の場合、形容詞が比喩的な意味と物理的な意味の二重の意味を表すことが多い（例：*Her words were as sharp as a razor, His heart is as hard as stone.*）。

(2014)によって広いスコープの直喩 (broad-scope simile) と呼ばれるタイプのものは、むしろ意外な特徴を共通点として見出すことに重きがおかれる (同上: 145)。たとえばそこで引用されている *Life is like a box of chocolates. You never know what you're gonna get* 「人生はチョコレートボックスのようなものだ。何が出てくるか分からない」という表現において類似性の根拠となっている「何が出てくるか分からない」という性質は、チョコレートボックスの典型的な性質として想起されるものというよりは、比較することで初めて焦点が当てられるものといえるだろう。

また、直喩と字義的比較の意味の区別をサポートする統語テストもいくつか考案されているが、これに関しても反例が報告されている (Gargani 2016: 60–63)<sup>4</sup>。もちろん反例があることは、大半の用例がある傾向に従うことを否定するものではなく、実際これらの違いは直喩を特徴づける重要な側面をなしている。しかし直喩の修辞性をより正確に捉えるためには、その対応物、いわゆる字義的な比較の「字義性」を子細に検討する必要があると考えられる。

### 6.2.3 直喩を複数の要因から特徴づける：Fishelov (1993) の NPS モデル

この節では、直喩を複数の要因から特徴づけることを試みた Fishelov (1993) の研究を取り上げる。本研究も、直喩をひとつの定義的特徴から規定するのではなく、いくつかの特徴が関わって直喩らしい直喩からそうでない直喩まで濃淡をなすカテゴリーだと捉えたい。

Fishelov (1993) は、直喩には詩的なもの (poetic simile) とそうでないもの (non-poetic simile) があると考え、両者の区別には複数の要因が寄与していると考えた。詩的でない直喩とは、慣習化されるなどしてほとんど修辞的效果を失った表現のことで、字義的比較とは別のものである。詩的な直喩は唯一絶対の基準によって決まるのではなく、一般的な直喩がもつ特徴のうちいくつかは逸脱するときに詩的な効果が生じると捉えられている。

Fishelov は表 6.1 のような NPS モデル (non-poetic simile の頭文字をとっている) を想定

<sup>4</sup> Ortony (1993: 351-352) や Bredin (1998: 73) は、A is like B 構文を区別する方法として、趣意と媒体の順序を入れ替えたときに意味が変わるかどうかという基準を設けている。*Encyclopedias are like dictionaries* と *Encyclopedias are like gold mines* を比べたとき、前者は趣意と媒体の順序を入れ替えても大して意味は変わらないため、対称的な比較を表していると言える。一方後者は、*Gold mines are like encyclopedia* とすると、両者の類似関係において注目される側面が変化するため直喩であると判断される。しかし Gargani が指摘するように、字義的な比較を表していても順序を入れ替えると意味が変わることがある。たとえばしっかり者の姉とおっちょこちょいの弟が実は似ていることを言い表そうとするとき、*She is like her brother* と *He is like his sister* のどちらを用いるかによって、どちらの性格に注目しているかが異なってくるだろう。また Croft and Cruse (2004: 211) は、*like* をとったときにメタファーとして解釈されるものが直喩であると述べているが、字義的比較を表す *She is like her mother* という表現も *like* をとるとメタファーとして解釈されうるため、この基準も絶対ではない。

表 6.1 NPS モデル (Fishelov 1993)

原則	逸脱例
[1] Order	(B') Pig-like, John is eating.
[2] Length	(A') The water is as cold as the ice at the North Pole during a stormy winter, licked by the savage and beautiful polar bears.
[3] Explicitness	(B') John is like a pig.
[4] G is literally interpreted with respect to T	(A') The water is as hard as ice.
[5] The G is a salient trait of V	(A') The water is as cold as metal.
[6] V should be more familiar than T	(B') John is eating like an artiodactyl animal of the family Suidae.
[7] The connotations of T and V are not contradictory	(A') The water in the sewer is flowing like the water in a clear mountain spring.
[8] T and V are taken from different and distinct categories	(B') John eats like Mary.

し、8つの原則によって詩的でない直喩を規定している。ここでいう詩的でない直喩とは、典型的には次のものである。

(5) 詩的でない直喩の典型

(A) The water is as cold as ice.

(B) John is eating like a pig.

表 6.1 では、詩的でない直喩を特徴づける 8つの原則と、それぞれの原則に違反している例を示している。T、V、G はそれぞれ趣意 (Tenor)、媒体 (Vehicle)、根拠 (Ground) を表しており、各例文は (5) の例からの拡張になっている。[1]～[3] は形式的な特徴で、[4]～[8] は意味的な特徴である。

たとえば [3] の Explicitness が表しているのは、詩的でない直喩は趣意、媒体、根拠が言語的に明示されるという原則で、表では逸脱例としてそのうち根拠が明示されていないものを挙げた。この原則は、本研究でいうところの「プロファイル」の次元の明示性が関わっており、メタファー写像に関わる要素が言語化されないものほど詩的になることを意味してい

る。[5] および [6] の原則は、前節で Saliency 「顕著さ」と呼んだ概念とほぼ対応しており、根拠となっている性質が媒体の顕現特性であることと、趣意と媒体を比べたときに相対的に媒体のほうが身近なものであることを意味している。ただし [8] の「T と V が異なるカテゴリーに属する」という原則だけは特殊であり、これは字義的比較と直喩を区別する特徴にもなっている。この原則の違反は一方で字義的比較に、他方で詩的な直喩になる可能性がある。表では字義的比較の例を示しているが、コールリッジやワーズワースなどロマン派の詩には趣意と媒体の区別をあえて曖昧にした詩的な直喩が見られるという (Fishelov 1993: 14)<sup>\*5</sup>。

NPS モデルは、主に詩的な直喩との対比で詩的でない直喩を規定しようとしたものであり、そのまま字義的比較と直喩との区別に援用することはできない。特に [1]～[4] の特徴は、字義的比較と詩的でない直喩の両者に明らかに共通する。しかし残りの特徴は日常的に用いられる直喩の特徴を捉えたものであり、一般的な直喩の意味として慣用化したものだと考えられる。本研究は NPS モデルの考え方にならい、いわゆる詩的でない直喩と字義的比較の区別においても唯一絶対の基準は存在せず、複数の要因が関わっているのではないかという立場にたつ。直喩というカテゴリーには、様々な逸脱が見られる詩的な直喩から、字義的な比較とほとんど区別のつかない周辺的な直喩まで含まれる。前節でみた非類似性や非対称性などの特徴も、反例が存在していても重要な要因であることに変わりはなく、一方あるいは両方が欠けていても直喩だと判断されうると考える。

## 6.3 構文ごとの直喩率

この節では、田丸 (2018b) の研究をベースに、(1) に示した Israel らの予測を検討する。彼らは原則的にはすべての比較構文が直喩として用いられうると論じたが、本当にそうなのか。コーパスを用い、多様な比較構文の実際の用法を観察することで、構文によって直喩としての用いられやすさが異なることを示す。

### 6.3.1 分析対象と方法

分析対象としたのは、二者を比較する構文のうち、両者が名詞句の形をとるものである。以下の表 6.2 は、分析対象とする構文の基本形とスケッチエンジン (Sketch Engine) で使用

<sup>\*5</sup> ロマン主義的直喩の具体例は、Wimsatt (1954) に収録されている論文 “The structure of romantic nature imagery” を参照のこと。

表 6.2 検索クエリ

検索クエリ (CQL)	
[1] A is the same as B	[lemma="be"][]{0,1}{word="the"}[word="same"][word="as"]{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}
[2] A is similar to B	[lemma="be"][]{0,1}{word="similar"}[word="to"]{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}
[3] A is like B	[lemma="be"]{word="like"}{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}
[4] A is as adj. as B	[lemma="be"][]{0,1}{word="as"}{tag="J.*"}[word="as"]{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}
[5] A is -er than B	[lemma="be"][]{0,1}{tag="JJR.*"} & !word="more less"[word="than"]{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}
[6] A is unlike B	[lemma="be"]{word="unlike"}{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}
[7] A is different from B	[lemma="be"][]{0,1}{word="different"}[word="from"]{tag="DT PPZ"}{0,1}{tag="JJ.*"}{0,3}{tag="NN.*"}

した検索クエリ (CQL) を示している\*6。分析対象とする7つの構文は、類似性スペクトラムにおいて異なる地点に位置づけられると考えられるものを選出した (図 6.3 を参照)。データは British National Corpus (BNC コーパス) から収集し、各構文に対し 200 例ずつ無作為抽出を行なった。

分析方法は次のとおりである。

1. 各構文の直喩率を求める
2. 構文の偏りがある場合、その要因を考察する (本節)

\*6 CQL の見方を簡単に述べる。たとえば [1] の A is the same as B 構文の場合、be 動詞の後に何らかの語 (*almost* や *not* を想定) が 0~1 個入り、*the same as* の後に冠詞もしくは代名詞所有格が 0~1 個、形容詞が 0~3 個続き、最後に普通名詞が現れるものを指定している。[5] の A is -er than B 構文は、あらかじめ形容詞のスロットに *more/less* 以外のものが入る用例を検索している。*no more/less than* などのイディオムの表現を取り除くためである。名詞句を抽出するためのマクロは、Sketch Engine の公式サイトのページ (<https://www.sketchengine.eu/documentation/writing-sketch-grammar/>) を参考にしている。

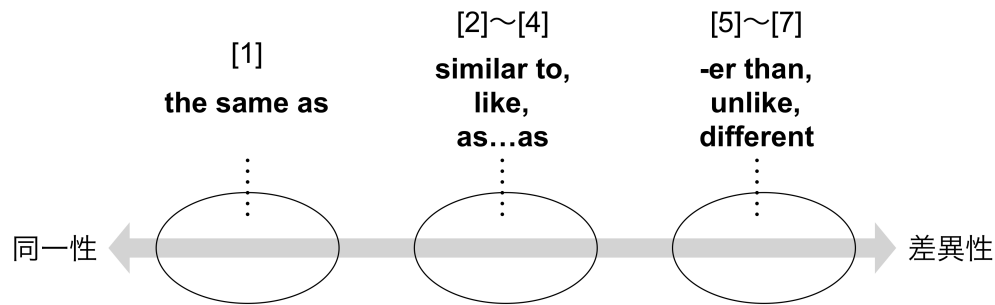


図 6.3 分析対象とする構文

3. 直喩と字義的比較の境界例の特徴を分析する (6.4 節)
4. 字義的比較の構文的意味を分析し、直喩の修辭的用法が字義的比較の構文的意味にどのように動機付けられているかを考察する (6.5 節)

直喩の判断基準は、基本的には Cameron (2003: 58-61) に従い、「意味的あるいはディスコース的に不一致 (incongruity) が感じられるか否か」によった。同時に、Fishelov (1993) の NPS モデルを下敷きに、複数の観点を導入した。これは直喩と字義的比較を排他的なカテゴリーではなく、段階性をなすものとして捉えるためである。本研究では直喩らしさに寄与する特徴として、(6) に示す 4 つのものを考慮した。ただしこれらの特徴は網羅的ではなく、その他の要因によって修辭的な機能を担う可能性がある。さらに詩的な直喩の場合はそもそもこれらの特徴を満たさないことがありえるため、直喩か否かの判断は最終的には研究者自身の直感に頼らざるをえない場合もあった。

#### (6) 直喩らしさに寄与する特徴

##### a. 間ドメイン性：趣意と媒体が異なるドメインに属するか

Cameron (2003) の「意味的な不一致 (incongruity)」に対応する。ここでのドメインは、人間、動物、植物、鉱物、人工物、場所、行為、現象、抽象概念などのタクソミー的な階層をなすものを想定している<sup>\*7</sup>。たとえば *He is like a chameleon* は人間と動物を比較しているので異なるドメインとみなし、*Computer games are like lots of other children's hobbies* はどちらも広い意味での行為と捉えら

<sup>\*7</sup> Fillmore (1982, 1985) のフレーム的な見方に基づき、ある概念を理解するために必要となる背景知識の全体をひとつのドメインとみなすことも可能だが、どこまでを同一ドメインと見なせるのか、その判断基準が難しくなるため、今回はドメインをタクソミー的なものとして捉えることにした。



れるので同じドメインに属するとみなす。また、*My experiences are very similar to the writer* のように比較されている対象のどちらかが省略して述べられている場合（ここでは *to* の補部は *the experiences of the writer* だと解釈される）、ドメイン内比較とみなす。

- b. **身近さ・顕著さ**：趣意と媒体を比べたとき、媒体のほうが相対的に身近なものか、あるいは媒体のほうが根拠となっている性質を顕著にもつか

*Her small hands were as cold as ice* と *Her voice was as cold as her face* を比べると、前者では冷たさが氷の性質として顕著なものだと捉えられるのに対し、後者では冷たさが顔の顕著な性質とは捉えられない。顔の温度は状況によって変わりうるものだからである。根拠が示されていない場合は前後の文脈を参照し、もし前後の文脈を参照しても根拠が書かれていなければこの項目は判断しない。

- c. **評価的コノテーション**：媒体に選ばれる対象が、肯定的あるいは否定的評価を喚起するか

媒体が肯定的あるいは否定的評価と強く結びついているとき、同じドメインに属していても比喩的な効果が生まれやすい（例：*That river is like a sewer* 「その川は下水のようだ」）。

- d. **誇張**：誇張の意味合いをもつか

*She had been as light as a feather to carry* のように程度が過大に述べられているなど、客観的には偽と捉えられるような描写になっている場合、誇張とみなす。

これら4つの観点で分析した上で、典型的直喩、周辺の直喩、周辺の字義的比較、典型的字義的比較に分類する。典型的直喩は、(a)の間ドメイン性を満たし、かつ(b-d)の特徴のうちどれかひとつ以上をもつものとし、周辺の直喩は、(a)のみを満たすあるいはドメイン内比較にも関わらず何らかの要因で修辭的だと直感されるものとする。周辺の字義的比較とはドメイン間比較にも関わらず字義的だと直感されるもので、典型的字義的比較とはドメイン内比較で字義的だと判断されるものである。それぞれの具体例を以下に示す。

- (7) a. *She was as light as a feather to carry.* [典型的直喩]  
 (彼女を運ぶと羽のように軽かった)
- b. *The dress is like a shroud.* [周辺の直喩]  
 (その服は経帷子のようだ)
- c. *Spiders are no larger than a palm.* [周辺の字義的比較]  
 (蜘蛛は掌ほどのサイズだ)

d. Your eggs are fresher than shop eggs.

[典型的字義的比較]

(君のところの卵は店の卵より新鮮だ)

### 6.3.2 分析結果

構文ごとの直喩として解釈される用例の比率は、表 6.3 に示すとおりである。例外として除外したものは、比較対象が名詞句ではなく、節や前置詞句をとるなど今回の分析対象とは異なる構文、あるいは字義的／修辭的の判断ができなかったものである。[6] の unlike 構文は BNC コーパスでのヒット数がそもそも 74 例であった。

この結果からまず分かるのは、直喩としての用いられやすさにかなりばらつきがあるということである。従来の比喩研究で取り上げられてきた like 構文と as … as 構文は、それぞれ 57.0% と 33.0% と、他の比較構文に比べてやはり直喩の比率が高いことが確かめられた。このことは、両者が修辭的な比較の意味を表す構文として慣習化されていることを示している\*8。

次に、直喩として用いられやすいのは、同一性や差異性を表す構文よりも類似性を表す構

表 6.3 構文ごとの直喩率

	直喩	字義的比較	例外	直喩率
[1] A is the same as B	6	187	7	3.1%
[2] A is similar to B	5	193	2	2.6%
[3] A is like B	106	80	14	<b>57.0%</b>
[4] A is as ... as B	60	122	18	<b>33.0%</b>
[5] A is ... than B	14	177	9	7.3%
[6] A is unlike B	0	73	1	0.0%
[7] A is different from B	2	195	3	1.0%

\*8 構文という単位で慣習化しているということは、Moder (2008, 2010) による類似の研究からも示唆される。Moder は、ラジオニュースという特定のディスコースにおける like の用法を調査し、直喩の比率を求めた。それによると、構文を限定しない場合は 21% しか直喩として使用されなかったのに対し (Moder 2008: 310)、It's like a NP に限定すると 62% (21 例中 13 例) が直喩として使用されるという結果が得られた (Moder 2010: 7.4 節)。本研究は Moder の研究と異なりジャンルの影響を考慮していないが、構文を限定した場合の結果は本研究の結果と同程度の比率になっている (各 62% と 57.0%)。このことから、like 自体が直喩標識としてはたらいっているというより、It's like a NP や NP is like NP のような特定の構文が直喩として慣習化されていることが示唆される。

文であることが示された。類似性スペクトラムでいうと中間部に当たる。差異性を表す構文のなかでは [5] の *than* 構文だけやや直喩率が高いが、この構文は共通する性質における程度差を問題にするので、ほかの構文と比べると類似性を表すタイプに近いものだと言えるだろう。また [7] の *different* 構文で例外的に直喩として判断された 2 例は、どちらも否定辞の *no* を伴うものだったことから、類似性との親和性の高さが見てとれる。*different* が例外的に直喩として用いられていた例を次に示す。ここでは計画を立てることがデザイン美学にたとえられており、どちらも自然な形をしているとスムーズに進むことができると述べられている。

- (8) Yet some plans are natural and others unnatural. In a way **this is no different from the aesthetics of a design**. There are “natural” designs that seem to flow and there are others that are awkward and “unnatural”.

(だが計画の中には自然なものも不自然なものもある。ある意味、これはデザインの美学と違わない。滑らかそうな「自然な」デザインと、ぎこちない「不自然な」デザインがある。)

なぜ差異性を表す比較構文は直喩として用いられにくいのかという問題は、6.6.2 節で論じる。一方で、類似性を表す構文であるにも関わらず、*similar* 構文は直喩として定着していないことにも注意が必要である。*like* 構文と *similar* 構文の違いについては、6.6.1 節で論じる。

最後に、直喩と字義的比較を連続的なものとして捉えると、ドメイン内比較に基づく周辺的な直喩や、ドメイン間比較にもとづく周辺の字義的比較が一定数存在することが示された(表 6.4)。

表 6.4 典型的直喩から典型的字義的比較までの構文別分布

	典型的直喩	周辺の直喩		周辺の 字義的比較	典型的 字義的比較	
	Fig(cr)+ $\alpha$	Fig(cr)	Fig(w)+ $\alpha$	Fig(w)	Lit(cr)	Lit(w)
[1] A is the same as B	1	0	4	1	2	185
[2] A is similar to B	2	0	3	0	0	193
[3] A is like B	58	11	25	12	4	76
[4] A is as ... as B	48	4	8	0	11	111
[5] A is ... than B	8	1	2	3	8	169
[6] A is unlike B	0	0	0	0	0	73
[7] A is different from B	0	0	2	0	0	195

表 6.4 では、Fig は修辭的比較、Lit は字義的比較を表す。Fig(cr) や Fig(w) における (cr) と (w) は、ドメイン間か (**cross-domain**)、ドメイン内か (**within-domain**) を表し、+  $\alpha$  は、分析方法の (6) で示した間ドメイン性以外の特徴うちどれかひとつ以上を有していることを表す。

like 構文と as...as 構文はどちらも直喩として慣習化しているものの、より詳細な分布を見ると両者の違いが浮き彫りになる。as...as は、典型的直喩で用いられることが圧倒的に多いのに対し (60 例中 48 例が典型的)、like 構文は典型的直喩と周辺的直喩の偏りがあまりない (106 例中 58 例が典型的)。一方で、周辺的な字義的比較に目を向けると、as...as 構文および than 構文で表されることがやや多く、それぞれ 10 例前後観察される。このような周辺的な例がどのようにして直喩あるいは字義的比較として判断されるかに関しては、次の 6.4 節で論じる。

## 6.4 間ドメイン性と修辭性

一般的に、直喩の重要な意味的特徴は、趣意と媒体が異なるドメインに属していることだと考えられてきた。しかし分析の結果、趣意と媒体の間ドメイン性は、修辭性判断の十分条件でも必要条件でもないことが明らかになった。確かに直喩と判断された用例の多くは、間ドメイン性という特徴を有していた。しかしその他の要因 (特に誇張、評価) が関わる場合は、趣意と媒体が同じドメインに属していても修辭的な印象を与えることができる (cf. Richards 1936, Israel et al. 2004)。

- (9) a. A mini-skirt that is no broader than a cummerbund  
(カマーバンドほど小さいミニスカート)
- b. Greg's jibe about the dress being like a shroud  
(服が経帷子みたいだというグレッグの嘲り)

たとえば (9a) の例は、概念的に近接したものが比較されたドメイン内比較の例だが、過大誇張の効果が見られるゆえに直喩と判断される。「カマーバンド」とは主にタキシードなどを着るときにウエスト部につける幅広のベルト程度の大きさのもので、どんなに短いスカートでもこれと同じくらいのは考えにくい。また、(9b) の場合は、否定的評価のコノテーションを伴うがゆえに直喩と判断される。この例では、着ている服が死者が身にまとう装束にたとえられているが、死を連想させるネガティブなものにたとえるのは本来不適切であり、相手の感情を逆なでする意図が感じられる。これらのように一見類似した存在と

比較していても、その対象に対してわれわれがもつ社会通念やイメージという点で不整合が見られるようなものは直喩として機能しうる。

逆に、異なるドメインに属するもの同士を比較していても、直喩と判断されない場合もある。このような周辺の字義的比較の例は、主に段階的比較構文 (as...as 構文と than 構文) で多く観察された (表 6.4)。ではこのような例が字義的と判断されるのはどのような要因が関わっているのだろうか。「比較の修辞性」に対して「比較の字義性」というものがあるとしたら、それはどのように特徴づけられるのだろうか。

字義的なドメイン間比較には、以下の特徴が観察された。

#### (10) 字義的なドメイン間比較の特徴

- i. 比較対象が対称的關係にある
- ii. 比較対象がメトニミー的關係にある
- iii. 比較対象が客観的な基準となる

字義的な比較の最も典型的な例は、比較される二者が対称的關係にある場合である。たとえば *I really do not think we are much brighter than monkeys, and monkeys are killed in experiments* 「私は自分たちが猿よりもずっと賢いとは思わないのに、猿は実験で殺されている」がこのタイプに該当する。この例は人間と動物が比較されており、一見すると典型的な動物メタファーに思えるかもしれない。しかしここでは人間の賢さを叙述するために「猿」が引き合いに出されているのではなく、人間と猿それぞれが知性をもつことが述べられているため、両者は対称的な關係にあると見なせる。したがって趣意と媒体の順序を入れ替えても同様の意味を表すことができる。また *we are much brighter than monkeys are* のように、*are* を挿入して *than* の補部を比較節にすることもできる。

次に、比較される二者がメトニミー的關係にあるものも字義的と見なせる。このタイプは主に as...as 構文で見られた。たとえば *Philip was as good as his word* 「フィリップは約束を守る人だった」や *computers here [...] are only as good as the individuals who are responsible for their programs* 「このコンピューターの質はプログラムに責任をもつ人材の質にかかっている」などは、広い意味で「生産者」と「生産物」を表すタイプのメトニミー的關係に基づいている。メトニミーは本来同一ドメイン内の關係が問題となる比喩だが、これがドメイン間比較と分析されるのは本研究の分析手法上の問題によるところが大きい。本研究ではタクソノミー的なドメイン観にもとづき、たとえば人間と人工物は別のドメインに属すると見なした。しかしドメインを広い意味で捉え、ある概念を理解するために必要な背景知識の構造と見なすなら、これらは同一ドメイン内の比較に属すると言えるだろう。生産者と生産物

は、社会・文化における慣習として一般的に密接な関係にあると見なすことができるからである。

最後に、誇張や評価的な意味合いを伴わず、客観的な比較が行われている場合も字義的に見なせる。特にサイズや重さなど客観的に測定できる性質が述べられている場合、異なるドメインに属する対象が比較されていても、それが客観的な基準として解釈される。たとえば *if a work [= picture] is bigger than a man* 「作品が人間よりも大きいなら」や *Most [= spiders] are no larger than the palm of a man's hand* 「多くの蜘蛛は人間の手のひらほどの大きさもない」では、サイズを説明するために人間や人間の手のひらが引き合いに出されている。これらの例には誇張は感じられず、もちろん擬人化の効果があるわけでもない。聞き手に分かりやすく伝えるために、大きさの基準としてイメージしやすい人間の身体が例として挙げられているのである。このタイプは主に *than* 構文（否定辞 *no* を伴うものを含む）で観察された。*as...as* 構文が用いられると、比較対象を模範的・典型的存在として解釈するという制約がはたらき、誇張のコノテーションが生じてしまうからである (Israel et al. 2004: 127)。 *as...as* 構文で誇張のコノテーションを否定するためには、*physically* などの副詞を伴うなどして、文脈的に客観的な値について述べていることが示される必要がある。

以上で述べたように、間ドメイン性という特徴だけでは、直喩を規定することはできない。この特徴が修辞性をもたらすうえで重要であることには違いないが、Fishelov (1993) の NPS モデルで提案されていたように、直喩の修辞性には、誇張や評価を含め、複数の要因が関与していると見なすべきだと思われる。さらに本節では、ドメイン間比較であっても字義的だと判断されるケースを考察し、「比較の字義性」には二者が対称的關係にあること、および客観的基準としてはたらくことが重要ではないかと指摘した。このふたつの点は、直喩と字義的比較を区別する重要な特徴になりうる。直喩として用いられるかどうかを決定づける要因として、間ドメイン性のほかにも重要なものがあることは、別の側面からも明らかにされる。この点に関して、6.6 節において、*like* 構文と *similar* 構文の比較を通して詳しく論じる。

## 6.5 構文的動機づけと修辞性

この節では、直喩の修辞的機能が比較構文の構文的意味にどのように動機付けられ、どのような意味で字義的用法から逸脱しているのかを考察する。(2) の Dancygier and Sweetser (2014) が予測するように、直喩の意味が元の字義的比較の構文的意味に動機付けられているとしたら、どの構文をとるかによって直喩が果たす修辞的機能も異なってくるはずである。構文によって、どのような比較関係を表すのかが異なるからである。個々の具体的構文がど

表 6.5 字義的意味と比喩的意味の対応関係

	字義的用法	比喩的用法
as...as構文	形容詞の意味の精緻化	→ 誇張的な限定修飾
than構文	対称的比較	→ アナロジー的直喩
	例示	→ 虚構性を伴う例示
like構文	描写	→ 誇張的あるいは評価的な描写
	代用的カテゴリー化	→ (1) 心象の投影 → (2) 価値変容・カテゴリー変容

のように拡張して用いられるかを明らかにすることで、似ていないもの同士の比較という特徴を超えた、より豊かな修辭的意味を捉えることができるようになることが期待される。

分析対象として、段階的比較構文の as...as 構文および than 構文、非段階的比較構文の like 構文を取り上げた。分析の結果、各構文の字義的意味に応じて、それぞれの構文が担う直喩としての機能も異なることが確かめられた。表 6.5 は分析の結果をまとめたものである。表では、字義的比較の意味とその拡張用法だと思われる比喩的意味の対応関係を示している。

### 6.5.1 as...as 構文と than 構文

as...as 構文と than 構文の字義的用法は、次の2つに大きく分類できる。

- i. モノ同士の比較：対称的比較、最上級比較
- ii. 形容詞の意味の精緻化：値の精緻化、典型例による精緻化

字義的比較の1つ目の用法は、モノ同士の比較である。このタイプは、あるものと別のものを、特定の性質をどの程度有するかによって比較する。比較される二者は対称的な関係をなし、どちらも同程度に具体的であり同程度に当該の性質をもちうる。典型的には、以下の(11)の例のように、ドメイン内比較の関係を表す。また(12)の例のように、特定の対象ではなく同じカテゴリーに属する他の成員一般と比べ、他の成員よりも抜きん出ていることを表す場合もある。後者では比較対象となる句が *any* や *no* などを伴うことが多い。

(11) a. The Prince was not as temperamental as his father.

(王子は父親ほど気性が激しくなかった)

- b. Your eggs are fresher than shop eggs.

(あなたの卵は店の卵より新鮮だ)

- (12) a. [N]one was as breathtaking as his hair.

(彼の髪ほどすばらしいものはなかった)

- b. You can probably stay at places that are older than anything in Australia.

(オーストラリアのなかで何よりも古い場所に滞在することができるでしょう)

字義的比較の2つ目の用法は、形容詞の意味の精緻化である。このタイプでは、二番目の *as* 句や *than* 句が前置詞句としてはたらき、直前の形容詞の意味を限定する。典型的には、具体的な値 (例: *twelve, the summer, the average rate*) を示す語が *as* や *than* の補部に選ばれる。

- (13) a. Some of the kids were as young as twelve.

(子どもの一部は12歳という若さだった)

- b. [T]he move could be as early as the summer.

(移動はこの夏という早い時期になるかもしれない)

- c. [T]he marginal rate of tax is higher than the average rate.

(限界税率は平均税率よりも高い)

(13a) では、*as* 句によって *young* の意味が限定され、単に若いだけでなく12歳という若さであったと述べられている。このタイプはモノ同士の比較とは文法的に異なるふるまいをみせる。モノ同士の比較は二番目の *as* 句を節の省略形としてとらえることができ、*The Prince was not as temperamental as his father was* と言うことができるのに対し、値の精緻化は、*be* 動詞を補うことができない (\**Some of the kids were as young as twelve was.* / \**The marginal rate of tax is higher than the average rate is.*)。

*as...as* 構文および *than* 構文の修辭的な用法は、字義的比較のうち値の精緻化を表すタイプに動機付けられていると思われる。この構文の修辭的意味の特徴は、次の例に見られるように、誇張の効果を伴うことである。

- (14) a. She had been as light as a feather to carry and her small hands were as cold as ice.

(彼女を運ぼうとすると羽のように軽く、その小さな手は氷のように冷たかった)

- b. He [= Superman] may be faster than a speeding bullet.

(彼は猛スピードの弾丸よりも速いかもしれない)



これらの例は、as 句や than 句を節の省略形として捉えることはできないという点で、値を精緻化するタイプと共通している。*She had been as light as a feather is* のように be 動詞を加えると、対称的比較の解釈が優先され、彼女が実際に羽と同程度の重さだったことが述べられる (Morgan 1975: 300-301, 山梨 1986: 193-194, 6.2.2 節の (3) を参照)。

さらに値の精緻化と誇張の直喩との中間例が存在することによっても、両者の拡張関係が裏付けられる。

(15) a. [T]he material is as brittle as glass and easily broken by careless handling and assembly.

(その素材はガラスのように脆く、不注意に扱ったり組み立てたりすれば簡単に壊れてしまう)

b. It [= Silences, a novel written by Tillie Olsen] is as useful as a dictionary.

(その小説は辞書のように役に立つ)

c. Most [= spiders] are no larger than the palm of a man's hand.

(多くの蜘蛛は人の手のひらほどの大きさもない)

これらの例では身近な例を挙げることによって、形容詞の意味を精緻化している。(13) のように具体的な値を指定するものに比べて正確さという点で劣るが、かといって(14)のように誇張的に述べている印象も受けない。少なくともこれを字義的ととるか修辭的ととるかは判断者によってゆれるだろう。ここでは具体的な値を述べるかわりに、イメージしやすい身近なものを基準として挙げることで、形容詞の意味が限定されている。数値的な正確さよりも分かりやすさを重視したものだといえる。

以上の分析から、as...as 構文および than 構文の直喩の主要な修辭的機能は、ある対象の性質や様態を誇張的に叙述することであると結論づけられる。この直喩構文は、色、形、手ざわりなどの知覚可能な性質を描写するイメージ・メタファーとしてよく用いられる。この修辭的用法は、形容詞の意味の精緻化という構文的意味に動機付けられており、その程度の甚だしさという点で逸脱的である。

6.4 節で述べたように、このタイプの直喩では趣意と媒体の間ドメイン性は本質的な特徴ではない。しかし間ドメイン性が関わると、聞き手に対して与える驚きやインパクトが大きくなり、より修辭性の高い表現を産むことができる。特に形容詞の意味が物理的な意味と比喩的な意味の二重の意味で用いられる場合、形容詞の多義性に気付く面白みや言葉遊び的な効果も生じる (例: *Her words were as sharp as a razor, That student was as cool as a cucumber*)。さらに、媒体に対して一般的にもたれているイメージや肯定的・否定的評価を

利用して、単なる誇張以上の意味合いを伝えることもできると考えられる。

## 6.5.2 like 構文

like 構文は、as...as 構文に比べて用法が多様で、新奇な直喩表現が多い。性質や様態などの類似性に基づくイメージ・メタファーだけでなく、関係レベルや構造レベルのより高次の類似性に基づくメタファー的关系を表すことができる。形容詞を必ず伴う as...as 構文とは異なり、どのような点で類似しているかを明示することは文法的に必須ではない。しかし高次の類似性に基づく直喩で、特に慣用化されていない場合は類似関係の説明を必要とすることが多く、後続する *because* 句などで詳しい説明が行われることが多い (Dancygier and Sweetser 2014: 145, Cuenca 2015: 143, Romano 2017: 2)。本研究のデータでは、前後の文脈で類似性の詳述を伴うものと伴わないものはほぼ同数（それぞれ 54 例と 52 例）であった。

like 構文の字義的用法には、次のものが含まれる。

- i. モノ同士の比較：対称的比較、最上級比較
- ii. 例示
- iii. 描写
- iv. 代用的カテゴリー化
- v. その他（ヘッジ、近接、推量など）

(i~iv) の下位カテゴリーは、それぞれ異なる修辞的機能を動機付けている。以下では、それぞれのタイプにおける字義的な用例と拡張的な用例を対比させつつ、どのような側面で逸脱が見られるのかを論じる。

最も典型的な字義的比較は、段階的比較構文の場合と同じく、(i) モノ同士の比較である。このタイプが拡張的に用いられると、創造的なアナロジーを表すことができる。(16)はこの用法の字義的な例を、(17)はやや拡張的に用いられている例を、(18)は修辞性の高い例を示している。

### (16) 字義的比較

- a. But it [= the second scenario] is like the first scenario in this: *both kinds of eroticism are specific to male bonding* [...].

(しかしそれは最初のシナリオと以下の点で似ている。どちらもそのエロティシズムは男の絆に特有のものである)

- b. Computer games are like lots of other children's hobbies — *great in small doses*.

(コンピューターゲームは多くのほかの子どもの趣味と似ている。少しならすばらしい)

(17) 中間例

They [= errand-boys] are like postcards, *so easy to send and so cheap, that everyone likes to have one handy.*

(彼ら(使い走りの少年)ははがきに似ている。簡単に送れてしかも安いので、皆が手元におきたがる)

(18) アナロジー的直喩

a. [G]ood poems are like good football teams, *in that they get 'better results'.*

(よい詩とはよいサッカーチームのようなものだ、どちらも「よい結果」をもたらす)

b. The main argument method is like a set of blinkers for a horse in a race, *forcing a straight line and avoiding distractions.*

(主要な議論の方法はレースで馬に用いる目隠し革のようなものだ。まっすぐ進行させたり、横道を避けたりできる)

このタイプは字義的用法から修辞性の高い用法まで通して、どういう点で似ているのかその説明を伴うことが多いのが特徴である。上の例では類似性の説明となっている部分を斜体で示している。中間例の(17)は、人間と具体物という異なるドメインに属するものが比較されているという点でやや修辞性を感じさせるが、比較対象同士が使用目的や機能という点で非常に似通っているため字義的比較にも近い。修辞的用法は、(18)にあるように、抽象物をより具体的で身近な存在にたとえ、意外な共通性を指摘することで類推を促すという特徴がある。比較対象が意外なものであり、類似性が創造されるという点で逸脱が見られる。

(ii)の例示は、同じカテゴリーに属する例を示すことで、ある対象やできごとを描写する用法である。例示はときに、事細かに形容句を重ねて描写するよりも経済的に、そして具体的にイメージを伝えることができる。具体例を挙げることで十分な説明がなされていると見なされるためか、基本的には根拠の説明を伴わないという特徴がある。たとえば、(19a)では登場人物の具体的な特徴を述べることなく、「道ばたで会う人」という例を示すことでその平凡さを伝える方略がとられている。(19b)は兵士が目にした光景がどのようなものだったか説明するために、夜のニュース番組で報じられる光景という具体例が挙げられている。

(19) 例示の字義的用法

a. The characters are like someone you would meet in the street, although they tend to be a bit more romantic.

(登場人物は道ばたで会いそうな人である、もちろんもう少しロマンティックだが)

- b. You don't know what it'll [= what the soldiers will find] be like, if it'll be like the scenes you see on the news every night.

(あなたはそれ(兵士らが目にするだろうこと)がどんなものか、それが毎晩ニュースで見えるような光景のようなものなのかどうか知らないだろう)

例示用法の拡張例を見ていく。(20)は、誇張的なコノテーションが含まれるため、字義的な例示からの逸脱をやや感じさせる例である。ここでは、ある人物が教会には通うものの病気の隣人を助けないことに対し、そのような偽善的行動をとると典型的に思われているパリサイ人を例に非難している\*9。

#### (20) 中間例

You go to church so fine and holy and when your neighbour fall down sick you pass by on the other side! You are like the Pharisees and the hypocrites!

(あんたが教会に行くのはすばらしいし信心深いことだけでも、あんたは隣人が病に倒れていても道の反対を歩いていけようよ! あんたはパリサイ人や偽善者みたいなもんだね!)

誇張に加えて、虚構のシナリオを読み手に想像させるものは、より修辭的な印象を与えることができる。たとえば(21a)では、ある地域の政策の非道さを伝えるために、映画 *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (邦題『カッコウの巣の上で』)が例に挙げられている。この映画は精神病院を舞台とし、その精神病院が行きすぎた統制によって患者の人間性をことごとく奪う場所として描かれている。(21a)では、当該の政策がこの架空の物語から飛び出してきたかのように述べることで、その政策が現実にはありえないほど酷いということが強調されている。(21b)も同様で、「聖杯を見る」という虚構のシナリオにもとづき、その極限的経験をした人を例にある人物の様子が叙述されている。

#### (21) 例示の修辭的用法

- a. The whole regime in Ashworth was *inhumane and degrading*. It was like something out of the film *One Flew Over the Cuckoo's Nest*. If anything, it was more brutal.

(アッシュワースの政策はすべて非人道的で人の尊厳を傷つけるものだった。それはまるで『カッコウの巣の上で』という映画から出てきたかのようにだった。それどころかもっと残酷だった)

- b. There was a guy doing tricks: you know, magic, conjuring, juggling ... Luke was

\*9 パリサイ人とはユダヤ教の一派に属する人々で、キリスト教信者から偽善者として非難されることがあった。

like someone who'd seen a vision of the Holy Grail – *completely obsessed*.

(トリックを披露してる男がいたんだよ。手品とか、霊を呼び出したりとか、曲芸したりとかそういうの。ルークは聖杯を見ちゃった人みたいだった、完全に取り憑かれてた)

これらの例は、斜体で示している部分（それぞれ *inhumane and degrading* と *completely obsessed*）で比較の根拠が示されており、その点で例示の字義的用法とは異なる。しかし、類似する性質は比較によって発見されるものではないという点で、同じく根拠の説明を伴うアナロジー的直喩とも異なる。例示の修辭的用法では、根拠の部分で対象の様子は十分叙述されており、具体例を挙げることは蛇足的とも言える。極端な例が付け加えられているのは、単なる叙述では、話し手の受けた印象を伝えるには不十分であるからだと考えられる。この点で、as...as 構文や than 構文の修辭的用法に近い機能を果たしている。

like 構文の字義的用法の3つ目は、(iii)の描写である。このタイプは、ある対象が聞き手にとってなじみのないものであるとき、具体的にそのイメージをつかませるために、形状や色、音、手ざわりなどの特徴を詳しく描写するものである。(22a)がその好例で、“pacifier”と呼ばれるもの（通常はおしゃぶりを表すがこの文脈では警棒を指す）がどのような見た目なのか説明するために、*like a long stick with a handle on them*「握る部分がついた長い棒みたいな（もの）」と描写している。これはあくまで聞き手の理解を促すために描写しているだけであり、意外なものにたとえることで修辭的な効果をもたらそうとしているわけではないので、字義的な用法と見なせる。(22b)も同様である。

## (22) 描写の字義的用法

- a. They're called a pacifier. They're like a long stick with a handle on them.

(それらはパシファイヤーと呼ばれる。握る部分がついた長い棒のようなものだ)

- b. This quadrilateral is called a rhombus. It is like a square, *with all sides equal*, but each angle is not 90°.

(この四辺形はひし形と呼ばれる。正方形のように4辺が同じ長さだが、それぞれの角が90度ではない)

描写の修辭的用法では、明瞭さや正確さよりも、誇張的な効果や肯定的・否定的評価の含みを伴う描写、さらには虚構的シナリオを利用した描写が観察される。(23a)ではアリスの目が太陽の炎にたとえられているが、ここでは色やきらめきなどの知覚的な類似性だけでなく、太陽がもつ肯定的なイメージ、たとえば力強さや明るさ、情熱などの総合的なイメージが同時に重ね合わされることで、目の美しさが描写されていると思われる。(23b)は誇張的な効果に加えて、現実には起こりえないできごとが引き合いに出されているがゆえの面白み

が感じられる例になっている。この例では東京の地下鉄路線図の複雑さが「恐ろしく活発なムカデによるアクションペインティング」にたとえられているが、そこには地図と作品の見た目上の類似性以上に、絵の具を身にまとったムカデがキャンバス上で動き回るというできごと自体の滑稽さが重要であると思われる。虚構的なシナリオを利用して、文章全体に面白みをもたらす効果があると考えられる。

### (23) 描写の修辭的用法

- a. Alice's eyes were like blue fire in the sun.

(アリスの目は太陽の中の青い炎のようだった)

- b. Nor can you read the Tokyo tube map. Even if the trains are coloured according to the line they run on, the map itself is like an action painting by a hyperactive centipede.

(東京の地下鉄路線図は読めないだろう。電車が路線ごとに色分けされたとしても、地図自体がおそろしく活発なムカデのアクションペインティングのようなものだ)

描写の場合、根拠の説明を伴うかどうかは場合による。(23a)などは根拠が不要なタイプであろう。ここではどのような点で似ているかは読み手の自由な解釈に任されており、*in that they were brilliant and powerful*などと続けるとかえってこの比喩の魅力が下がってしまうと考えられる。一方、類似関係が概念化者の独特の捉え方を反映しているような場合は、アナロジー的な直喩と同様に説明が重要となるだろう<sup>\*10</sup>。

like 構文は、曰く言いがたいものや既存の名がないものに対して、かりそめの名を与えるような文脈で用いられることがある。この用法を (iv) 代用的カテゴリー化と呼ぶことにする。*like* の補部に抽象名詞が多く用いられるという点で他の用法と異なり、典型的には *it* を主語にとる。語が代用的に用いられるものを字義的と呼ぶのは正確ではないかもしれないが、適切な言葉が見つからないがゆえの代用であり、修辭的な意図がほとんど感じられないので、これを字義的な用法と捉えたい。たとえば以下のようなものが含まれる。

### (24) 代用的カテゴリー化

- a. I'm Irish and you're my child, so you're Irish. [...] It's like a feeling, you know you're Irish even if you're born here.

(わたしはアイルランド人であなたはわたしの子ども、だからあなたはアイルランド人よ。)

<sup>\*10</sup> 日本語の例になるが、「(駒子の)唇はまことに美しい蛭の輪のように伸び縮みがなめらか」(川端康成『雪国』)という表現の場合、「美しい」「伸び縮みがなめらか」などのように根拠が述べられる。唇と蛭という本来似ても似つかぬ存在の間に類似性を見出すことが重要だからであろう(佐藤 1978: 79-84)。

それは感情のようなもので、ここで生まれたとしてもあなたは自分がアイルランド人だと知ってるのよ)

- b. Then there was complete pandemonium. Everyone just panicked, it was like a stampede.

(すさまじい混乱が起きた。あらゆる人がパニック状態に陥った。それは集団的暴走の体をなしていた)

(24a) では、話し手は「あなたはアイルランド人だ、たとえ生まれたのがアイルランドでなくても」と主張しており、そのロジックが「感情のような」ものだと述べている。もちろん厳密には感情とも異なり、その結論に至る何らかの思考法があるのだろうが、少なくとも合理的論理に基づいているわけではない。しかし他に適切な言葉がないので、次善の策として最も近い「感情」という概念を使って当該事態を言い表そうとしていると考えられる。次の (24b) でも同様に、*stampede* という語によって暫定的なカテゴリー化が行われている。ここでの *it* は大混乱が生じ人々がパニックに陥った状況全体を表しており、それを *like a stampede* 「集団的暴走のような」ものと呼んでいるのである。

この用法は2つの方向での比喩的拡張が見られる。ひとつは、ある状況に対して主体の心象風景を投影した名を与えるものである。この用法は、上で見た字義的用法と同じく、漠然と状況全体を表す *it* を主語にとる。(25a) は近未来小説からの引用で、ある女性が特殊性能をもつ義眼を移植され、その直後に歩行を行おうとしている場面である。最初はぎこちなさを感じている様子が描かれているが、*It was like a click inside her* 「彼女の内にカチッという音がなったようだった」という瞬間を境に、彼女は歩行の感覚をつかむ。ここでのクリック音は当然ながら現実の音ではなく、内部で生じた変化を彼女がそのようなものとして感じ取ったことを表している。一般的には誤った認識に思えるかもしれないが、おそらく彼女にとってはそうとしか捉えられなかったような経験である。(25b) でも同様に、海岸沿いに人々が集う日常の風景が、ある人物の目には *exodus* 「逃避」として映し出された様子が描かれている。

#### (25) 心象の投影によるカテゴリー化

- a. He walked her to the centre of the room, and let her go. She tottered, and put her arms out. The Doc pushed the wheeled table back against the wall, giving her some space. It was like a **click inside her**. The dizziness went away.

(彼は彼女を部屋の中央に歩かせ手を離した。彼女はよろめき、両手を広げた。医者は車輪付きテーブルを壁に寄せ、スペースを作ってやった。彼女の内にカチッという音がなった)

ようだった。めまいが去った)

- b. There were hordes of people down by the sea-front. It's like **an exodus from a spoiled country**, she marvelled.

(海岸沿いでは人々が大きな群れをなしていた。まるでだめになった国からの逃避のようだと彼女は驚いた)

このようにきわめて個人的で特殊な経験に対して、一見すると誤った認識にもとづく名が与えられることがある。これらの例に修辞性が感じられるのは、他者と共有できないような主観的な認識にもとづいて、カテゴリー化が行われているからだと考えられる。

比喩的拡張のふたつめの方向は、その対象やできごとを指す既存の語彙があるにも関わらず、あえてカテゴリーのずらしを行うものである。主語には当該の対象を一般的に表す名詞が用いられる。たとえば(26)では、テムズ川の下を走る歩行者用トンネルである「グリニッジ・フットトンネル」が、「秘密の通路のようだ」と叙述されている。*secret passage*とは権力者や犯罪者が逃亡するための隠し通路のことだが、ここではそのような隠し通路との比較をしようとしているとは考えにくい。特別なコノテーションをもつものへとカテゴリーのずらしを行うことで、話し手がそのトンネルから受けた主観的な印象を伝えることが重視されていると考えられる。

(26) 中間例

It [= The Greenwich Foot Tunnel] is like a secret passage.

(それは秘密の通路のようだ)

カテゴリーのずれがより大きくなり、価値的側面がさらに強調されているのが(27)の例である。これらの例では、別のものにたとえることによって、対象の個人的あるいは社会的な価値の変容がみられる。このタイプは、誰にとっての認識なのかを言語的に明示することが多いという特徴がある。たとえば(27a)では心の声が彼女にとっては音楽のようだったこと、(27b)では祭りが近隣住民にとっては侵略のようだったことが述べられている。前者は音楽にたとえることで心の声に肯定的価値が与えられ、それが彼女にとって心地よいあるいは都合のよいものであったことが強調される。後者は反対に祭りの負の側面が喚起される。

(27) 個人的／社会的な価値変容

- a. The other [(half of her mind)] was like music to her ears: 'Get out. She doesn't need you.'

(もう片方の心の声は彼女の耳には音楽のようだった。「出て行こう、あの人はおまえなん



て必要としてない」)

- b. Those living near the common have say the festival was like an invasion.  
(共有地の近くに住んでいる人は、祭りは侵略のようなものだと言っている)

(28) は逸脱の度合いがもう一段進み、抽象から具体、現実から虚構などのカテゴリーの変容が関わる。たとえば (28a) では、コオロギや蜜蜂の羽音、子どもたちの声が、頭の中を動き回る重い物体として描写されている。ここでは姿形をもたない音が物体として捉えられており、もはやカテゴリーのずらしという次元ではおさまらず、矛盾するカテゴリーへの転換が見られる。(28b) では人間がアイデアにたとえられており、肉体をもつ人間が、その勇ましさが並外れているゆえに抽象的概念へと変容させられている。どちらも主体独自の事態認識が反映されているために価値変容も関わっていると言えるが、ここではむしろ虚構的なイメージが創り出されているという点が重要であろう。

#### (28) カテゴリー変容

- a. The sounds of summer – crickets, bees, the distant shouts of children – were like heavy objects being moved around in her head.  
(夏の音—コオロギや蜜蜂、遠くに聞こえる子ども達の叫び声—が頭の中を動き回る重い物体のようだった)
- b. These men [= Sir Henry Curtis and his army] were like Platonic ideas: they were not life as one had already begun to know it.  
(これらの人々はプラトンのアイデアのようだった。すでに気付かれつつあったように、彼らは命ある存在ではなかった)

以上、like 構文の字義的用法を下位タイプに分類し、それぞれにおいて比喩的拡張にどのような側面が関わるかを論じた。しかし like 構文の直喩は、常に下位タイプのどれかひとつに位置づけられるとは限らない。むしろ多くが複数の構文的意味を継承した融合型を示す。たとえば (29) は、カテゴリーの変容、評価的描写、アナロジー的直喩などの複数の用法に動機付けられていると考えられる。

#### (29) 融合型

- It [= the kiss] *made her warm, relaxed, and she didn't try to escape*. It was like the sun coming out after a long time of darkness.  
(キスをされるとあたたかくて安らいだ気持ちになり、逃げようという気がなくなった。それは長い長い夜が終わりようやく顔を出した太陽のようだった)

ここではまず、キスというできごとが太陽として捉え直されているという点で、行為から具体的存在へというカテゴリーの変容が関わっている。これはもちろんキス一般のことを指しているのではなく、彼女が経験したまさに一回限りのできごとであるという点で、個人的な価値の変容である。同時に太陽にたとえることによって、具体的な性質の描写がなされている。唇に感じる熱が誇張的に描かれ、太陽がもつ肯定的なイメージによってその温かみの心地よさが伝えられる。さらにアナロジー的比較によって、両者の間に写像関係が生まれる。たとえば太陽からの熱、すべてを照らす光の絶対的な包容力、太陽が昇るまでの夜の時間などが、唇に感じる体温や、精神的な安心感、そこに至るまでの日々といったものに対応づけられる。このような類似関係の一部は *made her warm, relaxed, and she didn't try to escape* によって部分的に示されているが、もっと列挙することも可能だろう。このように比較の根拠が示され、類推が促されるのはアナロジー的直喩の特徴である。

単純なアナロジー的直喩と (29) のような融合型の直喩の違いは、前者の場合当該の特徴をもつものであれば基本的になんでも媒体に選ばれうるのに対し、後者では何が媒体に選ばれかがきわめて重要だという点である。アナロジー的直喩の場合、たとえば「豚に真珠」でも「猫に小判」でも「馬の耳に念仏」でも大して意味は変わらない。価値の分からないものに良いものを与えるのは無意味だということが伝わればよいので、実際に何が比較対象に選ばれるかは本質的ではないのである。しかし融合型の場合は、媒体として選ばれる対象がもつイメージや、その対象が他のものと切り結ぶ関係など、様々な側面が目標領域に写像される。したがって、その媒体でしか伝えられない意味があり、豊かな解釈がもたらされる。

以上、like 構文においても、字義的用法の意味に動機付けられて様々な修辭的機能がもたらされることが示された。as...as 構文および than 構文と同様に、誇張的な叙述を行うことも重要な修辭的機能ではあるが、like 構文はその他にも多様な機能を果たしうる。さらに like 構文の場合、趣意と媒体の間ドメイン性がその修辭性に深く関わるのが大きな特徴である。たとえばアナロジー的直喩は、間ドメイン性を利用して、新たな類似性を創り出すことができる。例示や描写の用法は、虚構的シナリオを喚起させることで、誇張して聞き手に伝えたり、面白がらせたり、話し手が抱く評価をほめかしたりすることができる。ここに関わる虚構性という特徴も、現実との乖離という意味で広い意味での間ドメイン性に含めることができる。さらに既存の語彙では自分の経験を言い表すことができないとき、結果としてカテゴリーの変容が行われる場合にも間ドメイン性が関わっている。ただし意図的に行われるのではなく、かけ離れたものにたとえられているほど、話し手の主観的な事態認識のありかたに気付くことができるという意味で、アナロジー的直喩の場合とは異なる。

## 6.6 主観的叙述としての直喩

この節では、ここまでの分析で残されている課題について検討する。本研究では、「比較を表すことができるものであれば原則的にはすべて直喩として用いられうる」という Israel et al. (2004: 125) の主張を検証するために、異なる比較構文を取り上げ、各構文の直喩用法の比率を求めた。その結果、*as...as* 構文、*than* 構文、*like* 構文など、類似性スペクトラムの中間辺りに位置づけられる構文が、直喩として用いられやすいことが示された。しかし、*similar* 構文は例外的なふるまいを見せ、*like* 構文とほぼ同じような意味関係を表すにも関わらず、直喩としては用いられにくいことが判明した。

*like* 構文と *similar* 構文のふるまいの違いはなぜ生じるのだろうか。比較構文が直喩として用いられるためには、単に類似関係を表すだけでは不十分で、ほかの重要な意味的特徴をもつと考えられる。本研究では、*like* 構文と *similar* 構文の対比を手がかりに、主観的叙述として機能することが直喩の重要な特徴であることを主張する。

### 6.6.1 *like* 構文と *similar* 構文の違い

この節では、*like* 構文と *simile* 構文を比較し、なぜ前者のみ直喩の構文として慣習化しているのかを考察する。その要因を探ることで、直喩として用いられる比較構文の重要な特徴が明らかになると考えられる。

*like* 構文と *similar* 構文は、類似性スペクトラムにおいて占める位置はほぼ同じである。Oxford English Dictionary (OED) によると、使用されはじめた時期は異なるものの (*like* は古英語から用いられているのに対し、*similar* はラテン語からの借用で 16 世紀頃から頻繁に用いられるようになった)、両者とも同じような意味を表す。以下に示すのは OED の定義である。

#### (30) a. *like* の意味

1a. Of similar or identical shape, size, colour, character, etc., to something else; having the same or comparable characteristics or qualities as some other person or thing; similar; resembling; analogous.

#### b. *similar* の意味

2a. Having a significant or notable resemblance or likeness, in appearance, form, character, quantity, etc., to something stated or implied (though generally without being identical); of a like nature or kind. Of two or more persons or things:

表 6.6 like 構文と similar 構文のジャンル別相対頻度

A is like B	高 (200%以上)	対面の会話 (S)、詩 (W)、教室の対話 (S)、 オーラル・ヒストリー (S)
	低 (10%以下)	学術論文：工学 (W)、非学術的テキスト：工学 (W)、 公的ドキュメント・報告書 (W)、学術論文：医学 (W)、 行政・社内文書 (W)
A is similar to B	高 (300%以上)	学術論文：医学 (W)、実演 (S)、学術論文：自然科学 (W)、 学術論文：工学 (W)、非学術的テキスト：医学 (W)、 非学術的テキスト：自然科学 (W)
	低 (20%以下)	対面の会話 (S)、スポーツ紙 (W)、詩 (W)

resembling or like one another.

しかし両者が直喩として用いられる比率は、それぞれ 57.0% と 2.6% とかなり隔たりがある (6.3.2 節の表 6.3 を参照)。similar 構文が直喩として用いられにくい要因は、(i) 比較の根拠が客観的で実証可能なものであること、(ii) 比較対象が現実世界に属する特定の対象であることという点が深く関わっていると考えられる。以下では、これらの点が直喩としての用いられやすさにどのように影響を与えるかを論じる。

第一に、similar 構文のほうが、客観的、科学的、厳密な比較に基づく類似性を表す構文として定着している。この根拠としてまず、両構文の使用領域の違いが挙げられる。Sketch Engine を用いて両構文のジャンル別相対頻度を調査したところ、表 6.6 に示す違いが見られた。相対頻度とは、コーパス全体の頻度と比較した特定のジャンルでの頻度のことで、100% を越えるほど高頻度であることを意味する。表からも明らかのように、like 構文と similar 構文は使用ジャンルのすみわけがなされていると言える。対面の会話など形式ばらない場面や詩という特殊なジャンルでは、like 構文のほうが similar 構文よりも高頻度で用いられる。反対に、医学、工学などの学術論文をはじめとするフォーマルな文体では similar 構文のほうが高頻度である。similar 構文は科学的な正確さが求められる文体で用いられることから、厳密で客観的な類似性を表すのに適していると考えられる。

さらに、共起副詞という点でも両者は違いを見せる。同じく Sketch Engine の Word Sketch というシステムを用いて比較すると、like 構文は、*really, just, almost, actually* など類似性の意味合いを感情的に強めるような語が高頻度で共起する。一方 similar 構文の場合、程度

を限定する副詞 (*broadly, somewhat, superficially, roughly* など) や、意外性を強調する副詞 (*remarkably, strikingly, startlingly, surprisingly* など) に加えて、比較の観点を明確にする副詞 (*functionally, structurally, chemically, physically* など) が好まれる。このことから、*similar* 構文のほうが、類似性の程度や比較の観点を厳密にして述べるときに用いられることがわかる。

一般的に比較の観点(色、形、音、様態、感情など)が明示的に述べられると、字義的比較と直喩の区別が曖昧になると言われている。たとえば「ような」を用いた日本語の直喩の「夏の空のような色」や「恋のような感情」は、単に類似性を指摘しているのか、それとも比喩的にたとえているのかの判断が難しい(cf. 佐藤・佐々木・松尾 2006: 200)。英語の場合、*like* 構文と *similar* 構文のどちらを使うかによって、曖昧性がいくらか軽減される。以下を比べてみよう。どちらの例でも、「音」という比較の観点が明示されている。

- (31) a. Woomph-woomph, woomph-woomph! Woomph-woomph! It was like the noise made by a steam locomotive pulling out from a station.

(ハッハッ、ハッハッ！ハッハッ！それは蒸気機関車が駅から発車しようとする音のようだった)

- b. [I]t seemed to him that the sound of the wind in the trees was very similar to the sound of a rushing stream and also to that of a roaring fire.

(彼には木立をわたる風の音は小川の流れる音あるいは火が燃える音によく似ているように思えた)

(31 a) の *like* の例では、少年が森の中に住む怪物に今にも追いつかれそうになっているシーンが描かれており、その怪物が迫ってくるときの息切れの音が蒸気機関車の音にたとえられている。ここでは、蒸気機関車という人間よりもはるかに速く、巨大で重い鋼鉄の塊の音が引き合いに出されることで、それに追いかけている少年の恐怖心が伝わってくる。したがって厳密な意味での類似というよりは主観的な印象に基づく表現になっている。

これに対し、(31 b) の *similar* の例は客観的な類似を表していると考えられる。なぜなら、この表現の直後に *On experimenting, he found that they were all within the frequency range of 256 to 320 cycles per second* 「実験によって、どの音も 256~320Hz の範囲内であることが明らかになった」という文が後続するからである。この部分から、この比較が印象論的なものではなく、客観的に数値化できるような類似性に基づいていることが分かる。両者は形の上では非常に似ているが、*like* の例は音という観点で間接的にある対象を別の対象になぞらえているのに対し、*similar* の例は「音」と「音」を直接比較していると言えるだろう。

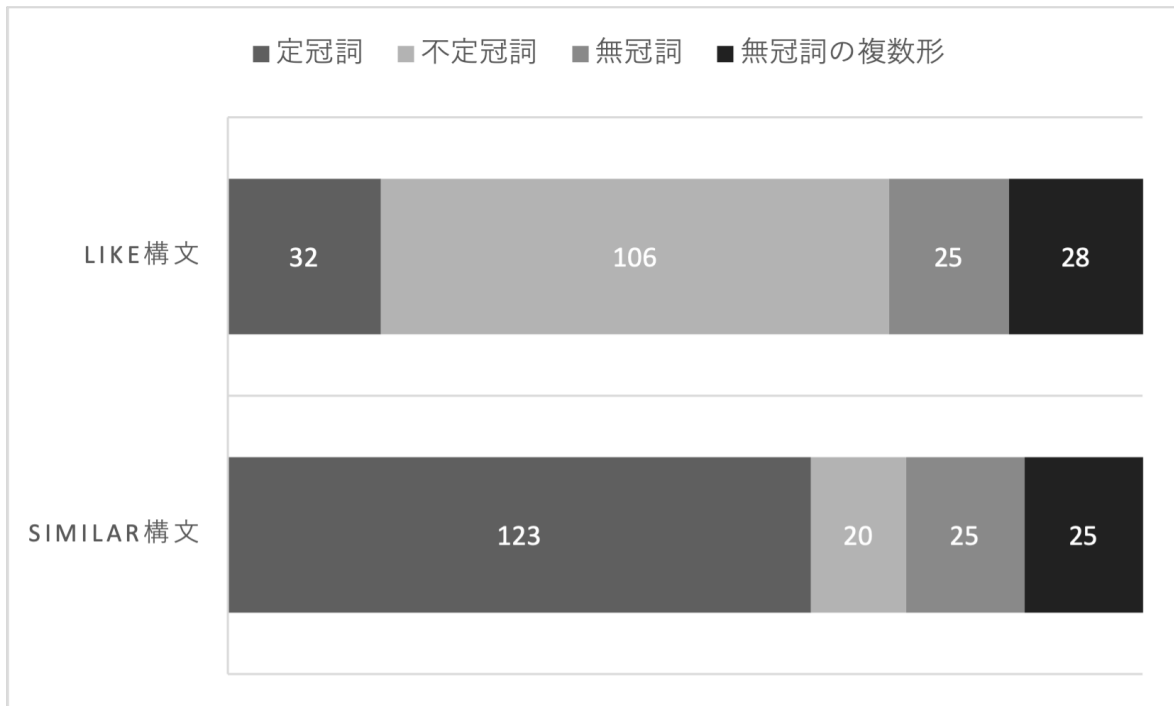


図 6.4 like 構文・similar 構文と冠詞

like 構文と similar 構文の第二の違いは、比較対象の名詞句の定性に関わる。*like* に後続する名詞句と *similar to* に後続する名詞句の冠詞の種類を調べたところ、前者は不定冠詞 (*a(n), any, some* など) を、後者は定冠詞 (*the*, 所有代名詞など) をとる傾向があることが明らかになった (図 6.6.1 を参照)。

この分布の違いは何を反映しているのだろうか。具体例を見ながら、両者がとる名詞句の違いを考察する。まず like 構文は、*he was like a chameleon* 「彼はカメレオンのようだ」や *this quadrilateral is like a square* 「この四辺形は正方形に似ている」における *a chameleon* や *a square* のように、前後の文脈で現れず、特定の指示対象をもたないものが比較対象に選ばれることが多い。これらは非指示的 (non-referential) な名詞句である。言い換えれば、*he* 「彼」や *this quadrilateral* 「この四辺形」とは異なり *a chameleon* 「カメレオン」や *a square* 「正方形」は想像上のプロトタイプ的な概念を表している。

一方 *similar* は指示的 (referential) な名詞句をとる傾向が強く、典型的には定冠詞を伴う。不定名詞句が用いられる場合でも、次の例のように現実世界に特定の指示対象をもつものを表す。

(32) The incident was similar to **a bomb blast** at the Free University of Brussels on Dec. 1,

1989, when a suitcase exploded in an auditorium (injuring three students) and two other bombs failed to detonate.

(その事故は 1989 年 12 月 1 日ブリュッセル自由大学で起きた、講堂でスーツケースが爆発し 3 人が負傷しほかの 2 つの爆弾が不発に終わった爆発事故と似ている)

ここで不定冠詞が用いられているのは、聞き手にとって新情報だからである。しかし後続修飾句によって示されるように、この名詞句は時間的、空間的に定位される具体的なできごとを表しているため、特定の指示対象をもつといえる。要するに、like 構文と similar 構文がとる名詞句の定性の違いは、比較対象が現実世界に属する特定の対象であるか、それとも一般的に想起されるプロトタイプ的な存在なのかという違いを反映していると考えられる<sup>\*11</sup>。

like 構文のように補部に不定名詞句をとる比較構文は、形の上では比較を表しているが、語用論的にはトピックとなっている対象の叙述として機能することがある。Fortescue (2010) は、個別具体的な対象 (token) とカテゴリー的なもの (type) が比較される場合、その文は属性叙述を表すことができると述べている。

(33) [E]xpressions for the identification of a (token) thing with a (type) category should lie close to the boundary between these two domains [= similitude and predication] and that such expressions should be recruited for expressing the ascription of category membership to a thing in the adjacent domain of predication. (Fortescue 2010: 139)

ここでは、比較構文の形をとっていても、比較対象がカテゴリー的な概念を表す場合、その効果は極めて叙述に近くなることが指摘されている。つまり比較構文は、異なる二者を対比させその類似性や差異性を強調する機能だけでなく、トピックとなる対象の性質や特徴を叙述する機能があることを意味している。この違いは、コピュラ文の指定文と措定文の違いに概ね対応する。両者は述部の名詞句が特定の指示対象をもつかどうかという点で異なる。指定文の *John is the president of the United States* と措定文の *John is a student* を比べると、前者の *the president of the United States* と異なり、後者の *a student* は主語の属性を叙述するは

<sup>\*11</sup> ただし、like によって導入された対象が、後続文脈において定名詞句で言及されることもある。たとえば、*Their love was like a bonfire behind someone else's high fence. You stood in the dark watching the glow and the flare of fireworks, and it never occurred to the other people to invite you in* 「彼らの恋は、高塀の奥で燃えるたき火のようだった。あなたは暗闇に立ち尽くしその光と炎を見つめることしかできなかったし、他の人のもとで火がおこり、あなたを中に招いてくれるようなこともなかった」では、*a bonfire* が後続文で *it* で言及されている。これが可能なのは、仮想世界のスペース内で叙述が重ねられるなら定名詞句によって言及することができるからである。これは、*I want to marry an American. He should be rich* における *he* の用法と同じである (cf. Radden and Dirven 2007: 94-96)。

たらきがあり指示対象をもたない<sup>\*12</sup>。

similar 構文によって典型的に表される比較は、比較対象が特定の指示対象をもつために、純粋な比較として解釈される。比較対象同士の類似関係が叙述されているのである。一方 like 構文の場合、字義的な用法であっても、カテゴリー的、すなわちプロトタイプの概念が引き合いに出される傾向が強く、トピックとなっている対象の性質や行為の叙述として解釈される。この違いが、両者の直喩用法の比率の違いをもたらししていると考えられる。比較構文が直喩として用いられるためには、単に類似関係を表すだけでは不十分で、トピックの叙述として機能することが求められる。さらに、客観的な根拠に基づく叙述ではなく、認知主体の主観的な認識を反映していることも、直喩として解釈されるためには重要な特徴であると言えよう。

## 6.6.2 主観的叙述としての直喩

直喩は、トピックとなっている対象の主観的な叙述として機能する比喩である (Ortony 1993, Bredin 1998, Israel et al. 2004, Cuenca 2015)。このことは、like 構文と similar 構文の直喩率の差だけでなく、そのほかの現象によっても裏付けることができる。本節では、媒体名詞句の定性が修辞性判断に与える影響一般や、差異性を表す構文と類似性を表す構文の違い、さらには比較構文の形をとらないが直喩と同様の修辞的機能をもつ表現を取り上げ、トピックの主観的叙述として機能することが直喩の重要な特徴であることを論じる。

### 媒体名詞句の定性と直喩

媒体名詞句の定性は、直喩と字義的比較の区別に大きく関わる。たとえば Svartengren (1918: 463) は、中英語～現代英語初期の直喩表現を分析し、*the sky* や *the devil* などのをのぞき直喩が定冠詞をとることは稀で、多くが *any*, *a/an* などの不定冠詞か無冠詞をとることを指摘している。さらに Cameron (2003: 58-61) は、メタファーの判断基準として、意味的あるいはディスコース的に不一致 (incongruity) が感じられるか否かという点を挙げているが、ここでのディスコース的な不一致とは前後の文脈において言及されているかどうかを意味する。ディスコース的な不一致は不定名詞句で表されることによって強く示唆されるため、特にドメイン内比較の場合、名詞句の定性が直喩の判断に大きな影響を与えうることを意味する。

名詞句の定性と直喩の関係を論じた研究として、Addison (1993) が挙げられる。Addison は、直喩と字義的比較の区別は程度問題とした上で、複数の要因がその区別に影響している

<sup>\*12</sup> コピュラ文の分類については Mikkelsen (2005) に簡潔にまとめられている。



と述べている。比較される対象間の概念的距離もそのひとつに含まれるが、特に重要な要因として挙げられるのは、「一般性」および「存在の領域」の違いが修辞性に関係するという点である。たとえば次の2例はきわめてよく似ているが、「一般性」と「存在の領域」という点で異なるために、修辞性の程度が異なるという。前者は Byron の『ドン・ジュアン』からの一節で、ここではドン・ジュアンが戦場で見つけた生き残りの少女と周囲の死体が比較されている。後者は Shelly の『アドネイス』に見られる表現で、同じく生者と納骨堂におさめられた死体が比較されている。

- (34) a. And she was chill as they. (Lord Byron, *Don Juan*, 8.95.1)  
 b. We decay like corpses in a charnel. (Percy Bysshe Shelley, *Adonais*, 39.6–7)

Addison は、(34a) も誇張の意味合いを含むという点でやや修辭的であることを認めつつ、(34b) のほうがより修辭的だと論じている (同上: 414)。なぜなら Byron の死体は見知った人物のもので、彼女の隣に実際に横たわっているのに対し、Shelly の死体は不特定の納骨堂におさめられている死体一般を表しており、実際には不在のものだからである。つまり一般性の差および同じ現実世界に属するかどうか修辭性の違いをもたらすという。

上の指摘は、6.6.1 節で示した Fortescue (2010) の指摘と深く関わる。Fortescue は、個別具体的な対象 (token) がカテゴリー的なもの (type) と比較される場合、その文は属性叙述を表すことができると主張したが、個別具体的なものとカテゴリー的なものの違いは、Addison (1993) でいう「一般性」と「存在の領域」の違いに対応する。すなわち、趣意と媒体の特定性 (specificity) に差があることが、修辭性の判断一般に寄与すると言える。次の例を見てみよう。

- (35) a. Gordon is as innocent as his baby. [token–token]  
 b. Gordon is as innocent as a baby. [token–type]  
 c. Animals are as innocent as babies. [type–type]  
 d. A good neighbor is as good as a faraway friend. [type–type]

(35a) は具体的な指示対象と比較されており、ゴードンが大人でありながら自分の子どもと同じくらい純粋であることを述べた字義的な比較だと判断されるだろう。一方 (35b) は比較対象が不定名詞句で表されることでタイプとして解釈され、赤ん坊の典型的なイメージによってゴードンの性質を誇張的に叙述した直喩だと判断されやすい。トークン同士の対称的な比較は字義的比較として解釈されるのに対し、トークンとタイプの非対称的な比較は叙述として機能し、結果的に直喩として解釈されやすいことが分かる。

(35c) および (35d) は、両者とも比較される二者が特定の指示対象をもたない総称文として解釈される。前者は動物一般と人間の赤ん坊一般を比べ、両者が同等に悪意をもっていないことを表しており、後者はよき隣人というものが遠方の友人と同じくらいよいものであることを表している。これらタイプ同士の比較は、字義的な比較として、あるいは修辞性の低い直喩として解釈できる。したがって名詞句の特定性の非対称性が存在するとき、より具体的に言えば主語と述部が「トークン-タイプ型」のとき、もっとも直喩として解釈されやすいと考えられる<sup>\*13</sup>。

### 類似性の叙述と直喩

6.3.2 節で類似性を表す構文のほうが差異性を表す構文よりも直喩として用いられやすいことを示した。直喩において類似性が重要だということは、直喩表現がメタファー的な思考プロセスの反映であることを考えればまったく不思議ではない。メタファーとは、抽象的な概念や既存の言語表現では適切に表せないものごとを、他のより身近な経験との類似性を見出すことで理解を深めていくプロセスだからである。一方これとは逆の差異性を見出していくプロセスは、タクソノミー的分類に代表されるような、合理的で分析的な思考の基盤であると考えられる。

類似性を表す構文と差異性を表す構文は、比較の根拠を述べるのがトピックの叙述として機能するかどうかという点で異なる。類似性を表す構文の場合、比較対象や両者の類似点について語ることが、トピックとなっている対象の叙述につながる。比較対象の特徴が叙述対象の特徴として写像されるからである。たとえば *Love is like a delicate orchid* 「愛は繊細な蘭のようだ」では、蘭の特徴を述べること、たとえば *it has to be watered and kept warm* 「水やりをして温度を保ってやらなければならない」と述べることはすなわち愛について語ることにつながる。類似性を語れば語るほど、叙述対象に豊かなイメージがもたらされ、新たな理解を与えることができるのである。

一方差異性を表す構文は、比較される二者の類似や未分化状態を前提に、差異を強調することでトピックとなっている対象が有している特徴を際立たせるものである。比較対象の叙述を重ねてもトピックとなっている対象の特徴が明らかにならないため、トピックについて直接語る必要がある。たとえば *The passage outside was unlike the ones on the floor above* 「(部屋の) 外の廊下は上階の廊下とは違っていた」と述べる場合、*it was as wide as a small*

<sup>\*13</sup> ただしトークンとタイプを比較する場合でも、常に直喩として機能するわけではない。比較対象が客観的な基準としてはたらく場合は、字義的に解釈される(例: *His pictures are as big as a match box* 「彼の絵はマッチ箱と同じくらい大きさだ」)。詳しくは 6.4 節参照。また後述するように、詩的な直喩もこの原則から外れ、比較対象に指示的 (referential) な名詞句をとり、比較と叙述の境界があいまいになることがある。

*room, but there were bulky pieces of old furniture against the walls* 「小さな部屋くらいの広さがあるのに、壁側に古い家具が山ほど積まれていた」のように、後続部分ではトピックとなっている廊下の様子について詳しく語られる必要がある。外の廊下の状況は、上階の廊下を持ち出さなくても独立して存在するものだが、比較されることによってその特殊性に認知的な際立ちが当てられる。もし上階の廊下について、*they were kept clean and tidy, and the walls were decorated with dried flowers* 「清潔で片付いていて、壁はドライフラワーで飾られていた」のように語ったとしても、叙述対象のイメージが豊かになることはない。Xではないものとして、消極的に規定されるだけである。実際に本研究で分析したデータで差異性を表す構文が根拠の説明を伴う場合、トピックとなっている対象を直接叙述するパターンがほとんどで、比較対象の叙述による消極的規定はごくわずかしか見られなかった。

ただし、差異性を表す比較もレトリックとして機能しうる場合がある。「反直喩（二つのものを引き比べたうえで、その違いを指摘する表現）」(佐藤・佐々木・松尾 2006: 197)や「緩叙（いわんとすることの対義的な語句を用い、それを否定することによって、趣旨を表す技法）」(同上: 394)がこれに当たる。具体的には、次のようなものが挙げられる。

(36) Love is not like a TV or a light bulb. It cannot be turned off and on.

(愛はテレビや電球とは違う。付けたり消したりすることはできない)

(Tim Howard. *The ABC's of love: 26 ways to show God's love.*)

反直喩は、読み手の想定を否定することで、同一性や類似性を逆説的にほのめかすレトリックである。否定することで、隠されていた同一性あるいは類似性を浮き彫りにする効果があり、結果として読み手に意外な発見をもたらすことになる。しかしこのようなタイプも厳密には類似性の否定という形をとり、差異性を直接表す構文を反直喩として用いることは極めて稀である<sup>\*14</sup>。

<sup>\*14</sup> 類似性という概念は、Fortescue (2010)でも主張されているように、実際には同一性と差異性の間に横たわる段階的な概念であり、異なる二者間に見出される類似性の強さは程度問題だと言える。山梨 (2015)によると、日本語の場合「AはまさにBだ」「AはBも同然だ」のように強い同一性を表す表現から、「AはほとんどBだ」「AはさしずめBといったところだ」のように弱い同一性を表す表現、さらには「AはBではあるまいし」「AはBじゃあないんだから」のように同一性を否定する表現まで様々な表現が直喩として用いられる。このことは、認知主体が状況によってAとBの間に同一性を強く認識することも差異性を強く認識することもあることを反映している(同上: 82-88)。このように直喩に関わる認知プロセスを段階的なものとして捉えるなら、同一性の認識へと最大限にシフトしたときに、隠喩との境界も曖昧になることが予想される。しかし同一性の否定を表す構文と、差異性を直接表す構文を同じ認識プロセスを反映するものとして扱ってよいかという問題は残されている。

### 程度副詞による叙述と直喩

段階的比較構文は、形容詞を修飾しその性質の程度を限定する句あるいは節を伴う構文と隣接するカテゴリーである。6.5.1 節で論じたように、as...as 型の直喩の第二の as 句は形容詞を修飾する副詞句としてはたらく。She is (as) light as a feather において、as a feather は、very much や extremely などの副詞句が用いられる場合と同じように軽さの程度を強調している。as 句は主語よりも形容詞との結びつきが強く、慣用的直喩の多くは、形容詞と as 句のセットの形で辞書に記載される。さらに慣習化が進むと、feather-light のような複合語の形や feathery のように派生形容詞の形を取り、light の下位語として「軽さ」という意味カテゴリーの一部を表すことができるようになる。

比較構文ではなくても、形容詞の程度を限定する副詞節を伴う構文が誇張的に用いられるとき、直喩と同じような効果をもたらす。特に、enough to 構文は誇張的に用いられやすい。enough to は程度を表す付加詞のひとつで、最低限のラインを示すことでスケール上の位置を限定するはたらきがある（例：He had studied enough to scrape a pass 「彼はかろうじて合格する程度に勉強した」；Huddleston and Pullum 2002: 724）。この最低限のラインに現実にはありえないような厳しい状況が設定されると、次の (37) のように直喩的な表現になる<sup>\*15</sup>。

- (37) a. [...] during the summer when temperatures get hot **enough to** boil rocks  
 (岩がゆであがるほど気温が高くなる夏の間)
- b. A cup of coffee hot **enough to** scald a rhino  
 (サイをやけどさせるほど熱いコーヒー)

so...that 構文も、so が程度が高いことを表し、that 節がそれによって引き起こされる結果を示すことで、形容詞の意味を限定するはたらきがある（例：The case was so heavy that I couldn't lift it 「この箱はあまりにも重くて持ち上げられない」；Huddleston and Pullum 2002: 967）。この構文も次のように誇張的に用いられ、「～かのような」という直喩的な意味を表すことができる。

- (38) a. Miranda was hot. **So** hot **that** the top of her head felt like the bottom of a frying pan.  
 (ミランダは暑かった。あまりにも暑いので頭の天辺がフライパンの底のように感じた)
- b. It was eight o'clock and **so** hot **that** the heat was visible.  
 (8 時になり、あまりにも暑いのでその熱が目に見えた)

<sup>\*15</sup> (37) と (38) は COCA コーパス (Corpus of Contemporary American English) から得た例である。

このように、as...as 構文の直喩は、誇張的な程度副詞句／節をとりうる構文と隣接するカテゴリーだと捉えることができる<sup>\*16</sup>。どちらも形容詞の意味を精緻化する過程で、修辞性が生じる。

以上、趣意と媒体の非対称性が修辞性判断に影響を与えること、類似性を表す構文が直喩として用いられやすいこと、さらには程度副詞句との意味的な連続性があることを指摘した。これらの特徴はすべて、直喩がトピックの叙述として機能することを裏付けている。

### 6.6.3 例外的な直喩

趣意と媒体の非対称性に関して、例外的な直喩が存在する。ひとつはアナロジー的直喩で、もうひとつは詩的な直喩である。

まず、アナロジー的直喩は、趣意と媒体が特定性という点で対称的関係をなしていてもかまわない。6.5.2 節の like 構文の分析では、他の修辞的用法と異なり、アナロジー的直喩は対称的比較を表す用法に動機付けられていることを指摘した（表 6.5 を参照）。次に示すのは、その一例である。

(39) ((18) の再掲)

[G]ood poems are like good football teams, *in that they get 'better results'*.

(よい詩とはよいサッカーチームのようなものだ、どちらも「よい結果」をもたらす)

ここでは趣意の *good poems* と媒体の *good foot ball teams* がどちらも総称的なタイプを表しており、特定性の差が見られない。それにも関わらず、アナロジーとして解釈されうる。

また、similar 構文において例外的に修辞性がやや感じられる例も、アナロジー的直喩の一例と判断できるものであった。(40) では、王家の婚姻とさいころゲームの間にアナロジー的關係が成立しており、後続部分で類似性の説明が示されている。

(40) [T]he dynasts [...] constructed elaborate alliances by their marriages. **These alliances were similar to the games of dice much favoured at the time: the marriages might or might not be successful; they might or might not have political consequences.**

(王朝は婚姻によって複雑な協力関係を築いた。これらの姻戚関係は当時好まれていたさいころ

<sup>\*16</sup> 程度を表すそのほかの構文、たとえば *too ... to* や *sufficiently ... to* は誇張的には用いられにくい。その要因に関してはさらなる分析が待たれる。

ゲームに似ている。結婚は成功するかもしれないし成功しれないかもしれない、政治的な影響を与えるかもしれないし与えないかもしれない。)

上の例では、*these alliances* 「王家の姻戚関係」と *the games of dice much favoured at the time* 「当時流行っていたさいころゲーム」という特定性の高いもの同士が比較されているが、両者の意外な構造的類似が指摘されているために、アナロジー的直喩と解釈されうる。アナロジー的直喩の場合は、similar 構文のようにトピックの叙述として機能しない構文でも、修辭的に用いられうると考えられる。

### 詩的な直喩

本研究で分析対象とした直喩の例は、その多くが日常的な表現であった。最後に、詩的な直喩がどのように逸脱しているのか、その特徴についても見ておきたい。

Fishelov (1993) が述べるように、詩的な直喩は、一般的な直喩がもつ特徴のうちいくつかは逸脱することでさらに修辭性が高まる (6.2.3 節を参照)。一般的な直喩の多くはトピックの叙述として機能する一方で、詩的な直喩の場合はトピックの叙述と対称的比較の境界が曖昧になることがある。叙述と比較が曖昧になるとはどういうことか、具体例を見ながら考察する。

次の例は、イギリスのロマン派詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770–1850) の詩 “I Wandered Lonely as a Cloud” からの一節である。この詩は、詩人である「私」が散歩の途中で黄色水仙の群生を見かけたときの感動をうたっている。詩は、「私」を「雲」にたとえる直喩からはじまっている。

#### (41) I wandered lonely as a cloud

That floats on high o'er vales and hills,

When all at once I saw a crowd,

A host of golden daffodils;

(谷を越え山を越えて空高く流れてゆく

白い一片の雲のように、私は独り悄然としてさまよっていた。

すると、全く突如として、目の前に花の群れが、

黄金色に輝く夥しい水仙の花の群れが、現れた。)\*<sup>17</sup>

ここでは、青空にぽかりと浮かぶ一片の雲が、ある詩人がさまよい歩く様子、あるいはひとりぼっちでいる様子に重ね合わされている。ここで解釈が問題になるのは、1行目に現れる

\*<sup>17</sup> 平井正穂訳。岩波書店『イギリス名詩選』より。

*a cloud* である。この媒体名詞句は不定冠詞の *a* をとっているため、一般的には特定の雲ではなく、プロトタイプ的な雲として解釈される。ところが2行目以降を読むと、*a cloud* を先行詞にとる関係節が続いており、雲のイメージがかなり具体的に描かれていることが分かる。Steen (1999) によると、このように媒体となる名詞句が修飾句や節などを伴い構造的に複雑になると、認知的な際立ちが上がりトピックらしさ (topic-hood) が高まるという<sup>\*18</sup>。それによって、表現のメタファーらしさが失われ (de-metaphorization)、字義的な解釈とメタファー的な解釈の両方が可能となる。

(42) In fact, the possibility for independent topic-hood of the cloud in line 2 affords it such presence in the poem that it may lead to a form of de-metaphorization that is close to the phenomenon of metaphor realization (Hrushovski 1984)<sup>\*19</sup>, which involves the conflation of the literal and non-literal frames of reference in the text world. The second line creates the possibility of our imagining the poet as actually seeing a real cloud in the sky as he walks across the vales and hills. (Steen 1999: 518)

結果として、ここでの「雲」は散歩している途中で詩人が実際に見かけた雲として解釈することが可能になる。関係節に含まれる *vales* 「谷」や *hills* 「丘」も同様に、詩人が散歩している途中に見かけた現実の風景として解釈されうる。その場合、この表現は詩人の様子を叙述しているというより、詩人と雲を直接比較していると捉えられる。

しかし一方で、メタファー的な解釈も残される。関係節内の動詞 *floats* が現在形をとっており、過去形で語られる具体的なエピソードと対比されることで、谷や丘をわたる雲の普遍性や抽象性も依然として保たれているからである。つまりここでは、目の前に浮かぶ雲と自分を比較しつつ、一般的な雲にたとえて自分の状態を叙述するという二重の解釈が可能になっている。具体的な対象がもつ豊かで鮮明なイメージと、プロトタイプ的な概念が喚起する様々な慣習的イメージの両方が関わることで、より修辞性の高い表現になっていると言えよう。このような解釈の曖昧性も、詩的な直喩が持つ重要な特徴のひとつだと考えられる。

<sup>\*18</sup> 構造の複雑性と詩的な直喩の関係は、6.2.3 節で示した Fishelov (1993) の NPS モデルのうち、[2] の Length に対応すると思われる。媒体名詞句が長いことは、詩的な直喩の特徴のひとつとされる。

<sup>\*19</sup> Hrushovski (1984) は、T.S. Eliot の “Prufrock” という詩における霧の描写が、ロシア・フォルマリズムのなかで提唱された *metaphor realization* という現象を体現していると述べている。*metaphor realization* とは、“an image, once presented to the reader’s consciousness (not even in words, but through gap-filling of a metaphor), becomes ‘real,’ enters the fictional world” 「イメージが読み手の意識上に提示されると (語で直接表されておらずギャップから間接的に想起されるものでも)、「現実的」なものとなりフィクションの世界に参加するようになる」(同上: 26) という現象を指す。

表 6.7 字義的意味と比喩的意味の対応関係 (= 表 6.5 の再掲)

	字義的用法	比喩的用法
as...as構文	形容詞の意味の精緻化	→ 誇張的な限定修飾
than構文	対称的比較	→ アナロジー的直喩
	例示	→ 虚構性を伴う例示
like構文	描写	→ 誇張的あるいは評価的な描写
	代用的カテゴリー化	→ (1) 心象の投影 → (2) 価値変容・カテゴリー変容

## 6.7 まとめ

本研究では直喩を修辭的比較とみなし、比較構文の字義的用法にどのように動機付けられ、またどのように逸脱しているのかという観点で直喩の修辭性を考察した。その上で、似ていないもの同士を比較することで意外な類似性を発見することが直喩の修辭性であるという従来の見方がどこまで有効か検討した。

まず、どのような比較構文が直喩として用いられやすいかを検討した。その結果、構文によってばらつきがあり、類似性スペクトラムの中間部を占めるものが直喩として用いられやすいことが明らかになった。次に、直喩と字義的比較の境界例を分析することで、趣意と媒体の間ドメイン性は、直喩の本質的な特徴ではないことを論じた。直喩は似ていないもの同士の間で意外な類似を見出すことが重要な特徴だとされてきたが、比較構文の修辭性には、誇張や評価的コノテーションの有無、比較の非対称性、根拠の主観性など、様々な要因が関わっている。また、直喩はどのような構文で表されるかによってその修辭的機能が異なると考え、字義的用法からの動機付けの問題を考察した。本研究では直喩構文として定着している as...as 構文、than 構文、like 構文を取り上げ、それぞれの字義的用法の意味記述を行うことで、各構文が異なる修辭的機能を発達させていることを示した。結果をまとめたものを表 6.7 に再掲する。

最後に、直喩は二者間の類似関係の叙述ではなく、あくまでもトピックとなっている趣意の叙述として機能することが重要な特徴であることを論じた。このことは、like 構文と similar 構文を対比することで明らかになる。similar 構文は like 構文と同様の意味を表すにも関わらず、直喩として用いられにくい。その理由は、similar 構文が、比較対象同士が同程



度の特定性をもつ対称的比較を表すからだと考えた。一方 like 構文は、趣意の名詞句が具体的な指示対象をもつものに対し、媒体の名詞句は指示対象をもたない一般的概念を表し、プロトタイプ的なイメージを喚起することが多い。このような非対称的関係があるとき、比較構文は叙述として解釈される。さらに、as...as 構文においても、趣意と媒体の非対称的関係が、修辞性判断に影響を与えていることを示した。また差異性を表す構文ではなく類似性を表す構文が好まれること、程度副詞句との意味的な連続性があることなど、その他の事実からも、直喩が叙述として機能することを裏付けられる。

直喩の修辞的機能は、媒体名詞句のイメージを想起させることによって、トピックとなっている趣意の主観的な叙述を行うことであると結論づけられる。そのとき、客観的な厳密さや正確さを犠牲にして、様々な目的で叙述がなされる。たとえば認知主体の主観的な認識を言語化したり価値判断を反映させたりすること、誇張的あるいは言葉遊び的に言い表すことで聞き手へより大きなインパクトを与えること、意外な類似関係に光を当て発見的推論を促すことなどが、直喩を用いることによって可能になるだろう。またこれらの目的に応じて、適切な直喩の構文が選ばれる。一方でこの一般化もまた必要十分な条件ではなく、詩的な直喩は通常の直喩がもつ特徴をのりこえて、さらに逸脱を見せると考えられる。比喩の創造性は、そのような逸脱のくりかえしのなかにその一片を垣間見せるのだろう。



## 第7章

# 結語

本研究では、認知言語学および語用論のアプローチから、英語における明示的なメタファー表現の修辞性を探究した。第一に、Langacker の認知文法観によってたち、言語表現の文法的・構文的特徴は話し手のものの捉え方を反映するという立場から、メタファー表現の表現形式上の違いを重視した。第二に、語用論的な観点も取り入れ、表現形式の選択には聞き手に対する伝達上の意図が大きく関わると想定した。本研究は、メタファーであることが明示されるとメタファーとしての力が弱まってしまうという一般的見解に対し、明示性の高いメタファー表現にも、それ独自の認知的・修辞的価値があることを主張するものである。

この章では、本研究の全体を通したまとめを行う。まず 7.1 節で、各章のまとめを行う。次に 7.2 節で、本研究がメタファー研究に対してもつ意義と残された課題について述べる。

### 7.1 各章のまとめ

本研究は、メタファー表現の文法的・構文的特徴と文脈的要因の両側面から、直喩をはじめとする、いわゆる“明示性”の高いメタファー表現の価値を問い直すことを試みた。

まず第1章では、メタファーが思考や認識において重要な役割を果たしているという20世紀以降主流となっている見方を導入したうえで、本研究ではメタファーのどのような側面に注目するかを述べた。近年は無意識のうちに用いられる表現に反映されるメタファー的認識が論じられることが多いが、本研究はメタファーが意識的に駆使される時、我々の認識やコミュニケーションにおいてどのような役割を果たすことができるかを問題にする。この問題に取り組むためにはメタファー表現の構文的多様性に注目する必要がある。メタファー表現の下位タイプとして、これまで直喩と隠喩が対比的に論じられてきたが、直喩は明示的な比較の形をとるがゆえに、隠喩に比べて劣っていると見なされることが多い。このような

見方に対し、その問題点を指摘しながら、メタファーの明示が本当にメタファーの力を弱めるのかを疑う必要があることを示した。その上で本研究では、メタファー表現の明示性と修辭性の関係を記述・考察することを目的とすることを述べた。

第2章では、メタファーの明示性を「メタファーとしての気付きやすさの程度」と定義し、聞き手にメタファー的解釈を促すような形式的・意味的・語用論的特徴を整理した。まず直喩の明示性に関わる特徴を明らかにするために、直喩と隱喩の意味および機能の違いについて、哲学、心理学、言語学などの分野で議論されてきたことを概観し、*like*の意味と機能が直喩を特徴づける重要な要素だと見なされてきたことを示した。しかし *A is like B* という直喩が *A is B* という隱喩よりも明示的であるというとき、明示的な比較構文の形をとるという意味で明示的とみるのか、*like* という明示的な標識を伴うという意味で明示的とみるのかという、ふたつの異なる見方が可能である。そこで本研究では、特に表現形式の特徴によってもたらされる明示性の違いを、「概念的自律性」、「プロフィール」、「解釈の方向づけ」という3つの次元から規定することを提案した。この規定によって、比較構文をとるかどうかは、趣意や媒体が言語化されるかどうかというプロフィールの問題として、標識を伴うかどうかは、聞き手にメタファーとして解釈するよう求めるかどうかという解釈の方向づけの問題として捉え直すことができるようになる。さらに明示性をこのように複数の次元から捉えることによって、直喩と隱喩の連続性を示すことができた。

第3章では、メタファー表現の構文的多様性を捉えるために、明示性に関わる3つの次元のうち特にプロフィールの次元に注目して、隱喩、直喩、メタファー標識の類型化を行い、本研究の分析に用いるための道具立てとした。隱喩は意味の緊張を伴う形をとるかどうかという観点から、目標領域を喚起する概念がプロフィールされるST型と、起点領域を喚起する概念のみがプロフィールされるS型に二分し、それぞれのタイプに当てはまる構文を整理した。直喩は比較の根拠が文法的に必須な要素としてプロフィールされるか否かによって、直接比較型と根拠介在型に分類した。メタファー標識については、崎田・岡本(2010)の発話事態モデルの考え方を取り入れ、コミュニケーションに関わる関係性のうちどれを主に指標するのかという観点で、体系的な分類を試みた。最後にケーススタディとして、この章で示した分類を用いて隱喩の分布を調査した。その結果、実際のテキストではST型の隱喩が大きな割合を占めるということが明らかになった。またS型の隱喩に関しても、その理解を動機付ける重要なパターンがあることが示された。

第4章では、第3章で示した分類を用いて、異なるテキストタイプにおけるメタファー表現の使用を分析し、それぞれのテキストタイプで特徴的に用いられるメタファー表現の修辭的役割を記述・考察した。本研究では植物や風景の描写におけるメタファー表現の使用に注

目し、科学的描写、広告的描写、詩的描写という3つのテキストタイプにおける分布を調査した。その結果、テキストが書かれた目的に応じて異なる表現が好まれること、またその目的を達成するために効果的な形が選択されていることが明らかになった。たとえば科学的描写では慣用化した名詞メタファーが多用され、メタファー的ラベリングによる知識の共有が行われていることが観察された。一方詩的描写では、同じく名詞メタファーによる指示が行われるが、この指示がディスコースの中で段階的に確立されるという点で科学的描写とは対照的であった。さらにこの隠喩的指示が確立される過程で、概念的自律性などの明示性の違いが重要な役割を果たしていることも明らかになった。テキストタイプ間の分布の違いや、ディスコースの流れにおける使い分けは、明示性の高い表現であっても、当該の文脈において重要な修辞機能をもつことを意味している。

第5章では、メタファー表現に関わる明示性のうち、メタファー標識を伴って解釈の方向づけが行われる現象を取り上げ、*metaphorical / metaphorically* を例に、メタファー標識の機能を記述・考察した。一般的に、標識は解釈の曖昧性を軽減し、聞き手の理解を助ける機能があると想定される (Goatly 1997, Cameron and Deignan 2003)。そこで解釈の曖昧性がある表現のほうが標識を伴いやすいという仮説を立て、BNC コーパスから収集した用例を分析し、その検証を行った。解釈の曖昧性をもたらす要因には様々なものがあるが、ここでは構文的にメタファーとして気づきやすいかどうか焦点を当て、第3章で示した隠喩の分類を用いて、目標領域を喚起する要素を伴うタイプ (ST型) と伴わないタイプ (S型) を比較した。その結果、S型、すなわち意味の緊張がなく、字義的な解釈も可能なタイプのほうが、メタファー標識を伴いやすいことが明らかになった。これは標識には解釈の曖昧性を軽減する機能があるという仮説を裏付ける結果となった。一方で前後の言語文脈を参照し、より詳細な分析を行うと、単に聞き手の理解を助けることにとどまらない、豊かな修辞機能があることも示唆された。たとえばコードのずれを指標することによる字義的意味の活性化、事態認知のずれを指標することによる認知主体の前景化や事態把握の相対化が、本研究の分析によって新たに見出された修辞機能である。

最後に第6章では、直喩を比較構文の修辞的用法と捉え、字義的用法との対比によって直喩の修辞性に接近することを試みた。第一に、比較を表す構文のうちどのような特徴をもつものが直喩として用いられやすいか、また直喩と字義的比較の境界例にはどのような特徴があるかを分析し、比較構文の修辞性には、誇張や評価的コノテーションの有無、比較の非対称性や根拠の主観性など様々な要因が関わっていることを示した。第二に、字義的用法からいかに逸脱しているかを考察することで、直喩の修辞的機能が字義的用法の構文的意味に動機付けられていることを示した。as...as 構文と like 構文はどちらも直喩として慣用化してい

るが、字義的用法が表す意味が異なるために、修辭的な機能が異なる。as...as 構文は趣意がもつ性質を誇張的に精緻化する機能があり、like 構文は誇張的效果を伴う例示や描写だけでなく、アナロジー的比較や主観的認識を反映したカテゴリーの変容を表す機能がある。第三に、like 構文に比べて similar 構文が直喩として用いられにくいことに注目し、その要因として、後者が客観的な基準にもとづく対称的な比較を表すのに適した構文であることを指摘した。直喩は対称的な類似関係を表すのではなく、トピックとなっている趣意の主観的叙述として機能する。このことは、媒体名詞句がとる冠詞の種類や程度副詞句との機能的類似によっても裏付けられることを示した。従来は似ていないもの同士を比較することで意外な類似性をもたらすことが直喩の修辭性として捉えられてきたが、比較対象間の概念的距離だけでは直喩としてはたらくかどうかは決まらないことを明らかにした。

## 7.2 本研究の意義と残された課題

本研究は、構文には話し手のものの捉え方が反映されているという認知文法の言語観によって、メタファー表現の文法的・構文的特徴に焦点を当て分析を行った。それによって、実際のテキストの中でメタファーがどのように使い分けられ、どのような意味と機能を担うのか、その一端を明らかにすることができた。このことは、メタファー研究において、メタファー表現の文法的・構文的特徴を重視するアプローチが有用であることを示していると思われる。さらに本研究は、コミュニケーションにおける役割や効果を検討することで、いわゆる明示性の高いメタファー表現にも独自の認知的・修辭的価値があることを示すことができた。聞き手に対する伝達上の意図に注目した語用論的アプローチは、認知言語学のメタファー観に新たな視点を与えることができると考える。以下では、本研究で示した構文的アプローチおよび語用論的アプローチが、メタファー研究へもたらしうる貢献や示唆について述べていきたい。

第一に、認知文法の視点を取り入れた構文的アプローチは、メタファー表現の体系的類型化を可能にし、従来の直喩と隠喩の二分法の再考を促すことができる。また、メタファー表現の新たな記述・分析の枠組みを提供することが期待される。

これまで、直喩と隠喩は明示性という点で対立する比喩として捉えられてきた。本研究でも両者は構文的に区別できると考え、比較構文の形をとるものを直喩と見なし、その独自性・固有性を追及した。一方で本研究では、明示性には「プロフィール」「概念的自律性」「解釈の方向づけ」という3つの次元が複層的に関わるという想定のもと、直喩と隠喩の特徴づけを試みた。それによって、直喩に近い隠喩、隠喩に近い直喩の存在を浮き彫りにすることができた。たとえばメタファー的意味を担う語の概念的自律性という側面に注目すると、直

喩と隠喩が連続的なカテゴリーであることが示される。直喩の場合は *as* や *like* に後続する名詞句で媒体が表されるのに対し、隠喩の場合は動詞や形容詞などより概念的自律性の低い形によって起点領域が喚起されることも多い。しかし複合名詞や名詞派生形容詞など、両者の中間に位置づけられる形も数多く存在する (2.4 節)。このように、構文的な類似性や共通性に目を向けることで、直喩と隠喩の連続性を捉えることができるようになる。同時に直喩と隠喩の連続性を認めることは、直喩らしさあるいは隠喩らしさとは何かを解明するためのひとつの視座をもたらすだろう。

さらに、本研究で示した直喩、隠喩、メタファー標識の分類は、ジャンルやディスコースにおけるメタファー表現の分布をより精緻に記述するための枠組みとなりうる。従来の枠組みとしてメタファー表現の記述のためによく用いられるもののひとつは、アムステルダム自由大学の研究チームによって提唱された MIPVU という方法論である<sup>\*1</sup>。この方法論の確立によって、ジャンルごとのメタファー表現の相対頻度や、品詞の分布、明示的メタファーと非明示的メタファーの比率などが分析できるようになった (Steen et al. 2010, Dorst 2015)。しかし、MIPVU の方法論はあくまでジャンルごとの予測的な特徴づけにとどまり、質的な分析を行うには適していない。たとえば直喩とメタファー標識を伴う隠喩を区別せずに明示的メタファーとしていること、語レベルで品詞の分析が行われるため、メタファー的意味を担う語と共起要素との関係などの構文的特徴の記述が行われないことなどの点で限界があり、より具体的な構文タイプの使い分けを検討することはできない。これに対して本研究で示した構文的分類は、より精緻な質的分析を可能にすると考えられる。また、ジャンル間の違いだけでなく、ディスコースの流れのなかでメタファー表現がどのように変化するかなどを捉えることもできるようになる。たとえば第 4 章 4.5.3 節で示した、詩的描写における隠喩的指示が段階的に達成されるまでのプロセスは、用いられる構文タイプの変化によって説明することができた。

第二に、メタファー表現の修辭的機能に注目した語用論的アプローチは、認知言語学のメタファー観に新たな視点をもたらさう。Lakoff and Johnson (1980) によって概念メタファー理論が提唱されてから、メタファーは単なる言語的装飾ではなく認識や思考の手段であること、メタファーによってわれわれの概念体系が潜在的に構造化されていることなどが強調され、概念レベルでのメタファーが探究されてきた。このようなメタファーに対する認知的アプローチでは、認識や思考、あるいはイデオロギーを形作るメタファーの役割が重要視されるために、われわれが日常的な表現の中で知らず知らずのうちに用いている、慣習的

<sup>\*1</sup> MIPVU は、2007 年に、Cameron, Cienki, Crisp, Deignan, Gibbs, Grady, Kövecses らによって開発された MIP (Metaphor Identification Procedure) という方法論をベースにしている (Group 2007)。MIP との違いとしては、数える単位の厳密化、品詞の考慮、直喩や標識を伴う表現も含めたことなどが挙げられる。

なメタファーが中心的に論じられることになる。

これに対して本研究は意識的なメタファーの使用に注目し、その認知的・修辭的重要性に再び光を当てた。明示性の高い表現の一部は、話し手と聞き手に対し、メタファーであることにメタ的な意識を向けることを促す。そして、コミュニケーションにおいて隠されていた「ずれ」に気付くきっかけを与えることができる。そのずれは、事態認知や情報共有、発話行為の逸脱として認識され、明快さや誇張、ユーモアの効果を伴うなどして、コミュニケーションを円滑にしたり、やりとり自体を楽しんだりするために大きな役割を果たす。しかしそれだけにとどまらず、意識的なメタファーの使用は、認知的にも重要な価値を持つと考えられる。本研究ではその一例として、明示性の高いメタファー表現が、認識のしかたの積極的な転換や既存の価値・認識の相対化を可能にすることを述べた。これらのことから、メタファーの明示は、メタファーとしての力を弱めるどころか、自らの認識の枠組みに自覚的になることを可能にするものであると考えられる。意識的なメタファーの使用に光を当てることは、認識や思考におけるメタファーの役割を考える上でもきわめて重要である。

本研究に残された課題は、より広範なテキストタイプや構文を分析することによる一般化と、メタファーであることにメタ的意識を向けるとはどういうことかを、他の言語現象一般にも通じる形で規定することである。本研究では限られたテキストタイプで分析を行ったため、詩や文学作品などの豊かで創造的な表現の使用が期待される文脈や、スピーチや会話などコミュニケーションの相互性・オンライン性が強い文脈でのメタファー表現の使用については検討することができなかった。これらの文脈では特に、意識的なメタファーの使用が見られることが予想される。またメタファー標識に関しても、本研究で分析対象とした *metaphorical / metaphorically* のようにメタファーであることを直接述べるものだけでなく、より間接的にメタファーを指標するタイプ（例：*sort of, as it were, imagine* など）において、どのような修辭的機能が見られるかを分析する必要がある。分析対象とする構文の範囲を広げ、多様な文脈における使用を比較することで、ジャンルやレジスターに特徴的なメタファー表現を明らかにし、メタファー表現の構文的特徴と機能の関係をより妥当な形で一般化できると考えられる。一般化する際には、本研究で扱えなかった意味的な側面、すなわちメタファー表現の慣習性や、メタファー写像の基盤となる類似性の違い、トピックや起点領域に選ばれる概念の性質などの側面も考慮する必要があるだろう。

さらに、メタファーであることに意識を向けるとはどういうことかを論じるためには、言語使用一般におけるメタ的意識の役割にも目を向ける必要があるだろう。言語表現の形や意味、あるいは発話行為自体に意識が向けられ、話し手と聞き手の間にメタ的意識が共有される場合、どのようにしてそれが達成されるのか、それがどのような認知的価値をもつのか。



本研究では、趣意や目標領域を喚起する概念がプロフィールされているもの（直喩やST型の隠喩）や、メタファー標識を伴う隠喩が、メタファーとして意識されやすいと仮定して分析を行った。しかし構文は単に指標するだけであり、実際に意識が向けられるかどうかは場面や状況によって大きく変わるはずである。話し手が聞き手に気付かれないように企んだ、「意図的な」メタファーとどのように区別するかということも課題として挙げられる。意識が向けられているか否かをどのように判断するのか、そのためにはより妥当な記述のための枠組みと言語使用一般に通じるような視座が求められる。

メタファーとは、あるものを別のもの<として>見ることであり、ものごとを認識するための枠である。かけっぱなしのメガネのように、普段はその存在に気付くことはできない。しかしメガネを取り外して客体として眺めるときのように、その「枠」の存在にふと気付く瞬間がある。このように自らが用いているメタファーに意識を向けることは、言語学者としてだけでなく、言語使用者としても心が躍る営みではないだろうか。ある表現がメタファーであることに気付くことは、われわれの認識や思考、コミュニケーションをより豊かに、より自由にするためのひとつの契機となりうるのではないかと考える。



## 参考文献

- Addison, Catherine. (1993) From literal to figurative: An introduction to the study of simile. *College English*, 55(4), pp. 402–419.
- Aisenman, Ravid A. (1999) Structure-mapping and the simile–metaphor preference. *Metaphor and Symbol*, 14(1), pp. 45–51.
- Andersen, Gisle. (2001) *Pragmatic markers and sociolinguistic variation: A relevance- theoretic approach to the language of adolescents*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- アリストテレス. (1992) 『弁論術』 戸塚七郎訳. 東京: 岩波書店.
- Black, Max. (1962) *Models and metaphors: Studies in language and philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- (1979) More about metaphor. In Ortony, Andrew (ed.) *Metaphor and thought*, pp. 19–43, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bowdle, Brian F. and Dedre Gentner. (2005) The career of metaphor. *Psychological Review*, 112(1), pp. 193–216.
- Bredin, Hugh. (1998) Comparisons and similes. *Lingua*, 105(1-2), pp. 67–78.
- Brooke-Rose, Christine. (1958) *A grammar of metaphor*. London: Secker and Warburg.
- Bühler, Karl. (1934) *Sprachtheorie.[Theory of language]*. Jena: Fischer. (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子訳. (1983) 『言語理論 言語の叙述機能 (上)』 東京: クロノス) .
- Cameron, Lynne. (2003) *Metaphor in Educational Discourse*. London: Continuum.
- Cameron, Lynne and Alice Deignan. (2003) Combining large and small corpora to investigate tuning devices around metaphor in spoken discourse. *Metaphor and Symbol*, 18(3), pp. 149–160.
- Carston, Robyn. (2002) *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*. Oxford: Blackwell.
- (2010) XIII-metaphor: Ad hoc concepts, literal meaning and mental images. *Proceedings of the Aristotelian society*, 110(3), pp. 295–321.

- Charteris-Black, Jonathan. (2000) Metaphor and vocabulary teaching in ESP economics. *English for Specific Purposes*, 19(2), pp. 149–165.
- Chiappe, Dan L. and John M. Kennedy. (2000) Are metaphors elliptical similes? *Journal of Psycholinguistic Research*, 29(4), pp. 371–398.
- Chiappe, Dan L., John M. Kennedy, and Penny Chiappe. (2003) Aptness is more important than comprehensibility in preference for metaphors and similes. *Poetics*, 31(1), pp. 51–68.
- Croft, William. (1991) *Syntactic categories and grammatical relations: The cognitive organization of information*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- (1993) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics*, 4(4), pp. 335–370.
- Croft, William and D. Alan Cruse. (2004) *Cognitive linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan. (2011) *Meaning in language: An introduction to semantics and pragmatics, 3rd edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Cruse, D Alan. (1986) *Lexical semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cuenca, Maria Josep. (2015) Beyond compare: Similes in interaction. *Review of Cognitive Linguistics*, 13(1), pp. 140–166.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser. (2014) *Figurative language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davidson, Donald. (1978) What metaphors mean. *Critical Inquiry*, 5(1), pp. 31–47.
- Deignan, Alice. (2005) *Metaphor and corpus linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Deignan, Alice, Jeannette Littlemore, and Elena Semino. (2013) *Figurative language, genre and register*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dorst, Aletta G. (2015) More or different metaphors in fiction? A quantitative cross-register comparison. *Language and Literature*, 24(1), pp. 3–22.
- Ernst, Thomas. (1981) Grist for the linguistic mill: Idioms and “extra” adjectives. *Journal of Linguistic Research*, 1(3), pp. 51–68.
- (2001) *The syntax of adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the morning calm*, pp. 111–138, Seoul: Hanshin.
- Fillmore, Charles J. (1985) Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di Semantica*, 6(2), pp. 222–254.

- Fishelov, David. (1993) Poetic and non-poetic simile: Structure, semantics, rhetoric. *Poetics Today*, 14, pp. 1–23.
- Fortescue, Michael. (2010) Similitude: A conceptual category. *Acta Linguistica Hafniensia*, 42(2), pp. 117–142.
- Fraser, Bruce. (1990) An approach to discourse markers. *Journal of Pragmatics*, 14(3), pp. 383–395.
- (1999) What are discourse markers? *Journal of Pragmatics*, 31(7), pp. 931–952.
- (2006) Towards a theory of discourse markers. In Fischer, Kerstin (ed.) *Approaches to discourse particles*, pp. 189–204, Oxford: Elsevier.
- 福沢将樹 (2015) 『ナラトロジーの言語学：表現主体の多層性』 東京: ひつじ書房.
- Gargani, Adam. (2016) Similes as poetic comparisons. *Lingua*, 175, pp. 54–68.
- Gentner, Dedre and Brian F Bowdle. (2001) Convention, form, and figurative language processing. *Metaphor and Symbol*, 16(3-4), pp. 223–247.
- Gibbs, Raymond W. (1994) *The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2015) Do pragmatic signals affect conventional metaphor understanding? A failed test of deliberate metaphor theory. *Journal of Pragmatics*, 90, pp. 77–87.
- Glucksberg, Sam. (2001) *Understanding figurative language: From metaphor to idioms*. New York: Oxford University Press.
- Glucksberg, Sam and Catrinel Haught. (2006) On the relation between metaphor and simile: When comparison fails. *Mind & Language*, 21(3), pp. 360–378.
- Glucksberg, Sam and Boaz Keysar. (1990) Understanding metaphorical comparisons: Beyond similarity. *Psychological Review*, 97(1), pp. 3–18.
- Goatly, Andrew. (1997) *The language of metaphors*. London and New York: Routledge.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goossens, Louis. (1990) Metaphtonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. *Cognitive Linguistics*, 1(3), pp. 323–342.
- Group, Praggeljaz. (2007) MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22(1), pp. 1–39.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. (1989) *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*. Oxford: Oxford University Press.

- Hanks, Patrick. (2005) Similes and sets: The English preposition 'like'. In Blatná, R. and V. Petkevič (eds.) *Ľazyky a Ľazykověda*, pp. 31–44, Prague: Faculty of Philosophy Charles University.
- 林宅男（編）（2008）『談話分析のアプローチ: 理論と実践』 東京: 研究社.
- Hrushovski, Benjamin. (1984) Poetic metaphor and frames of reference: With examples from Eliot, Rilke, Mayakovsky, Mandelshtam, Pound, Creeley, Amichai, and the New York Times. *Poetics Today*, 5(1), pp. 5–43.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Israel, Michael, Jennifer Riddle Harding, and Vera Tobin. (2004) On simile. In Achard, M. and S. Kemmer (eds.) *Language, culture, and mind*, pp. 123–135, Stanford: CSLI Publications.
- 伊藤薫 (2020) 『修辞と文脈—レトリック理解のメカニズム—』 京都: 京都大学学術出版会.
- Jakobson, Roman. (1973) 『一般言語学』 川本茂雄（監修）. 東京: みすず書房.
- Jespersen, Otto. (1933) *Essentials of English grammar*. London: Allen & Unwin.
- Katz, Jerrold J. and Jerry A. Fodor. (1963) The structure of a semantic theory. *Language*, 39(2), pp. 170–210.
- Kittay, Eva Feder. (1984) The identification of metaphor. *Synthese*, 58(2), pp. 153–202.
- 小松原哲太 (2016) 『レトリックと意味の創造性: 言葉の逸脱と認知言語学』 京都: 京都大学学術出版会.
- 小松原哲太・田丸歩実 (2019) 「日本語における直喩の写像方略の類型」『日本認知言語学会論文集』, 第 19 巻, 37–49 頁.
- Lakoff, George. (1990) The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics*, 1(1), pp. 39–74.
- (1993) The contemporary theory of metaphor. In Ortony, Andrew (ed.) *Metaphor and thought, 2nd edition*, pp. 202–251, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- (1999) *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.
- Lakoff, George and Mark Turner. (1989) *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Landau, Mark Jordan, Brian P. Meier, and Lucas A. Keefer. (2010) A metaphor-enriched social cognition. *Psychological Bulletin*, 136, pp. 1045–67.

- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar, vol.1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- (1991) *Foundations of cognitive grammar, vol.2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- (2002) *Concept, image and symbol: The cognitive basis of grammar*. New York: Mouton de Gruyter.
- (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- Lederer, Jenny. (2019) Lexico-grammatical alignment in metaphor construal. *Cognitive Linguistics*, 30(1), pp. 165–203.
- Leech, Geoffrey N. (1969) *A linguistic guide to English poetry*. London: Longman.
- Leezenberg, Michiel. (2001) *Contexts of metaphor*. Amsterdam: Elsevier.
- Low, Graham D. (1988) On teaching metaphor. *Applied Linguistics*, 9(2), pp. 125–147.
- Mikkelsen, Line. (2005) *Copular clauses: Specification, predication and equation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Miller, George A. (1979) Images and models, similes, and metaphors. In Ortony, Andrew (ed.) *Metaphor and thought*, pp. 357–400, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mitchell, Keith. (1990) On comparisons in a notional grammar. *Applied Linguistics*, 11(1), pp. 52–72.
- Moder, Carol Lynn. (2008) It's like making a soup: Metaphors and similes in spoken news discourse. In Tyler, Andrea, Yiyoun Kim, and Mari Takada (eds.) *Language in the context of use*, pp. 301–320, Berlin: Mouton De Gruyter.
- (2010) Two puzzle pieces: Fitting discourse context and constructions into cognitive metaphor theory. *English Text Construction*, 3(2), pp. 294–320.
- Morgan, Jerry L. (1975) Some interactions of syntax and pragmatics. In Cole, P. and Jerry L Morgan (eds.) *Speech acts*, pp. 289–303, New York: Academic Press.
- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』 東京：くろしお出版。
- (2016) 『メタファーと身体性』 東京：ひつじ書房。
- 鍋島弘治朗・中野阿佐子 (2017) 「シミリーとメタファーの境界 —シミリーを導入する表現の分類に関する一提案—」『Kansai Linguistic Society : Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society』, 第 37 号, 121–132 頁。
- 中村明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 東京：秀英出版。
- Ortony, Andrew. (1979) The role of similarity in similes and metaphors. In Ortony, Andrew

- (ed.) *Metaphor and thought*, pp. 342–356, Cambridge: Cambridge University Press.
- Patterson, Katie J. (2017) When is a metaphor not a metaphor? An investigation into lexical characteristics of metaphoricity among uncertain cases. *Metaphor and Symbol*, 32(2), pp. 103–117.
- クインティリアヌス. (2013) 『弁論家の教育 (3)』 森谷宇一・戸高和弘・吉田俊一郎 訳. 京都: 京都大学学術出版会.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Radden, Günter and René Dirven. (2007) *Cognitive English grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Reijnierse, W Gudrun, Christian Burgers, Tina Krennmayr, and Gerard J Steen. (2018) On metaphorical views, dynamite, and doodlings: Functions of domain adjectives in metaphorical domain constructions. *Review of Cognitive Linguistics. Published under the auspices of the Spanish Cognitive Linguistics Association*, 16(2), pp. 431–454.
- Richards, Ivor A. (1936) *The philosophy of rhetoric*. New York and London: Oxford University Press.
- Ricoeur, Paul. (1975) *La Métaphore Vine*. Paris: Seuil. (久米博訳. (1998) 『生きた隠喩』 東京: 岩波書店) .
- 利沢幸雄 (1984) 「小説の言語としての直喩」『文藝言語研究・文藝篇』, 第9巻, 1–37頁.
- Romano, Manuela. (2017) Are similes and metaphors interchangeable? A case study in opinion discourse. *Review of Cognitive Linguistics*, 15(1), pp. 1–33.
- 崎田智子・岡本雅史 (2010) 『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』 東京: 研究社.
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』 東京: 講談社.
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大 (2006) 『レトリック事典』 東京: 大修館書店.
- Schiffrin, Deborah. (1987) *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2001) Discourse markers: Language, meaning, and context. In Schiffrin, Deborah, Deborah Tannen, and Heidi E. Hamilton (eds.) *The handbook of discourse analysis*, pp. 54–75, Oxford: Blackwell.
- Semino, Elena. (2008) *Metaphor in discourse*. Cambridge: Cambridge University Press Cambridge.
- Skorczynska, Hanna and Alice Deignan. (2006) Readership and purpose in the choice of eco-



- nomics metaphors. *Metaphor and Symbol*, 21(2), pp. 87–104.
- Steen, Gerard. (1999) Analyzing metaphor in literature: With examples from William Wordsworth's "I wandered lonely as a cloud". *Poetics Today*, 20(3), pp. 499–522.
- (2011) From three dimensions to five steps: The value of deliberate metaphor. *Metaphorik.de*, 21, pp. 83–110.
- (2017) Deliberate metaphor theory: Basic assumptions, main tenets, urgent issues. *Intercultural Pragmatics*, 14(1), pp. 1–24.
- Steen, Gerard, Aletta G. Dorst, J. Berenike Herrmann, Anna A. Kaal, Tina Krennmayr, and Trijntje Pasma. (2010) *A method for linguistic metaphor identification: From MIP to MIPVU*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Stern, Josef. (1983) Metaphor and grammatical deviance. *Noûs*, 17(4), pp. 577–599.
- Sullivan, Karen S. (2007) Grammar in metaphor: A construction grammar account of metaphoric language. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- (2013) *Frames and constructions in metaphoric language*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Svartengren, Torsten Hilding. (1918) *Intensifying similes in English*. Lund: Gleerupska Universitetsbokhandeln.
- 平知宏・楠見孝 (2011) 「比喩研究の動向と展望」『心理学研究』, 第 82 卷, 第 3 号, 283–299 頁.
- 田丸歩実 (2015a) 「英語の名詞派生形容詞に見られる比喩的意味の前景化」『日本語用論学会大会発表論文集』, 第 10 卷, 89–96 頁.
- (2015b) 「形容詞化とメタファー性に関する認知的研究: 英語の名詞派生形容詞を例に」修士論文, 京都大学人間・環境学研究科.
- (2016) 「名詞派生形容詞メタファーの意味的特徴およびテキストタイプとの関係」『日本語用論学会大会発表論文集』, 第 11 卷, 49–56 頁.
- (2018a) 「植物の描写におけるメタファーの役割: ハリデーの枠組みから」『社会言語科学会第 41 回大会発表論文集』, 76–79 頁.
- (2018b) 「直喩の比喩性をうみだす意味と文法: 英語比較構文の変種から考える」『日本認知言語学会論文集』, 第 21 卷, 91–103 頁.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』 東京: 研究社.
- Utsumi, Akira. (2007) Interpretive diversity explains metaphor-simile distinction. *Metaphor and Symbol*, 22(4), pp. 291–312.
- Wałaszewska, Ewa. (2013) Like in similes: A relevance-theoretic view. *Research in Language*,

11(3), pp. 323–334.

Whately, Richard. (1867) *Elements of rhetoric*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.

Wimsatt, William Kurtz. (1954) *The verbal icon: Studies in the meaning of poetry*. Lexington: University Press of Kentucky.

山梨正明 (1986) 『発話行為』 東京: 大修館書店.

—— (1988) 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版会.

—— (2015) 『修辭的表現論：認知と言葉の技巧』 東京: 開拓社.